平成20－23年度

平成20年度　文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」選定

新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）

富大流人生設計支援プログラム

『14歳の挑戦』と連携する
長期循環型インターンシップモデル

報告書

富山大学

はじめに

平成 20 年度から始まった「富大流人生設計支援プログラムー『14 歳の挑戦』と連携する長期循環型インターンシップモデルー」が、平成 23 年度末をもって予定の年限を終了することになりましたので、ここに最終報告を行います。

本プログラムは、文部科学省が全国の高等教育機関を対象に募集した「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に採択されたもので、その選定理由の中で「他には見られない工夫のある取組である」と高い評価をいただきました。具体的な取組内容については、本報告書の中で順次記述していきますが、端的に言えば、学生が地域社会（教育界・産業界）と交流する過程を通して、自身の人生を種々の課題のもとに自ら構築していくという取組です。「富大流人生設計支援プログラム」という名称もここに由来します。

ただし、このような取組は言葉や図に表してしまえば簡単なものですが、実際に支援を受ける学生はもちろんのこと、支援を行う教職員自身にとっても未知の取組であり、多くの困難に直面しながらの試行錯誤の連続でした。とりわけ、学生が辿る長い人生の中のほんの僅かな期間を対象に、このような支援を行っても成果はすぐには見えてこないという点は、農作物における種蒔きにも喩えることができ、いつか必ず実るという強い信念が必要でした。

幸いに、本学においてはインターンシップを中心としたキャリア開発支援の蓄積があり、また地域社会においても「14 歳の挑戦」事業をはじめとする様々な取組の蓄積があり、さらに多くの関係者からいただいたご理解と励ましは、強い信念を支えるに十分なものでした。

このプログラムの真の成果については、もっと長い時間をかけて慎重に見ていかなければならないことは言うまでもありませんが、この段階で 4 年間の取組をまとめて、他の高等教育機関や地域社会の新しい取組の参考に供することも、また大きな意義があるはずです。この 4 年間、このプログラムに関わっていただきました多くの方々に感謝申し上げますとともに、本報告書を紐解かれる方々の新たな出発点につながりますことを祈念いたします。

小助川　貞次

富山大学キャリアサポートセンター
富大流人生設計支援室長
（人文学部教授）

目　次

Ⅰ. はじめに …… p2

Ⅱ. 本プログラムの概要 …… p4

Ⅲ. プログラムの実績 …… p12

Ⅳ. 活動報告 p23

1. 長期循環型インターンシップ …… p25

2. 中等教育との連携事業 …… p109

Ⅴ. 予算措置最終年度報告会 …… p141

平成 23 年度「富大流人生設計支援プログラム」シンポジウム

Ⅵ. 取組の総括と今後の課題 …… p214

Ⅱ. 本プログラムの概要

国立　富山大学

プログラムの名称　富大流人生設計支援プログラム
――『14歳の挑戦』と連携する長期循環型インターンシップモデル

プログラム担当者　人文学部教授・インターンシップ支援室長　小助川　貞次

キーワード　1．『14歳の挑戦』　2．生徒指導ボランティア　3．学びの循環
4．キャリア開発支援　5．長期型インターンシップ

1．大学の概要

富山大学は、2005（平成17）年10 月に富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学の３国立大学法人が統合し、３キャンパス８学部（人文学部・人間発達科学部・経済学部・理学部・医学部・薬学部・工学部・芸術文化学部）、学部学生数約8,000名、大学院学生数約1,000名、教職員約2,000名（附属病院600名を含む）からなる新しい総合大学として誕生した。富山大学は理念として、地域と世界に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い、高い使命感と創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化と人間社会の調和的発展に寄与することを掲げている。この理念の下に教育目標として、学生の個性を尊重しつつ人格を陶冶するとともに、広い知識と深い専門的学識を教授することにより、「高い使命感と創造力のある人材を育成する総合大学」を目指すことを掲げ、更に具体的に以下の三点を掲げている。

（1）学生の主体的な学びを促し、多様な学習ニーズに応え、教育の質を保証するために、教育環境の充実と教育システムの改善を図り、教員の教授能力のたゆまぬ向上に努める。

（2）学士課程では、教養教育と専門教育を充実し、グローバルな知識基盤社会に貢献できる、豊かな人間性と創造力を持つ人材を育成する。

（3）大学院課程では、体系的で高度な専門教育を充実し、21世紀の複合的な課題に果敢に挑戦し解決できる人材を育成する。

2．本プログラムの概要

富山県では全国に先駆けて県内全中学校が「社会に学ぶ『14 歳の挑戦』」を実施しており、本学のインターンシップにも2006（平成18）年度から経験学生が参加するようになってきた。しかし相互に明確な連携・接続がないために、生徒・学生の経験値は個人レベルに留まっていた。

本プログラムではインターンシップ参加学生が実習後もICT を利用した自学研修を重ね、『14 歳の挑戦』の生徒指導ボランティアとして参加する。大学生は自らの成長を省みる機会を獲得し達成効果を高め、中学生は数年先のキャリア・ターゲットとなる大学生と触れ合うことで将来像を獲得し、発達段階に応じたキャリア教育の学びの循環として機能する。本プログラムにより、パーソナル支援、修学・学生支援、キャリア開発支援の総合的学生支援体制が推進できるとともに、他の高等教育機関と地域社会に対しても新しいタイプの長期型インターンシップを提示することになり、地域社会全体の活性化に大きく寄与できる。

3．本プログラムの趣旨・目的

グローバル化社会の中で先進各国は、人材、国力を高めることの原動力としての機能が大学に存在するとの認識で戦略的な拠点と位置付け、そこで行われる教育・人材育成に重大な関心を寄せるようになってきた。翻って我国においても、国際社会・情報化社会で活躍できる高度な社会人養成が大学に求められていると同時に、18歳人口の減少などにより多様な学生が大学へ入学してくるようになっている。このような世界情勢、社会的背景を受けて、地方の国立大学は、地域社会に貢献できる人材の養成が一層求められており、教育における効果を広く地域社会に提示していく必要がある。本学ではこれまでも、多様な学生への進路選択支援に対応するため、様々なキャリア支援に取り組んでいる。学生のキャリア開発に関する授業として、富山県に縁のある第一線で活躍する社会人を講師に招いて講義する「富大流人生設計講座」及び「インターンシップ」を正課授業として実施している。中でもインターンシップは、2000（平成12）年に県内の高等教育機関と経済諸団体で組織する富山県インターンシップ推進協議会が発足し、本学はその中心メンバーとして毎年度の実施計画に参画し、体験学生は2007（平

成19）年度までに延べ1,000名を越えている。

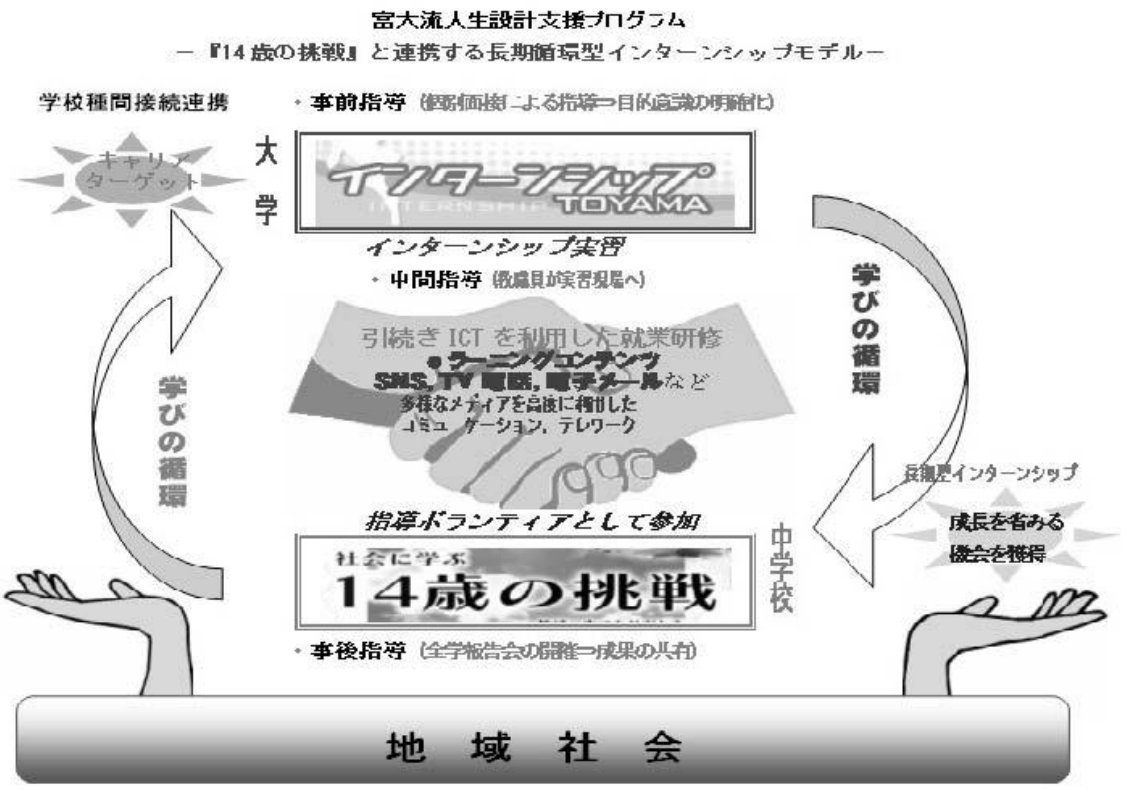
一方、このような地域社会に支えられ企業・団体などの協力の下で行われている就業体験は、発達段階に応じた中等教育段階でも実施されている。すなわち、昨年度の教育再生会議でも事例報告された県内の全中学校が全国に先駆けて実施している「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」は、富山県の地域社会全体で若者を育成しようという土壌に根ざした中等教育段階でのキャリア教育の取組である。他県では受入企業・団体の確保が困難な状況の中で、富山県では地域の企業・団体との連携協力がうまく実施されている。

2006（平成18）年度には、このような中等教育段階での就業体験を経験してきた学生がインターンシップに参加するようになり、参加者増に繋がったことなどが地元新聞紙上に大きく掲載された。ところが、このような学校間で功を奏している取組は、成長・発達段階におけるそれぞれの役割を認識しながら実践されてはいるものの、相互に接続連携するまでには至っていない。本プログラムでは、新たなキャリア開発支援方策を検討するために昨年度に実施した卒業者進路追跡実態調査のデータを基に、地域社会に支えられた総合的な学校種間接続連携による組織体系を構築し、学生へのインターンシップの参加目的の明確化と達成効果を高めると同時に、『14歳の挑戦』からはじまる中等教育段階におけるキャリア教育との連携を目的としている。更に、総合的学生支援体制の下にキャリア開発支援を軸とした学生へのエンロールメント・マネジメントの実践にも取り組む。

4. 本プログラムの独自性（工夫されている内容）

従来のインターンシップのように２週間程度の実習で終了するのではなく、実習終了後も、学生は引き続き受入先企業のインターンシップ担当者とICTを利用した就業研修を重ねる。また大学教職員とはSNSを利用した指導と相談を随時行う。このようにして十分な準備を行った上で、『14歳の挑戦』の現場で指導ボランティアとして参加する。指導ボランティア中も、ICTを利用して企業のインターンシップ担当者や大学教職員と随時、連絡・相談・指導を受けることができる。こうすることで、学生は長期間拘束されることなく、自分の勉学と両立させながら、結果的に従来の長期型インターンシップと同じ、あるいはそれ以上の効果を上げることが期待できる。

図１富大流人生設計支援プログラム概要図



『14歳の挑戦』の活動時期は、夏休みを除く５月～10月に実施されているので夏季休業中に実施している大学でのインターンシップと実施時期が重なることはない。また、『14歳の挑戦』は現在、受入先の指導ボランティアに加え、中学校教職員、PTAを中心とした保護者等の指導ボランティアの支援により実施しているが、その確保に苦慮していることや、保護者等の負担が課題となっている現状があることを主幹組織の富山県教育委員会への聴き取り調査で明らかにしている。今回のプログラムは、これらの課題を解決するために機能することも期待できる。更に、インターンシップ体験先企業・団体で『14歳の挑戦』への指導ボランティアとしての再度参加することで、客観的に自らのインターンシップへの取組を省みることになり達成効果が高められることや、自分が14歳時点で取り組んだ経験との対比により自分たちの過去を振り返り、今の自分の成長を自覚する機会提供にも繋がる。

これまでも学校や地域社会においては様々なキャリア教育の取組があり、それぞれに効果を上げてきた。本プログラムを実施するに当たり「キャリアサポートセンター」の下に「富大流人生設計支援室」を設置して、プログラムの推進に当たり「学校間・地域社会のコーディネート」を実践する。

また本学としても学校に対しては「大学開放事業」「出前授業」「理科支援員」などの取組を行い、また地域社会に対しては「生涯学習」「社会人大学院」「オープン・クラス」などの取組を行い、地域社会からも「短期職場体験」「インターンシップ」などの協力を受けている。

しかし残念ながら、それぞれの取組においては、情報交換や連携協力が十分に行われて実施されているとは言えない。本プログラムは、そのように分散している様々な取組を取りまとめるコーディネートの役割を、地方に根ざす国立大学である本学こそが担うべきであるという認識が根底にある。

本プログラムの実施組織として、「キャリアサポートセンター」の下に「富大流人生設計支援室」を設置してプログラムの推進に当たるとともに「学校間・地域社会のコーディネート」を実践する。更に、学生に対しては受入企業・団体ごとにプログラム調整及び連絡担当責任者（教職員）を決めて丁寧な指導を個別に行う。また、今年度導入したSNSを利用してコミュニティサイトを立上げ、受入企業毎の情報の集約と共有、学生同士また学生と教職員との密接な連絡体制の構築、実習中に生じる問題解決についての支援をリアルタイムに行う。

図３ SNSを利用したインターンシップ指導

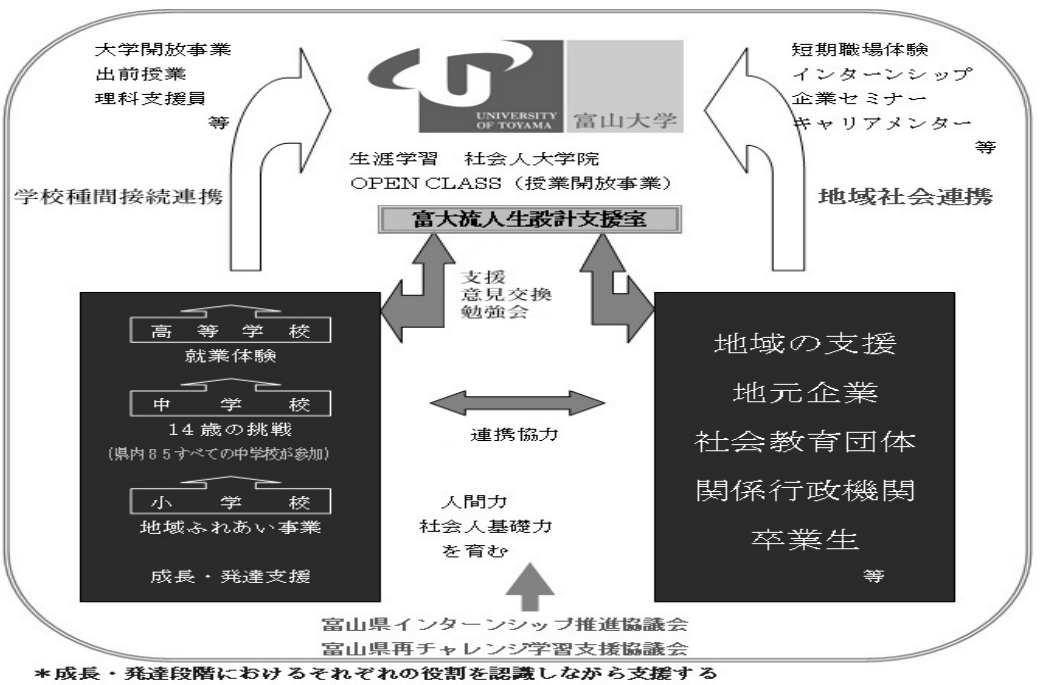


図２富大流人生設計支援プログラム連携組織図

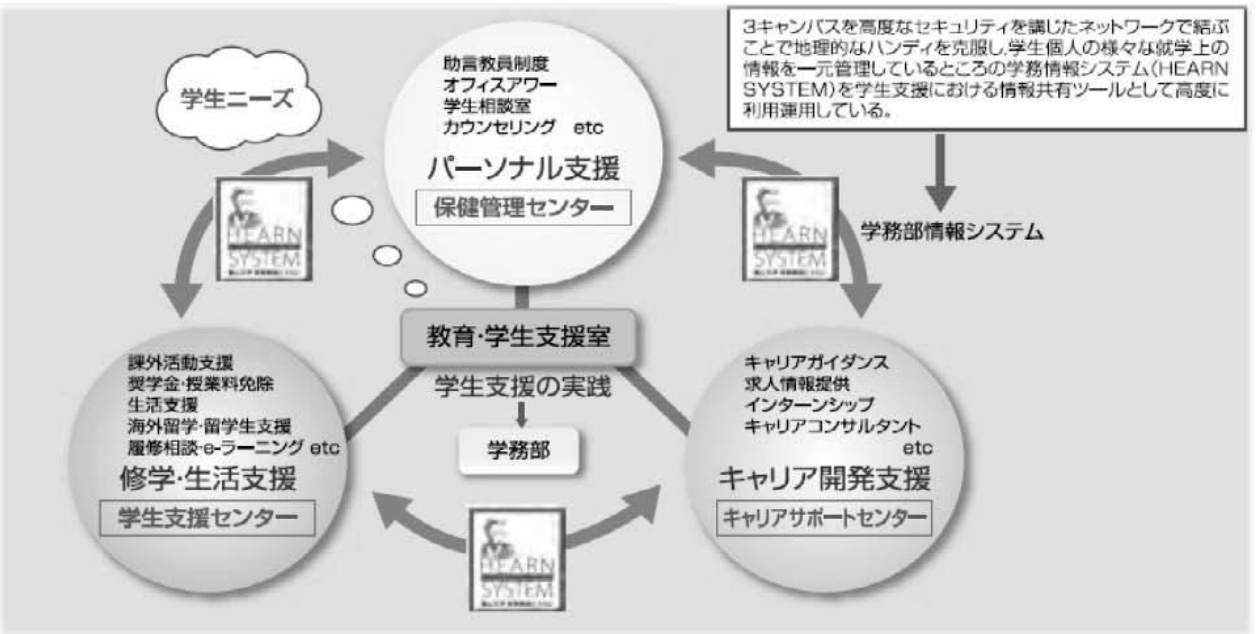


図４富山大学における学生支援の総合的な取組体制

５．本プログラムの有効性（効果）

本プログラムを通じて下記に掲げる効果が期待できる。

(1) 本プログラムを通じて、インターンシップの教育目標・達成目標への成果がこれまで以上に確実なものとなる。正課内・学外活動であるインターンシップは、受入企業・団体へそのプログラム内容が一任されている傾向があるが、大学が大きく関わることにより密接なプログラム構築が期待できる。また、学生が実習に参加することで終わるのではなく、サポートに携ることで振り返る機会を持ち、自らの成長を確認でき、参加学生への事後指導の観点からも効果が期待できる。

(2) 昨年度採択された「オフとオンの調和による学生支援」プログラムにより、パーソナル支援についての学生支援力強化が図られた。今回のプログラムは、キャリア開発支援の学生支援力強化を目指すものであり、パーソナル支援、修学・生活支援との総合的学生支援体制のもとでの相乗効果が期待できる。学生支援には、従来からのface to face による「オフ」の支援があるが、一方で現代の学生が得意とする様々なメディアを活用した新しいタイプの「オン」による支援もある。インターンシップにおいても、このような学生支援の手法は極めて有効であると考えられる。例えば受入企業毎の情報の集約と共有、学生同士また学生と教職員との密接な連絡体制の構築、問題を抱える学生からの相談窓口等にリアルタイムに対応することが可能となる。このように、昨年度採択されたGPと今回採択されたGPとは、非常に高い相乗効果が期待でき、本学における更なる「学生支援力」の強化に繋がることが期待できる。

(3) 富山県で行っている「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」は、事業の趣旨として「規範意識や社会性を高め、将来の自分の生き方を考えるなど、生涯にわたってたくましく生き抜く力を育てる」ということを掲げているが、実際に生徒と保護者の生の声を聞くと、むしろ「自分探し」すなわち「興味・関心・適性」を求めていることが窺われる。このこと自体は十分に意義のあることだが、他方で、現場の指導者不足のために地域の中で十分な受入先が確保できず、その結果、「希望通りの場所で職場体験ができない」という不満も聞かれる。更に高校ではインターンシップがほとんど行われていないために、せっかく体験したことも、継続されることがない。これらのことは、本年度、大学のインターンシップ説明会で行ったアンケート結果によく現れており、中学校で就業体験をした学生と、しなかった学生との間で、大学３年次の段階で「やりたい仕事が決まっているかどうか」という質問に対して、ほとんど差が出ていない。体験内容や経験が継続されていないと考えられる。本プログラムは、これらの問題を解消するための一つの装置として機能し、また、中学生にとっては、ひとつ先の高校進学というステージを考えるにあたって、更にその先の大学というステージを考えさせることになり、キャリア・ターゲットとしての効果が期待できる。

(4) 地域社会及び中等教育との連携により、若者の人材育成という社会的ニーズに対応している。昨年度実施した卒業生へのアンケート調査では、在学時にインターンシッ

プへ参加しておけばよかったとの記述が32%あった（現在のインターンシップ参加率は対象学生の約10%）。また、学生はもとより、地域社会全体を巻き込んで実施することから、地域に根ざす国立大学として地域社会からの信頼性の向上にもつながると考えられる。

(5) 本学では、インターンシップを正課の授業として位置付けていることから、授業内容の向上が期待できる。また、大学でのインターンシップ参加率は年々増え続けており、文部科学省の調査によれば2006（平成18）年度で約66%となっている。地方大学の利点を生かした地域社会と連携した人材育成の実践的な取組は、多くの地方高等教育機関にとっても、新しい長期型インターンシップ取組の研究事例となり得る。

6．本プログラムの改善・評価

（1）評価の体制と方法

学生満足度及びプログラム改善については、インターンシップ終了後の自己評価アンケートの達成度評価により行う。また、昨年度過去５年間の卒業者に対して実施した学生卒業者進路追跡実態調査結果をデータベース化して、３年程度ごとに評価を実施する。また、受入企業・団体及び中学校・生徒などのニーズに迅速に対応できるよう受入企業・団体ごとに明確な担当責任者（教職員）を配置し随時改善できるように体制を整える。

（2）評価観点

参加学生においては、アンケート調査の満足度及び指導教職員からの達成度評価並びに学生卒業者進路追跡実態調査結果の離職率（早期離職を防止する効果）などの状況により、その効果を定量的・定性的に計ることができる。また地域社会からの反応（中学校、企業団体、新聞報道等）など、十分な機能を果たしているか等を総合的に評価する。

（3）評価をどのように生かすか（評価に基づく改善方法等）

富大流人生設計支援プログラムは、計画・実践・評価が有機的にリンクした、アクション・リサーチの形態をとるプロジェクトである。評価方法としては、多元的方法により行う。すなわち、数値目標の達成評価、数値的アンケート評価等の定量的評価と、満足度調査、アンケート分析、地域社会からの反応などの定性的評価を定期的に行い、その結果をフィードバックして新たな改善のサイクルを実践する。

7．本プログラムの実現可能性・将来性

本プログラムは、初等・中等教育段階からの連続したキャリア教育の連携を図り、成長・発達段階に応じた「能力・態度」の育成に資するため、働くことを軸とした学習プログラムの開発により、連続したキャリア教育が実践できるとともに、地方の利点を生かした新しいタイプの長期型インターンシップを実践し、学校種間及び地域社会の連携組織を構築し運用することを目的とし、次に示す実施計画により取り組む。

（1）組織性の確保

「キャリアサポートセンター」の下に「富大流人生設計支援室」を設置し「富山大学インターンシップ支援室」及び「富山県インターンシップ推進協議会」、「富山県教育委員会」「（富山県内各市町村）教育委員会」と連携協力体制を構築する。また、受入企業・団体ごとに明確な担当責任者（教職員）を配置する。

（2）人的・物的・財政的条件の整備

本プロジェクトを運用するに当たって、「富大流人生設計支援室」にプログラム担当特命教員（アドミニストレータ）１名を新規配置する。合わせてキャリアコンサルタント及び事務補佐員各１名を配置する。

（3）各年度の運用予定

本プロジェクトは、４年計画で、準備・合意形成、実施、総括の３段階に分けて実施する。

2008（平成20）年度（準備・合意形成）

富大流人生設計支援プログラムを達成するために、富大流人生設計支援室を設置し、実施運営体制の確立を図り、中学校及び受け入れ企業先へのプログラム調整の実施、及びプログラム説明会の開催により、翌年度の長期型インターンシップ実施に向けた準備を整える。また、学生に対する富大大流人生設計支援プログラムの内容理解と全学的

な支援体制の充実を図るため公開フォーラムを開催するなど、準備・合意形成を中心に一部実施段階の項目を行う。

2009（平成21）年度（実施）

試行的稼動年度とし、受入企業へプログラム調整、中学校へ支援提供調整、学生へのプログラム説明会開催に取り組む。富大流人生設計支援プログラムにおける新しいタイプの長期型インターンシップの実施並びに学校種間及び地域社会における連携組織の構築を図る中心年次になる。

2010（平成22）年度（実施）

本格稼動年度とし、昨年度実施の評価による改善を行い実施する。

2011（平成23）年度（総括）

完成年度として成果のまとめを行い、成果報告書の作成、点検評価の実施を行う。実施のまとめと全体評価が中心となる総括段階と位置付ける。

（４）補助期間終了後の展開

プログラム終了後は、企業・団体及び中等教育諸学校との密接な連携組織体制の構築の下に、若者の一層のキャリア開発支援が期待できる。毎年、県内の高校卒業生１万人のうち、約３千人が東京など大都市圏に流出し、一方で県内企業も少子高齢化などに伴い人材不足感が高まっており、そのためＵ・Ｉターン就職の促進が強く求められている。このような現状に対して、本プログラムは全国の大学に在学している富山県出身学生へも波及していく効果があり、ひいては地域社会の活性化及び人材確保にも対応することが期待できる。更に、他大学のインターンシッププログラムに対しても、新しい長期型インターンシップの取組として、その発展に貢献することが期待できる。

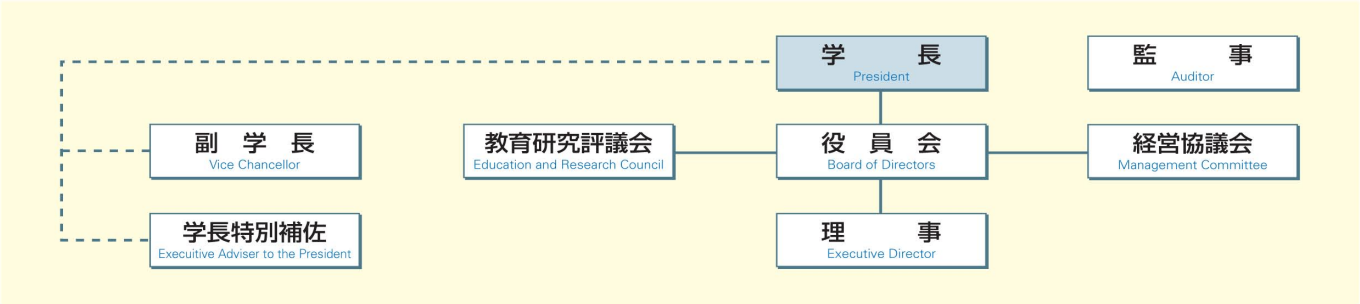
選　定　理　由

富山大学においては、学生支援に関して明確な理念と目標に基づき組織的に実施しており、その取組は、修学・生活支援、パーソナル支援、キャリア開発支援という３つの観点での学生ニーズへの対応であり、大きな成果を上げていると言えます。

今回申請のあった「富大流人生設計支援プログラム」の取組は、学生を取り巻く環境の大きな変化に対応し、キャリア開発支援にさらに力を注ぐ必要性から、富山県が行ってきている「14歳の挑戦」事業にも積極的に連携する長期循環型インターンシップモデルを構築しようとするものであり、学生のキャリア開発支援の充実とともに、地域社会全体の活性化にも貢献できる事業と言えます。この取組の中には、中学生（14歳）が企業等での体験をしつつ大学生と触れ合うことと大学生が自らの成長を省みつつインターンシップを経験することにより、それぞれが将来像を思い描く機会となる「学びの循環」にもつながることが期待され、他に見られない工夫ある取組であると言えます。

特に、この取組での新しいタイプのインターンシップは、多くの機関・関係者とも連携しながら進めていくことが欠かせませんが、よく連絡調整が進められています。地方の高等教育機関としての利点を生かした取組でもあり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。

組織図 Organization



富山大学 University of Toyama

- 学　部 Faculties
  - 人文学部 Faculty of Humanities
  - 人間発達科学部 Faculty of Human Development
    - 人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター Center for Educational Research and Practice
    - 附属学校 Attached School
      - 人間発達科学部附属幼稚園 Kindergarten
      - 人間発達科学部附属小学校 Elementary School
      - 人間発達科学部附属中学校 Junior High School
      - 人間発達科学部附属特別支援学校 School for Special Needs Education
  - 経済学部 Faculty of Economics
  - 理学部 Faculty of Science
  - 医学部 Faculty of Medicine
  - 薬学部 Faculty of Pharmacy and Pharmaceutical Sciences
    - 薬学部附属薬用植物園 Experimental Station for Medicinal Plant Research
  - 工学部 Faculty of Engineering
  - 芸術文化学部 Faculty of Art and Design
- 大学院 Graduate Schools
  - 人文科学研究科 Graduate School of Humanities
  - 人間発達科学研究科 Graduate School of Human Development
  - 経済学研究科 Graduate School of Economics
  - 芸術文化学研究科 Graduate School of Art and Design
  - 生命融合科学教育部 Graduate School of Innovative Life Science
  - 医学薬学教育部 Graduate School of Medicine and Pharmaceutical Sciences for Education
  - 理工学教育部 Graduate School of Science and Engineering for Education
  - 医学薬学研究部 Graduate School of Medicine and Pharmaceutical Sciences for Research
  - 理工学研究部 Graduate School of Science and Engineering for Research
- 和漢医薬学総合研究所 Institute of Natural Medicine
  - 民族薬物研究センター Research Center for Ethnomedicine
- 附属病院 University Hospital
- 附属図書館 University Library
- 機　構 Organization
  - 地域連携推進機構 Organization for Promotion of Regional Collaboration
    - 産学連携部門 Collaboration Division
    - 生涯学習部門 Lifelong Learning Division
    - 地域づくり・文化支援部門 Regional Engagement Division
    - 地域医療・保健支援部門 Community Medicine & Health Support Division
- 学内共同教育研究施設 Joint-use Facilities for Education and Research
  - 総合情報基盤センター Information Technology Center
  - 留学生センター International Student Center
  - 水素同位体科学研究センター Hydrogen Isotope Research Center
  - 自然科学研究支援センター Center for Basic Research and Development in Natural Sciences
  - 極東地域研究センター Center for Far Eastern Studies
  - 生命科学先端研究センター Life Science Research Center
  - 水質保全センター Water Quality Management Center
  - 自然観察実習センター Center for Nature Study and Training
  - 学生支援センター Student Support Center
  - キャリアサポートセンター Career Support Center
  - アドミッションセンター Admission Center
  - 臨床倫理センター Clinical Ethics Center
  - 大学教育支援センター University Education Support Center
- 保健管理センター Center for Health Care and Human Sciences
- 事務局 Administrative Office

Ⅲ. プログラムの実績

平成 20 年度

１．先行事例調査・関係機関打合せ	
【県内関係機関】	富山県教育委員会、富山市教育委員会、富山県中学校長会 富山労働局、富山県インターンシップ推進協議会
【県内小・中等教育機関】	小学校　　富山市立呉羽小学校 中学校　　富山市立呉羽中学校、富山市立城山中学校 高等学校　　富山工業大学高校、富山いずみ高等学校 　　富山商業高校、小杉高等学校
【県外教育関係機関】	・兵庫県　　兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会
【県外大学】	・東京都　10 月　　法政大学・立教大学 ・北海道　11 月　　北海道大学、道都大学、北星学園大学、札幌国際大学
【県外中等教育機関】	・兵庫県　10 月　　伊丹北高等学校
【韓国】	Ⅰ　調査期間 平成 21 年 3 月 10 日（火）～3 月 13 日（金） Ⅱ　調査主体 　小助川貞次（富大流人生設計支援室長・富山大学人文学部教授） 　荒井明（富山大学キャリアサポートセンター特命准教授 　　平成 21 年 4 月 1 日着任予定） 　湯浅健一（富山大学学務部就職支援グループ長） 　山田豊（富山大学学務部就職支援グループ員） Ⅲ　調査機関 　私立大学：　延世大学，崇実大学，漢陽大学 　国立大学：　ソウル大学 Ⅳ　調査結果概要 　今回訪問した延世大学，崇実大学，漢陽大学はいずれも歴史が古い私立の総合大学であり，日本でいえば慶応大学，早稲田大学レベルの私立大学と思われる。ソウル大学を含め，学生向けの各種の福利厚生施設は十分に整っている。これらの大学の就職関連の部署は，学生の福利厚生施設内に設置されており，スペース的にもかなりの広さを有している。 　また，延世大学，崇実大学，漢陽大学では，学生がサポーター（奨学金として報酬を支給）として相談等に対応している。 現在の韓国では，求人数が求職者数を下回っており就職率が低い（漢陽大学で 73.1%）状況であることから，就職支援（履歴書・面接対策，企業説明会の開催等）に，よ

	り力を入れているのが現状と見受けられた。なお，キャリア教育に関してはいずれの大学も１－２年次から様々なプログラムを実施している。 　現状では大学と初等（小学）・中等教育（中学・高校）とのキャリア教育についての連携は，いずれの大学も実施していないとのこと。また，高等学校ではキャリア教育として「職業と教育」という授業が準備されているが，日本と同様に進学に関心が向けられており実際に授業が行われているかは不明であるとの発言が印象的であった。 　卒業生を利用した就職説明会や相談支援など ICT を活用したシステムを導入していることや、就職に有利になるように英語教育に力を注いでいることが特筆できる。職員は、専門家（キャリアカウンセラー）を配置している、或いは専門家として養成している大学が多く、永い間在職しているケースが多く見られた。

２．「富大流人生設計支援プログラム推進フォーラム」の開催

平成 20 年 12 月 20 日（土）10:00～16:00

会　場：富山大学五福キャンパス黒田講堂ホール　　参加者 85 名

【目的】平成 20 年度文部科学省 「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に選定されたことを受け、GP の内容説明会と広報活動並びにキャリア開発研修会を兼ねて開催。

第 1 部 ：基調講演

「キャリア教育の推進について」

国立教育政策研究所総括研究官　藤田晃之

第 2 部 ：富大流人生設計支援プログラム説明

富大流人生設計支援室長　小助川貞次

第 3 部：パネルディスカッション 「キャリア教育の実践と課題」

コメンテータ

藤田晃之（国立教育政策研究所総括研究官）

コーディネータ

小助川貞次（富大流人生設計支援室長）

パネリスト

殿村幸子（株式会社富山第一銀行人事企画部調査役）

北愼吾（富山県立富山工業高等学校長）

笹木秀俊（富山市立呉羽中学校長）

小林福治（富山市立呉羽小学校長）

高見泰子（富山市立呉羽幼稚園長）

３．広報
「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」意見交換会への参加（事例紹介） 平成 20 年 12 月 16 日（火）「北陸・東海地区」/ 会場：名古屋マリオットアソシアホテル **「大学教育改革プログラム合同フォーラム」ポスターセッションへの参加** 平成 21 年 1 月 13 日（火）/ 会場：パシフィコ横浜 **ホームページの作成** 「富大流人生設計支援プログラム」ホームページを作成 http://www3.u-toyama.ac.jp/gp08/index20.html **タペストリー・リーフレットの作成** 学生向けに大学が実施するキャリア開発支援プログラムを分かりやすく提供するために タペストリー及びリーフレットを作成 【内訳】タペストリー6 枚（2 種×3 枚）、リーフレット 3,000 部
４．他大学からの視察訪問
・平成 20 年 11 月 12 日（水）島根大学 ・平成 21 年 3 月 5 日（木）香川大学
５・特命教員等の公募
本プログラムを実施運用するに当たり「キャリアサポートセンター」の下に 「富大流人生設計支援室」を設置し，さらにプログラム担当特命教員及びコーディネータ各１名を公募（平成 21 年 4 月 1 日付採用）

平成 21 年度

１.長期循環型インターンシップの実施			
キャリアサポーター	11 名	IS 経験者	10 名
参加企業・団体	4 社	中学生	4 校
①株式会社オレンジマート（5 名） ②株式会社北日本新聞社（7 名） ③株式会社富山第一銀行（3 名） ④株式会社北陸銀行（2 名）		城山中学校（①男 1） 八尾中学校（①男 4 名） 月岡中学校（②男 4 名） 北部中学校（②男 3 名） 雄山中学校（③男 2 女 1） 呉羽中学校（④女 2）	
【報道・掲載】	朝日新聞社、北日本新聞社、富山新聞社、日経新聞社 チューリップテレビ		
２．初等教育（呉羽小学校 6 年児童）との連携事業実施（平成 21 年 7 月 16 日（木））			
呉羽小学校【参加者】大学生 6 名・小学生 101 名		【報道・掲載】 朝日新聞社、富山新聞社、北陸中日新聞社	
３．中学校 3 年生に対するキャリア教育支援活動の実施（平成 21 年 9 月 11 日（金））			
呉羽中学校【参加者】大学生 23 名・中学生 220 名		【報道・掲載】北日本新聞社	
４．先行事例調査・関係機関打合せ			
【県内関係機関】	富山県教育委員会、富山市教育委員会、富山県中学校長会 富山労働局、富山県インターンシップ推進協議会		
【県外大学】	・千葉県 9 月　千葉商科大学 ・東京都 11 月　東京工業大学 ・東京都 12 月　杏林大学 ・千葉県 12 月　麗澤大学		
【フィンランド】	Ⅰ 調査期間　平成 22 年 2 月 13 日から平成 22 年 2 月 21 日 Ⅱ 調査主体 小助川貞次（富大流人生設計支援室長・富山大学人文学部教授） 荒井明（富山大学キャリアサポートセンター特命准教授） 高井博美（富山大学キャリアサポートセンターコーディネーター） 山田豊（富山大学学務部就職支援グループ員） 千葉庄寿（麗澤大学外国語学部准教授）		

	Ⅲ 調査機関 フィンランド(ラハティ・ヘルシンキ) Ⅰ）ラハティ大学 Ⅱ）ヘルシンキ大学 Ⅲ）ヘルシンキ工科大学 Ⅳ 調査結果概要 Ⅰ-1 ラハティ大学/Lahit University of Applied Sciences 平成 22 年 2 月 16 日　9:00～14:00 Ⅰ-2　面談者　Heikki Saros　他キャリア関連担当者 3 名 Ⅰ-3　訪問目的 1)教育システムの仕組み・概要説明 2)キャリアサポートサービスについての取り組み 3)ポリテクニック制度と大学・企業産業界の連携について 4)施設見学 Ⅰ-4　概要(以下同じ) フィンランド政府の国策により大学の学位取得や取り組み実績に応じて予算半分がある。評価チームによって厳しく内容を吟味されることとなる。国際学位(EU 共同学位)など大学間で柔軟に動けるようになっている。 また、現在約 300 人の社会人の再教育も行っている。 近年は入学時に 4 日間の試験を行っている。全２５大学中、４大学に受験可能であり、ディスカッション等課題をやってもらい入学時に優秀な学生を絞り込んでいる。3,4 年次になってからキャリアについて考えてもらうカリキュラムがあり、具体的には働いている人に大学へ来てもらい起業や著作権・ベンチャー的なオムニバス形式の授業を設けている。時勢に応じて柔軟な対応を実施している。 →キャリアサービスはリクルート関係の Job step.net.の仕事が 90% →企業が求めているようなテーラーメイドコースも用意しているとのこと。 →求められる人材像…偏見がない人、差別しない人
６．広報	
【新聞全国紙、民間教育雑誌、学術誌】 「就職指導者のための総合情報サイトマイナビキャリアサポート Special Interview-就職最前線-」 「TOM’SPRESS Vol. 8」	

「富大流人生設計支援室プログラム説明会」を開催（対象：富山大学学生）

平成 21 年 4 月 15 日（水）

会　場：富山大学五福キャンパス共通教育棟 4 番教室（2 回開催）

キャリア基礎学習の実施（対象：富山大学学生、教職員）

2011 年就職活動に向けた社会人基礎力の向上と自立的キャリア形成を目的に実践講座を開催（後期全 7 回）

「プレゼンテーションスキル講座Ⅰ・Ⅱ」「キャリアカウンセリング・ロールプレー」「業界・企業研究」「様々な働き方・キャリアに対する考え方・ワークライフバランスを考える」「エントリーシートの書き方」「模擬グループディスカッション」「個人模擬面接」

経営研究フォーラム参加

平成 21 年 11 月 28 日（土）

「地域の人材は地域の総合力で育てようー激変の時代に求められる人材育成のあり方ー」にて、富大流人生設計支援プログラムについて室員及び学生サポーターが参加

トータルコミュニケーションサポートフォーラム参加

平成 21 年 11 月 28 日（土）

第一部：「富山大学 PSNS を活用したオンライン学生支援」内に

「PSNS を活用したキャリア支援」というテーマで富大流人生設計支援室の紹介や PSNS の活用方法を発表。

長期循環型インターンシップ説明会の実施

平成 22 年 2 月 5 日（水）Ⅳ限　　参加学生　34 名

富大流人生設計支援プログラム DVD 作成、送付

学生、職員のインタビューを交えプログラムを紹介・説明した PRDVD を作成（200 枚）

県内中学校 84 校、報道機関、参加企業等に送付

平成 20 年度「富大流人生設計支援プログラム」推進フォーラム報告書の作成

400 部作成。参加者、学内外関係者に送付

7．他大学からの視察訪問

平成 22 年 1 月 12 日（火）　鳥取大学訪問

平成 22 年度

1.長期循環型インターンシップの実施			
キャリアサポーター	23 名（前年 11 名）	IS 経験者	18 名（前年 10 名）
参加企業・団体	8 社（前年 4 社）	中学生	6 校（前年 4 校）
①ANA クラウンプラザホテル ②射水市大島絵本館 ③日医工株式会社 ④富山労働局⑤株式会社オレンジマート ⑥株式会社北日本新聞社 ⑦株式会社富山第一銀行 ⑧株式会社北陸銀行		雄山中学校（⑦男 2 女 2⑧男 5 ） 呉羽中学校（①女 2⑥女 2） 城山中学校（⑤女 2） 北部中学校（⑥男 2） 早月中学校（③男 4④男 2） 射北中学校（②女 3）	
【報道・掲載】	朝日新聞社、北日本新聞社、富山新聞社、読売新聞社、北陸中日新聞社、チューリップテレビ		

2．中学校 3 年生に対するキャリア教育支援活動の実施	
呉羽中学校　平成 22 年 9 月 14 日（木） 【参加者】大学生 18 名・中学生約 200 名	八尾中学校　平成 22 年 7 月 1 日（木） 【参加者】大学生 5 名・中学生 121 名

3．キャリアサポーターの育成		
【前期】教養原論演習　「富大流キャリア基礎講座」	23 名	昨年度参加学生 6 名 新規参加者 17 名
【後期】教養コロキアム「富大流キャリア基礎科目（アドバンスコース　リーダーシップ論）」	24 名	キャリアサポーター 13 名 プログラム参加学生 11 名

4．先行事例調査・関係機関打合せ	
【県内関係機関】	富山県教育委員会、富山市教育委員会、富山県中学校長会 富山労働局、富山県インターンシップ推進協議会
【県外大学】	・東京都　5 月　東京学芸大学 ・新潟県　8 月　新潟大学 ・山口県　3 月　山口大学
【キャリア関係機関】	・東京都　5 月　リクルートワークス研究所 ・東京都　7 月　東京大学 大学総合研究センター・法政大学

5．「富大流人生設計支援プログラム」シンポジウムの開催
平成 22 年 12 月 10 日（土）13：00～16：00 会　場：富山大学人文学部第６講義室　　参加者約 50 名

【目的】本プログラムが来年完成年度を迎えることを踏まえ、今年度の本格実施を受けてプログラムに関わった参加企業・中学校・教育関係者を対象にシンポジウムを開催。学生・企業・中学校関係者それぞれの立場より発表並びに意見交換を行うことで相互理解を深め、連携の必要性を認識していただくとともに、本プログラムの内容を幅広く理解を頂く。

第１部　：富大流人生設計支援プログラム趣旨説明

富山大学キャリアサポートセンター特命准教授　荒井明

第２部　：基調講演「明日をになう若者支援」

株式会社オレンジマート専務取締役　辻素樹（富山県中小企業家同友会共同求人副委員長）

第３部　：発表&意見交換会

活動報告　射水市大島絵本館：松崎友里絵（富山大学経済学部 4 学年）

活動報告　北日本新聞社：田中寛子（富山大学人間発達科学部 3 学年）

意見交換会助言講師：4 名

土田陽一（財団法人射水市絵本文化振興財団　事務局長）

米田宗尚（呉羽中学校　PTA 会長）

伊藤満（呉羽中学校　教頭）

黒田哲也（株式会社北日本新聞社　経営企画室人事部部長デスク）

６．広報

【新聞全国紙、民間教育雑誌、学術誌】

「読売新聞大学ルネサンス」「Between NO.235　秋号」

「大学マネジメント 2011 年 1 月号」（国立大学マネジメント研究会）

「キャリアデザイン研究 vol.6」（日本キャリアデザイン学会）、「TOM’SPRESS Vol.12」

長期循環型インターンシップ説明会の実施

平成 23 年 2 月 9 日（水）Ⅳ限　　参加学生　34 名

キャリアカウンセリング研修会の実施

平成 23 年 3 月 25 日（金）　　参加者 9 名（教員 3 名、職員 6 名）

内容：傾聴ワーク及び事例検討発表。

長期循環型インターンシップパンフレットの作成

2100 部作成。平成 23 年 4 月 13 日（水）の公募型インターンシップ等で配布。

平成 22 年度「富大流人生設計支援プログラム」シンポジウム報告書の作成

100 部作成。参加者、学内外関係者に送付。

７．府議会からの視察訪問

平成 23 年 1 月 20 日（木）京都府議会文教常任委員会委員ら 11 人が京都府のキャリア教育の参考調査として視察訪問

平成 23 年度

<table>
<tr><th colspan="4">1.長期循環型インターンシップの実施</th></tr>
<tr><td>キャリアサポーター</td><td>14 名（前年 23 名）</td><td>IS 経験者</td><td>18 名（前年 18 名）</td></tr>
<tr><td>参加企業・団体</td><td>3 社（前年 8 社）</td><td>中学生</td><td>4 校（前年 6 校）</td></tr>
<tr><td colspan="2">①射水市大島絵本館
②株式会社オレンジマート
③株式会社北日本新聞社</td><td colspan="2">呉羽中学校（①女 4③男 2）
城山中学校（②男 2）
北部中学校（③男 2）
堀川中学校（③女 2）</td></tr>
<tr><td>【報道・掲載】</td><td colspan="3">北日本新聞社、富山新聞社
チューリップテレビ</td></tr>
<tr><th colspan="4">2．中学校 3 年生に対するキャリア教育支援活動の実施（ 平成 23 年 9 月 16 日（金））</th></tr>
<tr><td colspan="2">呉羽中学校【参加者】大学 18 名・中学生 225 名</td><td colspan="2">【報道】北日本新聞社、富山新聞社</td></tr>
<tr><th colspan="4">3．キャリアサポーターの育成</th></tr>
<tr><td colspan="2">【前期】教養原論演習
「富大流キャリア基礎学習」</td><td>9 名</td><td>昨年度参加学生 6 名
新規参加者 3 名</td></tr>
<tr><th colspan="4">4．先行事例調査・関係機関打合せ</th></tr>
<tr><td>【県内関係機関】</td><td colspan="3">富山県教育委員会、富山市教育委員会、富山県中学校長会
富山労働局、富山県インターンシップ推進協議会</td></tr>
<tr><td>【県外大学】</td><td colspan="3">・東京都　6 月　　東京大学社会科学研究所
・北海道　6 月　　北海道大学、北星学園大学</td></tr>
<tr><td>【県外中・高等教育機関</td><td colspan="3">・北海道　6 月　　北海道標津町立標津中学校</td></tr>
<tr><td>【キャリア関係機関】</td><td colspan="3">・東京都　6 月　　特定非営利活動法人 NPO カタリバ
・北海道　6 月　　北海道塾</td></tr>
<tr><th colspan="4">6．「富大流人生設計支援プログラム」シンポジウムの開催</th></tr>
<tr><td colspan="4">平成 23 年 11 月 26 日（土）10:00～16:00 実施
会　場：富山大学学生会館ホール　　参加者 97 名

【目的】平成 20 年度文部科学省新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラムに選定された「富大流人生設計支援プログラム」が本年度予算措置終了するにあたり、これまでの成果を取りまとめた上で、このような取組が今後地域社会における学校種間での連携の中でどのように展開して行けるのか、新たな出発点を模索する。</td></tr>
</table>

第 1 部：プログラムの成果報告

（1）プログラムの総括

荒井明（富山大学キャリアサポートセンター特命准教授）

（2）長期循環型インターンシップ参加学生・生徒からの報告

[平成 21 年度]

受入企業「オレンジマート」報告

山崎雄亮（富山交易株式会社・平成 22 年度卒業生学生サポーター）

[平成 22 年度]

受入企業「ANA クラウンプラザホテル」報告

滝谷美紗子（富山大学経済学部 4 年）

百山功子・鈴木志穂（富山市立呉羽中学校 3 年）

[平成 23 年度]

受入企業：株式会社北日本新聞社

丸山知也（富山大学経済学部 3 年）

松井公平・篠田遼太郎（富山市立呉羽中学校 2 年）

第 2 部：基調講演「新たな出発点を求めて」

(1)講演題「14 歳の挑戦」から希望学へ

玄田有史（東京大学社会科学研究所　教授）

(2) キャリア教育が子供たちを変える～起業家教育からビジネス実践へ～

飯田雄士（北海道標津町立標津中学校教諭）

第 3 部：パネルディスカッション「新たな出発点を求めて」

コメンテータ

玄田有史（東京大学社会科学研究所　教授）

コーディネータ

小助川貞次（富大流人生設計支援室長）

パネリスト

大学生：金盛愛（富山大学経済学部 4 年）、大澤亮（富山大学医学部 5 年）

高　校：長田治（富山県立富山いずみ高等学校教諭）

中学校：飯田雄士（北海道標津町立標津中学校教諭）

矢崎千栄美（富山県射水市立大門中学校教諭）

7．広報

【報告書の作成・送付】

予算措置最終年度の報告書を作成。1600 部

Ⅳ. 活動報告

1　長期循環型インターンシップ

平成 22 年度　学生サポーター活動報告

1－1【ホテル】　ANA クラウンプラザホテル富山（平成 22 年度）

1－2.【医薬品メーカー】 日医工株式会社（平成 22 年度）

1－3.【銀行】　株式会社北陸銀行（平成 21 年度－平成 22 年度）

1－4.【銀行】　株式会社富山第一銀行（平成 21 年度－平成 22 年度）

1－5.【公務】　富山労働局（平成 22 年度）

平成 23 年度　学生サポーター活動報告

1－6.【マスコミ】　株式会社北日本新聞社（平成 21 年度－平成 23 年度）

1－7.【文化推進事業】　射水市立大島絵本館（平成 22 年度－平成 23 年度）

1－8【スーパー】　株式会社オレンジマート（平成 21 年度－平成 23 年度）

2　中等教育との連携事業

富山市立呉羽中学校（平成 21 年度－平成 23 年度）
中学校 3 年生に対するキャリア教育支援活動の実施「15 歳の選択」

GP 活動報告書

平成 23 年度「富大流人生設計支援プログラム」シンポジウム終了後、先輩たちと記念撮影

富大流人生設計支援室　学生サポーター

はじめに

「単位を取るなら、楽しそうな授業で取ってみよう！」昨年四月の私はシラバスの中に「教養教育言論―富大流人生設計講座―」という見慣れない言葉を見つけ、こんなにも単純な動機でこの授業に参加することに決めたのでした。

この「教養教育言論―富大流人生設計講座―」の受講対象者は全学部の 1~4 年生。一体どのような新しい出会いがあるのだろうかと胸を膨らませ、いざ授業に出てみると何と生徒は私を含めて 3 人！半ば意固地になって「2 人を引っ張って行ってやる！」などと決意しリーダーとして約半年間の間 GP 活動を行ってきたのです。

正直な話をすると、何度も何度もこの授業に参加することを放棄してしまいたい！と思うこともありました。3 人だけといえども学部が違えば予定も合わない。全員が 2 年生だから他の授業に時間を割かなくてはならず、中々計画通りには物事が進まない。一人ひとりの考え方、価値観が違うのだから意見もまとまらない。そして何より「14 歳の挑戦」「15 歳の選択」の活動をする上で関わっていかなければならない方々は殆ど年上の方ばかりで、どのように関係を築いていったら良いのかわからない。つまり苦悩と失敗の連続だったのです。もちろんこの報告書を作成している今も。

しかし、壁にぶつかりながらも活動をしていくうちに見えてきたことはたくさんあります。その中で私にとって衝撃的だったのは「自分一人ではどうにもならない事でも、何人かで協力すれば何とかなる」ということ、そして「困った時に勇気を出して『助けて。』と言ってみれば誰かかが手を差し伸べてくれる」ということです。誰にも迷惑をかけず、できるだけ自分一人で問題を解決することが大切であると長年思い込んできた私にとってこの経験は私を後押ししてくれるものとなりました。そして今、何事にも積極的に関わろうとする私がいるのだと思います。

だから、この GP 活動を通して出会った沢山の方々……先生方、企業の方、先輩方、そして一緒に頑張ってきた GP 生の二人には本当に感謝しています。

この報告書は私を多少なりとも変えてくれた活動の記録です。私も私以外の GP 生もまだまだ未熟者であるため、至らない点が目立つ報告書であると思います。しかし、全力で取り組んできたことには間違いないので温かい目で見ていただけるとありがたいなと思います。

ここまで読んでくださってありがとうございました！それでは是非ご覧ください。

平成 23 年度富山大学キャリアサポーターリーダー

阿部 早織

1-1　ANA クラウンプラザホテル富山（とやま）

最終日　手作りお礼カードを持ってみんなで記念撮影

実施日程	平成 22 年 9 月 27 日(月) 平成 22 年 10 月 1 日(金)
メンバー	リーダー跡部（あとべ） 暁（さとる）　滝谷（たきたに） 美紗子（みさこ）　宮越（みやこし） 裕之（ひろゆき） 堀（ほり） 雄一（ゆういち）　河口（かわぐち） 晴菜（はるな）　松田（まつだ） 沙希（さき）
担当教員	荒井（あらい） 明（あきら）

１. 活動日程表

日付	内容	参加者
8/7(土)	企業様へ訪問(IS 生のご挨拶)	跡部・河口・堀・松田
8/23(月)	学内中間報告会	跡部・滝谷
9/3(金)	企業様へ訪問(企業様のご要望伺い)	跡部・滝谷・宮越
9/7(火)	企画内容進行【初日分】	跡部・宮越・河口
9/8(水)	企画進捗状況報告・他分科会からの意見頂く	跡部・宮越・他 CS メンバー
	分科会各員へ仕事分担・スケジュール確認	跡部→滝谷・河口・堀
9/9(木)	企画内容進行【初日分】	跡部・宮越・河口
9/10(金)	企画内容進行【初日分】	跡部・宮越・河口
9/13(月)	企画内容進行【初日分】	跡部・河口
9/14(火)	分化会全体ミーティング	跡部・滝谷・河口・堀・松田
	企画内容進行【初日分】	跡部・河口
	企画内容進行【最終日分】	跡部・堀・松田
9/15(水)	企画内容進行【初日分】	跡部・河口
9/17(金)	企画内容進行【初日分】	跡部・河口
9/18(土)	企画内容進行【最終日分】	跡部・滝谷・堀・松田
9/21(火)	企画内容進行【初日分】	跡部・滝谷・河口
9/22(水)	企業様へプレゼン資料送付	跡部
	企画内容進行【初日分】	跡部・河口
	事前リハーサル	跡部・河口
9/24(金)	企業様へプレゼン	跡部・滝谷
9/27(月)	プログラム実施【初日分】	跡部・河口
	プログラム【初日分】実施報告	跡部・河口→滝谷・堀
9/28(火)	企画内容進行【最終日分】	跡部・滝谷・堀
9/29(水)	企画内容進行【最終日分】	跡部・滝谷・堀
	事前リハーサル	跡部・滝谷・堀
10/1(金)	事前リハーサル	跡部・滝谷・堀
	プログラム実施【最終日分】	跡部・滝谷・堀

２.GP 活動を振り返って

〇プログラムに関して

目標カード

・カード作成により、目標の意識化を明確にすることができた

・一つの目標を達成するまで取り組んでもらい、その後自己評価をしてもらうことで、達成感・充実感の実感につなげることができた

不安対策講座

・企画進行にて、事前の想定が充分にでき、クイズの難易度等、適切に設定できた

・時間配分の想定を細かく行ったため、スムーズに進行することができた

・時間配分に関し、予定が早まる又は遅れる場合に、どこで調整するかの想定が甘かった

・クイズ等不安対策の企画により、中学生の緊張を緩和・軽減することができた

反省会

・中学生の体験を中学生自身の言葉で発信できる時間を提供できた

・初日に立てた課題の振り返りをすることで、中学生に実習の成果を実感してもらえた

・実習後の中学生の疲労、集中力への配慮が甘く、企画内容を詰め過ぎていた

お礼カード

・中学生に「人に喜んでもらえることの嬉しさ」を実感してもらえた

・中学生、企業の社員の方両方に喜んでもらえる企画にすることができた

・当日までカードを受け取って頂く方が決まっておらず、スムーズに進行できなかった

〇企画内容進行段階について

評価できる点

・事前リハーサルが充分にでき、それにより詳細な時間配分や改善点の洗い出しができた

・全体として「中学生に成果を実感してもらいたい」という目標を企画に反映できた

改善すべきだった点

・最初からもっと（時間的・内容的に）余裕をもって動くべきだった

・目標や目的は明確だったが、企画内容の詳細化・具体化へのシフトが遅かった

・詳細な進行スケジュールの設定ができず、計画的に企画の進行ができなかった

にちいこうかぶしきがいしゃ

1-2　日医工株式会社

最終日　みんなで記念撮影

実施日程　　平成 22 年 9 月 27 日(月)
　　平成 22 年 10 月 1 日(金)

メンバー　　リーダー金盛(かなもり) 愛(あい)　笹倉(ささくら) 由季(ゆうき)　天野(あまの) 美由紀(みゆき)
　　西口(にしぐち) 諒(りょう)　吉原(よしはら) 祥子(しょうこ)　和田(わだ) 亮吾(りょうご)

担当教員　　高井(たかい) 博美(ひろみ)

１.活動日程表

日付	内容	参加者
7/29(木)	本社訪問	金盛　高井先生　荒井先生
9/14(火)	IS 生顔合わせ、企画説明	金盛　笹倉　和田　西口　吉原
9/15(水)	日医工第 2 物流センター見学	金盛　笹倉　和田　西口　吉原
9/21(火)	企画書を日医工に提出(FAX)	金盛　笹倉
9/24(金)	打ち合わせ、リハーサル	金盛　笹倉　和田　西口　吉原
9/27(月)	GP 活動初日	金盛　和田　西口　吉原
10/1(金)	GP 活動最終日	金盛　笹倉　和田　西口　吉原
10/11(月)	反省会準備	金盛　笹倉
10/13(水)	反省会【全体】	金盛　笹倉

２.GP 活動を振り返って

【GP 活動を通して学んだこと】

○時間配分

GP の計画を細かく立て、事前にリハーサルもしていたが、当日は時間がいっぱいいっぱいだった。初日は他己紹介が予定より少し長引き、最終日は座談会のスケジュールが変更になるなど、予想外のことも多かった。

計画を細かくたてることや事前のリハーサルはとても大切だが、やはり当日に予定外のことがあったときに、すばやく判断をし、時間変更にも臨機応変に対応すること、また、企画の時点で、活動の時間配分にも柔軟性をもたせることの重要性を感じた。

○コミュニケーション

活動の中において、初日の「他己紹介」では「聴くこと」・「話すこと」、「IS 生とのディスカッション」では「自由に質問できる空間を作る」という目的があった。
活動全体を振り返ると、大学生から中学生へいろいろな質問をしたり、和気あいあいとした雰囲気を作ったりすることに気を配ることができたように思う。

しかし、中には、中学生のわからない話をしてしまった、中学生を中心に話を聴き出すということができなかったという場面もあったため、もっと中学生の目線に立って言葉や話題を選ぶこと、中学生が発言しやすいような質問・雰囲気づくりをすることに気を配ることが大切なのではないかと感じた。

また、この日医工 GP 全体を通しての１番の反省点は、インターンシップ生との顔合わせの

が GP の２週間前と、とても遅かったことだと思う。そのため、インターンシップ生との打ち合わせやコミュニケーションをとれる時間が少なく、直前の準備が慌ただしくなってしまったことが反省点。

日医工の GP 受け入れが決まったのが９月初めと、比較的遅めではあったが、受け入れが決まっているかどうかに関わらず、早い時期からインターンシップ生とのコミュニケーションをとり、話し合いの機会を多く持ち信頼関係を結びながら、ともに企画を作り上げていくことができたらよかったのではないかと思う。

【新たな発見】

○中学生について　（変化）

初日に中学生に会った時には、まだ幼さも感じるような「中学生」の顔だったが、最終日に会った時には、「責任を持って頑張ってきた」というのが伝わってくる、自信をもった、たくましい顔つきに変化していたことに驚いた。また、活動の中で、中学生の素直さや吸収の早さに驚くことも多かった。そのような中学生との関わりを通して、大学生はいろいろと難しく考えがちなのではないかとも感じたので、中学生の素直さ、吸収の早さを見習うとともに、もっと頭を柔らかくいろいろな企画を考えていけたらと思った。

ほくりくぎんこう

1-3　北陸銀行

初日　マナー・挨拶指導の様子

実施日程　　平成 22 年 10 月 4 日(月)

平成 22 年 10 月 8 日(金)

メンバー　　リーダー小林(こばやし) 早佑未(さゆみ)　菊池(きくち) 康英(やすひで)　宮腰(みやこし) 裕之(ひろゆき)

熊谷(くまがい) 佳子(よしこ)　渋谷(しぶや) 翔(しょう)　高瀬(たかせ) 顕(あきら)

担当教員　　小助川(こすけがわ) 貞次(ていじ)

１. 活動日程表

日付	内容	参加者	備考
6/24(木)	企業様訪問　打ち合わせ	小林、菊池	11:00～15:00
7/2(金)	企業研究の発表準備	小林、菊池	14:30～16:15
7/15(木)	GP 事前説明資料作り	小林、菊池	13:00～18:00
7/28(水)	ＩＳ生への事前説明	小林、菊池、熊谷、渋谷、高瀬、宮越	12:15～13:00
8/6(金)	企画話し合い 先生に報告	小林、菊池、宮越	10:00～14:00
8/8(日)	去年の先輩に話を聞きに行く	菊池	10:00～12:00
8/12(木)	企画話し合い	小林、菊池	14:00～16:00
8/15(日)	中間発表資料作り	小林、菊池	13:00～17:00
8/19(木)	中間発表準備	小林、菊池	10:00～14:00
9/3(金)	ＩＳ生と顔合わせ 話し合い	小林、熊谷、渋谷、高瀬、宮越	9:00～13:00
9/6(月)	話し合い 先生にプレゼン	小林、熊谷、高瀬、宮越	10:00～15:00
9/9(木)	企業様へ企画提案	小林、菊池	12:00～15:00
9/10(金)	企画話し合い	小林、菊池、熊谷、渋谷、高瀬	9:00～13:00
9/13(月)	企画話し合い	小林、菊池、熊谷、渋谷、高瀬	10:00～14:00
9/24(金)	企画準備	熊谷、渋谷	10:00～14:00
9/27(月)	資料作り	小林、渋谷、高瀬	10:00～14:00
9/28(火)	リハーサル　資料作り	小林、菊池、熊谷、渋谷、高瀬	9:00～13:00
10/4(月)	GP 本番【初日】	小林、菊池、熊谷、渋谷、高瀬	7:45～13:00
10/8(金)	GP 本番【最終日】	小林、菊池、熊谷、渋谷、高瀬	8:00～9:30
	反省会資料作り	小林	12:00～14:00

２.GP 活動を振り返って

◇やってよかったこと

・大学生が普段関われない中学生と交流できたこと。
・事前に企画をきちんとたてたので、スムーズにいった。
・参加学生の仲が深まった。
・クイズ、札勘で景品をあげたこと。
・クイズなどに小道具をつかったことでわかりやすくできた。
・GP 活動を通してたくさん人に出会えた。
・先生の前でリハーサルをしてアドバイスをもらえたのでよかった。
・2 日間、ほどよい距離感で接することができた。
・臨機応変に対応ができたのでよかった。
・クイズ、札勘で競わせることにより、中学生のやる気をだせた。
・中学生に話すことで、大学生自身の振り返りができた。
・クイズで札を使うことにより、全員参加してくれた。
・GP の本番前に学生同士打ち解けることができていたので、やりやすかった。

◇やればよかったこと

・メンバーが決まってからすぐに活動すればよかった。
・メモをとるように言えば真剣に聞いてくれると思ったが、あまりメモをとってくれなかった。
・大学生同士、中学生同士で固まった座り方だったので、交互にしたほうがよかった。
・最終日に行員の方がきてくださらなく、連絡がいきとどいていなかった。
・行員の方への引き継ぎの方法。

平成 22 年 9 月 9 日

北陸銀行　立山支店　様

富山大学キャリアサポートセンター
富大流人生設計支援室
学生サポーター　小林

長期循環型インターンシップ　ご提案書

本取組で考えられるメリット

北陸銀行様

・普段利用しない世代と触れ合うことができる。
・中学生、大学生に興味をもってもらえる。
・新たな目線から考えることができる

大学生　・インターンシップを振り返ることができ、経験を活かせる。
また、アウトプットすることにより、理解が深まる。
・中学生、行員の方と関わることができる。
・中学生と活動することで、別の視点から物事をみることができる。
・富山大学、また大学生の取組について知ってもらえる。

中学生　・普段体験できないことができ、視野が広がる。
・大学生が中学生目線で考えることにより、理解してもらえる。
・より自分たちの立場に近い大学生のため、質問などがしやすい。
・大学生と目標を設定することにより、やる気が出る。

活動内容

初日の 10 月 4 日　午前中　3 時間程度

◆初日の目標
・中学生の不安解消、緊張をほぐす。
・大学生がインターンシップを体験したからこそ、言えることを伝える。
・銀行を身近に感じてもらう。

◇自己紹介【5 分】
→一人一分程度。決めたことを話す。自己紹介から、座談会の話題に繋げられるようにする。

◇北陸銀行の紹介【20 分】
→インターンシップで学んだことをもとに、中学生がわかる内容でクイズ、問いかけを含めて紹介

する。

～休憩 5 分～

◇大学生から中学生へ【30 分】

→インターンシップの体験談、14 歳の挑戦の感想、中学生へのアドバイスなどの内容をひとりひとり話す。大学生一人５分程度。それをもとに中学生に目標を立ててもらう。

～休憩 5 分～

◇座談会【30 分】

→中学生に大学生から質問をする、また大学生に聞きたいことなど質問を受け付ける。沈黙になった場合のために、話題を予め用意しておく。座談会を通して、中学生と打ち解けることができるようにする。

～休憩 5 分～

◇マナー、挨拶指導【20 分】

→挨拶の仕方やポイント、守秘義務について中心にしっかりと指導する。

◇札勘【30 分】

→インターンシップでいただいた模擬紙幣を使う。大学生は指導をしながら、一緒に札勘を行って、ふれあう。楽しみながら、銀行業務を体験してもらう。

◇諸注意【5 分】

→言葉遣いや態度を中心に話す。

<u>最終日の 10 月 8 日　午前中　30 分程度</u>

◆最終日の目標

・中学生が 5 日間で学んだこと、成果を振り返る。

・今後の将来選択に役立てられるように大学生がアドバイスをする。

◇座談会【30 分】

・目標を達成できたか、振り返る。

・大学生、行員の方から評価を行う。

・午前中に行い、やり残したこと、反省を午後に活かしてもらう。

・行員の方へのお礼の仕方も指導する。

・これからの進路選択へのアドバイスなど。

とやまだいいちぎんこう

1-4　富山第一銀行

最終日　完成したポスターと一緒に記念撮影

実施日程　　平成 22 年 10 月 4 日(月)
　　平成 22 年 10 月 8 日(金)

メンバー　　リーダー松井(まついひさかず) 久和　山本(やまもとわきこ) 和紀子　安達(あだちまさこ) 正子
　　五十嵐(いがらしひろき) 洸樹　近藤(こんどう) はるか

担当職員　　山田(やまだゆたか)　豊

１. 活動日程表

日付	内容	参加者
7/28(水)	IS 生への事前指導	松井・山本・安達・五十嵐・近藤
8/10(火)	GP に参加する IS 生との顔合わせ	松井・五十嵐・近藤
8/17(火)	企画・進行内容の打ち合わせ	山本・安達・五十嵐・近藤
8/30(月)	企画・進行内容の打ち合わせ	松井・山本
8/31(火)	企画・進行内容の打ち合わせ	松井・山本
9/1(水)	企画・進行内容の打ち合わせ	松井・山本
9/2(木)	企画・進行内容の打ち合わせ	松井・山本
9/3(金)	企画・進行内容の打ち合わせ	松井・山本
9/8(水)	企画・進行内容の打ち合わせ	松井・山本
9/9(木)	企業訪問	松井・山本
9/10(金)	資料作成	松井・山本
9/13(月)	資料作成	松井・山本・五十嵐
9/15(水)	中学生との顔合わせ	松井・山本・五十嵐・近藤
9/16(木)	資料作成	松井・山本・五十嵐・近藤
9/17(金)	資料作成	松井・山本・五十嵐・近藤
9/21(火)	資料作成	松井・山本
9/22(水)	資料作成	松井・山本・五十嵐・近藤
9/30(木)	資料作成	松井・山本・近藤
10/4(月)	GP 本番【初日】	松井・山本・五十嵐・近藤
10/8(金)	GP 本番【最終日】	松井・山本・五十嵐・近藤

～流れ～

前期中に業界・企業研究を通して「富山第一銀行」を知る。8 月中に GP の方向性を決める。9 月前半で大まかな企画内容を決定。9 月中旬で細かい内容を決めていく。9 月後半からリハーサルを入れていく。

２. GP 活動の振り返り

＜やって良かった事＞

・事前に中学生と顔合わせをすることで、活動計画が立てやすくなった。
・最終日にポスター作成のために、事前に中学生に対してポスターのデザインを宿題として考えてきてもらうことで、多くのアイデアがでた。また、それによってポスター作成がスムーズに進んだ。
・ポスター作成の際、水彩絵の具を使うことでポスターの仕上がりが鮮やかになった。
・昨年と同様に、クイズが打ち解けるのに役立った。
・中学生に出来るか不安だった他己紹介が、上手く出来たのでコミュニケーションをとるのに役立った。
・実行側の IS 生と企画側の GP 生との役割の違いを分けるようにしたのが良かった。

＜やっておけば良かった事＞

・昨年度の活動に関して、具体的な情報をもっと早くから知っておけばよかった。
・本番前のリハーサルをもっとやっておけばよかった。
・IS 生と GP 生との違いを分けることにこだわり過ぎたこと。

とやまろうどうきょく

1-5　富山労 働 局

初日　みんなで記念撮影

実施日程	平成 22 年 9 月 27 日(月) 平成 22 年 10 月 1 日(金)
メンバー	リーダー中田(なかだ) 香代子(かよこ)　森本(もりもと) 亜也奈(あやな)　山田(やまだ) 滝音(たきおん) 川原(かわはら) 秀之(ひでゆき)　佐々木(ささき) 由貴(ゆき)
担当教員	高井(たかい) 博美(ひろみ)

１.活動日程表

日付	内容	参加者	備考
6/23(水)	担当分科会決定		
6/25(金)	富山労働局様訪問	中田	
7/6(水)	企業研究の報告会【全体】		
7/27(水)	企画の大枠を考える	中田、山田、森本	
7/30(金)	IS 生と初顔合わせ	中田、山田、森本、川原、佐々木	
8/5(木)	中間報告発表内容検討	中田、山田、森本	
8/19(木)	報告会打ち合わせ	中田、森本	
8/20(金)	報告会資料作成	山田、森本	
8/23(月)	中間報告会【全体】		
8/30(月)	メリット考察	山田、森本	
9/6(月)	企画内容の時間調整	中田、山田、森本	
9/7(水)	IS 生及び先生方に企画プレゼン		
9/10(金)	滑川ハローワーク様訪問	高井先生、中田、森本、川原	
	役割分担の決定	中田、森本	
9/14(火)	企画進行内容打ち合わせ	森本、川原	
9/16(木)	LM にて各分担内容の確認及び報告	高井先生、中田、森本、川原、佐々木	12:30～13:05
9/17(金)	滑川ハローワーク様訪問　最終打合せ	高井先生、中田、森本、佐々木	
9/24(金)	先輩方からお話を伺う	中田、森本、川原、佐々木	
	最終リハ	荒井先生、高井先生、中田、森本、川原、佐々木	
9/27(月)	GP 本番①	高井先生、中田、森本、川原	9:30～16:30
9/30(木)	最終日のクイズ問題の確認	森本、佐々木	
10/１(金)	GP 本番②	高井先生、中田、森本、川原、佐々木	9:30～16:30
10/13(水)	反省会【全体】		

２. GP 活動の反省

	企業	中学生	IS 生
良かった点	・企画書を事前に企業様側から提示して頂いたため、向こうの意向が明確に分かったこと。	・逆に中学生の情報を事前に知りすぎないことで、直接いろいろ聞く事ができたこと。 ・首からぶら下げる名札とは別に三角 POP で名前を書いてもらうことで、話しやすい環境を作れたこと。	・IS 生が決まった段階で顔合わせと説明を行ったため、早い段階から IS 生と協力して企画を練り上げられた。 ・荒井先生や 4 年生から、事前に中学生との接し方についての注意点を聞けたこと。
悪かった点	・企業様との「ホウレンソウ」が徹底されていなかったこと。→企画内容の相違が生じた。	・１４歳の挑戦が始まる前に顔合わせをしなかったため、初日に緊張してしまった（緊張させてしまった）こと。	・連絡先の交換を全員で行わなかったこと。 ・最終リハを念入りに行わなかったため、当日の緊張が増してしまったこと。

【悪かった点の改善点】

企業様

→受け入れ先が富山労働局から滑川ハローワークに変更になった時点で、リーダー又はメンバーの誰かが挨拶＆説明に伺っていれば、企画内容の相違や日程の調整も上手くいったと思う。

中学生

→この問題は中学校側との調整もあるので難しいが、なるべく本番(14 の挑戦)前に顔合わせが出来るように交渉するのが良いと思う。

IS 生

→最終リハーサルには、なるべく全スタッフで臨むのが好ましいと思う。（当日にフォローもできるから）

きたにっぽんしんぶんしゃ

1-6　北日本新聞社

最終日に中学生と一緒に記念撮影

実施日程　　平成 23 年 9 月 26 日(月)　9:30～12:00

　　平成 23 年 9 月 30 日(金)　13:00～15:20

メンバー　リーダー：源（みなもと）　卓也（たくや）

丸山（まるやま）　知也（ともや）　目黒（めぐろ）　大貴（ひろき）　鬼頭（きとう）　沙弓（さゆみ）　二塚（ふたづか）　美乃里（みのり）　本田（ほんだ）　直樹（なおき）

担当教員　　荒井（あらい）　明（あきら）

1.　当日までの流れ

1.1　活動日程表

日付	内容	参加者
6/28（火）	北日本新聞社訪問 （「14 歳の挑戦」担当者の黒田様と池谷様との事前打ち合わせ）	本田
7/6(水)	IS 生への事前説明	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
7/13(水)	北日本新聞社訪問 （メンバーと「14 歳の挑戦」担当者の黒田様と池谷様との顔合わせ）	本田、源、丸山、目黒、鬼頭
7/19(火)	昨年のＧＰ生の話を聞く、方向性の話し合い	本田、源、丸山、目黒、鬼頭
7/22(金)	全体のスケジュール決め、初日・最終日の目的決め 活動内容の検討	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
7/26(火)	活動内容の検討	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
7/29(金)	活動内容の検討、時間割の検討	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
8/18(月)	インターンシップ体験後の学生からの報告、活動内容の見直し	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
8/19(火)	活動内容の決定、活動ごとの目標決め	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
↓	企業プレゼンの準備	各自
8/29(月)	企業プレゼンの準備、荒井先生に報告	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
8/30(火)	企業プレゼンの準備	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
8/31(水)	模擬プレゼン	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
9/1(木)	企業プレゼン	本田、源、丸山
9/2(金)	作業の役割分担、活動準備（小道具や内容の検討）	本田、源、丸山、目黒
9/6(火)	活動準備（小道具や内容の検討）	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
9/12（月）	各内容の流れの検討、インタビューシート準備	源、丸山、目黒、鬼頭
9/14（水）	各内容の確認、修正	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
9/15（木）	インターンシップ体験談の割り振り、各内容の修正	本田、源、丸山
9/20（火）	リハーサル準備、記者さんとの打ち合わせの内容についての検討	本田、源、丸山、鬼頭、

		二塚
9/21(水)	小道具完成、リハーサルの確認	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
9/22(木)	小助川先生や荒井先生、先輩、他のＧＰ生の前でリハーサル →内容の修正	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
9/25(日)	事前リハーサル、流れの確認	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
9/26(月)	14 歳の挑戦(本番 1 日目)、反省会 最終日の活動に向けて、記者さんとの事前打ち合わせ	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
9/27(火)	本番 2 日目の内容の修正	本田、丸山、目黒、鬼頭、二塚
9/29(木)	最終日の流れの確認	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
9/30(金)	14 歳の挑戦(本番 2 日目)、反省会	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
10/3(月)	ＧＰ新聞づくり	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚
10/6(木)	ＧＰ新聞完成	本田、源、丸山、目黒、鬼頭、二塚

1.2　企画内容立案の流れ

まず今回の活動は初年度とは異なり、白紙の状態から作り上げるものではなかったのですが、それに変わり今までの活動を見直し改善し、そこからさらに改良してより完成された活動へと昇華させなければなりませんでした。ただ、2010 年の活動が既に完成形に近い内容で、先輩方の努力に圧倒され、これを超えるのは大変だと思いました。

しかし、忘れてはならないのは目的が昨年の活動に勝つことではなく、この活動はあくまで中学生の為のものであることです。そこでまず、私たちは活動の軸となるものを話し合いで決め「私たち大学生を含め、中学生、北日本新聞社様、全員がやってよかった、大学生がいてくれてよかった、頼んでよかったなどといった全てにとってメリットがある活動」つまり、**「北日本新聞社でしか出来ない、大学生にしか出来ない活動」**そして、**「中学生の体験後にも何か生きるような活動」**を目指すという方針を立てて、そこから企画立案は始まりました。

初めに中学生にどうなってほしいかを話し合い、初日・最終日の目的を決め、先輩のアドバイスや今までの 2 回の企画の活動内容や反省点、北日本新聞社様の「14 歳の挑戦」の担当者である黒田様や池谷様のアドバイスなどを参考にしながら考え始めました。

インターンシップに行く前にあらかたの軸を決め、よりよい活動にするためにインターシップで培った知識を還元してもらい、話し合いを重ねに重ね進化した企画を目指しました。

1.3　昨年との違い

一番の大きな違いは「１４歳の挑戦」後の活動として最終日に行われる相互インタビューで中学生に書いてもらった記事を集めて１個の新聞を作り、それを中学生に贈るという活動を入れたことです。自分達の活動が何か中学生に影響をあたえられたかはわからないですが、せめて一つ思い出という価値に残るものを作成しようという思いからこの活動は生まれました。また、新聞のほかに大学生から中学生に向けたメッセージも一緒に贈りました。

他にも今までの活動の反省点を生かし、「講座の内容が複雑だった」という反省点には講座というイメージではなく、楽しみながら学べるクイズ番組のようにクイズをはさんだり、誰かに話したくなるような新聞の構造や豆知識を教えることにより興味をひかせるなどの工夫を取り入れました。他にもクイズには効果音を使ったり、お辞儀ブレードという視覚的にお辞儀の角度が確認できるものや解答札などの小道具も使いました。クイズや効果音、解答札には笑いが起こるようなネタも仕込んで楽しい雰囲気を作る努力もしました。

「初日と最終日の活動にリンクがなかった」という反省点には中学生に５日間の目標を立ててもらい、相互インタビューで目標を達成できたかを聞く、また、最終日の振り返りクイズは１日目の活動から出すなどつながりを持たせました。

他にもしおりを作ることで中学生にも次に何をするかが視覚的に解るようにしたり、ニックネームを書いた名札を作っていき、気軽に呼べるような工夫、自己紹介に心理テストを組み込み、緊張緩和を施す工夫をしました。

1.4　進行段階での反省

・連絡手段や報告の場所として提示されていたＰＳＮＳの活用が出来てなかった。また、ＰＳＮＳで会議の内容や決まったことを書くことで他の人からの意見をもらえ、まだ進化できた活動や新しい活動が生まれた可能性もありました。生かしきれなかったのは反省点の一つに挙げられます。
・他のＧＰ生とのかかわりが少なかった。リハーサルで関わったぐらいなのでもっと関わることで相互にいい作用が働いたのではないかと思います。
・北日本新聞社様にアポイントを取るのが遅くなってしまったり、荒井先生などに伝え忘れていたことがあったので、情報伝達やお願いはしっかりやるべきだった。
・６人という多人数でしたが積極的に短い時間でも集まれたことがよかった。来れなかった人にもフォローが出来ていたので会議がスムーズにできたと思いました。
・誰をターゲットにするかを明確にすることで明確な目標意識を持って活動に取り組めました。
・成長を感じられる活動になりました。
・事前に中学生と交流を図ることが出来れば、企画に中学生の意見を取り入れたものや中学生の雰囲気に合わせた企画など新たな企画のイメージが出来たのではないかと感じました。

2.　GP 活動を振り返って

2.1　タイムテーブル

日時	時間	内容	目的
9/26(月)			5 日間でより多くのものを吸収する準備をする(対象：中学生)
	9：15～9：30	準備 中学生と雑談	
	9：30～9：55	自己紹介	緊張緩和 中学生・大学生が打ち解ける
	9：55～10：30	新聞の読み方講座	新聞に興味を持ってもらう
	10：30～10：35	休憩	
	10：35～11：20	マナー講座	就業体験に向けての意識向上
	11：20～11：25	休憩	
	11：25～11：45	インターンシップ体験談	これからの就業体験のイメージをつかんでもらい、5 日間の目標を立てやすくする(対象：中学生)
	11：45～11：55	目標設定	中学生同士の交流を目的として目標を設定してもらう 明確な目標を持って、就業体験に取り組んでもらう
9/30(金)			「14 歳の挑戦」を経て、今後に生かせるような振り返りをする
	12：30～13：00	準備 中学生との雑談	
	13：00～13：15	振り返りクイズ	5 日間の体験を楽しく振り返る 緊張緩和
	13：15～14：35	相互インタビュー 途中休憩あり	新聞社らしく 5 日間を振り返る 中学生と大学生の交流
	14：35～14：40	休憩	
	14：40～15：10	記者さんとの座談会	自分達の就業体験とは違う、実際に働いている人の話を聞いて、具体的な仕事に対するイメージを持たせる
	15：10～15：20	記念撮影	
10/3(月) ↓ 10/6(木)		新聞記事の作成	活動を新聞としてまとめることで中学生たちのいい思い出にする

2.2　各企画について

企画全体についてですが、１．２「**企画内容立案の流れ**」で挙げたように「**北日本新聞社でしか出来ない、大学生にしか出来ない活動**」そして、「**中学生の体験後にも何か生きるような活動**」を前提とし、初日、最終日、それぞれに一つのキーワードをもとに作成しました。

初日のキーワードは「**緊張緩和**」です。自分達の活動の時間が「１４歳の挑戦」での最初の時間だったので、参加する中学生が初めて会う他の中学生や大人の方、初めての就業体験など、緊張するのが当たり前の状況だと考え、私たちの役割は中学生の緊張を少しでも緩和させることだと思い、このキーワードにしました。

最終日のキーワードは「**内省と今後への抱負**」です。最終日の活動の時間が「１４歳の挑戦」での最後の時間だったので、中学生が５日間の体験を振り返り、そこで得た知識などをより多く自分のものへと還元出来るお手伝いができるような活動をしたいと思い、このキーワードにしました。

9 月 26 日(月)　9：15～11：55 まで

9：15～9：30

準備・中学生との雑談

中学生が入室する前に中学生がある程度これから何をするのか理解できるよう、企画の大まかな内容を伝えるためにしおりの配布と新聞の読み方講座で使う新聞、中学生の名札を配布(所属中学の名前と下の名前を書いたもの)しました。

また、雑談をする際は中学生に大学生側から話しかけ、緊張を緩和させることで企画の進行がスムーズになるという効果も狙いました。

中学生の様子

初めて中学生を見たのは、「失礼します」と言って入室してくる姿でした。

各自の席に座ったときの中学生の表情は緊張していて、また、今回の就業体験を楽しみにしているような期待と就業体験に対する不安が合わさったようなものでした。

大学生から雑談の話題を提供することで返答してもらえ、会話のキャッチボールは成功しました。

実際の効果

先に雑談をすることで今回の体験をする中学生がどんな性格なのか、どんなことに興

味があるのかなどが少しわかったことで次の自己紹介のときに話題を提供しやすくなりました。
中学生の名札を中学生の入室前に席に配布しておくことで大学生側に席に座る中学生の名前が分かっていたことで話しかけやすくなっていました。また、企画にスムーズに入れた理由の一つに先に席順を決めたことがあります。先に決めていることで混乱なく企画へ進むことが出来ました。
中学生が入室する前に大学生が名札を付けていることにより、中学生に名前を知ってもらえていたので、次の企画の自己紹介がスムーズにできました。
大学生の名札はニックネームと役職を書くなどの工夫を施し、親しみやすいイメージを中学生に持たせることができたと思いました。

反省点

良かった点は、しおりや名札が中学生の役に立ったことと、大学生が笑顔で話しかけることで活動前に少し緊張緩和の効果があったことです。
しおりを渡したことで中学生が企画について事前に知ることができたことや、先に緊張緩和を促したことにより、今回の企画は非常にスムーズに行うことができました。

9：30～9：55

自己紹介

初日の企画が成功するかどうかを決めるのはこの企画にかかっていると言っても過言ではないと思ったため、この企画を最重要視しました。初日のキーワードである「**緊張緩和**」をさせることが最大の目標でもあったからです。それ故にこの自己紹介にはさまざまな工夫を取り入れました。
一つは名札にも取り入れたのですが、中学生を呼ぶときは下の名前で呼び、また、敬語は使わないことに気をつけました。
他にも、自己紹介の項目に好きな数字を組み込み、みんなの自己紹介が終わったときに、その数字で心理テストしたりと飽きさせない工夫を取り入れました。

中学生の様子

雑談を交えながら自己紹介をしていく中で、徐々に中学生の緊張も和らいできて、時折笑顔を見せてくれました。
心理テストの発表があったときには同じ中学の学生同士で「あってる。」「そのまんま」など感想を言い合ってました。

実際の効果

大学生がスーツを着て、接客業のような敬語で話しかけず、中学生を下の名前で呼び、敬語を使わないようにしたことは中学生の緊張緩和に役立ったと感じます。
また、中学生の自己紹介に質問をすることで中学生との距離が徐々に短くなっていくように感じました。他にも心理テストをいれることで中学生の興味をひかせることができました。

大学生の自己紹介の時に自分の中学校の時の就業体験を話して、中学生に今回の活動が思い出になることを伝えました。

反省点

はじめに想定した時間よりも長くなってしまったことは反省点のひとつにあげられます。
しかし、今回の活動全体を通して、時間の調整を柔軟に行うことができました。
また、活動全体を通しても言えることですが、大学生が中学生の名前を呼びながら質問をする形は、中学生に考えてもらえるので、この方法を取り入れて良かったです。

9：55～10：30

新聞の読み方講座

先に配布していた新聞を使い、講座というイメージというよりクイズ番組のように楽しみながらもしっかりと学べるようなものにしました。また、この時間は大学生がインターシップで学んだ新聞記事の構成や豆知識を知ってもらい、中学生に新聞に興味を持ってもらい、今後も新聞を読んでもらえるようなものを目指しました。

中学生の様子

この時間は中学生に笑顔は少なく、ペンを片手に静かに集中して話を聞いており、ときにこちらの質問にはそれぞれが考えた各々の回答を出してくれました。また、その質問に正解した場合と不正解した場合でも効果音を入れたことで笑ってくれたりしました。

実際の効果

中学生の隣に講師役以外の大学生を配置したことにより、中学生が話に遅れないように読み方のサポートする形をとることで中学生にきちんと内容が伝わったと感じます。
新聞の読み方を伝えることや今後にも使えるような知識を中学生にも伝えられ、実際、最終日に「この5日間しっかり新聞を読んでいる。」と言ってくれた中学生がいたことで「新聞に興味を持ってもらう」という目標は達成できました。
また、クイズや質問を所々で挟むことなどの工夫を入れ、中学生が受け身になってしまわないように心がけました。

反省点

新聞のページを行ったり来たりすることで少し中学生がついていくのに大変そうな部分がありました。それを解消するためにも資料を作っておくべきでした。
ポイントを２回言うことで中学生にちゃんと伝えることができたのではないかと思います。

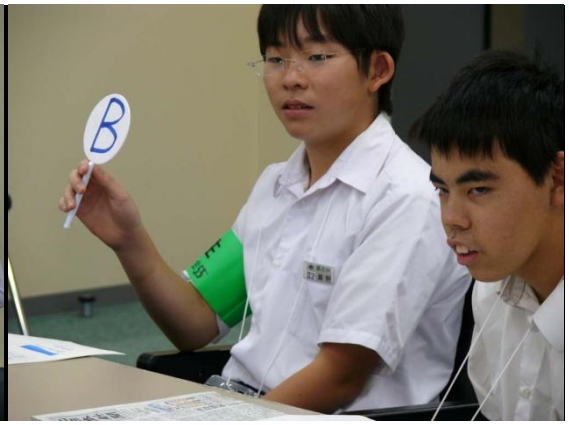
10：30～10：35
休憩

10：35～11：20
マナー講座

就業体験の意識の向上を目的とし、講座という名前ですが講議型ではなく、大学生と中学生が一緒に体を動かしたり交流したりしながら学べるものを目指しました。
内容としては挨拶やマナークイズ、身だしなみチェックシートを見ながら２人の大学生の見比べクイズ、中学生同士で身だしなみのチェック、視覚的にお辞儀の角度が確認できるお辞儀ブレードを使用して自分のお辞儀を中学生同士で確認できるようにしました。
また、挨拶やお辞儀のマナーは社会人の基礎中の基礎であるとともに、就業体験の後も学校などの日常生活で行う機会が毎日のようにあります。マナー講座を行い、就業体験中、挨拶をすることの大切さに気付き、普段の生活にも役立つのではないかと考え、マナー講座には力を入れました。

中学生の様子

非常に楽しそうな雰囲気でした。体を動かしながら、挨拶やお辞儀を体験することでずっと座っているよりも楽しみながら学べているのが感じられ、クイズには真剣に考えて、自分たちなりの答えを導いているのがわかりました。
中学生が時折見せる笑顔が印象的でした。



実際の効果

身だしなみチェッククイズのコーナー(写真前ページ右上)ではいち早くメガネが反対になっているのに気づいた中学生がずっと笑っている光景もありました。

クイズに効果音を取り入れることで雰囲気を盛り上げる効果がありました

中学生の目線に立って、「もし、エレベーターに乗る時〇〇君はどこに乗ったらいいかな？」などクイズの問い方にも工夫を入れることで知識だけではなくそれを行動に移せる、行動をしてみようかなと思えるような活動になったと感じます。

体を動かすというやり方を取り入れたことで中学生にずっと座っているよりリラックスしながら活動させることができていた。

お辞儀ブレードを使うことにより、中学生にも視覚的に分かりやすく体験させることができた。

レジュメを使うことにより、終わってからでも内容やポイントを確認できるようにしたことで中学生が今後も使えるものになったと思う。

反省点

時間が想定よりもかかってしまったのは体を動かしながらなので、見積もりを短くしてしまったことによるものだと思う。ただ、そこで慌てず、柔軟に他の企画との時間調整がしっかり出来たことがよかった。

他の企画にも言えることだが、他校の中学生との交流が少ない。せっかく 3 校でやっているので勿体無かった。

11：20〜11：25

休憩

11：25〜11：45

インターンシップ体験談

インターンシップの体験談を話し、どんなことをやったか、どんなことに気をつけたかなど、これからの「14 歳の挑戦」を行う上でのアドバイスを大学生が話す。その上で次の企画である「5 日間の目標設定」に活かせるように意識しました。

また、最終日の振り返りクイズに問題を含めることで最終日の活動ともつながりを持たせた。

中学生の様子

興味ある人と興味のない人で聞く態度が違っていた。

質問を積極的にしてくれる子や話を真剣にメモを取っていた子がいた。

実際の効果

最終日にこの体験談の中にあったアドバイスの一つに「メモ帳を持ち歩くこと」というものがあったのですが、中学生の一人が最終日に「この体験中メモ帳を持ち歩いた」と話してくれて、体験談が中学生の役に立っていることと中学生が真剣に聞いてくれていたことが実感できた。

アドバイスが活かされたことは中学生にとって効果のあることが話せたのではないかと思う。

時折質問を挟んだことや話し方に気を付けたことであまり堅苦しい話にならず、中学生にとっても有意義のあるものになったのではないかと思う。

体験談用のしおりも作り、次に何を話すのか、アドバイスは何かなどを記載して今後にも活かせるようなものを作ったのも効果的だった。

反省点

先に中学生の日程をいただいていたので「14 歳の挑戦」のプログラムの順番で話をするべきだった。そうすることで中学生により今後の体験のイメージがついたと思う。

中学生の様子にも書いたが興味のある学生と興味のない学生がいたので、興味がない学生に興味を持たせるような工夫を考えていくべきだった。

11：45〜11：55

目標設定

5 日間の目標を考えるため中学生と大学生 2 人で円となり話し合いをしながら目標を決めました。決まったらその目標を紙に書いて他の大学生に発表。

全員共通の**「新聞の記事を 1 つ以上読む」「社内の人にあいさつをする」**という二つの目標を設定しました。

この 2 つの目標を達成できたかどうかを最終日に確認をすることでつながりを持たせた。

中学生の様子

自ら話すことがあまりなく、大学生がずっとしゃべっていた印象を持ちました。

実際の効果

目標を決めることで5日間の体験が充実したものになっていると最終日のインタビューしている時に感じ、初日に目標を設定したことは成功だと思いました。

反省点

自分がこれからの体験でやりたいことを紙に書かせた後、それをみんなの前で発表させるなど全体ではなく個人目標という形にしても良かったのではないかと思いました。。

全体で決める場合のやり方をもう少し工夫し、中学生の自主性を促すべきだった。

9月30日(金)　12：30～15：20まで

12：30～13：00

準備・中学生との雑談

中学生が5日ぶりに会った大学生との緊張緩和を目指しました。

中学生から質問があったり、大学生側から質問したりと初日より親しげに話をしてくれました。

中学生の様子

会うのも2回目ということで、中学生には緊張の色は見られませんでした。

初日よりもリラックスした雰囲気で最終日の企画に臨んでくれて、非常に安心しました。

初日より中学生が明るくなっていました。

実際の効果

活動前に話すことで「14 歳の挑戦」がすごく充実したものになっているように感じました。
ここで初日のインターンシップ体験談の大学生からのアドバイス「メモ帳を持ち歩く」という話を聞き、実際にメモ帳を持ち始めたなどの話を聞くことが出来ました。

反省点

全体的なことでもあるのですが、中学生と大学生や大学生と大学生が積極的にコミュニケーション取ることが今回の活動の成功につながったと思います。

13：00～13：15

振り返りクイズ

5 日間のまとめとして、初日に学んだことを 3 択クイズにして出題。初日の活動とリンクさせ、中学生が「14 歳の挑戦」で学んだことや体験したことの知識の定着を目指しました。
クイズにネタを仕込むことで楽しく進行することを考えました。

中学生の様子

大学生が出す出題に真剣に考え、時折、笑顔を見せてくれました。
正答率も高かった。
また、初日に配った資料やメモした紙を取り出していて、初日の活動が中学生の為になっていたことが実感できた
クイズの景品には大きい袋と小さい袋を用意したことで景品を選ぶのに困っていました。
しかし、景品には喜んでくれていました。

実際の効果

効果音などで楽しい雰囲気を作り、和気あいあいと出来ていた。

初日の活動とリンクをさせることで初日の活動が無駄にならず、復習や知識の定着の手助けになった。

反省点

クイズの景品を渡したことにより、時々、景品に意識がいっている中学生がいて、大学生が注意する場面があったので、渡すタイミングを考えるべきだった。クイズの選択肢にも工夫を取り入れて飽きさせず、楽しみながら振り返ることが出来ていた。

13：15～14：35（途中休憩あり）

相互インタビュー

今回の自分達が企画した活動のなかでも一番重要となる活動です。

なぜなら、最終日の目標「**内省と今後への抱負**」を体現した活動で 5 日間のまとめとなる活動になるからです。

インタビュー項目に中学生が初日に立てた目標(**「新聞の記事を 1 つ以上読む」「社内の人にあいさつをする」**)についての反省や、「14 歳の挑戦」の経験を通じてどんなことを心がけていきたいかというように中学生が今後この経験をどう活かしたいかを考えることが含まれています。

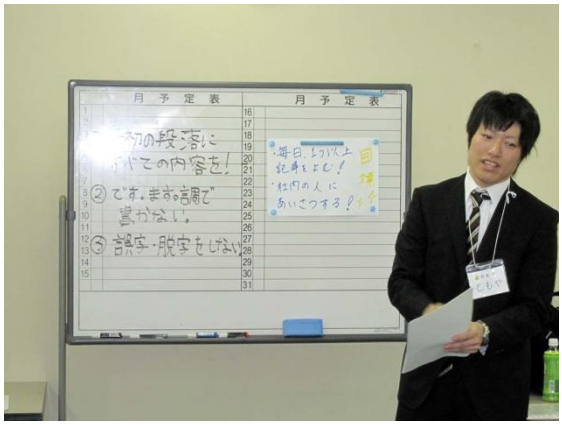
また、そのインタビューしたものを記事にすることによって、新聞社でしか出来ない活動になったと思います。

中学生の様子

真剣に取り組んでいる姿が確認できました。先に北日本新聞社の記者橋本様と大学生の手本を見たおかげでイメージが湧き、スムーズに相手の大学生とインタビュー出来ていた。

ただ、記事を考えることは簡単に出来た中学生と遅れてしまう中学生がいた。ただ、発表には間に合ってそれぞれの記事を発表する時は堂々としていた。

それぞれの抱負に「今回の経験を今後も生かしたい」というものが書かれており、中学生の成長を間近で見られたのではないかと思う。



実際の効果

記者さんと大学生で行ったお手本がよく、中学生にも分かりやすかった。このおかげでどの中学生もインタビューがスムーズに出来ていた。また、その際に記事を書いてもらえたことにより、お手本だけではなくより記事を書くことのイメージがついたのではないかと思う。

インタビューシートがあったこともスムーズに進行した要因の一つとして挙げられる。

初日に目標を設定することで、この活動がより意味のあるものになったと感じる。中学生が目標を意識して活動ができ、その経験や成長を振り返ることで充実感と達成感を感じることができたと思います。

反省点

インタビューシートの例文をもっといろんなバリエーションで書くことができれば、中学生にもっといろんな書き方があることを知ってもらうことができた。

せっかく書いてもらった橋本様の記事を帰る際に気が回らずに持って帰れなかったこと。

橋本様との事前打ち合わせをすることがよりよいお手本につながった。

2 つの発表の班を作ることが時間をうまく使えた要因の一つである。

どの中学生がどの大学生にインタビューするかを性別や共通点の有無などで事前に決めておくことが混乱を招かずにインタビューを行うことができた要因だと思います。

14：35～14：40

休憩

14：40～15：10

記者さんとの座談会

先ほどのインタビューでお手本をしてくれた橋本様に中学生と大学生からの質問に答えてもらう座談会です。

内省よりも中学生や大学生の今後の人生についての話に重きをおいて、今後に生かせるものを何かつかんでほしいという思いから生まれたものです。

中学生の様子

初日の帰り際やしおりに「最終日までに質問を考えてきて」と話をしてきたので中学生も積極的に質問していた。ただ、全員というわけではなかったのが残念だった。

ただ、話は真剣に聞いていたので、何か心に残ったものがあると信じたい。

実際の効果

先に質問を考えてきてもらうことや詰まったときには大学生が質問するなど事前に決めていたことがしっかり出来ていたので、スムーズに進み、中学生が多くのものを得られたと思う。

反省点

雰囲気をもっとわいわいがやがやさせたかった。

質問をしやすい雰囲気作りがあまり出来ていなかった。

司会役の源さんの場の持たせ方が上手だった。

15：10～15：20

記念撮影

新聞記事の作成

「14 歳の挑戦」終了後に中学生全員にＧＰ新聞を作成しプレゼントしました。

この活動は今回の活動の集大成であり、何でもいいので何か一つでも得たものがあればいいと考えて行動してきた私達から、思い出として形になるものを残そうという思いから生れたものです。

記事の内容は最終日の「相互インタビュー」の中学生と大学生の記事を集め、一つの新聞とし、それに「相互インタビュー」でペアだった大学生から中学生へ向けたメッセージも別紙で作成しました。

中学生の様子

手渡し出来なかったことで中学生の様子を見ることが出来なかったのは残念ですが、この新聞を受け取ってくれたときに笑顔になってほしい。それが私たちの願いです。

実際の効果

この新聞の効果は中学生がまたいつかこの新聞を見たときに今回の活動や活動を通して持った想いや知識、新聞の読み方や、大学生を思い出してくれることだと思う。私達はこの新聞にその効果があると信じています。

反省点

中学生に手渡し出来なかったこと。

集大成の活動であるが、全員で集まって出来なかったこと。

全体の活動

最終日の活動の後、北日本新聞社の担当の方に「中学生にとって緊張緩和になってよかった」などお褒めの言葉をいただきました。

また、中学生には「とても楽しかった」「ありがとうございました」と言ってもらい、中には報道関係の仕事に興味を持ったと言ってくれた生徒がいました。

「14 歳の挑戦」の中学生のサポートなど今回の活動は成功したと自信を持って言えます。

また、今回の活動にご協力していただいた方々に感謝の意を述べさせていただきます。

本当にありがとうございました。

３． 参加大学生の感想

北日本新聞社様ＧＰ学生サポーター

源　卓也

私は、この GP 活動に参加したことによってたくさんの経験をさせていただくことが出来、自分の力になったと感じました。

今年が GP 活動 3 年目という事もあり、3 年間の集大成となる活動にするべきだとして、様々な課題に取り組みました。

自分達にしか出来ないような活動、去年より更に洗練されたものをプレゼンにするなど多くの課題がありましたが、それをみんなで乗り越え、自分達が満足いくようなプレゼンに出来ただけでなく、会社の方や中学生のみんなにも、喜んでいただけた事が自分にとって、今後、社会に出る上で大きな自信になったと思いました。

私は、本当にこの活動に参加できて良かったです。

これからもこの活動を引き継いでいけたらと思います。

北日本新聞社様ＧＰ学生サポーター

丸山　知也

とても素敵な出会いだった。内容を書く人がほとんどだろうから外郭を書こうと思う。特にこれといった目標もなく過ごしていた大学生活にやりがいを見つけることができた。中学生、北日本新聞社の方はもちろん、同じ目標を目指す友達、サポートしてくれる先輩や後輩、そして未熟な自分達の面倒を見てくれた先生方。半年でどれだけ輪が広がっただろう。もしあの時、GP 参加を表明していなかったら。そう考えるとゾッとする。この活動で出会えた人々からは本当に多くのことを学ばせてもらった。自分も何かひとつでも良い影響を与えられていることを願う。

北日本新聞社様ＧＰ学生サポーター
目黒　大貴

ＧＰの活動は、今までの学生生活では体験できないような様々な経験をすることができ、参加してよかったと心から思えます。

初めて合うチームメイトとチームワークを深め、自分たちで考え企画を作り、年代の違う方々とのコミュニケーションなどを経て、プログラムを最後まで成し遂げたことで、多くのことを学び、自信を得ることが出来ました。人間的にも大きく成長できたと実感しています。

北日本新聞社様ＧＰ学生サポーター
鬼頭　沙弓

最初の方でどのような内容にするか決めていく段階の頃は、何度集まってもなかなか進んでいる感じがしなくて、アイデアの出ない自分が悔しいと感じていました。けれど、皆で意見を積極的に出していけるいい雰囲気の会議だったので、準備は大変でしたがとても楽しい思い出になったと思います。また、インターンシップ中も気合を入れることができ、インターンシップで得たことを復習できるよい機会になりました。この活動で得たものは、きっと今後にも役立つだろうと思います。

北日本新聞社様ＧＰ学生サポーター
二塚　美乃里

ＧＰの企画会議では、チームのメンバーと何度も話し合いを重ねることで、インターンシップで得た経験と知識を自分の中により深く刻み込むことができました。もしGPに参加しなかったら、それらは今頃風化していたかもしれません。私は中学生の役に立ちたい、楽しんでもらいたい、という一心で活動に取り組んでいましたが、活動を終え、振り返ってみると、GPは企画力、チームワーク力、プレゼンテーション力などをつける非常に良い機会であり、自分の為になる要素が多くありました。GPに参加して本当に良かったです。

４．参考資料

・インタビューシート
・中学生に贈った新聞
・北日本新聞社様への企業プレゼン用のパワーポイント

インタビューシート

＜　質問項目　＞

Ｑ１．いつ？

Ａ．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ｑ２．どこで？

Ａ．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ｑ３．だれが？

Ａ．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ｑ４．なにを？

Ａ．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ｑ５．インターンシップまたは「１４歳の挑戦」でなぜ北日本新聞社を選んだか？

Ａ．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ｑ６．インターンシップまたは「１４歳の挑戦」を通して感じたことやわかったことは？

Ａ．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ｑ７．（中学生に質問）初日に立てた目標を意識して「１４歳の挑戦」を取り組めたか？

はい　　いいえ

理由＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ｑ８．インターンシップまたは「１４歳の挑戦」で一番印象に残っていることは？

Ａ．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Q9．インターンシップまたは「１４歳の挑戦」を通してこれから心がけていきたいことは？

Ａ．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ｑ１０．インターンシップまたは「１４歳の挑戦」で特に大変だったことは？

Ａ．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ｑ１１．**インターンシップまたは**「14 歳の挑戦」を通して仕事をすることの大変さを知ることができましたか？

はい　　**いいえ**

Ｑ１２．ペアの人に自由に質問してみよう

質問

Ａ．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＜　記事を作ってみよう　＞

＜　記事の例　＞

今年の 8 月 22 日から 26 日、富山大学の M さん（20）が北日本新聞社でインターンシップという就業体験を行い、働くことの厳しさや、やりがいを学んだ。

以前からマスコミ業界に興味を持っていた M さんは、北日本新聞社を選び、実際に働いてみることで、「マスコミ業界は一見、華やかなイメージが先行しているけど、実際は見えないところでの仕事が多くあり、大変だった。反対に、自分で記事を作ったり、見出しをつけたりする仕事はやりがいがあって楽しかった。」と話していた。

「一番印象に残っていることは何か」という質問に対し、M さんは「編制本部で紙面レイアウトを作ったのが楽しかった。実際に印刷してもらうと、本当に自分のつけた見出しが新聞に載っているような気がして、とても嬉しかった。」と笑顔で話していた。

この体験を通して、M さんは、「これから社会に出るために必要なことは、特別な技術や対策ではなく、新聞を毎日欠かさず読んだりすることや、あいさつをするなど当たり前のことを当たり前に出来ることが大切だと思った。これらのことをできる大人になりたい。」と意気込んだ。

★みんなの記事★

GP新聞

発行者

源　卓也

丸山　知也

目黒　大貴

二塚　美乃里

鬼頭　沙弓

本田　直樹

2011年(平成23年)

10月6日

木曜日

「14歳の挑戦」feat.富山大学

今年の9月26日から30日にかけて、富山大学が取り組んでいる「富大流人生設計支援プログラム」の活動の一環として、富山県がすべての中学2年生を対象に行っている就業体験「14歳の挑戦」に大学生が「キャリアサポーター」として参加した。

活動の最終日に、中学生と大学生がペアを組み、お互いにインタビューをして、記事を書きあう「相互インタビュー」を行い、その時に作成した記事が以下の通りである。

今年の8月22日から26日、富山大学の二塚美乃里さん（20）が北日本新聞社で「インターンシップ」という就業体験を行い、働くことの大変さを学んだ。

情報を得るということに興味があった二塚さんは、北日本新聞社を選び、実際に働いてみることで、「地味な仕事、つまらない仕事、いろんな仕事があったが、どんな仕事でも必ずやり遂げなければいけないと感じた。」と話していた。

「特に大変だったことは何か」という質問に対し、二塚さんは「記事を書くことが大変だった。書きたいことが多すぎて、短くまとめるのが難しくて、3回書き直した。」と笑って話していた。

この体験を通して、二塚さんは「これからは、普段からハキハキと受け答えできるよう心がけていきたい。」と意気込んだ。

記者　堀川中　扇　杏津美

今年の8月8日から12日、富山大学の目黒大貴さん（20）が北日本新聞社で「インターンシップ」という就業体験を行い、礼儀やあいさつの大切さを学んだ。

マスコミの裏側について知りたかった目黒大貴さんは、北日本新聞社を選び、実際に働いてみることで、「わかりやすい記事を書くのが大変だった。」と話していた。

「一番印象に残っていることは何か」という質問に対し、目黒さんは「駅前での号外配りが楽しかった。新湊高校が優勝したと言ったら、みんな笑顔で号外をとってくれたのがうれしかった。」と笑顔で話していた。

この体験を通して、目黒さんは、「日頃からあいさつと礼儀を心がけることと、新聞を読むことが大切だと思った。」と語った。

記者　呉羽中　篠田　遼太朗

今年の8月22日から26日の5日間、富山大学の鬼頭沙弓さん(20)が北日本新聞社で「インターンシップ」という就業体験を行った。

今回のインターンシップで一番印象に残っていることは、編制本部での校閲だと言う。誤字脱字を見つけるこの仕事は、取材のような華やかさはないけれども、間違いの許されない新聞においてとても大事な作業だ。自分の指摘した間違いが直って新聞に載ったときの感動は大きい。

インターンシップを通じて思ったことは、やはり「あいさつ」。人と人との関係を円滑に進める方法でもあるし、自分から発言していくことの大切さを感じたという。その思いは記者の仕事とつながるのではと思った。

記者　堀川中　長井　綾佳

8月8日から12日の5日間、富山大学の丸山知也さん(21)ら5人が北日本新聞社で就業体験「インターンシップ」を行い、仕事をすることの大変さなどを知った。記者の取材に同行した際、帰省ラッシュで記者とはぐれてしまった。など当時のことについて語ってくれた。

丸山さんは北日本新聞社を選んだ理由について、「今まで新聞を読むことがなかったので、新聞を読む機会を作りたかった。」と話した。また、インターンシップを通して、「あいさつをすることや毎日新聞を読むことなどを心がけるようになった。」とも話していた。

記者　呉羽中　松井　公平

8月24日から9月3日富山大学の本田直樹さん(21)が北日本新聞社とチューリップテレビで就業体験を行い、働くことの厳しさや、やりがいを学んだ。以前からマスコミ業界に興味を持っていた本田さんは、マスコミ業界の裏側を知ることができるので、北日本新聞社を選び、実際に働いてみることで、「色んな仕事があって一つのものができている」と話していた。

「インターンシップで一番印象に残っていることは何か」という質問に対し、本田さんは、「チューリップテレビでプロンプターを見たことと取材を受けたこと」と話していた。

記者　富山北部中　中野　広陸

今年の8月22日から26日、富山大学の源卓也さん（20）が北日本新聞社で「インターンシップ」という就業体験を行い、働くことの厳しさややりがいを学んだ。

以前からマスコミ業界に興味をもっていたという源さんは、北日本新聞社を選び、実際に働いてみることで、「あいさつなど基本的マナーが大切だ。」と話していた。

「一番印象に残っていることは何か」という質問に対し、源さんは「大雨の中での撮影は大変だった。」と話した。

この体験を通して、源さんは、「毎日新聞を読むのとあいさつやマナーなどをしっかり身につけたい。」と話した。

記者　富山北部中　真野　勇佑

★大学生の記事★

今年の9月26日から30日、堀川中学校2年の扇杏津美さん(14)が北日本新聞社で「14歳の挑戦」という就業体験を行い、働くことの楽しさ、やりがいを実感した。

扇さんは普段、新聞を読む機会がなかったので、新聞と関わりを持つキッカケとして今回北日本新聞社を選んだ。就業体験では、越中座見学、新聞の見出し作成、取材や記事作成を行い、「難しいこともあったが、それ以上に楽しかった。一つのことに集中するって良いことだなと分かった。」と語った。

初日にたてた「あいさつをする」という目標に関しては、「達成できた。社員の方がとてもフレンドリーで、向こうからあいさつをしてくれたので、自分も進んであいさつしようと思えた。」と評価した。就業体験を終えて、今後の目標は「コミュニケーション力をつけること」と意気込んだ。

記者　二塚　美乃里

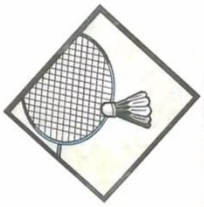
9月26日から30日、富山北部中学校の真野勇佑君（14）が北日本新聞社で「14歳の挑戦」という就業体験を行い、仕事の大変さや、あいさつやマナーの大切さを学んだ。

部活の先輩に勧められて選んだ勇佑君は、活動当日に「毎日一つ以上記事を読む」「社内の人にあいさつする」という2つの目標を掲げて取り組んだ。最終日に「目標は達成できたか」という質問に対し「全員にあいさつできた。新聞も初日に聞いた新聞の読み方講座を参考にして読んだ。」と話していた。

「一番印象に残っていることは何ですか」と質問すると「カメラでイベントを撮影したことが一番楽しかった。」と話していた。

この体験を通して、勇佑君は「新聞業界で働くことが将来の夢の一つになった。これからは、あいさつやマナーを学校でもしていきたい。」と意気込んだ。

記者　源　卓也



今年の9月26日から30日にかけて、富山北部中学校の中野広陸君（14）が北日本新聞社で「14歳の挑戦」という就業体験を行い、仕事をすることの大変さを知った。

この体験を通し、広陸君は、「パソコンを使って、見出しを作ったり、チラシを運ぶのが思っていたより、重くて大変だった。でも、前から写真を撮るのが好きだったので、動きを感じさせる撮り方を見ることができたのが一番印象に残った。」と笑顔で話していた。

「この体験を通してこれから心がけていきたいことは何か」という質問に対し、広陸君は、「毎日少しずつでも新聞を読んでいきたい。」と意気込んでいた。

また、「14歳の挑戦で大学生がいてどうだったか」という質問に対し、中野広陸君は、「楽しかった。」と満面の笑みで話してくれた。

記者　本田　直樹

9月26日から30日、堀川中学校2年の長井綾佳さん（13）が北日本新聞社で「14歳の挑戦」という就業体験を行い、働くことの大変さを学んだ。

長井さんは毎朝、家庭で新聞を読む習慣があり、新聞が好きで記者の仕事に興味があったという。

「14歳の挑戦」では、実際に記事を作成したが、長井さんは「体験だけでも考えこんだが、仕事になると毎日行うものだと考えると大変だ。」と話していた。

最終日には、自分で決めたテーマについて作文を書いた。そのことに対し、長井さんは「新聞に限らず、書くコツを教わったことが一番印象に残っている。」と笑顔で話していた。

記者　鬼頭　沙弓

9月26日から30日まで、呉羽中学校の篠田遼太郎君（13）が、北日本新聞社で「14歳の挑戦」という就業体験を行い、仕事のやりがいや、あいさつ、マナーの大切さを学んだ。

テレビには出ないニュースも扱う新聞について詳しく知りたかった遼太郎君は、北日本新聞社を選び、取材やチラシ運びなど様々な仕事を体験した。

「一番大変だったことは何か」という質問に対し遼太郎君は、「重いチラシを運んだこと。働くことの大変さを知った。」と話した。

14歳の挑戦を通して遼太郎君は「あいさつを心がけ、毎朝、新聞の一面を読み、社会のことを知る。」という目標を掲げ、決意をあらわにした。

記者　目黒　大貴

9月26日から30日にかけて呉羽中学校の松井公平君(14)が北日本新聞社で「14歳の挑戦」という5日間の就業体験を行い、仕事は楽しくやりがいのあるものだと学んだ。

初日にたてた目標である、「社内の人にあいさつをする、毎日記事を読む」を意識して取り組んだ公平君は、「ロビーで会社の人にあいさつができ、気になる記事も毎日3つほど読むこともできた」と話した。

14歳の挑戦を通して、「働くこと」の大変さを理解でき、期間中に身についた「メモを取るクセ」をこれからも心がけていきたいと今後への意気込みをあらわにした。

記者　丸山　知也

北日本新聞社様ご提案書

本田　直樹（キャリアサポーター）
源　　卓也
丸山　知也
目黒　大貴
鬼頭　沙弓
二塚　美乃里

概要

・活動日
　9月26日　9時30分～12時00分
　9月30日　13時00分～15時30分

・中学生　　6人

・大学生　　キャリアサポーター1名
　　インターシップ生5名

今年のGP活動の目標

・初日
五日間でより多くのものを吸収する準備をする

・最終日
「１４歳の挑戦」を経て、今後に生かせるような振り返りをする

去年との相違点

・初日に中学生たちの目標設定を追加
→最終日のインタビューで目標の達成度・反省点の確認

・IS生たちのインターン体験談を追加

・GP後、中学生に向けての新聞作成・配布

今年のGP活動内容

・<初日>９月２６日
　①自己紹介　３０分
　休憩
　②新聞の読み方講座　３０分
　休憩
　③マナー講座　４０分
　休憩
　④IS体験談・目標設定　３０分

①自己紹介

・目的
緊張緩和
中学生・大学生同士打ち解けあう

・内容
　・名札の作成
　・質問を紹介の間にはさみながら行う。
　・席は円卓
　・２分×１２

②新聞の読み方講座

・目的
新聞に興味をもってもらう。

・内容
当日の朝刊を用いて、新聞の構造をクイズを交えながら　説明する。　webunの紹介を行う。

・ご依頼
当日の朝刊12部を用意していただけないでしょうか？

③マナー講座

・目的
就業体験に向けての意識向上
社会人の基礎知識

・内容
マナーに関するクイズを交えながら行う。
・あいさつ、お辞儀　・敬語　etc.

④インターン体験談

・目的
これからの就業体験のイメージをつかんでもらい、
5日間の目標を立て易くする。

・　内容
大学生がISで体験した出来事を話す。
・1日のスケジュールを話す。
・席は円卓
・雑談形式

⑤5日間の目標設定

・目的
中学生同士の交流を目的として目標を設定してもらう。
明確な目標をもって、就業体験に取り組んでもらう。

・内容
おおまかな目標を中学生同士で設定してもらう。
（進行を大学生が補助）

最終日活動内容

①振り返りクイズ　３０分
休憩
②相互インタビュー　約８０分
休憩
③記者との座談会　３０分

①振り返りクイズ

・目的
5日間の体験を楽しく振り返る。
緊張緩和

・内容
中学生にペアを組んでもらう。クイズは、初日に行った読み方講座や、マナー講座から出題する。正解者には景品（お菓子など）。
新聞の見出しを作成してもらう。

②相互インタビュー

・目的
新聞社らしく5日間を振り返る。
中学生と大学生の交流。

・内容
中学生と大学生がペアを組み、相互にインタビューをして双方の記事を作成し、発表を行う。

・ご依頼
記者の方1名にご協力をお願いできないでしょうか？

インタビューの内容について

・大学生と中学生でペアになる。

・インタビューシートをこちらであらかじめ作成し、ある程度の枠組みを作っておく。

・大学生は１４歳の挑戦での体験を、中学生はISの体験を、５Ｗ１Ｈに基づいて質問し記事を作成する。

・加えて、初日にたてた目標の達成度・反省点をインタビュー内容に加える。

インタビューのタイムテーブル

①記者→大学生（10分）・・・お手本
②インタビューシートを配布し、質問内容を整理（10分）
③大学生→中学生にインタビュー（10分）
④中学生→大学生にインタビュー（10分）
⑤記事作成・・・相互でインタビューした内容をまとめる（10分）
⑥発表・・・作成した記事の発表と感想、2グループに分けて発表してもらう（20分）
⑦総評・・・記者の方からの感想（10分）

③記者との座談会

・目的
自分たちの就業体験とは違う、実際に働いている人の話を聞いて、具体的な仕事に対するイメージをもたせる。
・内容
各中学校毎に質問を考えてきてもらい、記者の方に答えていただく。

GP後の活動内容

・新聞記事作成
活動を新聞としてまとめることで中学生達の良い思い出になる。

・形式→インタビューで作成した記事とGP活動中の写真を基に作成する。

1-7　射水市（いみずし）　大島絵本館（おおしまえほんかん）

全体の反省会の様子

実施日程　　平成 23 年 9 月 16 日(金)　15 歳の選択後(10 分程度)

平成 23 年 9 月 27 日(火)　9:15～12:00

平成 23 年 9 月 28 日(水)　9:15～12:00

平成 23 年 9 月 30 日(金)　15:00～16:00

メンバー　　リーダー:傳羽(でんば) 佐有(さあり)　塩谷(しおたに) 優子(ゆうこ)　樋口(ひぐち) 綾(あや)　阿部(あべ) 早織(さおり)

担当教員　　小助川(こすけがわ) 貞次(ていじ)

1.　当日までの流れ

1.1　活動日程表

日付	内容	参加者
6/30(木)	昨年度の状況の説明	長森千明(昨年度 IS 生)・阿部
7/1(金)	昨年度の状況の説明	鈴木麻美子(昨年度 GP 生)・阿部
7/6(水)	IS 生への事前説明	傳羽・塩谷・樋口・阿部
7/12(火)	事前訪問(大島絵本館様)	傳羽・塩谷・樋口・阿部
7/21(木)	IS 生との打ち合わせ	鈴木・傳羽・塩谷・樋口・阿部
8/16(火)	IS 生との打ち合わせ	鈴木・傳羽・塩谷・樋口・阿部
9/6(火)	大島絵本館様と打ち合わせ(電話)	阿部
9/7(水)	事前訪問(呉羽中学校様)	傳羽・塩谷・樋口・阿部
9/15(木)	企業プレゼン	阿部
9/16(金)	事前訪問(呉羽中学校様)・顔合わせ	傳羽・塩谷・樋口・阿部
9/26(月)	最終打ち合わせ	傳羽・塩谷・樋口・阿部
9/27(火)	14 歳の挑戦(初日)	傳羽・塩谷・樋口・阿部
9/28(水)	14 歳の挑戦(2 日目)	傳羽・塩谷・樋口・阿部
9/30(金)	14 歳の挑戦(最終日)	傳羽・塩谷・樋口・阿部

※IS＝インターンシップ

1.2　企画内容立案の流れ

企画立案をするに当たって去年の活動で良かった部分を残しつつ、反省点である「中学生が緊張していたので交流を増やした方がよかった」「中学生自身が数日間の成長を実感できるようにしたかった」「中学生が自分で考え、行動する場面を設ければよかった」という 3 点を改善することが課題として挙げられました。

昨年度は GP 生（企画者）が全てのプログラムを企画し、IS 生は「14 歳の挑戦」で中学生への指導のみを担当していたのですが、今年度は IS 生にも一緒に企画立案の段階から参加してもらうことにしました。

「14 歳の挑戦」を行う現場でインターンシップを経験してきた IS 生に企画立案段階から参加してもらうことで、より良い企画を作ることができたと感じます。現場で活動しないと見えてこない部分を実際に教えてもらいながら、企画することが出来たため本番当日に予想していなかったトラブルが起こることはありませんでした。

1.3　昨年との違い

昨年度の反省を活かし、今年度は「中学生の緊張緩和をすること」「就業体験中の日々の成長を中学生に実感させること」「中学生が自分で考え、行動する場面をいくつか設けること」この 3 点を達成できるようなプログラムを作成しました。

昨年度との違いは中学生の緊張を緩和するために「14 歳の挑戦」が始まる前に IS 生と中学生の顔合わ

せを行って打ち解ける機会を設けたり、IS 生と中学生のペア（もしくは IS 生 1 人と中学生 2 人の班）を作り中学生が疑問や不安を解消しやすい環境を作ったりした点です。また、中学生に「14 歳の挑戦」初日から最終日までしおりにその日 1 日の目標と反省を書きこんでもらい、最終日に自分のどのような所が成長したのかということを発表してもらった所も昨年度との違いです。

一番の違いは、「14 歳の挑戦」初日に中学生を 2 グループに分けて活動させたということです。少人数での活動を取り入れることで、中学生はより効率的に IS 生に指導してもらうことができ、自分で考えて動く場面も増えたと思います。

1.4　進行段階での反省

・全ての活動において、大まかなスケジュールを立てられなかったため、準備が期限ギリギリになることが多かった。

→全体感を持ち、計画的に活動するべきでした。

・昨年度とは違い、GP 生が一人しかいなかったため、自分が行き詰ってしまうと全く進まなかった。

→他のグループの GP 生や先生に相談し、行き詰る前に打開策を見つけるべきだった。「報告・連絡・相談」を意識して行うべきでした。

2. GP 活動を振り返って

2.1　タイムテーブル

日時	時間	内容
9/7（水）	10 分程度	IS 生と中学生の顔合わせ
		14 歳の挑戦の説明・質疑応答
		しおりの配布・IS 生と中学生のペア（班）作成
9/27（火）	9:15～9 : 20	集合
		挨拶、予定の確認
	9:30～9 : 50	朝礼
		目標の確認・インターンシップ体験談（ペア）
	10:00	開館

接客（付き添い）指導と読み聞かせ指導

<table>
<tr><th colspan="2">グループ 1
中学生（松崎さん、松江さん）</th><th colspan="2">グループ 2
中学生（道永さん、湊川さん）</th></tr>
<tr><td>時間</td><td>内容</td><td>時間</td><td>内容</td></tr>
<tr><td>10：00〜10：10</td><td>IS 生(塩谷さん)が説明</td><td>10：00〜10：10</td><td>読み聞かせの本選び</td></tr>
<tr><td>10：10〜10：20</td><td>IS 生・中学生（松崎さん、松江さん）が接客</td><td>10：10〜10：15</td><td>IS 生（樋口さん）が説明</td></tr>
<tr><td>10：20〜11：00</td><td>中学生（松崎さん、松江さん）が接客</td><td rowspan="4">10:15〜11：00</td><td rowspan="4">（樋口さん、傳羽さんはその場で
中学生とペアを組む）
一対一の練習
中学生が読み聞かせの本を読む
↓
IS 生がアドバイス（お手本を見せる）
↓
個人練習（IS 生は見守り、アドバイス）</td></tr>
<tr><td>11：00〜11：10</td><td>読み聞かせの本選び</td></tr>
<tr><td>11：10〜11：15</td><td>IS 生（傳羽さん）が説明
（樋口さん、傳羽さんはその場で中学生とペアを組む）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">11：15〜12：00</td><td rowspan="4">一対一の練習
中学生が読み聞かせの本を読む
↓
IS 生がアドバイス（お手本を見せる）
↓
個人練習（IS 生は見守り、アドバイス）</td></tr>
<tr><td>11：00〜11：10</td><td>IS 生(塩谷さん)が説明</td></tr>
<tr><td>11：10〜11：20</td><td>IS 生・中学生（道永さん、湊川さん）が接客</td></tr>
<tr><td>11:20〜12：00</td><td>中学生（松崎さん、松江さん）が接客</td></tr>
</table>

※赤字の「ペア」は呉羽中学校で決めたペアの事を指します。黒字の「ペア」はその場で決めた臨時のペアの事を指します。

9/28(水)	9:15～9：20	集合
		挨拶、予定の確認
	9:30～9：50	朝礼
		館内の整頓
		読み聞かせ練習(ペア)
		中学生が読む ↓ 大学生がアドバイス(励ます)
	10:00	開館
	10:15～10：20	中学生接客（IS 生は見守り）
	10:30～11：00	読み聞かせ本番（大学生は見守る）
	11：00～11：05	休憩
	11：05～11：30	反省・意見や感想の交換（司会進行　大学生 1 名） ペアで反省・感想の発表(5 分～10 分) 全体で反省・感想の発表(15 分～20 分)
	11：30～12：00	次の日の予定・目標の確認(全体)
9/30(金)	15：00～	反省会(司会進行　大学生 1 名)
		中学生が自分の考えをまとめ、それをメモする
	15：10～15：20	中学生の感想発表 (1)出来るようになった事 (2)日々の目標や全体の目標は達成できたか (3)楽しかった事 (4)辛かった事
	15：20～15：30	職員さんからの言葉 4 日間で中学生のどのような部分が成長したかということ、全日程を通しての感想を語ってもらった。
	15:30	座談会
	15:50～16：00	職員さんへお礼（中学生が職員さんに対し感謝の言葉を述べた。）

2.2　各企画について

顔合わせ・事前指導

中学生の緊張緩和、不安の解消を目的に「14 歳の挑戦」が始まる約一週間前に顔合わせを行いました。その場で自己紹介を行い、IS 生と中学生のペア（班）を作成した後、何故大学生が「14 歳の挑戦」に関わっているのかということについて説明をしました。

中学生の様子

当初中学生は、なかなか接する機会の無い大学生を前にして緊張した面持ちでした。しかし、簡単な自己紹介を済ませ、アミダくじでペア（班）を作成したあたりから笑顔が出てきました。

実際の効果

昨年度の「中学生と打ち解ける時間をもう少し設けるべきだった」という反省を活かし、顔合わせと事前指導を行い中学生の緊張をほぐした所、中学生はすんなりと「14 歳の挑戦」本番に臨むことができた。

反省点

中学生が大学生に質問しやすいように、中学生と大学生のペア（班）を作成したが、そのせいでペア（班）以外の大学生に質問しにくい雰囲気を作ってしまった点。

しおり・日程表の使用

全日程を通してしおりを使用しました。しおりには一日毎の目標・反省、予定を書き込む欄、日程表を入れました。

中学生の様子

1 日の予定の確認を行った際に、中学生はその日のタイムスケジュールや重要だと思われることを毎回必ずしおりにメモしていました。しかし、一日の一言目標や一言反省を書いていない日がありました。

反省点にもあげましたが、学校から渡された活動記録票にも毎日の目標や反省を書く欄があり、一言目標、一言反省を書くことは中学生の負担になっていた為このようなことになったのだと思われます。

実際の効果

一日ごとの目標を設定し、目標を達成することができたかどうか反省し、しおりに書き込むことで、中学生は一日ごとに自分の成長や変化を実感させることができた。

しおりの中の日程表を用いることで、次にどのような行動をすればいいのか中学生に考えさせる機会を持たせることができた。

反省点

中学校からも活動記録帳が渡されており、毎日反省や感想を書くのは大変そうだったという点。

作成したグループでの行動（１日目）

４人の中学生に２人ずつのグループに分かれてもらい､1 時間ごとに異なった活動を行いました。グループ１は先に保育園児の接客、後から読み聞かせの練習を行いました。グループ２は先に読み聞かせの練習を行い、後に保育園児の接客を行いました。

読み聞かせの本を選ぶ中学生

IS 生が中学生にアドバイスを行っている

中学生の様子

様々なジャンルの本がたくさん有った為、中学生は読み聞かせの本選びにだいぶ時間がかかっていました。しかし職員さんや IS 生からアドバイスを受け、最終的には自分で読み聞かせの本や紙芝居を選ぶことが出来ていました。中学生の選んだ本や紙芝居は、お客様である子どもの年齢層を意識した物でした。

また、読み聞かせ練習序盤には中学生は恥ずかしがって抑揚を付けながら大きな声を出して読み聞かせをすることができていませんでした。そこで IS 生がお手本として中学生が選んできた本や紙芝居を読んだり、「どのような読み方をするとお客様である子どもたちが喜ぶのか」という事についてアドバイスを行ったりしました。すると中学生たちは IS の読み方を真似て、声色を変える、抑揚を付ける、お客様である子どもに呼びかけをするという工夫を凝らした読み方をしていました。

実際の効果

一時間ごとに活動内容を変更した（接客と読み聞かせ練習）ことで、中学生がダラダラせずメリハリのある活動をすることができた。

IS 生と中学生が一対一で読み聞かせ練習を行ったため、充実した練習を行うことができた。

反省点

一時間ごとに活動内容を変更したため、中学生を焦らせてしまった点。

読み聞かせ（2 日目）

初日に練習した読み聞かせを中学生が一人ずつお客様に披露していました。

読み聞かせをする中学生たち。お客様に語り掛けながら本や紙芝居を読み聞かせている。

中学生の様子

中学生は前日に職員さんや IS 生からもらったアドバイスを意識して、お客様に読み聞かせを行っていました。

中学生は間の取り方を工夫したり、お客様であるお子様に話しかけたりして読み聞かせをするというアドリブを入れることができており、大学生は圧倒されるばかりでした。

実際の効果

読み聞かせのイベントを成功させるという目標に向かって、練習をすることができたので中学生が主体性を持って積極的に練習を行っていくことができた。

反省点

個人練習に熱が入るあまり、中学生全体での練習時間をあまり取ることができなかった点。

中学生どうしでアドバイスしあえる場面がもう少しあればよかったと思う。

全体の反省会

四日間を通して

(1)出来るようになった事(2)日々の目標や全体の目標は達成できたか

(3)楽しかった事(4)辛かった事

などの反省や感想を中学生に発表してもらい、IS 生はその反省や感想に対して思ったことを述べていました。

中学生の反省・感想として「以前よりもよく考え行動できるようになった。仕事の大切さが分かった。」「責任感を持って行動するということは大変なことだが、同時に充実感も得られることだと思った。責任感を持って仕事をしたい。」「以前は人任せだったけれど、主体性を持って行動することが大切だと思った。なるべく人と関わっていこうという気持ちが芽生えた。」「自信を持って挑戦すること、時間を気にして動くこと、挨拶することが必要。」「14 歳の挑戦によって家族の会話が増えた。」ということを述べていました。

職員の田中さんは中学生に対して「徐々に中学生が積極的になっていくのが分かった。分からないことを積極的に質問したり、報告を大切にしたり、ムードメーカーになって雰囲気を良くしようとする生徒も出現したりして、日々成長しているなと感じた。」という感想を述べていました。

最後に中学生は職員さん、私たち大学生へ感謝の気持ちが詰まった手紙を渡してくれました。最終日に職員さんへの感謝の気持ちを伝えてほしいというということだけしか中学生にお願いしていなかったので、手紙を渡された私たち大学生は非常に嬉しかったです。自主的に手紙を渡すことを計画していたところを想像すると、なんていい子たちなのだろうか！と思わずにはいられなかったです。

中学生の様子

一緒に活動してきた IS 生と中学生のペア（班）が隣同士になるように円卓の周りに座ってもらった為、終始落ち着いた雰囲気で中学生は自分の思いを伝えていました。

実際の効果

座談会のように和やかな雰囲気で反省会を行うことができたので、中学生の素直な感想を引き出すことができた。

反省点

特に無い。

3.参加大学生の感想

射水市　大島絵本館様ＧＰ学生サポーター
傳羽 佐有

この活動では、お互いに貴重な体験をし、成長し合う事が出来たと思います。中学生の皆さんは仕事とはどのようなものか実感し、どう行動すべきかを素早く身につけていました。私たちも責任感やコミュニケーションの仕方などを学ばせて頂く事が出来ました。

始めは中学生の皆さんとどのように接すればぃいのか分からず、これでは逆に不安にさせてしまっているかも！と心配になりましたが、最後には仲良くなることが出来ました。14 歳の挑戦とインターンシップをリンクさせることで、こんなにもお互いの活動をより良いものに出来たのだと幸せに感じると共に、この活動にとても感謝しています！

射水市　大島絵本館様ＧＰ学生サポーター
塩谷 優子

GP 活動は、中学生との接し方や活動内での関わり方などについて事前によく話し合い、工夫することによって良い雰囲気の中で行うことができたと思います。それぞれの中学生の性格や様子を把握しながら進めていく事が思ったより大変でした。インターンシップで学んだ事をもとに様々な活動をしたため、内容を振り返り内省を深めることもできました。最終日には中学生から思いがけずお礼の手紙を貰い、やりがいを感じられました。とても貴重な経験となりました。

射水市　大島絵本館様ＧＰ学生サポーター
樋口 綾

中学生にどのような働きかけをしていけば良いのか、その匙加減が一番難しかったように思います。問題を解決するための「答え」そのものを中学生に教えてしまうのではなく、「答え」に結びつく「きっかけ」に自分で気づいてもらえるような働きかけをすることが、この活動において大切なことでした。

インターンシップを終えたといっても、自分自身もまだまだ未熟な存在です。中学生や他のＧＰ生と一緒に活動をしながら、インターンシップ中には気づくことのできなかった新たな発見をすることができました。ありがとうございました。

4.参考資料

・射水市大島絵本館様へ企画内容を説明する為に使用した資料

射水市大島絵本館様
ご提案書

富山大学
傳羽　佐有
塩谷　優子
樋口　綾
阿部　早織

概要

・日程

14歳の挑戦の期間[9月27日(火)～9月30日(金)]の内3日間

9月27日(火)9:15～12:00
9月28日(水)9:15～12:00
9月30日(金)15:00～16:00

・参加者

中学生参加者　富山市立呉羽中学校　女子4名
大学生参加者　傳羽佐有・塩谷優子・樋口綾(IS生3名)
阿部早織(GP生1名)

今年度の活動の目標

・自分で考え、行動するという場面を中学生に提供し、本活動を今後の生活に役立つ有意義なものにする。

・日々の成長を実感できるようにし、中学生に自信を付けさせる。

・中学生の不安や緊張の解消に努める。

昨年度の反省を踏まえた変更

昨年度の反省点	今年度の変更点
・中学生が緊張していた。 ・中学生が自分の成長を実感できたかどうかわからなかった。 ・中学生が自分で考え行動する場面が少なかった。	・事前指導、ペアワークを行い、中学生の不安や緊張を緩和させる。 ・4日間の目標、日々の目標を設定し、振りかえりを行うことで中学生に成長を実感させる。 ・しおりを作成し、日程表を記載することで、どのような行動をすればいいのか中学生に考えさせる。

ご提案内容(事前指導)

9月16日(金)　呉羽中学校昼休み(15分～20分)
参加中学生との顔合わせ

・大学生1人・中学生1人のペア二組、大学生1人・中学生2人の班一組を作成。
※資料ではどちらもペアと表示しています。

・中学生とのコミュニケーションをはかり、不安や緊張をほぐす。

・しおりを渡し、目標を決めてくる事を伝える。

ご提案内容(1日目)

9月27日(火)　9:15～12:00

・挨拶、予定の確認

・目標の確認、インターンシップ体験談

・付き添い指導、読み聞かせ指導

ご提案内容 （2日目）

9月28日（水） 9:15～12:00

- 挨拶、予定の確認
- 目標の確認
- 読み聞かせ会場の片づけ、読み聞かせ練習
- 接客
- 読み聞かせ
- 反省会、感想発表会
- 次の日の予定、目標の確認

ご提案内容（最終日）

9月30日（金） 15:00～16:00

- 反省会（4日間の振り返り）
- 座談会
- お礼の言葉

ご依頼内容

初日から、最終日まで中学生を指導してくださった職員さんにして頂きたい事

- 最終日の反省会の時に中学生の反省や感想を聞いて頂きたい。
- 初日から最終日の間で中学生のどのような所が成長したかを述べて頂きたい。

かぶしきがいしゃ

1-8　株式会社オレンジマート

本番当日の朝　キャリアサポートセンターにて

実施日程　　平成 23 年 9 月 26 日(月)　9:00～11:10

　　平成 23 年 9 月 30 日(金)　14:00～15:00

メンバー　リーダー:高津(たかつ) 敦士(あつし)　藪(やぶ) あすか　丹羽(にわ) 良太(りょうた)　扇(おおぎ) 拓巳(たくみ)

担当教員　荒井(あらい) 明(あきら)

1.　当日までの流れ

1.1　活動日程表

日付	内容	参加者	時間
6/20(水)	辻専務との打ち合わせ	扇	14:00～16:30
7/ 6(水)	インターンシップ生への事前説明	高津、丹羽、扇	14:00～14:30
7/19(火)	インターンシップ生との打ち合わせ	高津、丹羽、扇	18:30～19:30
7/20(水)	辻専務との打ち合わせ	高津、丹羽	10:00～12:00
7/26(火)	打ち合わせ	藪、高津、丹羽、扇	13:00～14:30
8/ 8(月)	インターンシップ開始日	藪、高津、丹羽	9:00～18:00
8/18(木)	インターンシップ終了日	藪、高津、丹羽	9:00～18:00
9/ 5(月)	最終プレゼン資料作成	藪、高津、丹羽	10:30～12:00
9/ 6(火)	最終プレゼン資料作成	藪、高津	10:30～11:30
9/12(月)	最終プレゼンリハーサル	藪、高津、丹羽	13:00～16:00
9/13(火)	企業への最終プレゼン	藪、高津、扇	14:00～15:00
9/21(水)	本番リハーサル	藪、丹羽、扇	13:00～15:00
9/25(日)	本番へ向けての最終打ち合わせ	藪、高津、丹羽、扇	19:00～21:00
9/26(月)	14歳の挑戦(1日目)	藪、高津、丹羽、扇	9:00～11:10
9/30(金)	14歳の挑戦(最終日)	藪、高津、丹羽、扇	14:00～15:00

1.2　企画内容立案の流れ

７月上旬に、昨年度オレンジマート様で GP 活動を行った先輩からお話を伺う機会がありましたが、先輩からは「昨年の企画内容を参考に、インターンシップで自分たちが経験し、学んだことを伝えることが一番良い」というアドバイスをいただきました。7 月下旬の打ち合わせでは、今は企画の枠組みだけを作り、企画の中身についてはインターンシップでの経験をもとに作っていこうということになりました。

そして、8 月のインターンシップでは、自分自身の成長のため、また企画の内容を良いものとするために得られるものはすべて得ようという意識のもと、10 日間を過ごしました。

このインターンシップで特に印象に残っているのは、実習内容の時間が店舗の各部門の実習だけでなく、担当者の方が行う座学の時間に多くの時間が割かれていたことです。他のインターンシップ先では、その企業様の仕事の体験だけで終わることがほとんどのようですが、オレンジマート様では店舗での仕事でだけでなく、環境問題や食育についての勉強、経済・業界動向を知るための専門誌の読み方など、店舗での実習だけでは得ることのできない社会人として必要な知識を身につけることに大きな力を注いでいました。

これらの体験をもとに、企画内容について話し合いを行い、よりよい企画を練り上げていきました。

9 月には企業へ提案する資料が完成し、オレンジマート様へ企画を持ち込みました。企画は問題なく通

り、その後は担当者の方と当日の動きについての話し合いなどを行い、これを最終確認としました。
本番のリハーサルは北日本新聞社様の GP 活動を行うチームと合同で行いましたが、中学生への言葉づかいとしては難しい、笑顔が足りないなど多くのアドバイスをいただきました。
ここでいただいたアドバイスを意識しながら、最終打ち合わせ兼リハーサルを行い本番へ臨みました。

1.3　昨年との違い

昨年との違いですが、大きく変更したところは昨年度の報告書作成指導・店舗実習指導です。これらを、今年度は「14 歳の挑戦をするにあたって」・「新聞を使ってのコミュニケーション」としました。
変更した理由ですが、私たちは今回のインターンシップで、店舗実習だけでは学べない座学で学ぶ知識も働くことには大切であると学びました。中学生には店舗実習で学びを得てもらうと共に、座学でも、働くことになった際に必要になるようなモノを学んでほしいと考えました。そしてなにより、自分たちがインターンシップの経験を通して得た多くのモノを伝えることができると考え、この二つを企画内容として加えることにしました。

1.4　進行段階での反省

・７月下旬に打ち合わせを行い、企画内容を良くしようという意識を持ちながらインターンシップに臨んだことで、インターンシップで学んだことを企画内容にも大きく反映することができました。
自分たちが中学生に伝えたいこと、学んでほしいことを盛り込んだ内容にすることができたので良かったです。

・メンバー全員の予定が合うことが少なく、全員で打ち合わせを行う回数が少なかったです。
そのため、全員が情報の共有を図ることに意識を置かなければいけませんが、企画進行中は携帯や PC で連絡を取り合うことが出来たため、これはおおむね達成できました。

・前年度は行っていましたが、今年度は「14 歳の挑戦」に参加する中学生に事前に会うことができなかったため、本番では中学生が非常に緊張していました。
射水市 大島絵本館の GP チームは事前に交流を図っていたようなので、自分たちも事前に会って交流を図ることで、中学生が緊張せずに大学生と接することができるようにすべきでした。

・北日本新聞社様の GP 活動を行うチームとリハーサルを合同で行いましたが、自分たちでは見えない部分でアドバイスを得られたとともに、企画内容のなかでも参考にできそうなものがありました。
そのため早いタイミングで他のチームと交流を図り、自分たちの企画について意見の交換やアドバイスなどを得る努力をするべきでした。

・リハーサルは全部で 2 回行いましたが、全員で集まることのできた機会は一度しかなく、その際は本番前日で時間もなかったため、部分的にリハーサルを行うだけでした。
リハーサルの回数を増やすことで不足部分の把握や解消、時間配分の確認、全体の改善を行いさらに完成度を高めるべきだったと思います。

2.　GP 活動を振り返って

2.1　タイムテーブル

日時		内容
9/26（月）	9:00～ 9:20	はじめの挨拶、使用する資料配布
		自己紹介、インターンシップ体験談
		自己評価シートの説明 使用する資料:自己評価シート
	9:20～ 9:35	「14歳の挑戦」をするにあたって 使用する資料：レジュメ『14歳の挑戦』をするにあたって
	9:35～ 9:55	「新聞をつかってのコミュニケーション」についての説明 使用する資料：北日本新聞
	9:55～10:10	休憩・場所移動
	10:10～10:40	挨拶指導
	10:40～11:10	店舗案内
		終わりの挨拶
9/30（金）	14:00～14:30	はじめの挨拶
		新聞を使ってのコミュニケーション 使用する資料：北日本新聞 ワークシート『新聞を使ってのコミュニケーション』
	14:30～15:00	意見交換会 使用する資料：自己評価シート
	15:00	終わりの挨拶

2.2　各企画について

企画全体についてですが、各企画内容の説明で述べている部分に加えてすべての時間で意識することとして、中学生の緊張をいかにして緩和するかというものが挙げられます。中学生に対して、初めて出会う年上の人間に緊張するなと言うのは無理な話です。さらに私たちの企画は「14 歳の挑戦」の一番はじめの時間枠を使わせていただいています。

そのため、私たちは中学生が緊張せず、のびのびと就業体験を行い、学びを得られるように明るく楽しい雰囲気を出していくことを心がけていました。

9 月 26 日(月)　9:00~11:10 まで

9:00~9:20

はじめの挨拶、使用する資料配布　（配布資料は参考資料に添付）

中学生がある程度これから何をするのか理解できるよう、また企画ごとに必要なものが分かることや忘れ物防止のため、初めに企画の大まかな内容を伝えるとともに、企画のタイムテーブル、準備物を載せた資料を配布します。これによって企画の進行がスムーズになるという効果も狙いました。

中学生の様子

初めて参加する中学生を見た時は、大人しい子だろう、またかなりロベタであるだろうという印象でした。中学生 2 人は非常に緊張しており、また初めて見る大学生に対してはどう接したら良いか分からず不安を抱いているようでした。着席してから彼らは俯いたまま動かず、始まるのを静かに待っていました。

感想としては、中学 2 年生はもう少し元気ハツラツとしているイメージを持っていたため、より意識して笑顔を絶やさず、楽しい雰囲気を作り、彼らの緊張を解消しなければならないと思いました。

実際の効果

中学生 2 人は、配布した企画のタイムテーブルを見ながら、次の企画で必要なものをカバンから取り出していたため、先に資料を渡したことは狙い通りの効果があったと思います。

ただ、初めのほうは緊張と不安で、今、何をすべきか分からなくなっていたこともありました。その時は、隣に座っている大学生が話しかけながら説明をしてフォローをしました。

反省点

良かった点は、準備したタイムテーブルなどの配布物が中学生の役に立ったことです。渡したことで中学生が企画について事前に知ることができ、また企画の際に必要な準備物をすぐに準備できるようになったため、企画を非常に円滑に行うことができました。

自己紹介、インターンシップ体験談、自己評価シートの配布

自己紹介

まず始めに大学生が自己紹介の方法を話し、中学生から自己紹介をしてもらいました。

その後大学生の自己紹介を始め、そのままインターンシップの体験談を話しました。

インターンシップ体験談

大学生がインターンシップの体験を話します。その際に、下記の四つを踏まえました。

①どのような仕事をしたか　②楽しかったこと、やりがい

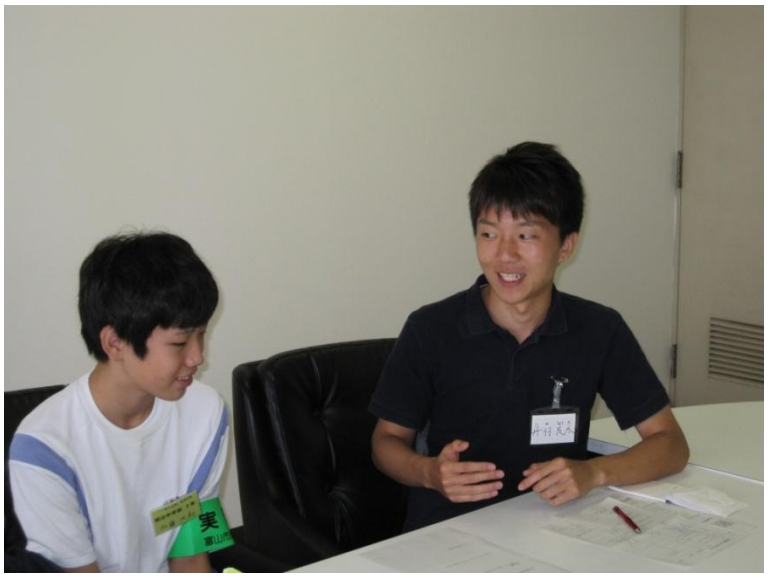
③失敗談、辛かったこと(どのように乗り越えたか)④インターンシップを通して成長したこと

また、大学生は目標を設定し、達成した経験を軸に据えて自分たちの経験を語ることで、これからの就業体験に対する中学生の不安と緊張を解消するとともに、就業体験を通して成長できることを中学生に実感してもらおうと考え、インターンシップの体験談を話すことにしました。

自己評価シートの説明

自己評価シートを配布し、説明をします。このシートには中学生が 5 日間の目標を設定する欄がありますが、時間をかけてじっくりと考えてもらうために、目標の設定は帰宅後に行ってもらうことにしました。

中学生の様子



雑談を交えながら自己紹介をしていく中で、中学生の緊張も多少和らいできて笑顔が出るようになっていましたが、まだ楽しい気持ちよりも緊張のほうが大きいように感じました。また、大学生側から質問すれば答えてくれるのですが、中学生 2 人から質問などが来ることはなかったです。

インターンシップ体験談、自己評価シートの説明はともに、静かに耳を傾けながら聞いていました。

実際の効果

中学生はインターンシップ体験談を興味深く聞いてくれていました。

しかし、外見を見るだけは、中学生たちのこれからの就業体験に対する不安が解消されたかどうかの判断がつきませんでした。

反省点

この時間で最も反省すべき点は、時間配分です。

ここまでの時間を 20 分に設定していましたが、予想以上に時間が足りず、当初考えていたインターンシップの体験談で話す内容よりも短くした形のものを話しました。

この企画内容は、大学生が自身の言葉でインターンシップでの経験を語ることで、自分たちの感じたものを中学生に言葉でまっすぐ届けることのできる時間であったので、その重要性を理解して時間を決めるべきでした。
改善点としては、中学生との距離を短時間でさらに縮めるためにも、例えば自己紹介の際にニックネームを付け合ったりすればよかったと思います。他にも、時間配分は 20 分でしたが、自己紹介の時間を増やす、少し雑談の時間を設けるなどさらに企画内容を練り込むべきでした。

9:20~9:35

「14 歳の挑戦」をするにあたって

レジュメ『「14 歳の挑戦」をするにあたって』を配布し、『働くとはどういうことか』を中学生と一緒に考えながら学んでいきます。
働くとはどういうことかを質疑応答を交え、共に考えてもらいながら、大学生が言葉として明確に伝えることで、ゆっくりであっても中学生に理解・納得してもらいながら進めることにしました。そして、これから始まる 5 日間の就業体験に対する心構えを作ってもらおうと考えました。

中学生の様子

この時間は中学生に笑顔は少なく、ペンを片手に静かに集中して話を聞いており、こちらが質問をするとゆっくりと思案しながら自分の意見を述べてくれていました。
ただ、自分の意見に自信がないのか、大学生がいるため言いづらいのか、意見を述べる際は数百人の前で壇上に立ち発表しているかのように緊張していました。
多少、質問の意図が分からなかったり、意見を述べるのに時間がかかったりしていましたが、分かっていなかった際は大学生が説明をし、意見がまとまらない時は急かすことなく待っていました。

実際の効果

『「14 歳の挑戦」をするにあたって』を担当した藪さんが、中学生でもきちんと理解できるように噛み砕いた説明をしていたため、中学生は『働くとはどういうことか』が分かり、これから行う就業体験への意識が高まったと思います。

反省点

『働くとはどういうことか』を一緒に考えることで、中学生は受け身になることなく集中して話を聞くことが出来ていました。

ただ、レジュメの空白の部分について質問をしながら、『働くとはどういうことか』を考えていましたが質問が少し難しかったため、中学生が答えにくそうにしており熟考してしまうことが多く、中学生が発言しにくい空気を作ってしまいました。

9:35~9:55

「新聞を使ってのコミュニケーション」についての説明

北日本新聞(9 月 25 日付)の地方欄とワークシートを配布し、最終日に行う「新聞をつかってのコミュニケーション」について説明をします。

まず始めに新聞の種類や構成、簡単な見方などについて中学生に話し、興味を持った記事について最終日までにまとめてくるよう伝えます。

狙いなどの説明は、5 日目の「新聞を使ってのコミュニケーション」で行います。

中学生の様子

新聞を渡すと、「初めて新聞を見たのか?」と思うほど中学生 2 人は動かなかったのですが、どうも萎縮していたのと、普段、新聞を開く機会がほとんどないため動かなかったようです。

新聞を開いてからはそわそわしながらも、様々な面を興味深そうに読んでいました。

説明に入ってからは、中学生が新聞の種類や構成、見方について、説明では完全に分かっていない、理解できていないように感じたので、大学生は隣で補足説明をしていました。

実際の効果

北日本新聞の地方欄を選んだのは、中学生が興味を持って読んでくれたため良い判断でした。ただ、上にも書いたとおり、新聞についての説明では中学生では分かりにくいような言葉を使用してしまい、中学生が意味を理解できず、キョトンとしてしまう場面が多く見られました。その際は大学生が補足で説明を行っていましたが、中学生 2 人がきちんと理解できたか不安が残ります。

反省点

新聞についての説明時に中学生では分かりにくい言葉を無意識に使ってしまったため、新聞についての知識の吸収の妨げになってしまった。リハーサルの回数を増やし、全員が言葉づかいに対する意識を強く持つべきだったように思います。

また、ときおり中学生に対して敬語を使い、大人に接するような態度になってしまったため、親近感を持ってもらうためにも、もう少しフランクな態度で接してもよかったと思います。

9:55~10:10

休憩

10:10~10:40

挨拶指導

大学生がインターンシップの経験を活かし、挨拶の見本を見せながら中学生の挨拶をチェックします。フォローとして従業員の方に入っていただきます。就業体験ではお客様に大きな声で挨拶をする場面が多くあるため、お店に立つ前に挨拶の指導をすることで中学生の不安を緩和できると考えました。

また、挨拶は社会人の基礎中の基礎であるとともに就業体験の後、学校などの日常生活で行う機会が毎日のようにあります。挨拶の練習を行い、就業体験中、お客様に気持ちの良い挨拶をしていくことで、挨拶をすることの大切さに気付き、普段の生活でもやろうと考えてくれるのではないかと考えました。そのため、挨拶指導を企画内容に入れました。

中学生の様子

初めは大きな声で挨拶をすることに恥ずかしさを感じ、軽く俯いた状態で小さな声でしか挨拶ができていませんでした。そこで大学生が見本を見せ、場の雰囲気を楽しく盛り上げながら中学生と一緒に挨拶の練習をし、中学生が大きな声で挨拶しても恥ずかしさを感じないような環境を作っていきました。
それから何度も練習を行うことで、最終的には中学生 2 人は大きな声で気持ちの良い挨拶が出来るようになっていました。
この時間は、初日の内容のなかで中学生たちに一番笑顔があふれた時間で、どちらにとっても非常に楽しい時間となりました。

実際の効果

これは後の店舗活動で各部門を見学していた時の話となりますが、大学生が見本として、インターンシップ時と同じようにお客様に挨拶をすれば中学生もそれに続き、大きな声で元気よく挨拶をしていました。これから行う就業体験時の不安を取り除くことができ、挨拶をすることの大切さを伝えることができました。

反省点

インターンシップのなかで従業員の方に教えてもらったように、大きな声を出すことや笑顔を絶やさず挨拶することなどを中学生にうまく指導ができ、大学生が主体となって挨拶の指導を行うことで、中学生が緊張することなく楽しく挨拶の練習に取り組むことができました。
そして、この時間だけでなく、指導したことを店舗見学の際に実行することで、中学生には指導の時間に挨拶の大切さを伝えることができました。

10:40~11:10

店舗案内

従業員の方にフォローして頂きながら店舗の 6 部門(青果,日配/グロス,精肉,海産,惣菜,レジ)の業務内容を中学生に説明しながら店舗のなかを見学します。前年度の反省に、学生のみで案内を行った場合、店舗内の各部門に案内のために大学生のみで入ってよいか悩む場面が多くあったという点が挙げられていたため、今年度は従業員の方に先導を頼みました。
就業体験をする中学生は、5 日間、1 つの部門に集中して働くため、他の部門がどのような仕事を行っているかを見る機会がありません。そこで、オレンジマート様ではどのような仕事が行われているのかをより深く知ってもらい、業務全体を理解してもらうために店舗案内を企画に盛り込むことにしました。

中学生の様子

従業員の方に先導してもらい、各部門の役割、仕事内容、重要性など説明を受けていました。
中学生は説明中の従業員の方の目を見て、静かに説明を聞きながら素直に知識を吸収していました。

実際の効果

中学生は、店舗内にあるすべての部門を回り詳しく説明を受けたため、自分たちが就業体験を行う部門以外の仕事内容などを知ることができ、オレンジマート様では普段どのような仕事が行われているのかを深く知ることが出来ました。

また仕事内容を言葉で聞くよりも、実際に働いている姿を見る機会を与えることで働くとはどういうことかを肌で感じ、理解を深める事が出来ました。

反省点

説明等を従業員の方にほとんど任せてしまい、大学生は一緒に回るだけの形になっていました。すべて従業員の方に任せてしまうのではなく、自分がインターンシップ中に実習を行っていた部門を回る際は、その部門で経験したことを話すなど従業員の方をサポートすべきでした。

ただ、従業員の方にお任せしたことで各部門について、正確な情報や従業員の方だけが知っている情報なども得ることが出来ました。

終わりの挨拶

9 月 30 日(金)　14:00~15:00 まで

14:00~14:30

はじめの挨拶、新聞を使ってのコミュニケーション

中学生に、すでに配布した新聞とワークシートを用いてまとめてもらった新聞記事の内容について発表してもらいました。その後、発表内容について中学生と意見交換を行いました。

新聞を使用し、発表をしてもらおうと考えたのは、ビジネスマンの情報収集ツールの新聞を用いて自ら話題を提供する練習になる、また自分の考えを相手に分かりやすく伝える方法が分かると考えたからです。

さらに地方欄を用いたのは、時事欄などのように内容が難しく、想像が難しいものよりも、中学生にとって身近な話題が多く載っている地方欄を用いた方が、彼らが意欲的に取り組めるとともに、内容が易しく、写真がたくさん使われているため新聞を読むきっかけにつながるのではないかと考えたためです。

意見交換を行ったのは、自分の考えを相手にきちんと伝えられるようになってほしかったとともに、自分とは異なる意見や考えを持った人と話すことの楽しさや、話を聞くことの大切さを学んでほしかったためです。

中学生の様子

会うのも 2 回目ということで、中学生には緊張の色は見られませんでした。

もともと大人しい子たちなので、笑顔がたくさんあったわけではないですが、初日よりもリラックスした雰囲気で 5 日目の企画に臨んでくれて、非常に安心しました。

しかし、新聞記事の要約を発表する際は、どちらとも自信なさげにおどおどしながら発表していました。

また、発表内容についての意見交換は、中学生に記事の内容に関する知識が乏しかったため、当初の予想よりも会話がスムーズに進みませんでした。そのため中学生は、途中で返答に困る場面が多かったです。

実際の効果

効果があった点は、初日の新聞についての説明を覚えてくれていたようで、新聞記事をうまくまとめることが出来ていたところです。また、新聞への興味も出たようで、自宅では少しずつですが新聞を見るようになったそうです。

ただ、上記でも述べましたが意見交換を行った際に中学生が返答に困る場面があったため、人と話すことの楽しさをあまり伝えることができませんでした。

反省点

新聞の地方欄を使ったが中学生、大学生ともに記事に関する知識が少なかったため話を膨らませることが難しかったです。 地方欄を用いるのは良かったので、大学生が選んだ記事の予備知識を持つか、中学生の知識があるような記事を選ぶなど工夫が必要でした。

14:30~15:00

意見交換会

中学生に 5 日間の就業体験を通して感じたことを、下記に沿って自己評価シートに記入して、発表してもらいました。

◇頑張ったこと、学んだこと　◇大変だったこと、辛かったこと(どう克服したか)

◇成長したこと　◇初日に立てた目標とその達成度

シートに記入をしてもらったのは、中学生が 5 日間を振り返り、自分自身がどのように成長したかを実感してもらいたかったためです。

さらに大学生と中学生が発表の内容について質疑応答を交えながら語り合いました。

質疑応答を交えたのは、大学生側が発表の内容について質問することで、中学生がその問いに対して思考し、答えていく中で中学生が自分の経験を深めることができると考えたからです。

最後の 10 分では中学生を担当された従業員の方から講評をいただきました。

従業員の方から見た、中学生が成長した点について話していただくことで、中学生は客観的な視点から評価によって自身の成長を実感できるとともに、自分とは異なる視点からの考え方を学習できると考えました。

中学生の様子

評価シートの記入時間は10分ではかなり少なかったようで、じっくりと考えながら、そして少々あせりながら自己評価シートにこの 5 日間で自分の得たものを記入していました。

最終的には 10 分では足りないと判断して記入時間を 5 分延長したため、中学生が書ききれないということは起こりませんでした。

発表では記入内容が 1 行、2 行程度と多くなかったため、あまりしゃべらないまま発表が終わっ

てしまいましたが、質疑応答をすれば中学生は就業体験を通じて考えたこと、感じたことをおどおどしながらも答えてくれました。
従業員の方の講評では、自分たちの 5 日間の就業体験を従業員の方がどう思っているかについて目を見て静かに、真剣に耳を傾けていました。

実際の効果

中学生 2 人は、設定した目標を達成することが出来たようなので、5 日間の目標を意識して能動的に実習に取り組むことが出来ました。
また、早い段階で設定した目標を達成できたかどうか経験や成長を振り返ることで、この 5 日間の充実感や達成感を感じることが出来たようです。
さらに自分の考えだけでなく、従業員の方から 5 日間の講評で客観的な視点から多くの意見を聞くことで、自分の成長を実感出来ました。

反省点

中学生の自己評価シートの記入が予想よりも長引いたため、意見交換の時間が短くなってしまいました。もう少し時間を設けるか、書いてきてもらうようにして意見交換の時間を増やすことで、もっと中学生の経験を深めることが出来たように思います。
また、記入の時間を延ばしたことで終了時間を 5 分ほど過ぎてしまったため、事前のリハーサルを徹底することや、時間に余裕を持たせた企画内容にすることが必要であると感じました。

終わりの挨拶

3. 参加大学生の感想

株式会社オレンジマート様GP 学生サポーター
高津 敦士

私はこの度、株式会社オレンジマート様でインターンシップをさせていただきました。10日間の日程の中で、座学と実習、それぞれ満遍なく経験させていただき、非常に充実した日々を送ることができました。その10日間の経験を活かし、今度は中学生の就業体験活動でそれらを伝える活動に参加させていただきました。

初日は、インターンシップでの体験談を語ることから始まり、挨拶指導等を行い、最終日には新聞を使ってのコミュニケーション方法を伝え、最後に意見交換をするというスケジュールでした。大人しい中学生を前に、最初はどう接すれば良いのか非常に悩みましたが、徐々に会話が弾むようになり、嬉しかったです。

このGP活動を通じて、自分が獲得したことを、人に伝えるという大切さを学ぶことができ、非常に良い機会となりました。

株式会社オレンジマート様 GP 学生サポーター

藪 あすか

大学生になってから中学生と関わる経験はあまりなかったので、今回の経験では、とても貴重な学びをさせていただきました。自分が受けたインターンシップをフィードバックするよい機会にもなったし、また同じインターンシップを受けたメンバーと企画を進めることで、互いに学びや感想を共有し合い深めることができました。

学んだことの中で特に大きいのは、相手の視点に立って考えることの大切さです。

中学生が相手であれば、まず自分の視点を大学生から中学生へと移して物事を考えることが必要で、そうして初めて本当に中学生のためになる企画に近付けました。

株式会社オレンジマート様 GP 学生サポーター

丹羽 良太

私は、人間発達科学部に在籍していますが、教員免許を取らないので中学生と接する機会はあまりありませんでした。今回の中学生 2 名と接する際も、基本的に自分が中学生だった時のことを考えて活動計画を進めていました。しかし計画段階から、過去の GP 活動参加者の方には、もっと言葉づかいを考えないと理解してもらえないとアドバイスいただき、直すこともありました。ただ、実際の活動に入ってみると、中学生は思っていた以上に緊張していて最初はどうなる事かと思いました。我々は、最初の活動日と最後の活動日に GP 活動をさせていただいたのですが、最後の活動日にはオレンジマート様の雰囲気にも慣れたようで、GP 活動も円滑に進められたと思います。今回の活動を通して、中学生のことを考えると同時に、自らのインターンシップを振り返ることが出来ました。

4. 参考資料

・「14 歳の挑戦をするにあたって」
・自己評価シート
・「新聞記事を使ってのコミュニケーション」　ワークシート
・平成 23 年度　14 歳の挑戦　GP 活動内容のご案内
・株式会社　オレンジマート様への企業プレゼン用のパワーポイント

ー１４歳の挑戦をするにあたって　ー

“働くとはどういうことか”　を考えてみよう！

☆子どもと大人（社会人）の違い

？大人（社会人）は子どもとどう違うのか？

	学び(誰から教わる？)	お金（誰からもらう？）	お金(何に使う？)
子ども			
大人			

◇誰（何）のために働くのか？

①

②

③

◇私達ひとりひとりが[③　　]をつくるメンバー。

[①　　]のため、[②　　]のために働くことは、[③　　]のために働くことと同じ。

☆働く…自分も成長できる！！

・厳しいこともあるが、一生懸命にやるほどおもしろくなる。達成感も大きい。
・一緒に働くメンバーと協力し合う→信頼関係が生まれる。いろいろな人と知り合うことが出来る。
・良い仕事をする→お客様に喜んでもらえる→もっと良い仕事をする→…
「おかげで助かったよ」「これからもよろしく頼みます」
というお客様からの言葉は励みになる。

自分の実力 UP！

○働くとは

「働く」＝「人」＋「動く」

人のために動く。また、それを通して自分も成長する。

だけど…

やってみないとわからない！

一四歳の挑戦

☆働くときのポイント☆

① 実践する

・学んだ知識、練習したこと（挨拶練習など）、知恵を行動に移す。
・考えるだけでなく実際に動くことが大事。

② 自分の仕事を振りかえり、そこから学ぶ→日誌の活用

・一生懸命仕事に取り組むとたくさん学べる
・失敗からもたくさん学べる

③ 質問する

・疑問が解けて自信がつく。
・よりたくさんの知識や知恵が得られる。
・ノートやメモを取る。

自己評価シート

学校名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

◎『14 歳の挑戦』を通しての目標

◎自己評価

1、頑張ったこと・学んだこと(今後どう生かしていくのか)

2、大変だったこと・辛かったこと(どう克服したのか)

3、初日の目標の達成度

「新聞記事を使ってのコミュニケーション」　ワークシート

◇　お配りした新聞を読み、あなたが興味を持った記事を１つ選び、以下の設問に従ってまとめ、最終日に発表してください。慣れない実習でお疲れの事と思いますが、よろしくお願いします。書き足りない場合は、裏面を使用しても結構です。

１．興味を持った記事のタイトル

２．その記事の要約

３．その記事を選んだ理由

４．その記事を読んでの感想、意見等(自分にどう関係してくるか等)

平成 23 年度　14 歳の挑戦　GP 活動内容のご案内

◇大学生メンバー(富山大学)◇

☆司会☆扇拓巳（おおぎたくみ）　経済学部 2 年生
○高津敦士（たかつあつし）　経済学部 3 年生
○丹羽良太（にわりょうた）　人間発達科学部 3 年生
○藪　あすか（やぶあすか）　人間発達科学部 4 年生

みなさんより先に、オレンジマート様で“働く”体験をしました！

◇GP 活動内容・スケジュール◇

		内容	担当	使用する資料・ワークシート
9 月 26 日	9:00~9:20	はじめの挨拶、使用する資料配布	扇	
		自己紹介、インターンシップ体験談	扇・高津・丹羽・藪	
		自己評価シートの説明	丹羽	・自己評価シート
	9:20~9:35	「14 歳の挑戦」をするにあたって	藪	・レジュメ『14 歳の挑戦』をするにあたって
	9:35~9:55	「新聞をつかってのコミュニケーション」についての説明	高津	
	~10:10	休憩・場所移動		
	10:10~10:40	挨拶指導	丹羽	
	10:40~11:10	店舗案内	扇	
		終わりの挨拶	扇	
9 月 30 日	14:00~14:30	はじめの挨拶	扇	
		新聞を使ってのコミュニケーション	高津	・ワークシート『新聞を使ってのコミュニケーション』・北日本新聞
	14:30~15:00	意見交換会	丹羽	・自己評価シート
	15:00	終わりの挨拶	扇	

※30 日(金)に用意するもの　①北日本新聞(9 月 25 日)　②ワークシート『新聞を使ってのコミュニケーション』　③自己評価シート　④筆記用具

株式会社オレンジマート様
ご提案書

富山大学
高津　敦士（経済学部　3年）
丹羽　良太（人間発達科学部　3年）
藪　あすか（人間発達科学部　4年）

日程及び参加者

・日程：
◇14歳の挑戦:2011年9月26日(月)～9月30日(金)
◇GP活動:2011年9月26日(月)9時～11時10分
9月30日(金)14時～15時

・実習参加者：城山中学校男子2名
・学生ボランティア（富山大学）
高津　敦士・丹羽　良太・藪　あすか

GP活動の目的

- 中学生の自主性と責任感を育む事のサポート

◇　中学生の不安や緊張を緩和
◇　14歳の挑戦は、中学生の主体性を育む事が目的
◇　過度の中学生への干渉は控える

ご提案内容（初日の概要）

- １日目：9月26日(月)9時～11時10分

◇　自己紹介
(大学生、GP)+インターンシップ体験談(9時～9時20分)
◇　14歳の挑戦をするにあたって(9時20分～9時35分)
◇　最終日に行う、「新聞記事を使ってのコミュニケーション」についての説明(9時35分～9時55分)
◇　休憩(10時10分まで)
◇　挨拶指導(10時10分～10時40分)
◇　店舗見学(10時40分～11時10分)

ご提案内容（最終日の概要）

- 最終日：9月30日(金)14時～15時

◇　「新聞記事を使ってのコミュニケーション」(15時～15時30分)

◇　「意見交換会」　(15時30分～16時)

ご提案内容(各項目について)

- １日目：９月２６日（月）、９時～１１時１０分

◇自己紹介（９時～９時２０分、２０分）
・大学生からインターンシップの体験談を話す
①インターンシップでどのような仕事をしたか
②楽しかったこと、やりがい
③失敗談、辛かったこと(どのように乗り越えたか)
④インターンシップを通して成長したこと

※「目標を設定→達成した経験　」を軸に話す。
（“自己評価シート”を配布。
中学生に目標設定をしてもらう）

→中学生の不安解消、緊張緩和
→中学生側にも不安、疑問等あれば質問してもらう

ご提案内容（各項目について）

- １日目：９月２６日（月）、９時～１１時１０分

◇14歳の挑戦をするにあたって
（９時２０分～９時３５分、１５分）
→レジュメ「１４歳の挑戦をするにあたって」を配布。
５日間を過ごすにあたっての心構えをつくる。

◇「新聞記事を使ってのコミュニケーション」
についての説明(９時３５分～９時５５分、２０分)
→ある日の新聞とワークシートを配布し、
興味を持った 記事について、最終日までに
まとめてくる旨の説明をする。

ご提案内容（各項目について）

１日目：９月２６日（月）、９時～１１時１０分

◇挨拶指導（１０時１０分～１０時４０分）
※フォローとして従業員の方に入っていただく

・挨拶は社会人としての基礎中の基礎
・大学生がインターンシップの経験を生
かし、見本を見せ、チェックする。
→社会人としてのマナーを身に付けることができる
→お店に立つ前に挨拶指導をすることで不安緩和

ご提案内容（各項目について）

１日目：９月２６日（月）、９時～１１時１０分

◇店舗見学(１０時４０分～１１時１０分)
※フォローとして従業員の方に入っていただく

・実習では一つの部門に集中して、他の部
門の仕事を見ることはほぼない。
・６部門を業務内容を説明しながら回る。
→自部門だけでなく他部門のことも知る。
→業務全体を知る。

ご提案内容（各項目について）

- 最終日：９月３０日（金）１５時～１６時

◇「新聞記事を使ってのコミュニケーション」
（１４時～１４時３０分、３０分）
中学生が、自ら人に話題を提供する練習として、ビジネスマンの情報収集ツールの１つである新聞を用いる。

・新聞の説明(種類、構成等)
・すでに配布した、新聞とワークシートを用い、発表
・大学生と意見交換

→新聞の大切さが分かる。
→自分の考えを相手に分かりやすく
伝える方法が分かる。
→時事問題に関する知識が得られる。

ご提案内容（各項目について）

- 最終日：９月３０日（金）１５時～１６時

◇意見交換会(座談会形式)
（１４時３０分～１５時、３０分）
※フォローとして従業員の方に入っていただく

・従業員の方から見た中学生が成長した点(講評)
・14歳の挑戦をしてみて、自己評価シート記入、
発表(中学生の感じたこと)
◇頑張ったこと、学んだこと
◇大変だったこと、辛かったこと(どう克服したか)
◇成長したこと
◇初日に立てた目標とその達成度
14歳の挑戦を通しての成長体験を語り合うことで・・・
→自分自身の成長を振り返る
→自分とは異なる視点からの考え方を学習

3.　GP 活動全体の報告

◇ＧＰ活動を始めた理由

・「はじめに」に書いたように、どうせ単位を取るなら楽しそうな授業で取りたいという単純な動機でこの授業を受講することに決めました。しかし、今になって考えてみるとその動機だけで受講した訳ではなく、「厳しい環境に身を置いて、変化したい！」という強い願望が私の中にあったからではないだろうかと思います。
シラバスの中には明らかに今後の生活が大変になることが予想される授業内容が記載されていましたから。

・荒井先生が開講していた「教養教育言論―富大流人生設計講座―」という授業を履修したことが私と GP 活動の出逢いです。その授業の中で 2010 年の GP 活動の説明を受けて、2011 年もやることになりましたが、この時、正直なところめんどうだなと思いました。
しかし、自分にとって GP 活動のような活動をすること自体初めてで、また、新しいことに挑戦したい気持ちがあったのでこの活動に挑戦する事に決めました。
自分が「北日本新聞社」を選んだのかというと「やるからには自分が一番成長できるところを選びたい」と思い、一番厳しいと言われていた「北日本新聞社」を選びました。

・「14 歳の選択」に参加するきっかけになったのは、荒井先生が開講していた「教養教育言論―富大流人生設計講座―」という授業を履修したことです。選んだ理由はとても単純で、他に興味深い講義がなかったためでした。
その時は、実際に中学生や様々な先輩たちと関わることになる大きな企画だったとは思っておらず、1 年半後には就活もあるし、受講して役に立つ情報を得られればいいかと考えていました。
現在もキャリアサポーターは 3 人ですが、1 回目の授業の際は阿部さんと私の 2 人しか居らず、衝撃を受けたとともに辞めようかと迷いました。しかし、本田君を引き込むことに成功したのでこのままやっていこうと考えるようになりました。今はこの時に他の授業を選ばずによかったと思っています。

◇ＧＰ活動全体の反省点

・インターンシップ生を入れても少人数の活動なのに、なかなかスケジュールが合わず計画通りに物事が進められなかったこと、そのため行き当たりばったりの活動が多くたくさんの迷惑をかけてしまったということ、この 2 点が心残りです。
もし同じような活動を行う機会があるのであれば、予想外の事態が起こっても柔軟な対応をすることを心がけ、報告・連絡・相談を大切にして行き詰まらないようにしていきたいと思います。

・「北日本新聞社」の GP は 6 人という大人数だったので、会議や企業訪問の日程を合わせるのに苦労しました。会議の日に次の予定の時間までいるなどスケジュール調整を GP メンバーが協力してくれたので何回も濃密な会議が出来たと思う。
大まかなスケジュールを立てたときは期日通りに出来ると思っていたが、いざ会議をしてみる　と

なかなか決まらず、間に合わないと思ったりしたこともあった。結局、夏休みの大半を使うほど会議や作業をした。この企画が成功したのはGPメンバーの協力があったからだと思います。

・本格的にGP活動をはじめていく前に、今年のGP活動をどのように進めていくか話し合いを行なわなかったことが反省点としてあげられます。前年度の反省を活かせるように、決まりごと、心がけることを全員で共有し、きちんと守るようにすべきでした。
また、企画の進行段階で起こることを想定し仮説を立てることで、活動中に起こる問題を未然に防ぐことができました。また、初めの段階で思いつかなくても活動中に気付いたことを共有できていれば、改善できた点が多くありました。
その上で、決まり事を振り返る機会を作る、問題が起きた時にサポートし合えるような関係を構築することで前年度よりもよい形で企画進行が出来ていたと思います。

・「考えるだけでなく行動しろ」
GP活動を行う中でなかで最も問題に上げられるものです。
活動を行う中で、こうすればよいのではないか、こうすべきだという発見がありましたが、それに気付いただけで実際に行動に移してやろうとした人はいませんでした。様々な理由を並べて、行動に移さないまま見ないふりをすることがありました。
また、自分で積極的に行動を起こさずに、誰かがやってくれると自分のいいように期待することで人任せになってしまうことが多かったです。
やろうと思ったときにしなければ人間はやらないし、行動すべきものを後回しにすれば後悔するということを肝に銘じておく必要があると考えます。

◇2年生として大変だったところ

・大学2年生の前期の活動ということだったので、普段の授業をこなしつつ活動していかなければならないことが一番大変でした。
また、インターンシップに行っていない2年生が企画・運営の代表として3年生に向かって「ああして下さい」「この方法はあまり良くないと思います」などと指示・意見しなくてはならず、
当初は胃が痛かったです。

・インターンシップに行く学生は3年生、私達は2年生でした。先輩、後輩の関係で引っ張っていかないといけないのは私達2年生の方でした。
特に気を使ったのは言葉づかいでした。初めて会った時の印象でずっと4年生だと思っていたと言われ、私に対して先輩方が敬語で私も他のメンバーに敬語という不思議な感覚で何か壁があるように感じてしまいました。会議としては間違いないのかもしれませんが、少し砕けた話し方の方がもっと議論がしやすかったのではないかと思います。

・GP活動はインターンシップに参加される3年生を対象としており、参加される方は年上になるため、2年生として接し方に非常に悩みました。
チームとしては対等な関係でなければならないですが、先輩に対して頼み事や指示を出す際に遠慮

してしまいリーダーシップを取ることが出来ず大変苦労しました。
また、前年度はインターンシップに参加する学生の中からキャリアサポーターを選んでいましたが、今年度は2年生の授業の一環として、活動を行う学生を募集したため、人数が3人と少なくなりました。企画全体の運営などを行う人数が減ったため、1人1人にかかる負担が大きくなり大変でした。さらに、インターンシップに参加しなかったため、企画内容の案を出しづらかったことや改善点を示しにくかったです。

◇ホウレンソウについて

・昨年度の反省として「他のグループと積極的に連絡を取り、定期的に経過状況を共有すること」が挙げられていましたが、それを全く活かすことが出来なかったように思います。そればかりか、今年度は担当のIS生と教員、GP生間だけで最低限の情報共有をすることしかしていませんでした。PSNSというツールやキャリアサポートセンターという活動場所が与えられているにもかかわらず、このような事になってしまったのは
　①各グループでの活動が始まる前に、情報共有についての決まりごとを作らなかった。
　②GP生同士で協力し、活動を行っていこうとする意識が低かった。
以上の2つの原因があったからだと思います。

・各自でも「報告・連絡・相談」が出来ていなかった。
手段はPSNSといったツールがあったにもかかわらず、それを活かそうとしなかった。活用してこそのツールなのに自発的に使えず、先生方に報告しろと言われても使えてなかったのは大人として失格だと思う。
多くのことを早めに連絡せず、相談せず、そして、多くの方に迷惑をかけたしまったと思います。今後、社会に出たときに同じようなミスを繰り返さないように大学生時代にこれらのことを身につけれるように心がけていきたい。

・報告の回数が少なく、企画の進行状況を報告するという意識が不足していました。常に報告をするという意識を持つことで、それ自体が企画を進めようとするインセンティブにつながる、助言をいただくことができるなど活動全体を良いものにすることが出来たと思います。
また、様々な理由を作って連絡のタイミングを遅らせてしまったことで、多くの人に迷惑をかけたと思います。分かったことや伝えることがあれば早めに連絡することを心がけるべきでした。
連絡が届いたと分かるようにメールを早く返すことで、送信者を心配させることが無く、信頼関係を築くことが出来たと思います。常に連絡を取ることで問題が起きた時に気付けるようになり、サポートすることが出来たのではないかと思います。
問題が起きた時は、先生にはもちろんそうですが、キャリアサポーター同士でも相談できるような関係になっておけば、多くの問題を未然に防ぐことが出来たと思います。
・キャリアサポーター3名ともに連絡用のツールの重要性をまったく分かっていませんでした。PSNSの活用や他に連絡や交流を図ることのできる手段があれば活用すべきでした。
ただ、連絡や交流を行う気があればツールとか関係なく、携帯電話で事足りるのでやるかやらないかの問題かと思う。Face　to　Faceで話をすることも大事だと感じました。

◇つながりについて

・前年度も「メンバー同士の連携が薄れていた」という反省があったが、今年度はそれ以上にメンバー間に距離があったように思います。今年度の活動は先輩方が作ってくださった土台をベースにして活動することが多かったため、メンバー3 人で何かを創り上げていくという作業をほとんど行わなくても活動をしていくことが出来てしまった。それに甘んじて各グループで情報共有をまめに行わなかったり、中間発表もしなかったりしたことが本当に良くなかったと思う。
メンバー同士の距離を縮めるためにプライベートでの交流を増やすべきだった。

・各企画の活動が始まるとそれぞれが各企業の活動に力を入れていたことは間違えではなかったと思います。ただ、全体が見えていなかったし、個人プレーでの活動でした。
せっかく 3 つのグループでやっているのだからもっと相談するなり、数多くのリハーサルを行うなり出来たはずでした。
それが出来なかったのは信頼関係が築けてなかったことや意識として 1 つのグループでやっていることを自覚出来てなかったことが原因だと思います。

・今年度は、過去 3 年間でもっともキャリアサポーター間のつながりが薄いと言える年だったのではないでしょうか。3 人で集まる機会をほぼ設けずに各々が自分の GP 活動の事だけを考えて積極的に他のチームとつながりを持とうとしていませんでした。それだけ、関係を築くことの重要性を理解していませんでした。
キャリアサポーターが重要性を理解していなかったため、各 GP 活動のチーム間交流は本番前のリハーサルの際に企画の内容を見せ合うだけにとどまり、3 チーム全体の交流に至っては一度も行われませんでした。
他のチームと交流することの大切さに気付いたのは、上でも述べましたが本番前のリハーサルです。このリハーサルで企画内容を見せ合うことで、お互いが多くのアドバイスを出すことができ、その企画内容から参考にできるところも多くあり、もっとチーム同士交流することで企画内容が格段に良くなっていたと思われます。リハーサル以外にもサポートし合えることもあったので、チーム間の交流を増やすことで GP 活動をいっしょに行う 1 つのチームだと、仲間であるという意識を持つべきでした。

・今年で GP 活動も 3 年目であり、私たちの前には過去に GP 活動を行った多くの先輩がいました。GP 活動を行う企業を前年度に担当した先輩に話を伺う機会は多くあり、実際に話を伺うことで企画についての多くの情報やアドバイスをいただくことが出来ましたが、本番を行ってからは情報が足りないところが多くあったと感じました。
情報不足は自分たちが質問しなかったからであるため、もっと意見をもらうことに対して貪欲になるべきだったと思います。

・キャリアサポーター3 人が集まって、何かを行う機会はまったくありませんでした。
私たちには GP 活動全体をうまく進めていくための役割があったが、自分たちの活動のことだけ考えてしまい、全体を見ようとはしませんでした。私たちが GP 活動全体のリーダー・サブリーダー

であると自覚し、各企業の GP 活動の進歩状況や企画内容を報告し情報を共有する、問題点があれば改善するなど活動全体を見ながら行動する必要があったと思います。

◇中学生相手ゆえの難しさ

・正しく伝わるように、中学生が理解できるような言葉づかいを意識しながら話す必要がありました。ですが説明中はどうしても中学生には難しい言葉で話してしまう時があり、意識することの難しさを感じました。

・中学生は初めて見る大学生との接し方が分からず、どうしても緊張や警戒心を抱いてしまう。
その状態からどのように心の距離を近づけるかという部分が非常に苦労しました。

・大学生相手に、中学生はどうしても緊張してしまうが、自分たちの想定以上に緊張していたし、初めのほうはよそよそしい印象を受けました。
さらに中学生は緊張からか自分からしゃべることが少なかったため意思疎通が大変でした。

・中学生からうなずきや相槌など、返ってくる反応が少ないため、本番中に企画の説明や中学生に伝えたいことが正確に伝わったか分からなかった場面が多くありました。

・中学生と関わった経験がないため行う企画内容で中学生からどのような反応が返ってくるか予測できず、企画の立案が非常に難しかったです。また本番では想定していた反応と違うことがままあったので、柔軟な対応する必要がありました。

・「14 歳の挑戦」をするに当たって、「15 歳の選択」で中学生と関わったこと、中学校の先生方に中学生の実態を伺ったことが大いに活かされたと思います。

◇大学生が企業と中学生の間に入るメリット・デメリット

・メリットは企業と中学生との間に年齢が近い大学生が入って「中学生の緊張」と「就業体験への不安」を緩和する手助けをすることで、活動への参加意欲や向上心が高まり、積極的に学ぶことを促すことだと思います。

・デメリットは大学生側からの中学生への過度な干渉をすることで中学生の自主的に考えて動くことの妨げになったり、中学生が委縮したりしてしまうことです。

◇GP 活動全体の改善

・昨年度の反省にもありましたが、GP 生どうしの交流が少なく情報共有があまりできないまま、実際の活動を行ってしまったことを反省しています。
3 人の交流が活発であれば行き詰ってもヒントを出し合って打開策を練ることができたのではないかと思います。

・スケジュールの立て方、活用方法にも改善できる点があると思います。各グループのスケジュールや進行状況が全員に分かるようにすることで、各グループの交流が図れると考えます。また、決めたスケジュールを出来ないからと言ってむやみに伸ばさないことです。伸ばしたのなら、そのスケジュールや期限はしっかりと守る。

・決まり事を決めるならそれを各自で何時でも確認できるように紙に書いて貼っておく。

・本年度は何と言ってもGP生（企画者）の人数不足だったかと思われます。
企画を始める前に、前年度の反省点を活かしながら企画をどのような形で進めるのかを話し合うべきだと思います。その話し合いのなかで、今年はこのような形で企画を進めていこう!というものを決め、3チームが協力し合い、先輩に力を借り、1人1人が能動的に活動を進めていくことが出来れば、「14歳の挑戦」という企画は、さらによいものへと進化していくと思います。

◇成長したと思う点

・成長した所だと思うのは、いい意味で人に頼ることができるようになった所です。何でもかんでも他力本願になるのは論外だけれども、一人で考えても同じような案や考えしか出てこないのだからある程度人に頼ってしまうのは正解だと思います。
また、自分の未熟さを痛感した所も成長した所だと思います。

・4月の私と比べると「人に指示を出すこと」や「意見を積極的に出すことができるようになった」とは思います。
ただ、成長したのかと問われると違うと答えます。私が気付いていないだけかもしれませんが。
なぜなら、どちらかというとこの活動を通して、私は成長を感じるよりも未熟な点が多く出てきたと感じているからです。
「約束を守れない」「言い訳がましい」「人の話を真剣に聞いていない」「日本語が出来ない」「言葉づかいがなっていない」などあげていったら切りがありません。
もしかしたらこれらの未熟な点に気づけたことが私にとって一番の成長かもしれません。

・成長した点として、GP活動に参加する以前よりも、積極的に多くの人と関わりたいと思えるようになった点が挙げられます。GP活動に関わる以前の私は、GP活動と同じように富山大学生を対象に活動を行っていましたが、基本的に独りよがりで勝手に行動し、メンバーとは企画について自分たちの考えを話し合う機会が少なかったです。しかし、GP活動を通して私よりも熱意をもった先輩方と出会い、共に活動していく中で人のために本気で考え、行動するとはどのようなことかを学べましたし、自分の未熟さを知ることで、何か出来ないことがあるときには誰かに力を借りることが出来るようになりました。以前には感じる事の無かった誰かと共に活動することの楽しさと大切さを学べ、今後もこのような活動に積極的に参加したいと思えるようになりました。

「15 歳の選択」
報告書

平成 23 年度「15 歳の選択」企画終了後　呉羽中学校前にて撮影

富大流人生設計支援室　学生サポーター

はじめに

「15 歳の選択」を通じて、企画に関わっていなければ絶対に出会うことのない様々な人と出会うことが出来ました。多くの場合出会うのは先輩でしたが、誰もが自分のやりたいことを持っており、何事にも本気で取り組む、一本芯の通った人ばかりで、誇れるものなんて何も持っていなかった私にとって、この人たちとの出会いは大きな衝撃で、自分というものを見つめなおすきっかけとなりました。

リーダーとして取り組んだ「15 歳の選択」ですが、活動中はリーダーとして企画の中心で動いてはいました。しかし、話し合いではしゃべるのが苦手で周りの先輩に力を借りる、参加大学生へ連絡する回数も少なく、リーダーとしての役割を全う出来ていなかった。ただ、だからこそこの「15 歳の選択」を通じて自分に必要なものは何かを学ぶことが出来、現在の自分があると思っています。

また、この活動を通じて誰かと一緒に 1 つの目標に向かっていくことの楽しさを学ぶことが出来ました。この活動の前にもボランティア系の活動に関わったことはあったのですが、ここまで誰かのことを一生懸命考えて、本気で取り組んでいる人たちには出会ったことなんてほとんどなかったです。この人たちに影響を受けて、自分の中の考え方が少しずつ変わっていきました。そして自分にはまとめる力なんてものは皆無でしたが、それでも呆れることなくいっしょに活動してくれた、力を貸してくれたこの人たちの姿を見てきて、助けられ、やる気をもらってきたからこそ、もっといろんな人と出会いたいと思えるようになり、誰かと一緒に活動していきたいと考えるようになりました。

この報告書は、今後、この企画を行う学生の参考になるように呉羽中学校との打ち合わせ、参加大学生の打ち合わせなど、本番当日よりも活動期間中に重点を置いてまとめさせていただきました。反省会では多くの反省点、改善点が上がったので、来年度に企画に参加される学生には今年度の企画よりもさらによい企画になるように頑張っていただきたいし、その一助としてこの報告書が役に立つことを願っています。

最後に「15 歳の選択」という素晴らしい成長の機会を与えてくださった呉羽中学校の先生方と小助川先生、ふがいない私を、時に厳しく叱ってくれ、時に優しく助言を下さり、最後まで呆れることなく指導してくださった荒井先生、私たち「15 歳の選択」に参加する学生をサポートして下さったキャリアサポートセンターの皆さん、そして参加大学生の皆さん、皆さんが協力してくれたからこそ、ふがいない私がリーダーでもこの企画を成功で終えることが出来たと思っています。

「15 歳の選択」を通じて、最高の経験を得ること、最高の時間を過ごすことが出来ました。「15 歳の選択」に関わったすべての人に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

平成 23 年度　「15 歳の選択」　リーダー

扇 拓巳

1.　企画概要

夢をつかめ！「15歳の選択」

日時　平成23年9月16日(金)　　9：15~12：00

目的　これまでに生徒は、1年生で様々な職業を知り、働くことの意義や勤労観を養い、
(「夢に向かってステップ・ワン「13歳の学び」」)
2年生では職場体験活動を行い、自立のための第一歩として勤労の尊さを知り、社会を通して自分を見つめてきた。
(「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」)
3年生では、これまでの活動を通して学んだことを基に自分自身を知り、将来を考えていかなければならない。そこで、大学生から進路選択に関する体験談や学生時代に力を注いできたこと、学習の仕方などを聞き、生徒が自らの生き方を考え、主体的に進路を選択することができるようにする。

参加大学生　　18名

学部	参加人数	参加大学生	学年						
人文学部	3名	清水(しみず)　綾香(あやか)	4年	塩谷(しおたに)　優子(ゆうこ)	3年	樋口(ひぐち)　綾(あや)	3年		
人間発達科学部	2名	藪(やぶ)　あすか	4年	阿部(あべ)　早織(さおり)	2年				
経済学部	7名	松井(まつい)　久和(ひさかず)	4年	高瀬(たかせ)　顕(あきら)	4年	高橋(たかはし)　健太(けんた)	4年		
		滝谷(たきたに)　美紗子(みさこ)	4年	傳羽(でんば)　佐有(さあり)	3年	扇(おおぎ)　拓巳(たくみ)	2年	本田(ほんだ)　直樹(なおき)	2年
理学部	2名	大久保(おおくぼ)　郁来(あや)	4年	若林(わかばやし)　旺実(あきみ)	2年				
工学部	1名	和田(わだ)　亮吾(りょうご)	4年						
医学部	2名	冨居(ふごう)　ゆかり	4年	富岡(とみおか)　義仁(よしひと)	2年				
医学薬学教育部	1名	李(り)　淳馨(すにょん)	修士1年						
合計	18名								

参加中学生　　225名

2.　当日までの流れ

2.1 活動日程表

6月	7月					8月					
4week	1week	2week		3week	4week	1week	2week	3week			4week
6/24(金)	7/5(火)	7/20(水)	7/20(水)			8/10(水)		8/20(土)	8/23(火)	8/29(月)	
15歳の選択概要説明	第1回呉羽中学校打合せ（呉羽中学校会議室）	第2回呉羽中学校打合せ（呉羽中学校コンピュータ室）	第2回呉羽中学校打合せの反省会			参加大学生へ概要説明		プロフィール〆切	プロフィール送信	アンケート回収 呉羽中学校訪問	
	15歳の選択参加者募集					プロフィール制作					
						アンケート制作					

9月							10月			
1week			2week		3week	4week	1week	2week	3week	4week
9/7(水)	9/7(水)	9/7(水)	9/16(金)					10/12(水)		
参加大学生　最終ミーティング	第3回呉羽中学校打合せ	呉羽中学校打合せの反省会	**15歳の選択　本番当日**	15歳の選択　反省会				15歳の選択の合同反省会		

2.2各活動内容について

5月6日(金)呉羽中学校ミーティング

参加者　小助川先生、荒井先生

小助川先生、荒井先生が本年度の GP 活動(「14 歳の挑戦」と連携する長期循環型インターンシップ)のご挨拶に呉羽中学校へ伺いました。その際、「15 歳の選択」についてのお話しがありました。

・実施時期は 9/12～9/15 あたりで(9/4 は体育大会)
・中学生代表と大学生との打ち合わせを昨年のように行いたい
・中学校、大学双方のプログラムをすりあわせる
・できるだけ多くの学部の学生に参加してもらいたい(医学系の学生も)

6月24日(金)　「15歳の選択」概要説明

参加者　小助川先生、荒井先生、阿部、本田、扇

小助川先生から「15 歳の選択」の概要、過去 2 年間の「15 歳の選択」について説明を受けました。文章の説明だけでなくではなく、説明の中で過去 2 年間の活動の様子を写した写真が豊富に使われており、中学校でどのように「15 歳の選択」の活動が行われたかを深く知ることができました。
また、今年度「15 歳の選択」のリーダーに扇が決定しました。

7 月 5 日(火)　第 1 回呉羽中学校打ち合わせ(呉羽中学校会議室)

参加者　小助川先生、荒井先生、勝見、阿部、本田、扇

「15 歳の選択」について、呉羽中学校へのご挨拶も兼ねて打ち合わせを行いました。
またアドバイザーとして前年度「15 歳の選択」に参加された勝見さんに参加していただきました。

1. 実施時期決定：9/16(金)9:00～12:00
2. 目的

「13 歳の学び」「14 歳の挑戦」を終え、現実の高校選択を目前に控えた生徒達に、大学生との交流を通して、高校のそのまた先に目を向けさせることで、視野を広げたり考えを深めさせ、自身の進路選択の参考にさせたい。

3. 内容（生徒数は 225 名）

プログラム：パネルディスカッション	9：30～10：20	(50 分)
移動	10：20～10：35	
夢トーク①	10：35～11：00	(25 分)
夢トーク②	11：05～11：30	(25 分)

パネルディスカッション
【共通テーマ】どのような視点で高校を選択したか、志望校合格のために頑張ったこと。
どのような高校生活を送り、なぜ今の大学・学部を選択したか。

夢トーク
【共通テーマ】大学卒業後の進路について。そのために今どのような努力をしているか。

4.　中学校からの要望事項の確認

・前年度は学部が偏っていたため、各学部から学生を派遣してほしい

・服装、言動など、良識のある学生を派遣してほしい

・中学生が鵜呑みにするような言動を避けてほしい

・話す内容について事前に打ち合わせをしたい

・高校選択を目前に控えた生徒達の気持ちを汲み進路選択の参考になるような発言を心がけてほしい

5.　打ち合わせ内で出たアイディア

・本番当日は名札をつけ、名前とニックネームを書いておけばよいのではないか

・中学生の緊張を緩和するために、大学生が始めの段階で何かをすればよいのでないか

・中学生の要望を受けて、大学生が本番で話す内容をふくらませる

・中学生は人生のなかの選択は一本(中学→高校→大学など)だと思っている。
さらに目先のことしか見えておらず、視野が狭くなっている。現在、もしくは少し先の将来を見てしか選択していない。(虫の目)

・人生はジグザグに進むこともあるが、それは無駄なことではないということを分かってほしい。
また、将来を見越した状態で今を選択してほしい。(中学生の現在の価値観を壊してほしい)

・人生のターニングポイントを話してくれるといいかもしれない。

中学生について

・保護者の方は将来に関心のある方　無い方両極端
・また勉強に熱心な方が多い
・部活・クラブチーム熱心に取り組んでいる
・素朴な生徒が多い
・人見知りの生徒も多い
・素直な生徒が多く、まだ幼い
・聞く態度は○　やる時は◎　やる人が多い
・ちょっとほめると寄ってくる　素直なのです
・流行のモノ　男子:ゲーム、カードゲーム　女子:携帯ゲーム、ameba pig、プロフ

6.　今後の動き

・生徒アンケート

・7/20 に大学生と中学生実行委員との打合せ

・8 月中に 2 回目の打合せ
(何度も顔を合わせて打ち解けることで話をしやすくする　前年度は 2 回会っている)

・出席大学生の決定

・参加大学生のプロフィールを中学校へ渡す

・伊藤教頭先生から中学生との関わり方についてレクチャーを受ける

・9 月に最終打合せ

7.　連絡先の確認

・中学校は田中先生(進路指導主事)、大学は小助川教授

7月20日(水) 第2回呉羽中学校打合せ

参加者　小助川先生、荒井先生、勝見、高瀬、松井、藪、本田、扇

呉羽中学校との「15 歳の選択」についての打ち合わせ、本番当日に大学生をサポートする中学生実行委員との顔合わせが行われました。

また、伊藤教頭先生からキャリア教育について説明を受けました。

1.　挨拶

2.　自己紹介　教職員、富山大学生、呉羽中学校生徒 12 名

3.　日程等確認

・当日の期日　　平成23年9月16日(金)

・当日の日程

9：00～	大学生　学校到着
9：15～	開会式
9：30～10：20	パネルディスカッション
10：20～10：35	移動
10：35～11：00	夢トーク 1 部
11：05～11：30	夢トーク 2 部
11：35～	閉会式

4.　事前アンケートについて(田中学年主任)　添付資料参照

中学生に対して 15 歳の挑戦、進路に関すること、大学へのイメージについてアンケートを実施し、その結果をまとめた資料が配布された。

5.　大学生と中学生との懇談

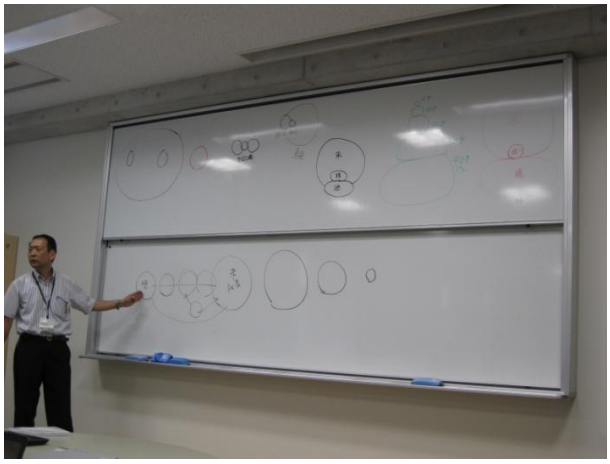
6.　その他

・大学生のプロフィールは8/20までに中学校へ提出

・次回ミーティングは9/7（水）16:00から呉羽中学校で行い、「夢トーク」のグループに分かれて中学生実行委員と大学生が事前打合せを行なう。

・掲示物の作成については要相談

7.　キャリア教育について（伊藤教頭先生）添付資料参照



7月20日(水) 第2回呉羽中学校打合せの反省会

参加者　小助川先生、荒井先生、勝見、高瀬、松井、藪、本田、扇

キャリアサポートセンターにおいて、呉羽中学校第2回打合せの反省会を開きました。

■主な意見

・高校の現状について事前に知っておいた方が話しやすいのではないか
・中学生が大学をどれだけ理解しているか、どのようなイメージを持っているか把握する必要がある
・短い時間で打ち解けられるように机の距離を近くしたい
・打ち合わせ（中学生との懇談）の段取りができていなかったのではないか
・中学生は固くなっていて、かつ主体性も感じられなかったため、大学生から働きかける必要がある
・先生が回りにいたせいか中学生がおとなしかった
・名前を覚える必要性と工夫を感じた
・大学生が中学生から「引き出す」工夫が必要
・プロフィールについて、大学生だけではなく、中学生もあっていいのでは
・この取り組みに参加した経験者からの情報が必要

■確認事項

・7月末までに参加学生の確定
・8/11(木)　プロフィールの検討(13:00～全員)(または8/10、8/8)
・8/20(土)　プロフィールの完成・提出
・8/25(木)　呉羽中学校3年生登校日 → プロフィールの配布(中学校)
・9/7（水）　16:00～、中学生実行委員との打合せ(夢トークの内容を確定しておく)
・9/16(金)　「15歳の選択」

8月10日(水)参加大学生へ概要説明

参加者　小助川先生、荒井先生、大澤、李、富居、高瀬、和田、樋口、富岡、阿部、本田、扇

「15 歳の選択」の概要、プロフィールについて説明を行いました。

また、9 月 7 日(水)の段取り、9 月 16 日(金)本番について、前年度の企画に参加された大澤さんを交えてアドバイスなどをいただきながら話し合いを行いました。

■確認事項

・プロフィール〆切　8 月 15 日
・プロフィール送信　8 月 20 日ごろ(添付資料参照)
・呉羽中学校へ(希望調査票について相談)　8 月 16・17・18 日いずれか

・事前打ち合わせ　9月7日　14：00　キャリアサポートセンター
　内容：自己紹介　パネルディスカッションについて
・中学生実行委員との打ち合わせ　9月7日　16：00　呉羽中学校
　内容：自己紹介・夢トークの進め方・司会者との話し合い
　ほしいもの：名札　小道具(本番で使うもの)
・パネルディスカッションについて
　司会者(各チームのリーダー)　高瀬・和田・富居
　リーダーを中心にパネルディスカッションを進める

希望調査票について(添付資料参照)
　本番に活かすため、中学生に質問をして生の声を聞く。
　そのために希望調査票を作成することに決定。
　・中学生に、大学生への質問を受け付ける
　・中学生に大学生から聞きたい話を書いてもらう

9月 7日(水)参加大学生　最終ミーティング

参加者：小助川先生、荒井先生、李、藪、高瀬、松井、和田、高橋、冨居、塩谷、清水
　　富岡、阿部、本田、扇
　パネルディスカッションの各チームで、どのようなテーマで話すか、どのような流れ(1人1人で話すか、全員で話し合いながらテーマを深めるかなど)にするか、必要な道具などについて話し合いました。

9月7日 (水)第3回呉羽中学校打合せ

参加者：小助川先生、荒井先生、李、藪、高瀬、松井、和田、高橋、冨居、清水、富岡、阿部、本田、扇

「15歳の選択」で大学生をサポートする中学生実行委員との企画内容についての最終打ち合わせ、また、呉羽中学校側との最終打ち合わせを行いました。

1. 小助川教授　あいさつ

2. 自己紹介　自分の名前と担当ブース

3. 中学生との打ち合わせ 16：10～
   第1クール　25分　　16：10～16：35
   第2クール　25分　　16：35～17：00

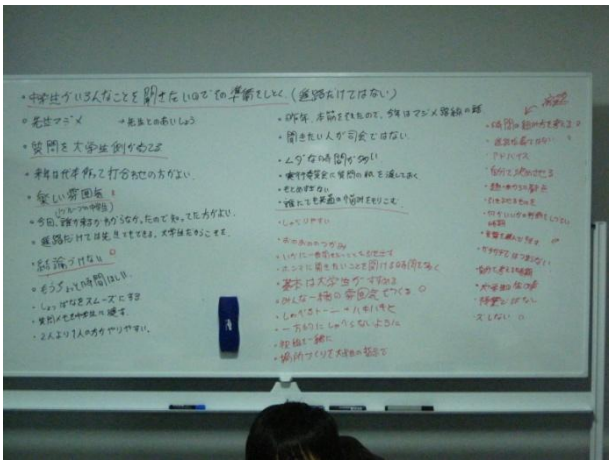
   「夢トーク」のグループに分かれて、大学生とサポートをする中学生実行委員で「夢トーク」の内容や本番当日の動きなどについて打ち合わせが行われた。

4. 中学3年生について(添付資料参照)

5. キャリア教育について（伊藤教頭先生）
   7月20日(水)に参加できなかった学生に向けて、伊藤教頭先生がキャリア教育について説明を行いました。

9月7日 (水)第3回呉羽中学校打合せの反省会

参加者：小助川先生、荒井先生、李、藪、高瀬、松井、和田、高橋、冨居、清水、富岡、阿部、本田、扇



キャリアサポートセンターにおいて、第3回呉羽中学校打合せの反省会を行いまいた。

■反省・意見など
・中学生はいろんな事を聞きたいので準備しておく(進路だけではない)
・先生マジメ→先生との相性
・質問を大学生側がする
・台本を作って打ち合わせのほうがいい
・来年は楽しい雰囲気
・今回、中学生の誰が来るか分からなかったので知っておいた方がいい
(どんな話をするか考える時間があればよかった)
・結論づけない
・中学生と距離が近くなったところで帰るのはさびしい
・もうちょっと時間欲しい
・はじめのところをスムーズにする
・質問メモを中学生に渡す
・夢トークは2人よりも1人のほうがやりやすい
(ペアとの相性、打ち合わせなど)
・昨年は本筋をそれたので、今年はマジメ路線の話
・聞きたい人が司会ではない
・無駄な時間が多い
・実行委員会に紙を渡しておく
・中学生に対してもとめすぎない
・誰にでも共通の悩みを盛り込む

■本番に向けて
・しゃべりやすい雰囲気を出す
・誰にでも共通の悩みを盛り込む
・おのおののつかみ
・いかに一番聞きたいことを引き出す
・中学生がホンマに聞きたいことを聞ける時間を多く
・基本は大学生が進める
・みんな一緒の雰囲気を作る
・しゃべるトーン+ハキハキと
・一方的にしゃべらないように
・視線を一緒に
・場所づくりを大学生の指示で
・時間の組み方を考える(大学生の責任)←宿題
・進路指導ではない
・アドバイス、結論づけない
・自分で決めさせる
・趣味からの観点
・引き寄せるものを
・何がいいかの判断をしづらい時期(何でも素直に受け入れてしまう)
・言葉を選んで話す
・ガチガチではつまらない
・自分で考える時期
・大学生の生の声
・授業ではない
・ズレない

■確認事項
9/16(金)　8:15　キャリアサポートセンター集合
13:00　反省会

3.　「15 歳の選択」当日

9月16日（金）「15歳の選択」　本番当日
参加者：小助川先生、荒井先生、李、藪、松井、高瀬、和田、高橋、滝谷、大久保、冨居、傳羽、塩谷、樋口、清水、富岡、若林、阿部、本田、扇

3.1　タイムテーブル

時間	内容
8:45	大学生到着　3年生:体育館へ移動
8:55	整列完了
9:00	開会式　　進行(西野先生)
	1.初めの言葉　(藤岡先生)
	2.校長挨拶
9:15	3.大学生代表挨拶　(小助川教授)
	4.大学生自己紹介
	会場へ移動、準備
9:30～10:20	パネルディスカッション(3部会) 第1部会・・・ランチルーム 第2部会・・・呉龍館 第3部会・・・視聴覚室
10:35～11:00	「夢トーク」　大学生の講話Ⅰ
11:10～11:35	「夢トーク」　大学生の講話Ⅱ
11:45～12:00	閉会式　　進行(東山)
	1.大学生代表の言葉
	2.生徒お礼の言葉(朴木)
	3.教頭挨拶

3.2　各企画について

9:30～10:20　パネルディスカッション(3 部会)

【共通テーマ】どのような視点で高校を選択したか、志望校合格のために頑張ったこと。
どのような高校生活を送り、なぜ今の大学・学部を選択したか。

参加大学生が 3 チームに分かれ、パネルディスカッションの共通テーマを軸に、大学生が進路選択に関する体験談や学習の仕方について、成功したことや失敗して乗り越えてきた自分たちのこれまでの経験を語り合いました。大学生が時折り、「気になうことはない?」「聞きたいことはない?」など質問をすることで、中学生には受け身にならず集中して話を聞いてもらえるような工夫を行いました。

第1部会

参加大学生	学部	学年
第1部会リーダー:高瀬 顕	経済学部	4年
李 淳馨	医学薬学教育部	修士1年
松井 久和	経済学部	4年
樋口 綾	人文学部	3年
若林 旺実	理学部	2年
阿部 早織	人間発達科学部	2年
扇 拓巳	経済学部	2年

第2部会

参加大学生	学部	学年
第2部会リーダー:和田 亮吾	工学部	4年
大久保 郁来	理学部	4年
高橋 健太	経済学部	4年
滝谷 美紗子	経済学部	4年
塩谷 優子	人文学部	3年
富岡 義仁	医学部	2年

第3部会

参加大学生	学部	学年
第3部会リーダー:冨居 ゆかり	医学部	4年
本田 直樹	経済学部	2年
傳羽 佐有	経済学部	3年
清水 綾香	人文学部	4年
藪 あすか	人間発達科学部	4年

パネルディスカッションの様子

10:35～11:00　「夢トーク」大学生の講話Ⅰ
11:10～11:35　「夢トーク」大学生の講話Ⅱ

【共通テーマ】大学卒業後の進路について。そのために今どのような努力をしているか。

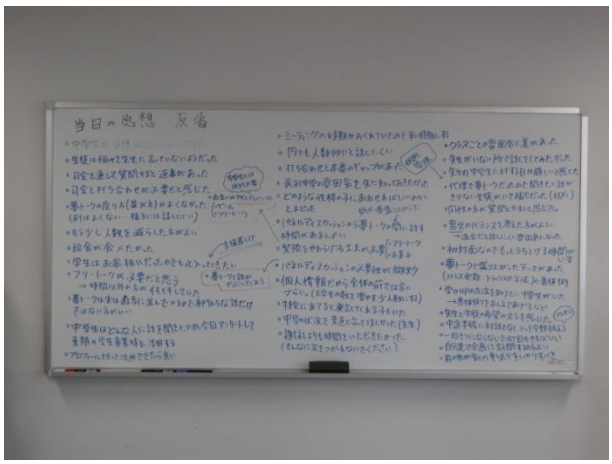
参加大学生が14グループに別れて共通テーマを軸に、中学生に自分自身のこれまでの経験を語ります。
また、中学生の質問に答えながら話をふくらませるようにします。
大学生が進路選択に関する体験談や学生時代に力を注いできたこと、学習の仕方などを話し、中学生が自らの生き方を考え、主体的に進路を選択することができるようにしました。
中学生の人数が少ないため、1人1人の質問に答えながらパネルディスカッションを深めるような形で行いました。また、学生が各自でパワーポイントや高校・大学で使用しているものを持ち込み、中学生に分かりやすく伝わるように工夫をしました。

グループ	学部	参加大学生	学部	参加大学生
1	人文学部	清水　綾香	人文学部	塩谷　優子
2	人間発達科学部	藪　あすか	人文学部	樋口　綾
3	人間発達科学部	阿部　早織	理学部	若林　旺実
4	経済学部	扇　拓巳		
5	経済学部	高瀬　顕		
6	経済学部	高橋　健太		
7	経済学部	滝谷　美紗子		
8	経済学部	傳羽　佐有	理学部	大久保　郁来
9	経済学部	本田　直樹		
10	経済学部	松井　久和		
11	工学部	和田　亮吾		
12	医学部	冨居　ゆかり	医学薬学教育部	李　淳馨
13	医学部	富岡　義仁		

「夢トーク」大学生の講話の様子

9月16日（金）「15歳の選択」　反省会

参加者：小助川先生、荒井先生、李、藪、松井、高瀬、高橋、滝谷、大久保、和田、樋口、清水、富岡、阿部、本田、扇、



「15 歳の選択」終了後、参加大学生が集まり、本番の感想、反省、今後の運営をどのような形で行うかを話し合いました。

■本番の感想

・中学生がシャイだった。
・悩みを中学生は先生に伝えていない。
・夢トークの並び方が良くなかった。
・給食を食べて中学生と打ち解けたかった。
・中学生を円状に並ばせても人数が多いと話しにくい。
・打ち合わせと本番のギャップがあった。
・事前に呉羽中の雰囲気を知っておきたかった。（学級委員以外の生徒の雰囲気）
・中学校の雰囲気を素直に言ってほしかった。
・どのような性格の子に合わせて話せばいいのか分からなかった。
・特定の生徒に当てると喋ってくれるということもあった。
・クラスごとの雰囲気に差があった。
・先生が居ないところで喋りたかった。
・中学校の先生の生徒を見る目が厳しいと感じた。
・代理で夢トークを行ったため、聞きたい話を聞けなかった生徒がかわいそうだった。
・先生と生徒に希望のずれが生じていた。

■反省

・司会者との打ち合わせを数回行う必要性を感じた。
・学生はお客様扱いだったのか？
　→主催者としてもっと関わらせてほしい。
・フリートークの時間が必要だと思う。
　→フリートークの時間の方が中学生はイキイキしていた。

・夢トークの生徒の振り分けは適当なので、専門的な話だけではない方がよい。
→具体的な勉強法、学力 UP 法、リラックス法、ストレス発散法など。
・「中学生はどんな人の話を聞きたいか」という事を調査してから、中学生のニーズに応えられる話をすることができる人を見つけ、その人をメンバーにするという方法を取って、メンバー集めをしても良いかもしれない。
・パネルディスカッションから夢トークの間に中学生と打ち解けるための時間を設けても良いかもしれない。
・緊張を和らげる工夫が必要。
→アイスブレイクが必要。（フリートーク、ゲーム、お菓子を与えるなど）
・パネルディスカッションと夢トークの内容が被っているので、パネルディスカッションの必要性が少ししか感じられない。
・中学生は個人情報（進路、悩みなど）をクラスメイトの前で言いづらい。
→パネルディスカッションの際に当てても答えない。
→大学生の人数を増やし、少人数制の話し合いにする。
・同性の大学生を配置したら中学生が質問しやすいかもしれない。
・男女（中学生）のバランスを考えた方がよい。
→男女混合だと話しにくい雰囲気になった。
・初対面なので打ち解ける時間がもっと必要。
・ニーズを考えるべき。

■今後の運営について
・1 回きりにしたくない。
→何回も行えばいい。自分たちで企画して訪問すればいい。
→学生主体で運営していけばいいのではないか。
・前の参加者との申し送りをしっかり行うべき。
・昨年度の資料を見直す。
・ミーティングの時期が遅れていたので、早い時期に行うべき。
・プロフィールをもっと活用すべき。
→詳細を付け加える。（市販のプロフィール帳を購入し使用する。）
・キャリア活動が知られていないので大々的に宣伝し、参加者を増やしたい。
・来年の事を PSNS に記入する。
→サークルになるのか？キャリアサポートセンター主体になるのか？

4.　「15 歳の選択」を振り返って

10月12日(水)「15歳の選択」の合同反省会
参加者　小助川先生、荒井先生、藪、和田、高瀬、松井、滝谷、冨居、清水、富岡、本田

呉羽中学校と参加大学生が合同で「15 歳の選択」の反省会を行いました。

1.　大学生と中学生のグループ反省会

2.　呉羽中学校　校長挨拶

3.　感想・反省発表

4.　アンケート結果発表

5.　まとめ

校長挨拶より

・「15 歳の選択」の取り組みが 3 年目となり、根付いて定着してきたことを実感している。
・大学生が自分の過去を振り返って、赤裸々に自分をさらけ出しながら中学生に濃い内容のものを話してくれたことに大変感銘を受けた。
・なかなか自分のことを語るのは難しいと思うが、十分に準備してきて自分の事を熱く語ってくれたことが嬉しかった。大学生にとってさらに自分の過去を振り返りながら将来を考えるきっかけになってくれたら幸いと思う。
・中学生のアンケートの中で、「自分の将来や進路について前向きに考え、努力してみよう」と答えた学生が 9 割を超え、とても有意義なものになっている。

■感想・反省

【大学生】

・マイクを使用した方が聞きやすい。
・人前で将来の話をしたり、大勢の前で話すのは恥ずかしい。
・パネルディスカッションは、様々な人の話を聞けるという点と自分の興味ない人の話も聞けるという点で大事だ。
・勉強の話が中心となったが、高校時代の部活動の話や友人との人間関係などについて不安を持っている学生が多かったので、幅広く話せればよかった。
・大学生が就職活動をする上で「働く」ことに対してどのような心理状態なのか、「どういう気持ちでこれから働くか」を詳しく聞きたいという意見もあった。
・パネルディスカッション時に質問したいということを、事前にアナウンスをしておいた方がよかった。
・フリートークの時間があってもよかった。大人数の前では話しづらいという意見も多かったので少人数(3 対 1、4 対 1 など)で話せればよかった。
パネルディスカッションの並び方はクラス別ではなく友達同士のほうがよいのではないか。
・自分の生活のことや親や先生と喧嘩したことなどを織り交ぜて話したので、「色々な話が聞けて良かった」、「安心した」、「考えを変えられた」、「親と話が出来た」等の意見が出てきた。
・質疑応答の時間があればよかった。
・パネルディスカッションの打ち合わせもあればよかった。
・一方的よりも、手を上げてもらうなど参加型の形式が望まれる。
・自由時間がなかったので、パネルディスカッション後に小さなブースを設けても良い。

【中学生】

・人前で自分の思っていることを話すのは恥ずかしい。場の雰囲気が固く、「話しづらい」、「聞きたかったのに聞けなかった」という声があり、事前に中学生に意見をまとめてから打ち合わせをすればよかった。
・人数が多く、並び方も身長順で男女交互であったため誰とも話せず、自分の意見を言う雰囲気がなかったので発表しずらかった。女子なら女子、好きな人同士などの少人数のほうが話しやすい。中学生の人数が多いため、聞きたいことが聞けなかった。
・打ち解けていない間に次々にプログラムが進行したため、もっと時間を取ればよかった。
・大学生の話は、勉強のことや大学生活が中心の話だったが、最初は打ち解けやすくするために中学生が興味のあるバイトのことやサークルの話をして頂きたかった。
・「親と相談出来た」、「安心することが出来た」、「勉強の仕方を変えることが出来た」という意見もあったが、手を上げることに対して抵抗感があるなど「質問しづらかった」という環境作りの問題があり、事前に打ち合わせが必要だった。
・移動前に自由時間を設けて、話し合い後に個人で質問する時間が必要。

アンケート結果報告

■「15 歳の選択」の活動はいかがでしたか?　86%(よく当てはまる、当てはまる)

■それぞれの活動内容は、将来設計や進路選択をするうえで参考になりましたか?

①パネルディスカッション　95%(よく当てはまる、当てはまる)

②夢トーク 1　87%(よく当てはまる、当てはまる)

③夢トーク 2　90%(よく当てはまる、当てはまる)

■「15 歳の選択」を終えて、自分の将来や進路について前向きに考えたり、努力してみようと思いましたか。　97%(よく当てはまる、当てはまる)

■自分の将来の進路について誰に相談していますか。

①親　54%　②友達　20%　③相談したことがない　10%　④先生　7%　⑤兄弟　5%

■日程について

・事前打ち合わせは 8 月中に希望

・実施時期は 9 月下旬にした方がよい

■プログラムについて

・現状維持

■内容について

・メンバーに専門学校(総合学科)　出身の学生も希望

・パネルディスカッションに中学生も参加させ、時間を長くする

・パネルディスカッションの事前打ち合わせも必要

・中学生に答えさせる話術が必要

■大学生への希望

・プリント、パワーポイントなどを使用すると中学生が集中できる

・不適切な言葉(勉強しなかった、進路選択は楽だった、勉強しなくても何とかなる)

■次年度への課題

・教育の場における不適切な言葉は控える

・人の悪口を言っている学生がいた

・大学での学習や研究に関する内容も入れてほしい

・9 月下旬の実施を希望

・中学校の教員の大学企画への参加

■大学生の声

・来年度はパネルディスカッションのリハーサルを中学校の先生方に事前に行いたい
(不適切な言動を防ぐため)

・先生方から中学生に分かりやすい話し方を教授してもらいたい

・大学生側も先生方に協力してもらった方が中学生にとって良い

・教育の場という点では無理かもしれないが、大学生の近い立場の考え方で今中学生たちが何をしたいかという企画を組み込むことはできないか。先生方の指導の目により緊張してしまい、せっかく大学生と触れ合う場であるが質問できないため、大学生と中学生だけの時間を取ることはできないか?

・先生方が「15 歳の選択」で求めていることと、中学生が求めていること(こういうことを聞きたい)と大学生が言いたいことに差異がある。改善するためには先生方や生徒さんとの打ち合わせが出来ればよかった。

・言いにくいことをいてもらい参考になった。

・大学生を育てる活動というコメントに対して、本当にそうであるという実感しており、育てていただきこのような機会を設けて頂いたことを感謝している。大学生を育てる活動であると公的な目的として頂いても私たちとしても嬉しい。

5.　参加大学生の感想

富山大学経済学部経営法学科 4 年
高瀬 顕

15 歳の選択に参加して
私は 15 歳の選択に参加することで、これまでの自分の人生を振り返り、そして将来について考えることができました。
15 歳の選択では中学生に、今までの大学生の経験において、進路や勉強の悩みをどのように解決してきたかを伝え、それを参考に中学生が考えることが一つの目的になります。そのために、今まで自分がどのように人生を歩んできたかを振り返ることになるのですが、いざ自分で振り返ってみると、自分が経験してきたことなのにも関わらず、客観的に参考にすることができました。また自分一人の経験だけではなく、同じく参加した大学生の話も聞くことができ、多くの価値観を学ぶことができました。今回の経験は、来年社会人になる自分の人生を考えるうえで非常に参考になることと考えています。
そして私は、中学生にも自分と同じように感じてもらえるようにすることが、この 15 歳の選択の目的ではないかと思いました。中学生たちが私の経験を参考に、自分の将来について考えるきっかけや、迷った時の一つの道標になれば非常に嬉しく思います。

後輩に伝えたいこと
私が後輩に伝えたいこととして、15 歳の選択は未完成の活動であり、これからもっとよりよい活動にしていくことができるということが挙げられます。
今回 15 歳の選択は 3 回目になりますが、参加者には以前参加した人が一人しかおらず、ほとんど一から始めているような状況でした。参加者を募るにあたっても、まだ富山大学内においてキャリアサポートという活動があまり認知されていないこともあり、最低限の人数を集めることが精一杯でした。そのこともあり、参加大学生の学部に偏りが生じてしまいました。時間も決して十分にあったとは言えず、パネルディスカッションのメンバー全員が集まることができたのは当日だけでした。大学生側が模索しながらやっていたということもあり、大学生と中学校との連携も不十分だったと感じます。しかし、それにもかかわらず一定の成果を上げることができたこともまた事実です。
これらの反省点を解消することができれば、15 歳の選択はより完成度の高い活動になると思います。そのためにも、今回の活動をしっかり後輩に伝えることが必要だと感じました。キャリアサポートという枠にとらわれず、広く大学生に知らせることも必要だと思います。また、中学校側が提供して下さる限られた時間のなかで、15 歳の選択という活動をコンパクトな形にしていくのか、長期的なプランで行動していくのか、具体的な形を決める必要もあると思います。まだまだ問題点は多いですが、その分可能性は未知数です。今後、後輩たちがこの 15 歳の選択という活動をよりよいものにしてくれることを期待しています。

富山大学医学部看護学科 4 年
冨居　ゆかり

今回私が「15 歳の選択」に参加した理由は、普段あまり関わることのできない中学生と関わって対話できるということに興味を持ったからである。私自身、中学生の時に進路に悩み、自分の話を親身に聞いてもらい、そして自分が考えている方向と似たような方向に向かって進んでいる人の意見を実際に聞いてみたいと思ったことがあった。そのため、今回は少しでも中学生の力になればよいと考えていた。

計画の段階で、どのようにすれば中学生にわかりやすく、また対話のしやすい状況を作り出すことができるのかということをメンバー全員で考え、意見を出し合った。この際、それぞれが持つ相手への伝え方を学ぶことができた。自分が考えもしなかった方法を用いる人もいて驚いた。コミュニケーションをとることや人に伝えることに対し、少しの工夫で大きな違いになってくることを学んだ。また「15 歳の選択」に参加したメンバーは、中学生に自分の経験を話したり、夢を話したりすることを目的として集まってきたメンバーであったので、話し合い以外でもメンバー同士で自分の将来について真剣に話し合う機会を持つことができた。話をしていると、それぞれ自分の進む方向に対しての考えや思いを聞くことができ、私の考えに対する参考になった。自分の将来や夢を誰かに語るということは普段なかなかできないが、このメンバーの間では中学生に伝えるという目的があることに乗じ、自分たちのことを話し合うことができたため、よい機会であったと思う。学部や学年がバラバラであったからこそいろいろな意見が聞けた。また発表の資料を作っている際に、自分がどのように考えてどの道を選択してきたか、また今どのような考えをもち、自分が目指す方向へ進もうとしているのかということを一連の流れとしてとらえ直す機会を得た。その際、自分の目標に対する意識が曖昧になっていたことに気づいた。自分のことを人に語るという機会を得たからこそ気づけたのだと思った。

中学生と関わることに対して、もっと個人で話せる時間を増やせればよかったと思った。夢トークの際、中学生自身が自分の興味のある系統に来てはいたが、どうしても抽象的な内容になりがちであったと思う。雰囲気作りがなかなか難しかった。しかし中学生からの感想を読んでいると、共感した部分があったという意見や、不安が軽減したというコメントがあって、中学生が自分の進路に対し現実味を帯びて考えることができる機会であったのではないかと思った。大学生とは年齢が近いこと、また将来の夢に向かっている途中という立場が似ていることで、共感できることがあったり、実感することもあったりするのではないかと思う。

これらから「15 歳の選択」は一方的に中学生に対して行うものではなく、大学生にとっても自分の学びとなる場であると感じた。
後輩の皆さんには自分が何を伝えたいかをはっきりさせ、どのようにしたら伝わるかを考えてもらいたいと思う。また自分の意見を伝えて、相手の意見を聞き、積極的に参加していってほしいと思う。そうすることでよいアイディアが生まれ、他人から学ぶことも増えると私の経験から考えられます。また中学生ならどう思うか、どう考えるか、何が気になるかということを考えて、相手と同じ目線に立って関わっていってほしいと思う。

富山大学医学部医学科 2 年
富岡　義仁

1. 準備段階において

「15 歳の選択」は学生主体のイベントということもあり、企画段階で学生側から沢山の意見が出され、イベントをよりよいものにしていこうという気概が感じられた。

私は数少ない杉谷キャンパスからの参加となったが、すぐに溶け込むことができた。学年も一年生から四年生までおり、学科もバラエティに富んでいた。

幹部達もイベントの経験者が少なく、最初は全体像が固まっていなかったこともあって探り探りやっていたように見受けられたが、最終的には非常に強いリーダーシップをもって素晴らしいイベントを創り上げたと思う。

準備期間が夏期休暇を挟んでしまい、あまり多くの回数のミーティングをこなすことができなかったのは残念であった。多学科、多学年にわたっているので全体ミーティングを開くのは難しいかもしれないが、細かい班ごとのミーティングをもう少し詰めるべきであった。また夢トークの担当中学生とも当日の進行の確認程度しかできず、彼らと内容にまで踏み込んだ話し合いができたら良かったと思う。

2. 「15 歳の選択」当日

イベント当日は中学生たちと対面し、3 つのグループに別れたパネルディスカッション、大学生一人に対して中学生 15 人程度の夢トークにわかれていた。

個人的には生徒ひとりひとりの顔を見られる夢トークの方が楽しかったし、反応が返ってきて嬉しかった(自分のやりたいようにできた、というのもある)。私は自分のバックグラウンドを表せるようにスポーツトレーナーの格好をしていったが、やはり目立てたようである。中学生と触れ合える時間は非常に限られていたので、どんな手段であれファーストインプレッションが大きいのはプラスになるのではないか。

パネルディスカッションでは自分の中高生時代の話をしたが、もう少し砕けた内容を最初にいれることで聴衆を話に引きこむ必要があったと感じる。

私の夢トークは「夢を叶えるためには何が必要か」ということを「目標の明確化」「目標達成への 4 つの壁を壊す」というテーマで行った。トークは対話形式で行いたかったが、やはり人前で自分の夢を積極的に話すことを恥ずかしがる生徒が多かったので、こちらからの質問形式とした。夢トークにおけるグループ分けも今後の課題の一つであり、中学生が発言しやすい環境を作ることが必要であると思う。

今回の夢トーク、パネルディスカッションでは、中学生から事前にどんなことを聞きたいかアンケートを取ったが、それをうまく反映できたか否かはよくわからない。イベント前にもう少し中学生側と関わる時間があったらより良いものになると思う。また、イベント自体を複数回に分けたほうが、より中学生との距離が近くなり、深い話ができるのではないか。この辺りは中学校側の事情もあると思うが。

3. その後

イベント後すぐに反省会を行い、出てきたアイディアは非常に貴重なものだと思うので、今後の糧にしていただきたいと思う。中学生に自分の夢の話をすることで自分のビジョンを再確認して明確にすることができたこと、彼らからエネルギーを分けてもらえたこと、このイベントを通して新たに交友の輪が広がったことはとても大きな収穫である。

また中学生から頂いたメッセージカードは一枚一枚読ませてもらった。残念ながらあまり興味のなさそうな感想を書いている子もいて、自分の力不足を痛感したが、中には長文で思ったことを書き連ねてくれた子もいた。自分の話が彼らのこれからの選択においてほんの少しでもプラスになることがあったら幸いである。

この場を借りて、この様な機会を下さった先生方、学生の皆さんには心より感謝を申し上げたいと思う。

6. 添付資料

・希望調査票
・プロフィール
・中学 3 年生・話し方について
・前年度「15 歳の選択」アンケート
・今年度「15 歳の選択」事前アンケート

希望調査票

年　組　　氏名

夢トーク　第1部

	夢トークで話を聞きたい大学生
第一希望	
第二希望	
第三希望	

	夢トークで話を聞きたい大学生	質問してみたいこと
第一希望		
第二希望		
第三希望		

夢トーク　第2部

	夢トークで話を聞きたい大学生
第一希望	
第二希望	
第三希望	

	夢トークで話を聞きたい大学生	質問してみたいこと
第一希望		
第二希望		
第三希望		

中学生が夢トークで話を聞きたい大学生を選べるよう希望を取り、選んだ大学生にどんな話を聞きたいか?質問などを書いてもらった。
第 1 希望から第 3 希望まで取ったのは、中学生の希望に沿った学生の話が聞けるようにするためです。ある程度、大学生に対する中学生の人数を均等にしなければいけませんが、前年度は数名の大学生に希望が集中することがあったため、第 1 希望から第 3 希望まで取ることで、確実に中学生が希望する学生に当たるようにしました。

質問してみたいことの欄を設けたのは、中学生のニーズを知ることで大学生が本番でどのような話をするか考えやすくするとともに、本番で中学生のためになるような話が出来るようにするため、この欄を設けました。
実際に、参考になるような中学生が聞きたい話や大学生への質問などが得られ、自分たちが考えていなかったようなものもあり本番に活かせたものが多くあったので、この欄を設けて良かったです。

プロフィール

中学生が夢トークで話を聞く大学生を選ぶ際、参考になるよう全部で参加大学生 19 人分のプロフィールを作成しました。

高校の普通科、商業科、部活などの欄を設けたのは、中学生が現在考えている進路と同じものがあれば、大学生に質問や相談することで進路選択や今後の学生生活の参考になると考えたからです。また、自分の関心のある事柄を経験してきた大学生であったほうが、中学生が集中して話を聞いてくれると考えました。

プロフィール例

扇　拓巳 [たくみ]
Ohgi　Takumi
経済学部　経営学科　2年

Personal Date

- 出身　兵庫県
- 商業科
- 中学→少林寺拳法・陸上部　高校→陸上部
- 趣味　ランニング・読書
- 就職先　まだまだ考え中
- 周りからは真面目だと言われるが、実際には変なタイプの人間です。目の前の選択肢にいろいろ悩みながらここまで来ました。

中学生へのメッセージ

自分の可能性を信じて、いろんな事に挑戦してください!!

本田　直樹 [ホンチュー]
Honda　Naoki
経済学部　経営法学科　2年

Personal Date

- 出身　兵庫県
- 普通科
- サッカー部
- 趣味　読書・散歩(自転車)・スポーツ観戦
- 就職先　いろいろ模索中
- 自分を紹介するのはとても難しいことだと思うし、人それぞれでその人に対する印象も人それぞれで違います。ただ、一つ言えるとすれば基本おしゃべりです。そして……続きは【15歳の選択】で！！

中学生へのメッセージ

自分がやりたいと思ったことをやれ

１５歳の選択　**お世話になります。どうぞよろしくお願いします。**

「中学3年生」の理解

学習について

・受験に対する重圧を感じています。・・・外見には現れないケースが多い。

・親や周囲の人の願いや期待をうっとうしく感じています。

・励ましや支えになるというよりは、負担に感じる生徒も多い。

⇩

ちょっとしたことでいらいらする　怒りっぽくなる　落ち込む
教師や親が何げなく言った言葉にも敏感に反応し、口げんかになったり
やる気をなくしたりするので、周囲に必要以上に気を遣わせる。

自己嫌悪

⇩

・勉強しなければいけないという観念にも縛られてはいるが、実際にはなかなかできない。

・人に頼りたい甘えたい気持ちと、人から言われたくない、自分でなんとかしたいという
気持ちの間を揺れ動いている

その他

・中学生は思いの外、非常に純粋で素直で公正な目をもっていて、善を求め悪を嫌う。

・その反面、たわいない口実で辛いことから逃避しようとすることがある。

・大人としての考え方ができるようになってくるが、理想と現実は厳しく不平不満をよく口にする。

・異性を意識し、異性の友達もできいろいろと励みになったり、片思いで悩んだりする。

・自分の顔や容姿も気になり、極端な場合は醜形恐怖症などの障害に発展していく場合もある。

・部活動や行事などの成功体験を通して、また、自分を認めてもらうことにより劇的に成長する。

・よくない態度や行動を反面教師として、自分自身を改めようとする。

・友達との絆が強くなり、生涯の友となっていく。

・これまでの体験による自信から行動範囲が広がったり、思い切った行動ができるようになる。

ちょっとした話し方のコツ

≪人は見た目が90%≫

・単に言葉だけの情報よりも言葉以外の視覚的情報の方が話に引き込む力がある。

〇声の大きさ　トーンの強弱　テンポ

・大きな声で

・早口はだめ

・単調にならず、トーンを大きくしたり、小さくしたり

・時にオーバーなくらいに「演技」して

〇表情や態度

・しっかり聴衆を見て、堂々と

・最初から同じ場所で話を続けるより、ゆったりと移動するのもよい。
（ただし、落ち着きがないのはだめ）

・明るい表情で、時に話の内容に応じた表情を作って

・視線は同じ場所にとどまらず、ときどきは誰かの顔を見て、同意を求めるなど
工夫を！

〇服装・髪型

・話の内容に応じた服装や髪型で　軽い服装や髪型で説得力がなくならないように

〇ジェスチャー　アクション

・多少オーバーじゃないかと思われるくらいの方が食いつきます。

〇人の興味を引きつける写真やカードなどの資料

・生徒が「何だろう？」と興味を持ちます。

≪中学生は思ったより、「子供」≫

〇難しい言葉はわからない生徒がたくさんいます。かみ砕いて話してください。

〇最初はむっつりしていて、反応がないかもしれませんが、ジョークやだじゃれは好きです。
得意な人は、へこまず、場違いじゃない程度に試してみてください。

≪考えさせる工夫を≫

〇黙って聞かせる一方でなく考えさせる工夫を
例えば、クイズを取り入れるとか、選択肢を上げて案が得させるとか、単調にならないような
工夫を！

〇答えた生徒には褒めてやることをお忘れなく。

≪話の内容は？≫

〇特に規定や条件はありません。体験談は説得力があります。

〇困難を乗り越えた苦労話は体験けっこうです。が、「こんな失敗をした！」それでも、
だからこそ、次の成功につながる・・・みたいな話もあったらお願いします。

〇自分に自信のない生徒がたくさんいます。なんとかそのような生徒がやる気を出すような
声かけをお願いします。

夢をつかめ！「15歳の選択」事前アンケート　集計結果

富山市立呉羽中学校　3年生　　2010．9．8
（　男子95名、女子97名　計192名　）

1　将来の職業について考えたことがありますか。	1　ある		2　ない	
	166		26	
	86.5%		13.5%	
2　中学校卒業後の進路は、もう決めていますか。	1　はい		2　いいえ	
	124		68	
	64.6%		35.4%	
3　「夢」をもつことは必要だと思いますか。	1	2	3	4
	必要	どちらかといえば必要	あまり必要ではない	必要ない
	120	65	4	3
	62.5%	33.9%	2.1%	1.5%
4　富山大学の学生から、高校や大学生活について話を聞く「夢をつかめ！『15歳の選択』」に興味がありますか。	1	2	3	4
	ある	どちらかといえばある	あまりない	ない
	69	74	35	14
	35.9%	38.6%	18.2%	7.3%

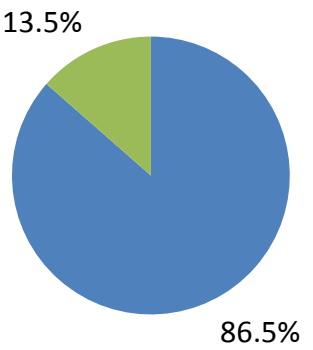
5　大学や大学生に対して、どんなイメージをもっていますか。（自由に書いてください）

大人	まじめ	けっこう遊んでいる
頭がいい	やさしい	夢に向かって勉強している
人生の先輩	自由	専門的な勉強をしている
かっこいい	忙しそう	近づきがたい
あこがれる	勉強が好きな人	落ち着いている
自立している	おしゃれ	チャレンジしている
遠い存在	休みが長い	勉強が大変そう
こわい	知的	立派でちゃんとした人
エリート	一人暮らし	アルバイトができる
兄姉という感じ	しっかりしている	サークルが楽しそう　就活が大変そう

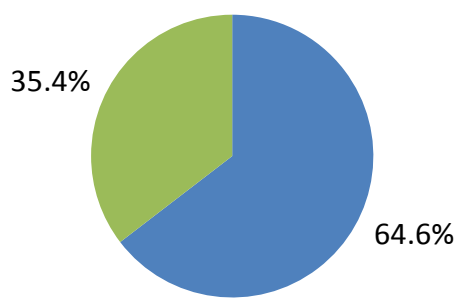
6　進路選択について、一番の悩みは何ですか。（自由に書いてください）

学力、成績	親からのプレッシャー	希望する高校に行けるか
目標がない	高校のことがよくわからない	高校の勉強についていけるか
夢がない	自分が何をしたいのか	やる気が出ない
自分の適性	自分にあった高校がわからない	入試、受験
勉強が進まない	家業を継ぐかどうか	つきたい職業がない
自分が選んだ進路で後悔がないか		

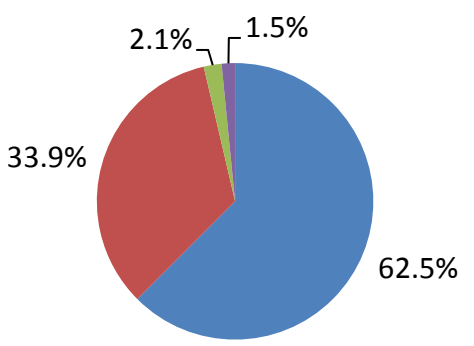
1 将来の職業について考えたことがある



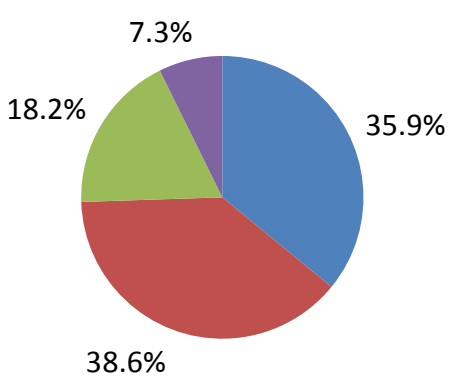
2 中学校卒業後の進路は、もう決めている



3 夢をもつことは必要か



4「15歳の選択」に興味があるか



夢をつかめ！「15歳の選択」事後アンケート　集計結果

富山市立呉羽中学校　3年生　　2010. 9. 14
（　男子93名、女子98名　計191名　）

		1	2	3	4
1	「15歳の選択」に参加したことは、将来の職業を考えるための参考になりましたか。	参考になった	どちらかといえばなった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった
		113	63	11	4
		59.2%	33.0%	5.7%	2.1%
2	「15歳の選択」に参加したことは、あなたの進路選択の参考になりましたか。	参考になった	どちらかといえばなった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった
		115	60	12	4
		60.2%	31.4%	6.3%	2.1%
3	「夢」をもつことは必要だと思いますか。	必要	どちらかといえば必要	あまり必要ではない	必要ない
		146	43	2	0
		76.5%	22.5%	1.0%	0.0%
4	今日の活動の中で、一番良かったと思うのはどれですか。1つだけ選んでください。また、その理由も書いてください。	パネルディスカッション	夢トーク	ランチタイム	座談会
		45	33	8	105
		23.6%	17.3%	4.2%	54.9%

（理由）
「パネルディスカッション」…… 部活動や勉強について詳しくわかったから。参考になる話が聞けたから。
何人もの人からいろいろな意見が聞けたから。
同じ部活をしている人がいたから。頑張ろうという気持ちになったから。
「夢トーク」…… 進路選択に大きな影響を与えられたから。面白い話が聞けたから。
具体的な話だったから。少人数でいろいろな話が聞けたから。
「ランチタイム」…… 一対一で大学生と話ができたから。一番よく会話ができたから。
「座談会」…… 気軽に話ができて、いろいろ役に立つアドバイスをしてもらったから。楽しかったから。
「夢トーク」のときに面白いなと思った学生さんと、もう一度話すことができたから。
自由選択だったから。ゲームが盛り上がったから楽しかった。

5　質問できなかったこと、まだ質問したいことなどあれば、自由に書いてください。

・受験勉強の方法　・サークルのこと　・（越宗さんに）今は絵をかいているか
・大学というところのよさ　・大学に行って良かったこと　・大学生のよい面と悪い面
・どんな勉強のやり方をしていたか　・高校受験の体験　・海外でできる仕事
・高校での部活と勉強の両立方法

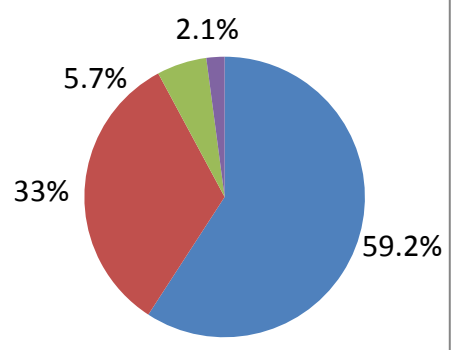
6　実際に話をして、大学や大学生に対するイメージが変わりましたか。
（変わったとすれば、どのように変わったか自由に書いてください）

・自由すぎる　・真面目そうなのかと思ったが、明るく楽しそうだった
・勉強したい人だけが行くところだと思っていたが、仲間との交流などもあり楽しそうだと思った
・もっと真面目な人ばかりだと思っていたがそうでもなかった　・時間に余裕がある
・大きな夢をもっている　・苦労していることがわかった　・4か月も休みがあり自由
・勉強ばかりでないんだとわかった　・夢や目的があって大学に行ったことがわかった
・様々な事を様々な観点から考えていて、人生の先輩だと思った　・自由で楽しい
・意外とふつうの人だった　・近寄りがたいと思っていたが、気さくな感じだった

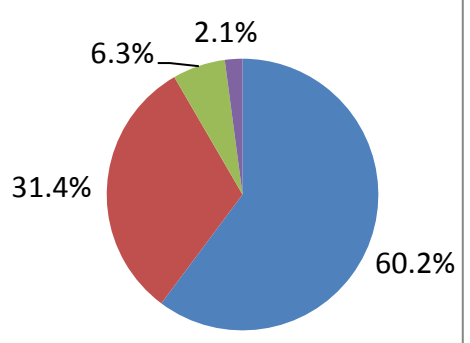
7　最後に、「15歳の選択」全体を振り返って、意見や感想を書いてください。リーダーとして、事前の打ち合わせなどに参加した人は、それも含めてお願いします。（来年に向けて参考にしたいと思います）

別紙参照

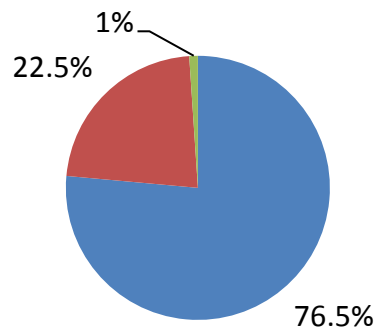
1 将来の職業を考える参考になった



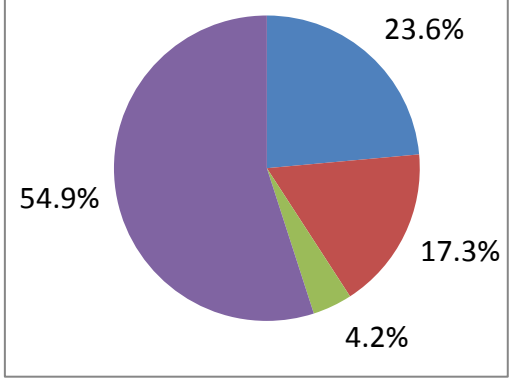
2 進路選択の参考になった



3 夢をもつことは必要か



4 一番よかった活動



夢をつかめ！「15歳の選択」事前アンケート　集計結果

H23.7.12実施

1 将来の職業を決めるとき、大切なのは次のどれだと思いますか（3つまで）

	人数	
ア. 収入が高い	45	7.2%
イ. 収入が安定している	136	21.9%
ウ. 尊敬されたり高く評価される	25	4.0%
エ. 社会や人の役に立つ	121	19.5%
オ. 自分の能力や適性が生かせる	153	24.6%
カ. 自分の興味ややりたいことに合っている	139	22.3%
キ. 親や周囲の人の希望にそっている	3	0.5%

2 中学校卒業後の進路について決めていますか

	人数	
ア. 進学	190	92%
イ. 専門学校	2	1%
ウ. 就職	1	0%
エ. まだ決まらない	12	6%
オ. 考えていない	2	1%

3 『13歳の学び』や『14歳の挑戦』で得られたもの（学んだこと）は何ですか

・仕事の大切さ、厳しさ、辛さ
・礼儀やマナー（挨拶や言葉遣い、時間厳守など）、あるいはその大切さ
・協調性やコミュニケーションの大切さ
・達成感、充実感、やりがい
・働くということの責任の大きさ
・その職業ごとに大切な役割があり、どんな仕事でも社会や人のためになっているということ
・親や周囲の人への感謝の心
・その仕事のやり方、内容などの知識
・いろいろな職業について考える機会になった
・自分の能力や適性について考えた、知った
・自分の将来について考えるきっかけとなった
・命の大切さ
・働くことで、自分の力を伸ばせるということ
・お金を稼ぐことの大変さ
・最後まで粘り強くやり遂げることの大切さ
・笑顔で接することの大切さ
・自ら仕事を見つけに行く積極性

4 『15歳の選択』に期待すること（聞きたい話、など）

①進路に関すること

・どうやって進路を決めたのか（高校、大学など）
・卒業後の進路はもう決まっているか、どう考えているか
・なぜ大学進学を選んだのか
・保育士になるにはどうすればよいか
・大卒の学歴があると、高卒とどう違うのか
・夢は何ですか。夢をかなえるためにどんなことをしているか
・受験の時、迷うことはなかったか？悩んだ時はどうしたか
・職業はどのようにして選ぶものか？
・いろいろな大学の情報はどうやって得たか
・受験の時の失敗談
・受験の時、やってみてよかったこと、心がけなど
・大卒後、どのような仕事があるのか知りたい
・就職活動は厳しいと聞いているが、本当なのか知りたい
・どのくらい勉強すればよいのか（高校受験の時と大学受験の時どのくらい勉強したか）
・受験期のストレス解消法
・中3の時に夢はあったか、中3の時に大学進学まで考えて高校を選んだか

②大学に関すること

・中学・高校・大学と、どこが違うか？一番楽しいのは？
・大学に行ってよかったこと
・心理学に興味があるのだが、富大で学べるか？
・大学はどのような場所か？何のために行くのか
・大学ってどのくらいお金がかかるのか
・富山大学にはどのような学科があり、どのようなことを学ぶのか
・富大で建築を学ぶことはできるか、富山でほかに建築を学べるところはあるか
・今の生活は楽しいか、後悔していることはないか
・大学の勉強は大変か、宿題とか提出物は多いか

③その他

・少人数で、質問しやすい雰囲気で話を聞きたい
・将来のことを考えたい。やりたいことが見つかるような場になるといい

5 進路に関する悩み

・高校に行けるかどうか
・大学は行ったほうがよいのか
・自分の適性がわからない
・行きたい高校がない
・どうやって高校を選べばいいかわからない
・新しい環境になじめるか心配
・勉強をしなきゃと思うが、集中力が続かない、やる気が出ない
・部活で進めばよいか、勉強で進めばよいか迷っている
・学校のテストで点が取れても、入試で点が取れるか不安
・将来の夢もないし、自分が何をしたいのかもわからない
・高校から専門的な事を勉強した方がよいか、とりあえず普通科か迷っている
・富山から出た方がよいか、富山で進学したほうがいいか
・なりたい職業に就けるか不安

6

大学や大学生のイメージ

・頭がよい、天才
・大人、何でも分かっている
・自由（時間や服装や研究など）、楽しそう
・勉強が大変そう
・勉強をたくさんしてそう
・サークルが楽しそう
・忙しそう
・まじめ、一生懸命
・やるときはやって遊ぶ時は遊ぶ、けじめがある
・しっかりしている
・ちょっと怖い
・何事にもあきらめない、努力してきた人たち
・社会に貢献する人
・資格をとれる場所、将来の夢を叶えるための場所
・自分のしたいことを専門的に学べる場所
・将来なりたいものに向かって頑張っている
・自分の意思をしっかりともっている

Ⅴ. 予算措置最終年度報告会

平成 23 年度「富大流人生設計支援プログラム」シンポジウム

平成 20 年度文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援ＧＰ）」選定

「富大流人生設計支援プログラム」－『14 歳の挑戦』と連携する長期循環型インターシップモデル－

シンポジウム　日程表

会　　場：富山大学学生会館ホール（富山県富山市五福３１９０）
総合司会：富山大学経済学部 4 年　松井 久和

	午 前 の 部
9:30	受付開始
10:00	**開会挨拶** 富山大学学長　　遠藤俊郎
10:15	**第 1 部　プログラム成果報告** (1) プログラムの総括 富山大学キャリアサポートセンター 特命准教授　荒井明 (2) 長期循環型インターンシップ 参加学生・生徒からの報告 ［平成 21 年度］ 受入企業：株式会社オレンジマート 山崎雄亮（富山大学経済学部卒業生） ［平成 22 年度］ 受入企業：ANA クラウンプラザホテル 滝谷美紗子（富山大学経済学部 4 年） 百山功子（富山市立呉羽中学校 3 年） 鈴木志穂（富山市立呉羽中学校 3 年） ［平成 23 年度］ 受入企業：株式会社北日本新聞社 丸山知也（富山大学経済学部 3 年） 松井公平（富山市立呉羽中学校 2 年） 篠田遼太郎(富山市立呉羽中学校 2 年）
11:45	休憩・昼食（75 分）

	午 後 の 部
12:50	第 2 部開会案内
13:00	**第 2 部　新たな出発点を求めて（講演）** ■講演題「14 歳の挑戦」から希望学へ 東京大学社会科学研究所 教授　玄田有史
14:00	■キャリア教育が子供たちを変える～起業家教育からビジネス実践へ～ 北海道標津町立標津中学校 教諭　飯田雄士
14:30	休憩（20 分）
14:50	**第 3 部　パネルディスカッション** コーディネーター 富大流人生設計支援室長　小助川貞次 コメンテーター 東京大学社会科学研究所 教授　玄田有史 パネリスト ［富山大学　学生］ プログラム参加学生 金盛愛（富山大学経済学部 4 年） 大澤亮（富山大学医学部 6 年） ［中学校］ 飯田雄士（北海道標津町立標津中学校教諭） 矢崎千栄美（射水市立大門中学校教諭） ［高　校］ 長田治（富山県立富山いずみ高等学校教諭）
15:50	**開会挨拶** 富山大学副学長 キャリアサポートセンター長　西川友之
16:00	終了

「富大流人生設計支援プログラム」シンポジウム
日時　2011 年 11 月 26 日（土）10:00～16:00
場所　富山大学学生会館ホール

第 1 部　プログラムの成果報告

（松井）　大変長らくお待たせしました。これより、「富大流人生設計支援プログラム～『14 歳の挑戦』と連携する長期循環型インターンシップモデル～」のシンポジウムを開催します。司会を務めさせていただきます経済学部 4 年生の松井久和と申します。本日はお忙しい中ご出席賜りましてありがとうございます。第 1 部ではプログラムの成果報告、13 時からの第 2 部では基調講演、14 時 50 分からの第 3 部では、「新たな出発点を求めて」（パネルディスカッション）を行います。

それでは、第 1 部「プログラムの成果報告」を始めます。開催に当たり、本学学長、遠藤俊郎先生より開会の挨拶がございます。遠藤先生、よろしくお願いします。

開会挨拶
遠藤　俊郎（富山大学学長）

おはようございます。富山大学の遠藤でございます。4 月から学長を務めさせていただいておりますが、キャッチフレーズは「よく遊び、よく遊べ」だけでは困りますので、「よく学び、よく遊べ」としております。

今日は「富大流人生設計支援プログラム」のシンポジウムにお集まりいただき、ありがとうございます。本シンポジウムは皆さんご存じのとおりで、本当に企業の方々にご協力いただきながら、本学と 14 歳の皆さん方とのいいコミュニケーションをつくりながら新しい形を考えていこうということでつくられたプログラムです。

今、日本で一番求められているものは何かというと、やはり人の育成であり、人の力をいかに日本の力に変え、世界に貢献していくかということだと思います。その基、本当に根底になるものは教育だと思っています。幼稚園から少なくとも高等教育に至るまで、さまざまな現場で教員の方々は苦労されています。学生諸君、あるいは小学生・中学生を含め、みんな夢を持ちながら、しかし結構苦労しながらいろいろな人生を送っていらっしゃると思います。ここに「流」となっていますが、やはり人が生き、そして成長していくための流れが本当に求められていると思います。

そういう意味で、この人生設計支援プログラムは副題に「循環型」とありますが、非常

に重要なプログラムであり、富山大学において取り組ませていただき、ご協力いただいたことに感謝申し上げます。最終的にこのプログラムで、諸大学生、中学生、そして企業の方々の間で一番得られたもの、重要だったことは何かといえば、年齢や環境の違う人と人とが、いろいろな思いを抱きながら付き合うことができた、あるいは接点ができたことであろうと思います。今はすぐに見えないことかもしれませんが、このことが、特に 14 歳の中学生にとって将来何か一つの思い出、あるいは心に残るものになってくだされば と思っております。最終的に、立場の違う人間同士が付き合うときに、お互い人として人を好きになり、そして相手を尊敬しながら付き合うことができるような感性を大事にしていけたらと思います。

今日は東京から玄田先生、それから北海道からは飯田先生に来ていただいております。シンポジウム、基調講演、そしてこの活動の報告等を含めて皆さんと振り返りながら、また将来を見ながら貴重な時間を過ごせればうれしいと思っています。ご挨拶に代えます。今日は本当にありがとうございます（拍手)。

（松井）　ありがとうございました。続きまして、キャリアサポートセンター、荒井明先生より「富大流人生設計支援プログラムの総括」をお話し願います。

（1）プログラムの統括

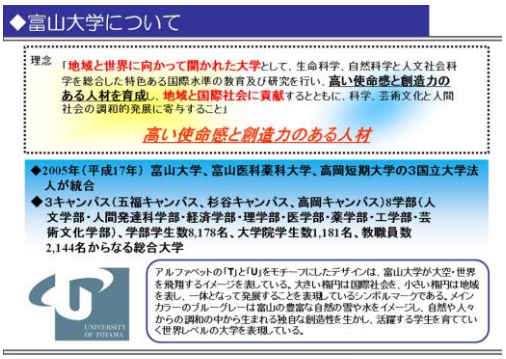
荒井　明（富山大学キャリアサポートセンター　特命准教授）

本日はお忙しい中、私どもの「富大流人生設計支援プログラム」のシンポジウムにお越しいただきまして誠にありがとうございます。先ほど名簿を拝見しましたら、遠方の茨城、神戸、また新潟や岡山からいらっしゃっている方もあり、この場をお借りして御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

このプログラムは平成 20 年度に文部科学省に選定された学生支援 GP です。学生が自ら考えて行動し、そしてさらに内省して一歩前に踏み出すことを目的にしたプログラムとなっております。実は、入り口のパネルで「14 歳の挑戦」や「15 歳の選択」の説明をしたり、皆さま方にお配りした富山弁の一覧も、わざわざお越しいただいた方にお土産としてぜひお持ち帰りいただきたいという、学生ならではのアイデアを実行したものです。

私どものこのプログラムは平成 20 年度に選定されまして、今年度、平成 23 年度が最終年度です。第 1 部としては、この後、統括として実際に参加した学生から 3 名の方に、21 年度、22 年度、23 年度、それぞれ発表していただき、またその際に実際に触れ合った中学生にも感想を述べていただきます。学生がどのような点で成長し、またどんなことを学んできたのかを、報告の中でぜひ皆さま方にも感じていただければと思っています。またこれからのキャリア教育、あるいは会社内での人材教育、人材育成にかかわる何かヒントが一つでも二つでも必ずあると私は思っていますので、ぜひ皆さま方にはヒントをお持ち帰りいただければと思っております。

この「富大流人生設計支援プログラム」は、実は、今の就職支援、そしてその次のステップとしてのキャリア支援、またさらにその先を行く人生設計という、少し長い目で見た形での支援プログラムです。



今、遠藤学長からもご挨拶をちょうだいしましたが、簡単に富山大学についてご紹介いたします。本学は 2005 年に富山大学と富山医科薬科大学、そして高岡短期大学の 3 国立大学が統合して、新生富山大学として生まれ変わりました。今、3 キャンパスがございまして、今日も医学部の学生にも来ていただいていますが、全部で 8 学部。そして学生が約 8200 名、大学院生も約 1200 名が在籍している大学です。

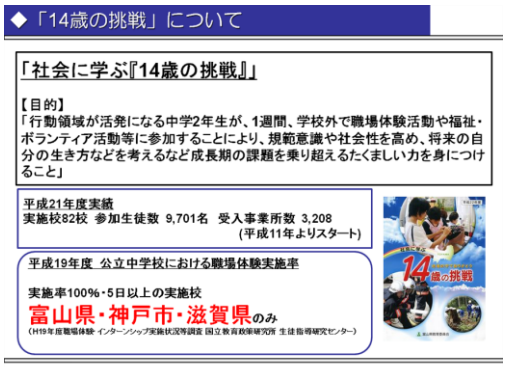
理念として本学が挙げている「地域と世界に向かって開かれた大学として」「高い使命感と創造力のある人材」を育成していくことをミッションとして挙げております。遠藤学長もよくおっしゃっている、「世界的な研究発信をしていく」、そして「将来を担う人材の育成をしていく」という 2 点が、今後本学が目指していくところです。

私どもは実際にこのミッションに沿って「高い使命感と創造力のある人材の育成」、そして「将来を担う人材の育成」というゴールイメージに向かって、このプログラムが何か貢

献できればという位置付けで考えております。いわゆる社会人基礎力でいえば、前に踏み出す力といいますか、学生がもう一歩だけ踏み出すプログラムです。

ここまでお話ししてもなかなか伝わりにくいと思いますし、今日初めてこのプログラムに触れる方もいらっしゃると思います。実は平成 21 年に私どものプログラムを企業や中学校に説明する際に作った DVD がありますので、ご覧いただき、まずは概要だけご理解いただきたいと思います。

＊＊＊DVD 上映＊＊＊



若干、プログラムについて補足させていただきます。富山の方にはもう当たり前の言葉になっていますが、富山県では「14 歳の挑戦」という中学 2 年生の就業体験が平成 11 年度から開催されています。これは何がすごいかというと、5 日間やっていることです。ほかの県や東京都は大体 2 日や 3 日の就業体験ですが、富山県は 5 日間、それも全中学生が参加しているプログラムだということです。

先日、かつて富山県教育委員会にいらっしゃった山本先生にお会いして、「14 歳の挑戦」をつくる際の努力やいろいろな苦労話をお伺いしてきました。もともとはいじめ対策のいじめ防止事業で親と子がごみを拾うことをしていたそうです。その際に、山本先生はそういう地域の方たちを見て、もっと地域を活用できるのではないかとひらめき、さらに富山県教育委員会で、こういうことをやりたいとかなり頭を下げながらもスタートしたということです。平成 11 年に始まり、平成 13 年度には中学校全校がプログラムを実施しました。

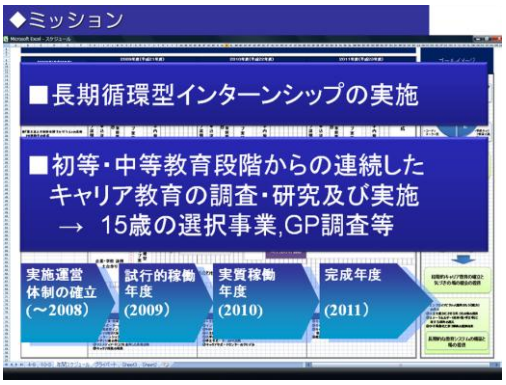
引き受けた事業者の方たちが、自分たちは子どもの役に立ったという感想を持ってくれたそうです。普段は文句ばかり言うような親も「教師はすごく大変なのだな」「先生方はこんなに努力をしているというのが分かった」と、また実際に行った子どもたちは「あのとき一生懸命頑張ったのだから、次も頑張れるのではないか」「何か困ったときは、誰か大人が手を差し伸べて助けてくれるのではないか」といった感想を持ったそうです。

それが継続して、もう 10 年以上続いています。全国を見ても、これは富山県と兵庫県、滋賀県の 3 県にしかないプログラムです。10 年以上続いてきた中で声を聞くと、やはりだんだんマンネリ化してきたり、どうすればいいのか分からない、去年やったから今年もやるという声が出たりしています。そこに大学がコーディネーター役として入ることにより何か新しい取り組みができないかということで始まったのが、私どものプログラムです。

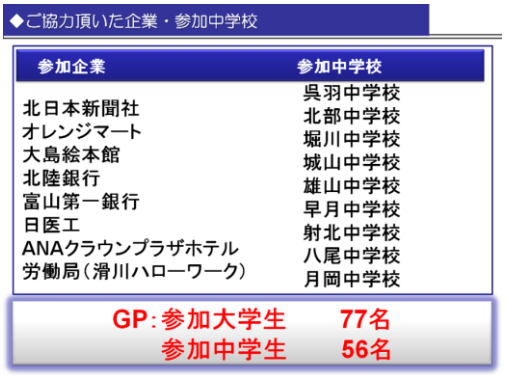
私たちはこれを「学びの循環」と言っています。ある中学校では 1 年、2 年、3 年と取り組み、その後、事前学習、インターンシップ、事後学習をへて、指導ボランティアとして入っていく。そして今度はさらに就活に入っていくという、教育学で言えばコルブの経験学習の形かもしれません。経験して、内省して、概念化して、試行するといったプログラムとお考えいただければと思います。

私が赴任したのが平成 21 年度です。3 年間のプ

ログラムでしたので、まずはゴールをどこに持っていくかをイメージして、単年度ごとにどんなことをしていくかを具体化したのがアクションプランです。私ども富大人生設計支援室には、大きく二つのミッションがあります。一つは先ほど DVD でご覧いただいた長期循環型インターンシップの実施、そしてもう一つは初等・中等教育段階からの連続したキャリア教育の実施ということで、私どもは「15 歳の選択」という新しい事業も並行してさせていただきました。



平成 20 年度に選定され、まずは運営体制を確立し、そして平成 21 年度は試行的稼動年度ということで 4 社でプログラムを実行させていただきましたが、この時は本当にゼロベースでした。この後、初年度の山崎さんという社会人になった方に発表していただきますが、全く何もない状態からどうやってこのプログラムを作っていくかを何度も何度もブレーンストーミングして築き上げたという努力の話もお伺いできると思います。また 2 年目の昨年度は実質稼動年度ということで、協力企業も倍増し、学生も 40 人以上が携わりました。そして本年度は完成年度、最終年度ですので、ある程度形を完成形に近づけてブロック化し、プログラムはいろいろな企業にも利用できるような形にまで、かなり精度の高いものに出来上がったのではないかという感想を持っています。

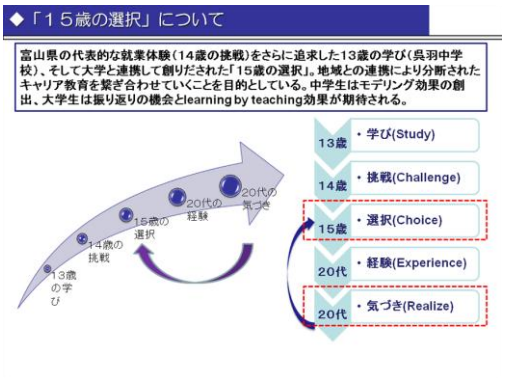


実際にご協力いただいた企業や参加中学校はこのとおりです。参加学生は延べ 77 名、参加中学生は 56 名です。この後ご紹介いたします「15 歳の選択」という事業は、実際に参加大学生も 70 名を超え、参加中学生も 750 名ということで 3 年間やってまいりました。

「15 歳の選択」は何をしているか。呉羽中学校が始めた「13 歳の学び」という授業では、中学 1 年生の時に地域で働いている方々を講師としてお呼びして職業を知ります。そして例えば床屋さんやトリマーなど、職業を体験するということを 13 歳でやります。さらに 14 歳では「14 歳の挑戦」で実際に就業体験をする。「15 歳の選択」は、その次の受験を目の前にした 15 歳の時に何かできないかという問い掛けを本学にちょうだいし、それを初年度に少しずつ並行して、学生ならではのいろいろなアイデアを出し、どんなことが中学生のためになるかということをずっと深掘りしながら作っていったプログラムです。これで一ついえることは、教えることによって学ぶということです。これが本当に学生にとっても一番の学びにつながると思います。「よく学び、よく遊べ」というのは、こういうところにもつながっているのではないかと思われるプログラムです。

これも簡単なものですが、北日本新聞社のニュースで流していただいたものをご覧いただきたいと思います。

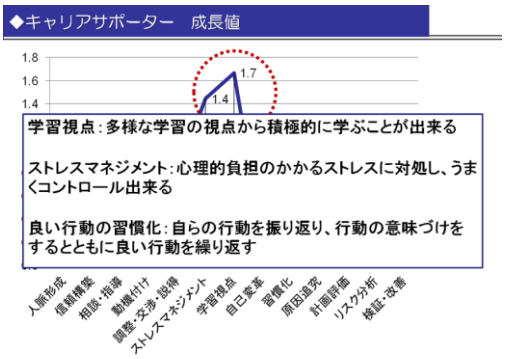
＊＊＊VTR 上映＊＊＊



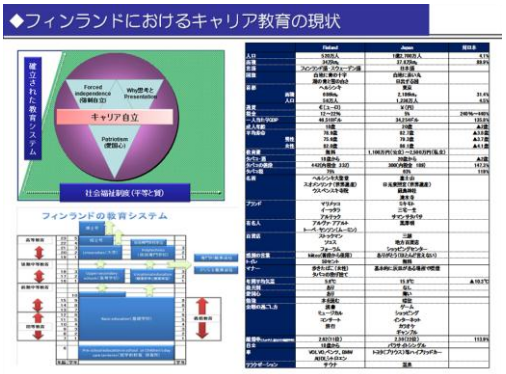
今の映像が、もう１本の柱の「15 歳の選択」というプログラムです。実際に学生たちが自分の失敗経験や挫折経験を中学生に対して話します。どのように壁を乗り越えたかとか、どんなことを一生懸命頑張ってきたかを語る場を設けたのが、この「15 歳の選択」です。

その中にはいろいろな理論や手法、それらを私たちの GP の取り組みも入れていますが、やはり一番は経験しながら体得していくことです。そして学生は失敗経験や挫折経験をこのプログラムのいろいろな場面で体験します。初めてチームでやったり、年上の人や企業の方、中学校の先生たちとお話しする中で、やはり途中でくじけてしまうこともあります。しかし実際には、希望を持って仕事をしていることの多い方は、こういった挫折経験をしているという統計も出ています。経験だけではなく、今の自分、将来の自分に信頼するとか希望を持つなど、多分これからの時代は若者たちにとって「自己信頼」がキーワードになってくると思っています。

日曜日のテレビに「南極大陸」という番組があります。その中で香川照之さんが星野という先生役を演じていますが、その人がある学者に「人のやらないことをやれ。失敗を恐れたらいかん。人は経験を積むために生まれてきたんや」と言われたそうです。とてもいい言葉だと思っています。学生のうちは、やはりたくさん失敗する経験を積ませることが大事かと思います。



実際に携わった学生たちのどういうところが伸びたかというと、大きく三つ見えてきています。一つは学習視点です。リーダーになったり、あるいはスタッフになったりといろいろな立場を経験しますが、その中でさまざま学習の視点から積極的に学ぶことができます。それから横でチームになってやったり、企業の方や校長先生や学校の先生と会うことによって今までにないストレスを感じ、それをマネジメントできる力が伸びました。そして一番見えてきたことは、良い行動が習慣化してきたということです。ある新聞社に行った学生が言っていましたが、たまたま人事の方に報告に行った時に、今朝の新聞を読んだかとズバッと軽く質問されたのですが、実は読んでいなかったと。その後は毎朝ずっと継続して朝刊を読んでいるそうです。聞かれようが聞かれまいが関係ないのです。そういう習慣がついたということが一つ見えてきたと思っています。



GP 調査をするに当たり、OECD の PISA では大体上位 3 位に入っているフィンランドに行かせていただきました。ここは本当に世界有数の教育国ですが、実際にこの国がすごいのは、本当に自立を目指す体制ができているというところです。基本的に教育はすべて無料です。大学を卒業して社会人になってから、また学び直す学生も多くいます。ここでは試験もありませんし、偏差値もありませ

ん。比べることのない国です。18 歳になるともう大人なので、たばこもお酒も大丈夫です。基本的には家を出ます。ルームシェアをして暮らし始めますが、そうした生活のバックアップは国がしてくれます。そこでまず家を出て自立させている国なのです。例えば親が建てた家も子どもには譲らず、自分たちで建てろと言います。そういう国ですが、実は留年するのが当たり前なのです。自分が小学校あるいは中学校レベルで到達していないと思ったら、もう 1 回その学年をやる。そういった自己決定権を持たせています。初年度に行かせていただいた中で得たエッセンスを、私たちのプログラムに少しずつ入れて試しました。

オッリペッカ・ヘイノネンという若い教育大臣が、不況の時に就任しました。彼は、お金がない厳しいときこそ子どもたちへの教育に投資するということを一番言っていました。だからフィンランドは今の体制ができたのでしょう。やはり教えて育てる大切さを国として理解していると思います。

◆「ナナメの関係」

学校は地域の人材を活用して「ナナメの関係」をつくろう！

社会全体で子どもを育て守るためには、親でも教師でもない第三者と子どもの新しい関係＝「ナナメの関係」をつくることが大切である。地域社会と協働し学校内外で子供が多くの大人と接する機会を増やすことが重要である。

平成19年2月 文部科学省 初等中等教育局児童生徒課生徒指導室「子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議より」

ウィーク・タイズ(Weak Ties) マーク・グラノヴェター

自分と違う環境にある人とのたまに会う程度のゆるいつながりのこと

「希望のつくり方」より引用

縦の関係は親と子、横の関係は友達ということは結構あります。実はこの図の「ナナメの関係」、つまり年齢の違う人たちと触れ合う機会の場を私どものプログラムは提供しているのです。これは、午後の玄田先生もある本の中でおっしゃっていましたが、ウィーク・タイズ（緩やかな絆）です。いわゆる親しい友達でも親でも子でもなく、ちょっとしたかかわりのある人たちとのつながりを増やしていくことがとても大事だということです。文科省も平成 19 年度に、この「ナナメの関係」という、地域社会と協力して学校内外で多くの大人と接する機会を増やすことが重要だと言っています。マーク・グラノヴェッターというアメリカの社会学者がこのウィーク・タイズを述べたことも、もしかすると午後のお話の中で出てくるかもしれません。

私が一番好きな玄田先生の言葉が『14 歳からの仕事道』という本に出てきます。「いちばんたいせつなのはちゃんといいかげんに生きること」、これを大人が教えてあげることだとおっしゃっています。とても学生視点で、非常に優しい言葉で話し掛けられている本ですので、ご興味がある方はぜひこの『14 歳からの仕事道』をお読みいただきたいと思います。

最後に、実際に去年富山大学と金沢大学で取ったアンケートで、いろいろな項目が百何十項目とありましたが、その結果をご紹介します。

◆承認欲求の重要性

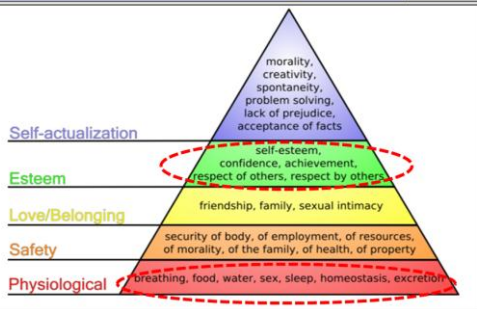
欲求で高いものは。

		1番		2番		3番	
富山大学	男性	自己実現	26.5%	承認欲求	21.9%	睡眠欲	27.0%
金沢大学	男性	自己実現	34.6%	食欲	21.1%	金銭欲	26.9%
富山大学	女性	自己実現	23.5%	承認欲求	24.8%	物欲	24.6%
金沢大学	女性	自己実現	33.3%	食欲	24.4%	物欲	22.2%
全体		自己実現	27.4%	承認欲求	20.1%	睡眠欲	20.5%
	男性	自己実現	29.6%	承認欲求	17.4%	金銭欲	26.9%
	女性	自己実現	25.8%	承認欲求	21.6%	物欲	24.0%
富山大学		自己実現	24.5%	承認欲求	20.9%	睡眠欲	27.7%
金沢大学		自己実現	34.0%	食欲	23.0%	金銭欲	20.6%

理想的な仕事。

		1番		2番	
富山大学	男性	失業の心配がない	28.8%	仲間と楽しく働ける	24.4%
金沢大学	男性	仲間と楽しく働ける	19.2%	高い収入が得られる	25.5%
富山大学	女性	仲間と楽しく働ける	42.7%	失業の心配がない	19.9%
金沢大学	女性	失業の心配がない	24.4%	世の中のためになる	17.8%
全体		仲間と楽しく働ける	29.1%	失業の心配がない	15.7%
	男性	失業の心配がない	23.5%	仲間と楽しく働ける	25.6%
	女性	仲間と楽しく働ける	37.2%	失業の心配がない	18.8%
富山大学		仲間と楽しく働ける	33.2%	失業の心配がない	18.4%
金沢大学		失業の心配がない	19.6%	仲間と楽しく働ける	22.9%

◆承認欲求の重要性



まず、今どんなことを学生が望んでいるかというと、これは言葉が一人歩きしていますが、予想どおり「自己実現」という言葉がやはり 1 位に出ました。2 番目は「承認要求」で、

認めてほしい、私がここに存在することを認めてほしいということが出てきていました。それからマズローで言うところの、一番根本となる生理的欲求、食べたい、寝たいといった結果が出ていました。

挫折経験や失敗経験といった中で小さな成功体験を積ませることが、実際の自己信頼、つまり自分を信じる力、そして他者である周りの人たちを信じる力に恐らくつながるのではないかと思います。いざ何かあったときに誰かが助けてくれる。そういう大人たちや周りの人たちがいるということを学んでもらえたらということで、このプログラムを始めました。

今現在キャリア教育も言葉だけが先走っており、手取り足取り的な教育になっています。演技力養成講座のようにその場限りの力を養うような形に流れており、これをまた元に戻さなければいけないのではないかと思っています。一番大事なのは、やはり周りの大人が今の若者たちを認めてあげることです。大学や地域がそういった経験ができる場を提供することが、これから何年間かは非常に大事になるのではないでしょうか。

それではこの後、初年度、2 年目、最終年度に実際にプログラムに携わった学生から発表していただきます。実際に学生がどんなことを学び、どんなところが成長したかを、ぜひ発表の中で感じていただければと思います。それでは私の統括はこれで終了とさせていただきます（拍手）。

（松井）　ありがとうございました。

（2）長期循環型インターンシップ参加学生・生徒からの報告

（松井）　続きまして、プログラムに参加された学生の皆さまより、プログラムのご報告がございます。本日は 7 名の参加者にお越しいただきました。簡単に紹介させていただきます。

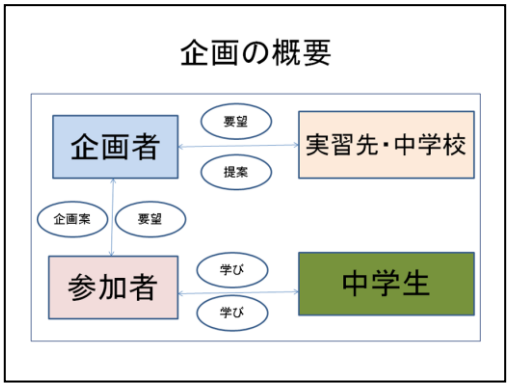
平成 21 年度、株式会社オレンジマートで活動された山崎雄亮様。昨年度、本学経済学部をご卒業。現在は、富山交易株式会社に勤務されております。

続きまして、平成22年度からはANAクラウンプラザホテルで活動された滝谷美紗子さん、百山功子さん、鈴木志穂さん。滝谷さんは現在、経済学部 4 年生。百山さん、鈴木さんは現在、呉羽中学 3 年生です。

続きまして、平成 23 年度からは株式会社北日本新聞社で活動された丸山知也さん、松井公平君、篠田遼太郎君。丸山さんは現在、経済学部 3 年生。松井君、篠田君は現在、呉羽中学 2 年生です。

それでは平成 21 年度、山崎様、よろしくお願いします。

平成 21 年度
受入企業：株式会社オレンジマート
山崎　雄亮（富山大学経済学部卒業生）



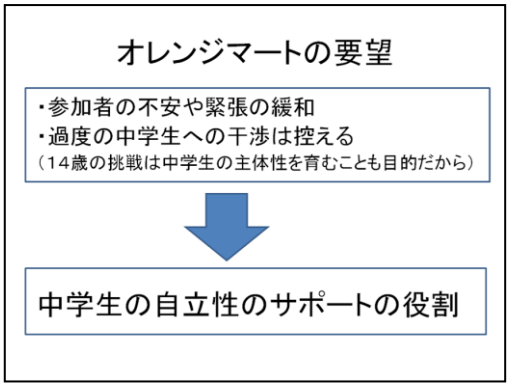
初代学生サポーターの山崎と申します。本日はよろしくお願いいたします。

発表に当たりまして、まず私がどのように企画にかかわったのかについてご説明いたします。オレンジマート様での GP 活動は、平成 21 年度から 3 回行われております。私はそのうち最初の 2 回に参加いたしました。初年度は企画を立てる企画者、そして実際に企画を実行する参加者としてかかわりました。2 年目は昨年の経験を基に後輩に指導、アドバイスをいたしました。本日はその過程で行われたこと、そしてこのプログラムで大学生、中学生がどのように成長したかについてお話しいたします。

第 1 回のミーティングの様子をご覧いただいていますが、企画の立案は平成 21 年 4 月から始まりました。企画というものが、中学生の「14 歳の挑戦」を大学生がサポートすることで大学生も中学生も共に成長するものであると説明されました。しかし、具体的に何をするかは全く決まっていない、白紙の状態で考えなければなりませんでした。ただ、この企画を始めるに当たり、先ほどお話しされた荒井先生から「お客さまは誰なのか、そして何を望んでいらっしゃるのかを考えることが大切だ」というアド

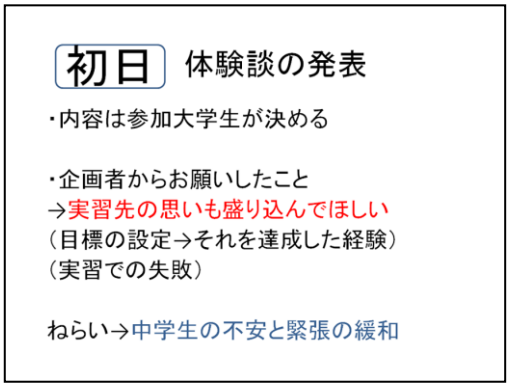
バイスを受けました。私たちは企画を実行する際、この言葉を常に念頭に置いて実行いたしました。

企画の立案が始まったのは、実際には 7 月からです。私のほかに越宗さん（コッシー）という女性、彼女は芸術文化学部の学生です。また、松井さん（まっちゃん）という方も岐阜県出身の学生です。オレンジマート様のほかにも企業はありましたので、全体で 10 名です。医学部の学生も入って、高岡・杉谷・五福の 3 キャンパスから集まった学生が主体となって行われました。

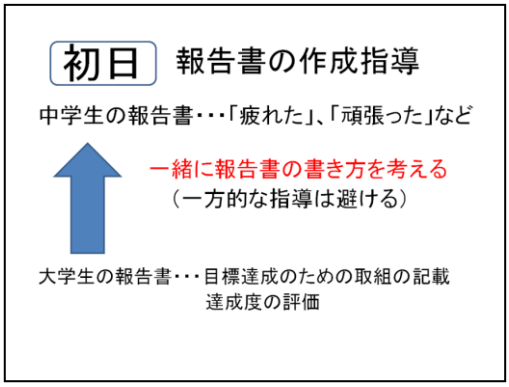


企画は一からのスタートですが、実際の立案は 7 月からでしたので 2 カ月しかありません。その中で、オレンジマート様が何を望んでおられるのかを聞かなければなりませんでした。担当者の方に伺ったところ、参加者の不安や緊張を緩和してほしい、ただし中学生の自主性をはぐくむために過度の干渉は控えてほしいということでした。そこで私たちは、中学生の「主体性」、「自立性」のサポートをキーワードに企画を立てました。

具体的には、初日に体験談の発表や報告書の作成指導、次に中間指導として昼食時の懇談、そして最終日には意見交換会を行うこととしました。このようなことが担当者様の要望でしたので、その後の話し合いでは、これをどのように具体化するかということについて話し合いました。何回か話し合いを重ねた後、企画案は完成し、実習先に提案に伺いました。ここでは、その内容とねらいを話し合いの中身も含めて簡単にご説明いたします。

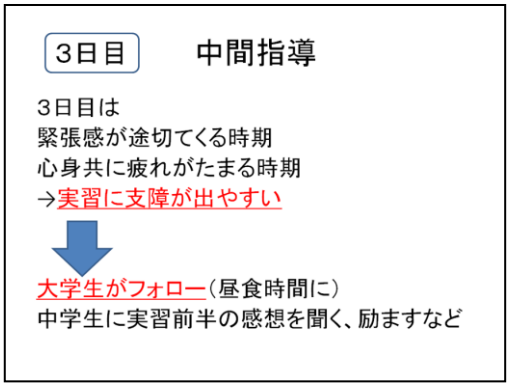


初日は体験談の発表です。体験談の発表ですから参加した人が体験談を話すわけですが、その中でも企画者からお願いしたことは、企業からの思いも盛り込んでほしいということです。例えばインターンシップでどのような目標を設定し、それをどのように達成したか。インターンシップでの失敗談、インターンシップを通じて変わったことなどを話すことで中学生の不安を少しでも取り除くとともに、実習先でどのように成長したかを大学生が話すことで、中学生にも実習で成長できることを実感してもらいたいと思いました。

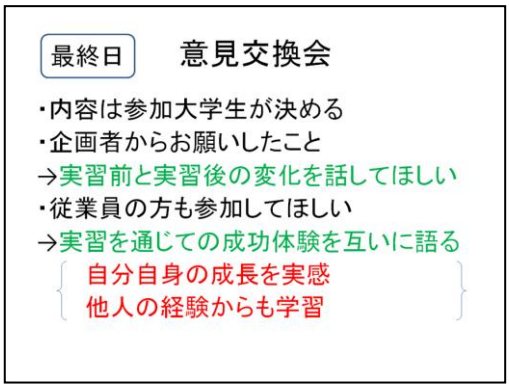


初日には報告書の作成指導も行います。中学生の「14 歳の挑戦」の報告書を見ていますと、中には「疲れた」とか「頑張った」という 1 文で終わっているものもありました。私たちは、話し合いの際に詳細な記述が求められる大学生の報告書を参考にすることで、中学生にもよりよい報告書が書けるのではないかと考えました。話し合いでは大学生が一方的にチェックしたり

指導したりするという形は避けて、共に報告書について考えるという形態を取る方が適切ではないかという結論に至りました。



3 日目には中間指導を行います。3 日目は疲れがたまりやすく実習に支障が出やすい時期なので、大学生が中学生の感想を聞いたり励ましたりして、昼食時間などにフォローすることを考えました。



最終日には意見交換会を行いました。中学生と大学生が自らの実習の経験を踏まえて意見を交換します。このねらいは、実習を通じての経験談をお互いに語ることで自分の成長を実感するとともに、他人の経験からも成長できるというものです。実習先からは意見交換会に参加してほしいという要望があっただけで、具体的な中身についての要望は一切伺いませんでした。そこで私たちは形態について一から考えなければなりませんでした。

私たちは次のように考えました。例えば、形態は座談会形式ならば参加しやすいのではないか。中学生が積極的に発言することは難しいだろうから、大学生が最初に議論の口火を切る必要があるのではないか。しかし、主体は中学生であることを忘れてはいけない。それから従業員の方にも一歩引いたコメンテーターのような立場として参加していただくことで、中学生も大学生も成長をより実感できるのではないか。意見交換会で話す内容についても参加者に決めてもらうことにしましたが、意見交換会が自分自身の成長を実感する場であることから、実習前に持っていたイメージと実習後とのギャップや、事前に立てた目標が達成できたかどうか、あるいは従業員の方から見て中学生はどのように成長したかということをぜひ盛り込んでいただきたいとお願いしました。

このように私たちは、中学生が一番のお客さまであること、そして実習先が実習を通じて中学生に成長を実感することを望んでいらっしゃるということを念頭に置いて、幾つかの仮説を立てた上で企画を考えました。そして、企画案を実習先に提案したところ、了承してくださいました。時間的な余裕のない中で立てた企画を了承いただいた時は、とてもうれしかったことを今でも覚えています。

実際にどのように企画案が実行されたか、ここではモア店という店舗で行われた企画を二つ紹介いたします。

初日　店舗見学

初日は体験談の発表です。大学生が体験談を話すのですが、その内容としては自己紹介、インターンシップ先を決めた理由、どんな仕事をしたか、大変だったこと、楽しかったこと、インターンシップを通じての変化というものでした。企画段階で体験談に盛り込んでほしいとされていた目標の設定とその達成度について、大変だった経験と一緒に語ることで、中学生もより親しみを持って聞いてくれるのではないかと考えてこのような内容にしました。この中で大学生は、インターンシップがお盆の時期でとても大変だったこと、お惣菜のパック詰めの単純な作業が日々やっていくうちにスピードが上がっていくことで充実感を得られたこと、実習を通じて挨拶のトレーニングをすることで挨拶が積極的にできるようになったことなどを話していました。これは体験談の発表の様子です。初日には店舗見学も行いました。非常に生き生きとした様子です。

意見交換会

最終日の意見交換会の内容としては、「14 歳の挑戦」で行ったこと、楽しかったこと、大変だったこと、変わったこと、成長できたことなどについてでした。これが意見交換会の様子です。

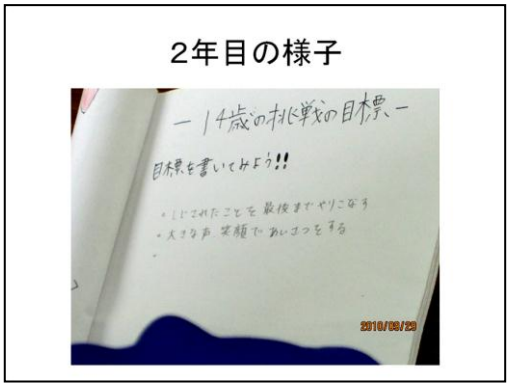
それではここで、初年度の企画を私なりに評価してみたいと思います。まず良かった点は、実習先の要望に対して、なぜそのような要望をされたかを考えた上で企画を立てられたことです。例えば体験談の内容などがその成果かと思います。次に、大学生も中学生も共に成長するというプログラムの趣旨に沿った企画ができたことが収穫点だったと思います。それは報告書の作成指導を行い、報告書を一緒に考え、意見交換会で共に成長するといった点に表れていると思います。そしてお客さまが実習先、中学生、大学生の三者であることを理解し、それぞれの要望に沿った企画を立てることができたのも収穫点かと思います。

中学生の様子

ほかの参加者からは「初日の体験談発表では中学生の緊張が緩和されている様子が読み取れた」「大学生も中学生も上から目線にならずに、共に率直に自分の体験を語り合っていた」「大学生としては、自分のインターンシップの経験を振り返ることができた」という肯定的な評価がありました。これは意見交換会の中学生の様子ですが、とても生き生きした表情だと思います。

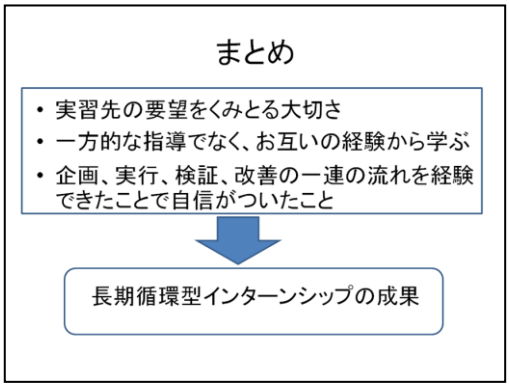
ただし、改善すべき点もありました。例えば「大学生がもっと積極的にかかわることができないか」「意見を言うだけではなく、実際に大学生が中学生とかかわって活動はできないものか」「スーパーマーケットであるのだから、スーパーマーケットならではの企画はできないか」という感想がありました。

次に、助言者として参加した 2 年目の様子についてです。2 年目はあくまで助言者としての参加ですので、積極的には関与しておりません。しかし、昨年度の良かった点や改善すべき点を後輩に伝えるという役割を果たしました。その中で私が特に伝えたかった点は、昨年度の内容で残すものは残し、変えるものは変えてほしい、前年と全く同じ内容は避けてほしいということです。体験談の発表や意見の発表にとどまらず、大学生と中学生が直接触れ合える企画もできれば作ってほしいと言いました。



後輩は私のそのような思いもくんで企画を立案してくれました。例えば、大学生がインターンシップで挨拶のトレーニングを行った経験を生かして、中学生にお手本を見せて指導をする企画などにその成果の一端が表れていると思います。また昨年度は目標を口で言うだけでしたが、2 年目は紙に残すことで中学生も目標をより実感できるようになったのではないでしょうか。これが 2 年目の成果だろうと思います。

オレンジマート様の企画には、一見して中学生が喜びそうな企画、例えばクイズやゲームといったものはありません。そういうものが効果的な場合もあるでしょうが、今回オレンジマート様が中学生に仕事の厳しさを知ってほしい、そして厳しい中にも楽しさがあって、その両方を経験することで自分が成長できたという体験をしてほしいということを望んでいると、伺った話から私たちは考えました。企画の立案では、それを実現するためのプログラムを企画したつもりです。同時に中学生も大学生も共に成長するために、また中学生の主体性をはぐくむために、大学生から中学生への一方的な押しつけや指導は避け、大学生が手本を見せ、自分の経験を中学生と一緒に考えることを大切にして企画しました。また従業員の方にも参加していただくことで、中学生も大学生も自分自身の成長をより実感することができたのではないでしょうか。



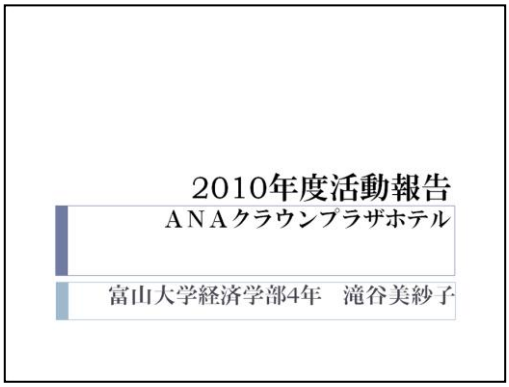
そして何より、企画を白紙の状態から立案することで実習先が要望された理由を考えて企画を立て、必要に応じてほかの店舗や参加者にお願いし、そして企画を行い、その改善点を来年に生かすという一連の流れを経験できたことで、自分たちや企画のチームのメンバーにやれたという自信がついたように思います。また店舗や中学校、ほかの参加者の方にはいろいろとご協力いただき、その大切さや感謝の心も学ぶことができたのではないかと思います。

私たちは白紙の状態から企画を立案することに苦労しましたが、後輩の皆さんは昨年より進歩した企画を立案することに苦労されているかと思います。3 年目となると、1 年目と

は実習先の要望が変わってくる点があるかもしれません。ですから、後輩の皆さんには常に最新の要望を把握するようにしていただきたいと思っています。
　以上で私の発表を終わります。ありがとうございました（拍手）。

（松井）　ありがとうございました。
　続きまして、平成 22 年度からは滝谷さんに報告をお願いします。

平成 22 年度
受入企業：ANA クラウンプラザホテル富山
滝谷　美紗子（富山大学経済学部 4 年）



2010 年度活動報告としまして、ANA クラウンプラザホテル富山様での活動を紹介させていただきます。よろしくお願いします。

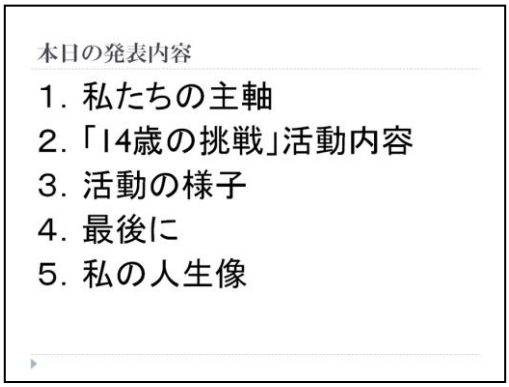
まず皆さん、この写真を見てください。この笑顔はどのように見られるでしょうか。これを見て、作り笑いや愛想笑いと思われる方は多分いないと思いますが、このような本当の心からの笑顔が、私たちの目に見える成果だったように思います。この笑顔がどうやって得られたかという真相は、また後で説明させていただきます。

私たちの GP 活動は 2 年目の活動でした。全 8 社総勢 40 人を超えるプロジェクトで、前年度の先輩方をサポーターに 3 年生が主体となって動きました。さらに企画側として私たち GP サポーターが企画を立案し、それをインターンシップ生に提案するという形で進められました。

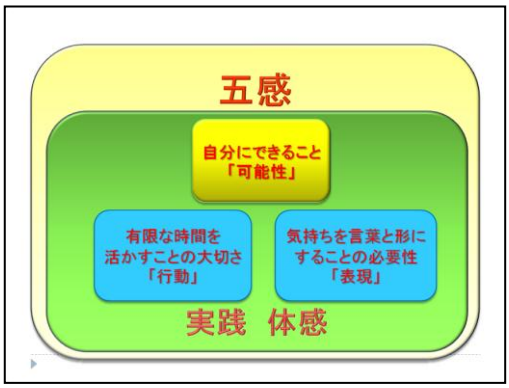
本日の発表内容としまして、一つ目は「私たちの主軸」、二つ目「『14 歳の挑戦』活動内容」、三つ目「活動の様子」、四つ目「最後に」、五つ目「私の人生像」と続けさせていただきたいと思います。

8 社の中で ANA クラウンプラザホテル様での活動は今年度が初めてでした。企業の中でも特にホテル業、サービス業というところに私たちの特徴がありました。私たちのプロジェクトは、今年、私たちの年度が初めてで、ゼロベースで何も分からないところから始まりました。そこでまず私たちが考えた課題は、中学生に何をしてあげられるか、どのようなことを与えてあげられるかということです。まずホテル業とは何かと考え、人対人ということで、本来は目に見えないサービスという価値をどうやって人の目に見えるものにす

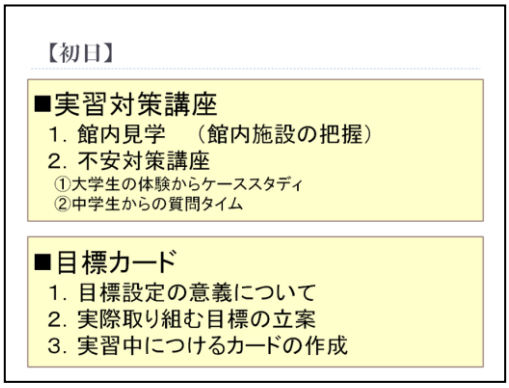
るか、そしてどうやって相手に対して最高のサービスを提供するかというところで何か教えてあげられないかと考えました。



「14 歳の挑戦」は、企業の方にご協力いただいた上で、日常では味わうことのできない状況を肌で感じられるとても貴重な活動です。そのことをまず中学生の皆さんに分かってほしいと私たちは思いました。私が実際に「14 歳の挑戦」を体験した時、実はそういうことを全く考えられずに、疲れた、早くこの 1 週間が終わればいいと思っていて、有意義な活動とならなかったことを残念に思っています。ですから今回の活動では、「14 歳の挑戦」をする子たちにはそういうメッセージを伝えたいと本当に強く思っていました。

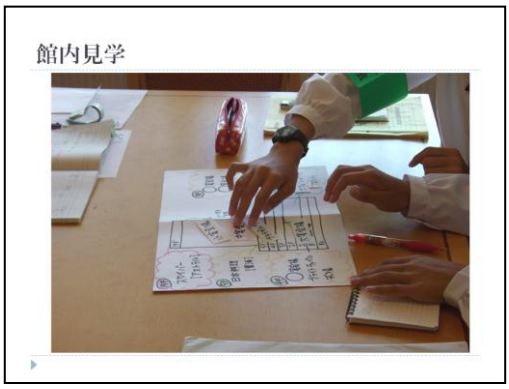


そこで、私たちが進めていく上での主軸はこのように考えました。まず、五感で感じるということが基盤にあります。次に、この活動で職業を実践し、それを体感することで、そのチャンスを有効に使う「行動」の大切さや、そこで感じた気持ちを形にする「表現」の必要性をこの活動に取り入れたいと思いました。そこからさらに、自分にできることとは何かという「可能性」に気付いてほしいというのが、このプロジェクトの企画でした。



活動内容としては、初日は実習対策講座として館内見学と不安対策講座を行いました。次に目標カードの設定をして、まず初日は終わりました。最終日はお礼状カードの作成と、反省会として中学生の成果について、また「実習を終えるにあたり」というところで話をしました。

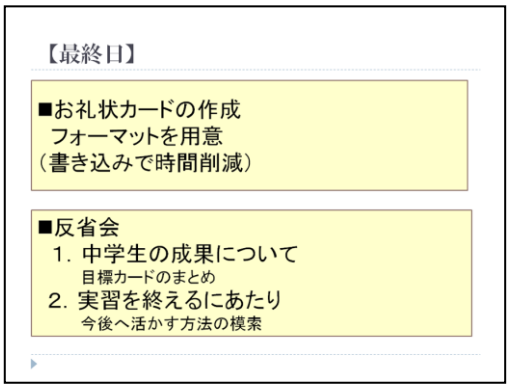
これは館内見学の様子です。スタッフの方に館内を見せていただきました。「14 歳の挑戦」とはいえ 1 週間仕事をさせていただくわけですから、中学生もスタッフ同然です。お客さまにいつどのような質問をされるか分かりませんし、またどこに何があるかをしっかりと覚えておかなければいけません。



ですから、そういうことが活動する上での不安になってはいけないということで、私たちは館内見学をし、さらに覚えていただくためにフォーマットを作成して復習という形で確認を行いました。

またほかにも活動をしている間に眠くなってしまうことも考えられたので、眠気覚ましのつぼ押しや、立ち仕事で疲れると思うので、家に帰ってからのむくみなどを解消するためのケアも指導しました。

目標カードは私たちにとって少し特徴的な活動です。このように１日心掛けたいことを紙に書いてもらいました。1 週間でどんなことに取り組みたいかを幾つか書いて、それをさらに名札の下に付けてもらいました。この活動の趣旨は目標を常に意識し続けるところにあったのですが、目標を常に意識し続ける状況を無理やりつくり出すことは、言ってしまえば非常に大きな負担となります。このようなことを本当にしてもいいのかという悩みや心配もありました。本人としても負担ですし、周りからもこんなことをさせていいのかという目があったらどうしようと不安に思いましたが、中学校側の理解もあってこのような活動をさせていただき、中学生の二人にはとても貴重な体験をしてもらったのではないかと感じています。



最終日は、台紙に切り張りした折り紙を張ってお礼カードを作成しました。一番お世話になったと思う人にメッセージを書いてもらうという方法で進めました。一番お世話になった人というところが私たちのポイントですが、その人を中学生に一人一人選んでもらい、どの人にどんな思いを伝えたいかというところに重点を置きました。そうすることで、より気持ちのあるカードが伝えられるのではないかと思い、このように仕上げてもらいました。写真も載せてかわいく仕上がっています。

私たちも中学生の皆さんに何かできないかということで、目標カードを色紙に張って渡しました。1 週間の思いや成果を形にして渡すと同時に、「これからも時々思い出して、部屋に置いて意識し続けてね」と一言添えて渡しました。また、こちらに写っているシクラメンはまだ成長途中のものです。これから子どもたちと一緒

に成長していってほしいという気持ちを添えて贈りました。植物は人に生きる力を教えてくれると私は思っています。ですから、まだまだ可能性のある中学生にそういう思いを込めて、成長段階のシクラメンを「一緒に成長してね」と言って渡しました。

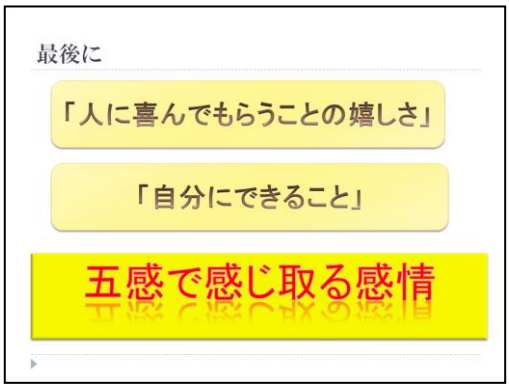
これは先ほどのスタッフの方です。初めに見せた写真ですが、覚えておられるでしょうか。左側は中学生の百山さんという方ですが、どこか自信に満ちた顔をしていませんか。生き生きして見えると思います。実はこのスタッフさんにお礼の気持ちを伝えた後の顔なのです。心から喜んでもらうことを実感したことで、自分にできることに少し気付き、それがあの生き生きした笑顔になったのではないかと私は感じています。実は、このスタッフさんは本当に感動して涙を流して泣いてくださったのです。私たちもそこまで喜んでもらえるとは本当に思いもしなかったので、もらい泣きしそうなくらい感動しました。また中学生のみんなの生き生きした顔も成果ということで、最後にとても気持ちの良い活動をさせていただいたと感じています。

これは１日目の緊張の顔です。しかし、全体を終えての顔はとても晴れ晴れと見えます。少したくましくなったようにも感じます。一回り成長した中学生の顔を見て私たち自身も感動させられたということが、この活動で大きく得られた成果ではないかと感じています。

この活動を通して、人に喜んでもらえることのうれしさを肌で感じられたと思います。これは私たちが中学生以上に感じたことかもしれませんが、私たちができる少しのことで中学生や企業の方がとても喜んでくれました。少しの努力でこれだけの人を喜ばせられるということは私たちにも達成感や充実感も与え、喜びを力に変えるという部分で何か成長できたのではないかと思っております。

この活動をすべて振り返りますと、本当に笑いあり涙ありだったと思います。毎日仲間と笑いながら、話もしながら計画を進めていきますが、その中にはやはり涙もありました。自分たちの自己満足の活動になりかけていた時があり、先生から「おまえたちは少し間違っていないか。こんなものを中学生に提供して失礼じゃないか」とズバッと言われてしまったことがありました。私はその時に、よく考えると中学生に何かしてあげたり提供したりするだけで、ありがとうという気持ちを返していないと気付き、とても情けなくなりました。その時は本当に涙して、みんなで一度頭を冷やして考えました。私たちは中学生にやれと言うだけで、感謝の気持ちを何も伝えていませんでした。そこで、その気持ちを伝えようということでできたのが目標カードでした。このように達成感と充実感があったのは、五感で、肌で感じ取る、感情あふれる活動だったからではないかと思います。

ここで、私のこれからの人生像として、私の使命を発表させていただきたいと思います。これは私の大好きな庄川町の景色です。私は去年3 年生の時に、インターンシップを庄川町の温泉旅館、三楽園で経験させていただきました。実は今日も三楽園の社長にお越しいただいております。大変良い経験をさせていただき、ありがとうございました。



私はこの経験を通して、おもてなしの心に触れさせていただきましたが、そこで感動することになりました。形のないサービスに対してどれだけお客さまに満足していただくかを追求する仕事は、本当に素晴らしいと教えていただいたと思っております。実は私は来年から三楽園で働かせていただくことになっていますが、私がやりたいことは世界を元気にすることです。まずは三楽園の一人のスタッフとして、私はそこから発信していきます。庄川町を元気にし、富山県を元気にし、そして日本を元気にして、最終的には世界を元気にしたいと強く思っています。こう思えるようになったのも、GP 活動をはじめインターンシップ、またいろいろな方と触れ合って、いろいろな自信がつき、いろいろなことを教えていただいたからだと実感しています。

この活動で多くの経験をさせていただいたおかげで、今の自分があると本当に思っています。企業をはじめ、先生の多くのサポートを得てこの活動が出来上がりました。そしてこの活動をする中で、仲間が何より大事な存在だったと思います。また私がいる基盤として、家族の支えもとても大切だったと感じています。GP に参加したことや今の自分がここに元気でいられることを、本当にうれしく思っています。

今日はお忙しい中、皆さまお越しくださいまして本当にありがとうございました。3 年間という GP の活動はもう終わりですが、このような学生に、また中学生にも財産となるような素晴らしい経験を与えられる活動は今後も続けていってほしいと本当に思います。私も社会人になりますが、これからも何かアプローチしていけないかと考えています。社会全体で子どもたちを支えていけるような町にするために、またそういう活動とするために、これからも皆さまの協力が必要となってくると思います。ぜひこれからもよろしくお願いいたします。本日は本当にありがとうございました（拍手）。

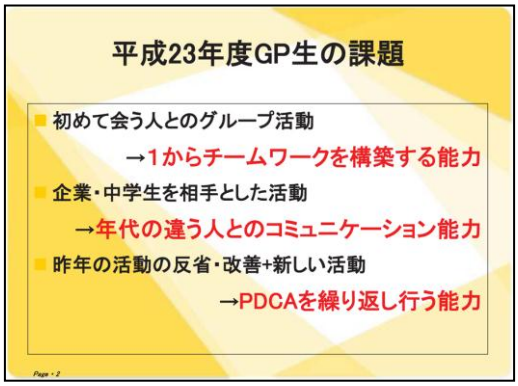
（松井）　ありがとうございました。

続きまして、平成 23 年度から丸山君、お願いします。

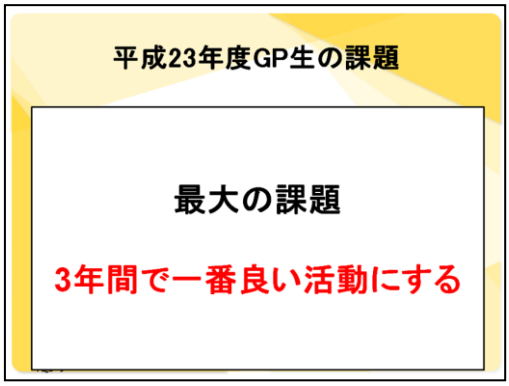
平成 23 年度
受入企業：株式会社　北日本新聞社
丸山　友也（富山大学経済学部 3 年）

皆さん、こんにちは。私は経済学部 3 年の丸山知也と申します。これから、北日本新聞社様の平成 23 年度長期循環型インターンシップ GP 活動について発表したいと思います。

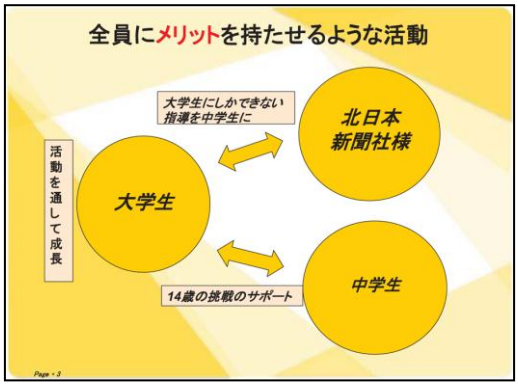
北日本新聞社様における GP 活動は平成 21 年度から行われ、今年で 3 年目となります。今回の活動がスタートしたのは 7 月の初めでした。北日本新聞社様へのインターンシップを希望していた 10 名ほどが長期循環型インターンシップの説明を受け、その中で興味を持った 5 名とキャリアサポーター1 名の計 6 名で活動を行うことになりました。メンバーが決まり、どのような活動を行うかを説明していただいた後、私たちには多くの課題や、それを乗り越えるために身に付けなければならないことがたくさんあると分かりました。



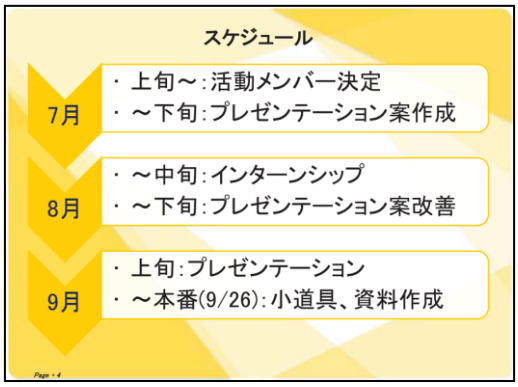
まず、今回のような活動はチームワークがとても重要になると思います。しかしメンバーの中には初対面となる人もいたので、このプロジェクトを成功させるためにはチームワークを一から築き上げていかなければなりませんでした。さらに今回の活動は企業と中学生を相手とするものでしたから、普段はあまりかかわることのない、年代の違う方とのコミュニケーション能力も必要となりました。私たち平成 23 年度の GP 生は、初年度のように全く白紙の状態から手探りで企画を練り上げていくという苦労はなかったのですが、その代わり今までの活動を反省して改善し、さらに同じような活動にしないために PDCA サイクルを繰り返し行い、よりよい企画を作り上げる必要がありました。



これらを踏まえた上での私たちの最大の課題は、3 年目となるこの GP 活動を完成形にまで作り上げることでした。3 年目ともなると、ある程度は洗練され、企画としては完成された形が求められます。昨年の GP 活動の企画は、メンバー全員がこれを超える企画を作るのは難しいのではないかと思うほど充実した内容で、昨年の GP 活動の先輩方の努力に圧倒されました。



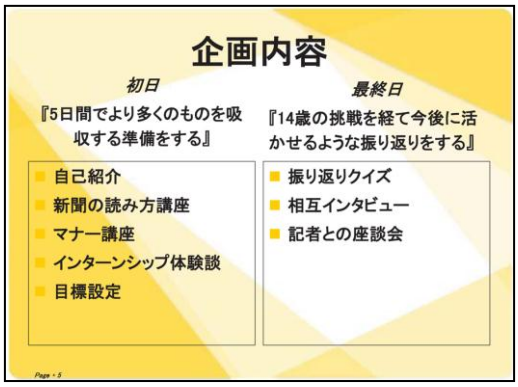
私たちはまず、この活動において最も大切にしようと思う軸となる考えをつくることから始めました。話し合いの結果、お客さまである北日本新聞社様や中学生はもちろん、大学生である私たち自身も含め、全員にとってメリットになるような活動にするという考えを活動の軸としました。そしてそのためには、大学生にしかできない、そして北日本新聞社様でしかできない活動をつくり上げようと話し合いました。つまり北日本新聞社様の期待に応えられるような大学生にしかできない企画を考えて実行することにより、中学生の「14 歳の挑戦」をサポートすることができれば両者のメリットにつながるのではないか、そしてこの活動を通して私たち自身も成長することができれば、このプロジェクトも成功するのではないかと考えました。



GP 活動のおおまかなスケジュールですが、7 月半ばからインターンシップが始まるまでの 1 カ月ほどは、プレゼンテーションに向けて具体的に何をやるか全員で話し合いを重ねました。この間に昨年の GP 活動に携わった先輩に話を聞く機会がありました。先輩は、昨年の活動の成功や失敗を話してくださり、同じ活動になるのはつまらないから、少しでも良い活動になるように改善した方がいいとアドバイスをくださいました。先輩の話や昨年の活動内容を参考にしながら、昨年と同じ内容にならないように新しいことを盛り込んだり、反省点を改善したりして、インターンシップ前には内容の枠組みが完成しました。

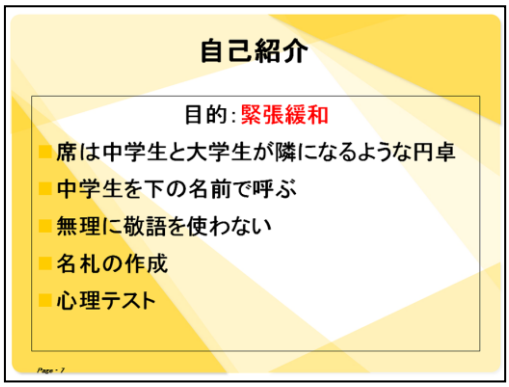
8 月にはインターンシップがありました。よりよい企画を作るために GP 活動に生かせるような知識や、中学生に伝えたいことを模索しながら過ごすインターンシップの 5 日間はとても大変でした。全員のインターンシップが終了し、その体験を基に企画の微調整を行い、8 月中に企画が完成しました。

9 月の初めに企画書を持ち、北日本新聞社様へプレゼンテーションに伺いました。細かい修正はあったものの企画を通していただき、プレゼンテーションが終わってから本番までの間は資料の作成や細かい立ち回り方について入念に話し合いました。その結果、7 月から始まった私たちの GP 活動は約 150 時間にも及びました。



私たちの企画は、初日、最終日共にさまざまな活動がありますが、どちらも一つのキーワードを基に作られています。初日のキーワードは「緊張緩和」です。初日に私たちが北日本新聞社様からいただいた時間枠は、「14 歳の挑戦」での最初の活動でした。そんな状況の中で中学生が緊張しないということは無理な話です。ですから、私たちの役割は中学生の緊張をできる

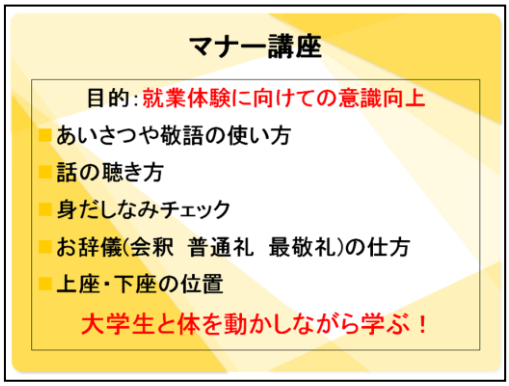
限り緩和させることだと考えました。最終日のキーワードは「内省と今後への抱負」です。「14 歳の挑戦」の最後のお時間をいただいたので、5 日間の就業体験を振り返り、学んだことをより多く自分のものにできるような場にしようとこのキーワードを選びました。



まず、初日の一番初めに行った自己紹介について話したいと思います。自己紹介はさっと済ませてしまうことが多いですが、私たちは自己紹介を重要視しました。中学生の緊張を緩和させることが、初日の活動の最大の目的だったからです。中学生とうち解けるために私たちは幾つかの工夫をしました。それは、自己紹介は中学生を名前で呼び、無理な敬語は使わないように気を付けたことです。これらは自己紹介に完結せず、この活動すべてを通して行いました。最初は人事の方もいらっしゃるので失礼ではないかとも考えましたが、この活動の相手は中学生です。大学生といえどもスーツを着て接客のような対応をしていたらどうでしょう。もっと緊張してしまうのではないでしょうか。

さらに私たちは、面識のない中学生同士や、中学生が大学生を気軽に呼べるように名札を作成しました。大学生の名札にはニックネームや役職を書くことで、イメージを持ちやすくなるように工夫しました。ちなみに「TYM48」という名札がありますが、これは「富山」と読みます。今はやりの AKB48 を意識した内容で、役職はアイドルということで TYM と名付けました。このようにポップで親しみやすいイメージで名札を作成しました。

最初は表情が硬いように見えた中学生も、これらの工夫や心理テストなどを行った後では笑顔もちらほら見えてきたので、緊張緩和にはとても有効だったと思います。これらの活動は、中学生と比較的年の近い私たち大学生にしかできない重要な役割だと思います。このように、私たちにしかできない活動をしようと意識して、企画や活動を行いました。



続いて、マナー講座にもさまざまな工夫を取り入れました。マナー講座は就業体験に向けての意識向上を目的とし、せっかく大学生が教えるのですから、講義型ではなく大学生と中学生が体を動かしながら学べるようなプログラムを心掛けました。内容は挨拶やマナーについてのクイズを出したり、身だしなみチェックシートを作ったりして、大学生と中学生で交流しながら学べるものにしました。

お辞儀の練習では、お辞儀ブレードというものを作りました。これはお辞儀の角度を視覚的に確認できるように用意した小道具です。ただお辞儀を練習をするより、お辞儀ブレードを体に当てながら行う方が、中学生も興味が持てたのではないかと思います。

また、クイズでも大きな模造紙に絵やヒントなどを入れて、番号の書かれた磁石を張り付ける形式にしたことで、ただ座って答えるよりも楽しみながら学べたのではないかと思います。

そして、マナー講座ではただ知識を丸投げするのではなく、中学生の目線になって「もし〇〇君がエレベーターに乗るなら、どこに乗ったらいいかな」「家族でタクシーに乗ったら、お父さんはどこに座るのが正解かな」など、問い方にも工夫をしました。知識があっても行動に移せなければ意味がありません。「14 歳の挑戦」が終わった後でも、ちょっとやってみようかなと思わせるような活動を心掛けました。

ここまでの話だけではどのような感じかイメージしにくいと思いますので、ここで初日に行った新聞の読み方講座を実演していただきたいと思います。それでは、目黒君と源君、よろしくお願いします。

（目黒）　これから北日本新聞社様に就業体験に行く中学生の皆さんに、新聞の読み方講座をしていきたいと思います。皆さん、新聞を今までにきちんと読んだことはありますか。新聞はすべてのページに文字がぎっしり詰まっていて、読むのはとても大変そうです。でも実は、読み方を知っているととても簡単に新聞から情報を得ることができるようになります。

では、どのように読めばいいでしょうか。このようにたくさん記事が載っていますが、まずは見出しを見ましょう。見出しというのは記事のタイトルのようなもので、一言で何があったかパンと書かれています。そして次に記事を読みます。記事もとても長く書いてあって、読むのが大変そうですが、実はこの記事のある一部分を見るだけでそのニュースのすべてが分かるようになっているのです。それはどこか分かりますか。実はこの記事の１段落目、最初の部分です。新聞の記事というのは、最初の段落にいつどこで何があったかがすべて分かるように書かれています。ですから、まず見出しを読み、そして１段落目を読むだけで簡単に効率よく情報を得ることができます。もし気になったニュースがあったら、後ろの方まで読んでいきましょう。後ろの方には詳しい内容が書かれています。このように拾い読みをしていくことで、時間をかけずに効率よく情報を得ることができます。

次に新聞の構造について、実際に今日の朝刊を見ながら見ていきましょう。

（源）　本日あった一番大事なニュースはどこに書かれていると思いますか。それは１面という、めくらなくても済むページにあります。

こちらの 1 面ですが、北日本新聞はほかの新聞と違う特徴がありますが、何か分かりますか。それは、富山県民の約 7 割の方が北日本新聞を取っているので、必ず 1 面に富山のニュースが載っています。今日なら、第 6 回越中アートフェスタの記事が載っています。

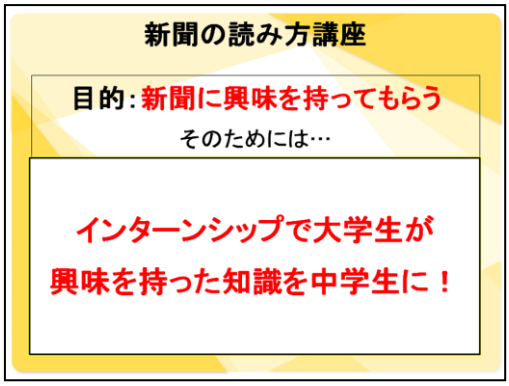
1 面に載っていない記事はどこに書いてありますか。1 枚めくっただけで見られる 2 面、3 面、さらにテレビ欄の後ろを 1 枚めくっただけで見られる社会面というところに大事なニュースが載っていますから、この 5 日間「14 歳の挑戦」に行く中学生の君たちは、こういうところをしっかり読んでおきましょう。

では、最後に一つ豆知識を。社会面の一番端に 4 コマ漫画があると思いますが、なぜ 4 コマ漫画がこのページにあるか分かりますか。

（目黒）　実はこの社会面といわれるページは、その日あった事故や事件、読んでいて暗くなってしまうような記事がたくさん載っています。ですから、そういった雰囲気を少しでも和やかにするために、ほのぼのとした 4 コマ漫画をここに載せています。皆さん知っていましたか。今日家に帰ったらお父さんやお母さんに、なぜここに 4 コマ漫画が載っているか知っているか聞いてみるといいと思います。

以上で新聞の読み方講座を終わります。今日聞いた読み方を今後新聞を読むときなどに意識してみてください。ありがとうございました（拍手）。

（丸山）　いかがだったでしょうか。今回はかなり短縮して行いましたが、本番では 30 分ほどかけてじっくり詳しく行いました。何となく雰囲気は伝わったのではないかと思います。



今お見せしたように、講座というイメージではなく、楽しみながらもしっかりと学ぶことを意識しながら行いました。自分たちの中学生のころを考えてみると、新聞はあまり読まなかった記憶があります。ですから、ここでは新聞に興味を持ってもらうことを第一に考えました。今回は記事を読むことではなく、構造や豆知識を知ってもらい、新聞は面白いと思ってもらえるような講座を心掛けました。

さらに中学生が受け身になってしまわないように、頻繁にクイズや質問を挟むことなども工夫しました。例えば「新聞を読んだことある？」「4 コマ漫画は何で社会面にあると思う？」など、クイズを挟みました。またこちらもただ知識を丸投げするのではなく「今日出したクイズを、家に帰ったらお父さんに問題を出してみよう」などと、「14 歳の挑戦」の間だけでなく、家に帰ってからも新聞に興味を持ってもらえるような仕掛けづくりを心掛けました。これらの豆知識やクイズは、大学生がインターンシップで学んだ知識の中から、中学生も興味が持てるのではないかと思ったものを選んで活用しました。また講師役以外の大学生は中学生

の隣に付いて読み方をサポートする形を取ることで、分からなくなるようなことがないようにしました。

次に、最終日の活動である相互インタビューについて話します。最終日のキーワードは「内省と今後への抱負」です。5 日間の総まとめとなり、学んだことをより多く吸収できる場を意識しました。

インタビューの質問内容には、中学生が初日に立てた目標についての反省と「14 歳の挑戦」の経験を日々のどんなことに心掛けていきたいかという質問項目を織り交ぜました。なぜなら、ここで私たちが最も大切にしたことは、中学生が目標の反省をするということと、5 日間の経験を今後どのように生かしたいかを考えることだったからです。中学生は「家や学校では挨拶をしていなかったので心掛けたい」「新聞を読む癖を『14 歳の挑戦』が終わった後も続けたい」など、それぞれ抱負を語ってくれました。この企画はとてもうまくいったと思います。こちらが相互インタビューの様子です。

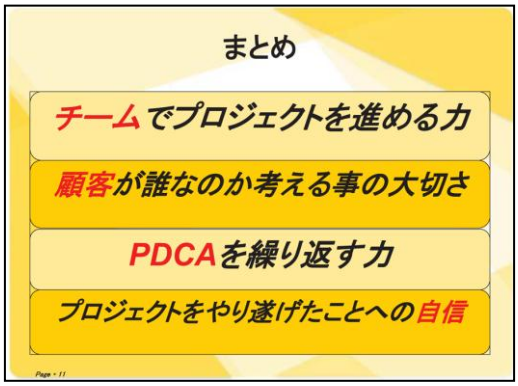
「14 歳の挑戦」での活動は以上になりますが、私たちは最後にもう一つだけ活動を行いました。それは「14 歳の挑戦」終了後に中学生に GP 新聞を手作りしてプレゼントするというものでした。本日の配布資料にもありますので、お時間があるときにでもご一読いただけるとありがたいです。

私たちは今回の企画を通して、例えばマナーの知識や新聞を読む癖、挨拶は大事だという気持ちでもいいので、何か一つでも「14 歳の挑戦」を通して得たものがあればと考えて行動しました。ただ教えるだけ教えて大学生の自己満足で終わらない、中学生のその後の生活に少しでも生きるような活動をしてあげたいと考えてきました。私たちの企画で中学生にそこまで影響を与えられたかどうかは分かりません。しかし、思い出としてでも形になるものを残そうという思いから新聞を作成しました。

記事の内容は、最終日の相互インタビューで作成した中学生と大学生の記事です。大学生から中学生へあてたメッセージも別紙で作成しました。届いた新聞を家族に自慢したり、自分の記事が新聞という形で残ることをうれしく思ってくれればと、願いを込めて作成しました。

GP 活動を通して、私たち大学生はほかの大学生にはない貴重な体験をすることができました。メンバーが 6 人ともなると、全員で集まるのはとても難しいことでした。ですから個人でできる作業は各自で片付けたり、数人でも集まれるときはその人たちだけでもできる作業を行いました。また、何か新しいことを考えるときはなるべく全員で集まり、集まれなかった場合でも報告や連絡をすることで、全員が納得できる企画を作り上げました。チームでのプロジェクトではこのようなことがとても重要だと感じました。さらに誰を相

手としているかを意識することによって、明確な目的意識を持って活動に取り組めるということを学びました。また、今回のプロジェクトは全く違う年代を相手とするものだったので、年の違う相手とのコミュニケーション能力や考え方を学ぶことができました。そして私たちは、今回の活動で新しい企画を作ったり、企画の反省や改善をしたりするためにPDCA サイクルを何度も繰り返し、納得のいく企画を作り上げることに成功しました。



そして何より、私たちはこの活動を通して自信を得ることができました。夏休みのほとんどを費やす大変な活動でしたが、実際の企業を相手とした企画、プレゼン、発表の一連の流れを大学生だけで行うことや、最初に去年よりも良い活動をつくり上げるのは難しいのではないかと思った企画を、自分たちが納得のいく出来にまで仕上げることができたことへの自信を何より感じることができました。これらの結果、私たちは間違いなく GP 活動前よりも成長できたと感じております。

「14 歳の挑戦」終了後、北日本新聞社様のご担当の方も、中学生にとって緊張緩和になってよかったとおっしゃってくださいました。中学生も別れ際に「とても楽しかった」「ありがとうございました」と言ってくれて、中には報道関係の仕事に興味が持てたと言ってくれる生徒までいました。そういう点では、中学生の「14 歳の挑戦」をサポートできたのではないかと感じることができました。

以上のように、北日本新聞社様、中学生、大学生、それぞれに多少なりともメリットを持たせることができたので、私たちの中では今回の活動は大成功だったと思っております。何より私たち自身が楽しみながら学ぶことができました。この場をお借りして、キャリアサポートセンターの皆さま、北日本新聞社の皆さま、中学生の皆さん、その他この活動にご協力していただいた方々に感謝の意を述べさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

以上で、本年度の北日本新聞社の GP 活動の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

（松井）　ありがとうございました。最後に参加中学生の皆さんにお話を伺いたいと思います。

昨年度、ANA クラウンプラザホテル様で「14 歳の挑戦」を体験された百山功子さん、鈴木志穂さん。今年度、北日本新聞社様で「14 歳の挑戦」を体験された松井公平君、篠田遼太郎君。皆さんに「14 歳の挑戦」を終えての感想を聞かせてもらいたいと思います。それでは、百山さんからお願いします。

（百山）　「14 歳の挑戦」ではなかなかできない体験ができ、いい経験になりよかったです。

（松井）　ありがとうございます。続きまして鈴木さん、お願いします。

（鈴木）　「14 歳の挑戦」では気配りや挨拶の大切さを学び、よかったと思います。

（松井）　ありがとうございます。続きまして松井君、お願いします。

（松井公）　「14 歳の挑戦」は 5 日間の職業体験を事業所でするというもので、あまりやったことがありませんでしたが、いい体験ができてよかったです。

（松井）　ありがとうございます。最後に篠田君、お願いします。

（篠田）　普段できないことを体験できたり、新聞についての豆知識がたくさん分かったのでよかったです。

（松井）　ありがとうございました。続きまして百山さん、鈴木さんのお二人に伺います。「14 歳の挑戦」初日に大学生と一緒に作った目標カードは、どのような目標にしましたか。

（百山）　人への気配り、笑顔、言葉遣い、分からないことは聞く、挨拶にしました。

（鈴木）　私は挨拶をすることに一番気を付けました。

（松井）　その目標カードは実際に役に立ちましたか。

（百山）　はい、役に立ちました。

（鈴木）　役に立ちました。

（松井）　実際に「14 歳の挑戦」が終わってからも、目標カードを振り返って見たり、役立った経験などはありますか。

（百山）　「14 歳の挑戦」をするときよりも、挨拶を積極的にできるようになりました。

（鈴木）　学校生活や部活動でも積極的に挨拶できるようになりました。

（松井）　ありがとうございます。続いて百山さん、鈴木さんにお伺いします。「14 歳の挑戦」最終日に、大学生の滝谷さんからガーデンシクラメンを「お花と一緒に成長してね」という意味でプレゼントされたと思いますが、どうでしたか。無事に育ちましたか。

（百山）　もらった当時は元気だったのですが、枯らしてしまいました（笑）

（鈴木）　今でも育てています。今年も咲く予定です。

（松井）　最後に、「14 歳の挑戦」を終えて成長したこと、ガーデンシクラメンのように

成長したと感じることはありますか。

（百山）　ガーデンシクラメンは枯らしてしまったのですが、「14 歳の挑戦」で学んだことは生かせていると思うので、成長はしました。

（鈴木）　日々こつこつ努力することで自分の目標に達することが分かり、これからもそういうことを続けていきたいと思います。

（松井）　ありがとうございます。続きまして、松井君、篠田君のお二人にお伺いします。「14 歳の挑戦」当日、大学生のお兄さん、お姉さん方がいて安心したり緊張が和らいだりしましたか。

（松井公）　初日だったのですごく緊張していましたが、気軽に話し掛けてくれて緊張がほぐれてよかったです。

（篠田）　緊張がほぐれてよかったです。

（松井）　実際になぜ緊張がほぐれたか、理由は。篠田君。

（篠田）　大学生の方々が友達のように下の名前で呼んでくれたりしたからだと思います。

（松井）　なるほど。続いて松井君、篠田君にお伺いします。「14 歳の挑戦」初日に大学生の職業体験、インターンシップの体験談を聞いて、これから始まる自分たちの職業体験「14 歳の挑戦」の役に立ちましたか。

（松井公）　はい。初日はすることが全然分からなくて戸惑っていましたが、大学生の話を聞いていろいろなことをあらかじめ知ることができたのでよかったです。

（篠田）　大学生がしたことが分かったので、自分たちがこれからすることも分かり、見通しがついてよかったです。

（松井）　なるほど。ありがとうございました。中学生の皆さま、ありがとうございました（拍手）。

第 2 部　新たな出発点を求めて（講演）

（荒井）　それではお時間になりましたので、第 2 部をスタートさせていただきたいと思います。本日は基調講演といたしまして東京大学の玄田先生、そして北海道の網走の少し下にあります標津町というところからわざわざおいでいただきました飯田先生にお話しいただきたいと思っています。

まず玄田先生ですが、午前中に少しお話しさせていただきました「14 歳の挑戦」を以前ご研究されました。ご存じだと思いますが「ニート」という言葉を通じて若者の労働雇用問題について研究され、世間に提言されたという素晴らしい先生です。今日はぜひお呼びしたいという私の念願の夢がかないまして、この後ぜひ皆さんに 1 時間ほどお聞きいただき、お楽しみいただきたいと思っています。

飯田先生は実際に今､標津町で中学校の中でのキャリア教育の一環ですがビジネス教育、いわゆる起業家教育という実践をなさっています。続きまして、そのお話をちょうだいしたいと思います。

それでは早速ですが、玄田先生にお話をちょうだいしたいと思います。皆さま、拍手でお迎えください（拍手)。

基調講演「『14 歳の挑戦』から富山の希望へ」
玄田　有史　氏（東京大学社会科学研究所　教授）

玄田有史と申します。次にお話しになられるのが飯田雄士先生で、タブルユウジということでよろしくお願いします。

1.「14 歳の挑戦」との出会い

私が「14 歳の挑戦」と初めて出会ったのが 2003 年です。その時に本を書こうと考えていました。2004 年 7 月にその本が出るのですが、タイトルは『ニート』といいます。まだ世の中にはニートという言葉が全くないころです。

富山市で今もやっていらっしゃるのでしょうか、富山労働大学という社会人向けの講座がありまして、そこにお招きいただいてお話ししました。控え室で確か県の方と話をしていて、その時は少しずつ若者の雇用対策に、特に国が本腰を入れてやらなければならないという動きにはなってきたのですが、どこも決め手がなく、富山はどうなのかという話をしていました。『ニート』を書きながらもニートという言葉が自分の中でまだ固まっていなかったのですが、働くことに苦しさや厳しさを抱えている人たちはとてもたくさんいました。しかもその背景にはいろいろあるけれども、どうも人とのかかわりを持つことに大変苦しさを抱えていて、それが結果的に働くことをあきらめる一つの原因になっているのではないかと考えていました。何かいい対策はないものかと何となく聞いていましたら､「雇用対策になるかどうかは分かりませんが、最近富山で非常に好評な取り組みがあるのですよ」と聞いたのが「14 歳の挑戦」でした。

詳しいことを教えてくださいと言って一度東京に帰ってしばらくたってから、教育委員会の山本先生にお会いして「14 歳の挑戦」について詳しく伺いました。ぜひそれを拝見させていただきたいと山本先生にお願いして、2003 年 11 月に当時はまだ福光町だった今の南砺市に 1 週間、日曜日から土曜日まで行きました。確か、みや川という旅館でした。ず

っと一人でしたから、途中で旅館の方に「先生、寂しくないですか」などと言われたりしながら見学していました。いろいろ思い出深いです。

月曜日から始まるということで、中学生は緊張気味なのです。面白いもので、人間は緊張するとあくびが出ます。社長が話していると、中学生がライオンキングのようにガーッとあくびをするのです。そうすると当然、人がまじめに話をしているのにあくびをするなと怒られます。考えてみれば、今、中学校では授業中にあくびをするななどと注意をするでしょうか。あまりしないのではないでしょうか。大学など絶対にしません。あくびをしてはいけないと、もしかしたら初めて怒られたのかもしれません。周りを見ていると、してはいけないことに気付くわけです。

社長と車に乗ってどこかへ行く時、社長が車で通り過ぎた時に運転しながらふと頭を下げました。取引先か何かの方がいて、頭を下げたのです。それを子どもが見ていたら、「こら、おれが頭を下げたのだからおまえも下げろ」と言われました。新鮮だったのでしょう。それが金曜日ぐらいになってまたガソリンスタンドへ見に行くと、少しリラックスした感じになっていました。そしてあくびをしなくなりました。出そうになるのですが、あくびをしそうになると下を向いて隠すので、やはり 1 週間で大人になるのだなと思いました。

だから、それこそ人間関係が難しいとかコミュニケーションのスキルが何とかといろいろなことが言われますが、あくびをしないとか、出そうになったら上手に隠すなどということがきちんとできれば何とかなるのです。1 週間もあるからそういうことを感じられるのはいいなと思いました。

中学校でも大学でもないのですが、ある時会社の新人研修に呼ばれてお話に行ったことがあります。その会社は、具体名は申し上げませんが、皆さんのお財布に多かれ少なかれ入っている紙が何枚出回るか決めている、券を出している銀行です。非常におつむのいい方々がお入りになるようで、多分その券もたくさんボーナスで頂くのだと思います。見るからに優秀そうな社会人がたくさん並んでいて、これから社会で働くためにといったことを話しました。

ホワイトボードに書いていてぱっと振り向くと、その辺に座っていたとても賢そうな子がライオンキングだったのです。どこの大学か知りません、有名な大学でしょうが、そこではあくびはいけないとは習わなかったのでしょう。グワーッとしているのを見て、私は書くのをやめて、ごめんねとおわびしました。すると彼は、あくびをしてすみませんと謝りましたが、私は「いや、ごめん。あなたがあくびをしたのは、あなたのせいではないよ。僕の話がつまらないからあくびしたのだよ。だからいい。本当にごめんね。申し訳ない。ただ、あなたと会うのは多分今日が最後なので、今日は新人研修だから一応言うことは言っておくよ。社会というのはいろいろなことがあるが、私のわずかな経験から言えるのは、1 回のあくびが人生を駄目にするということがあるからね」と言いました。

あのときあくびをしたあいつにだけは絶対にいい仕事をさせてたまるかと、意外に大人は覚えていたりします。みんなが一生懸命考えている時に、ぱっと見てあくびをしていたら、「このやろう。こいつだけには絶対にいい仕事をさせるものか」と思うところが大人にはあるのです。だから、あくびが出そうになったら口を押さえたり下を向いたりして何と

か隠せと「14 歳の挑戦」で学んだようなことを言いました。

研修が終わって質問があるかと聞くと、先ほどのライオンキングが手を挙げるのです。「今日は大変貴重なご指摘をいただき、誠にありがとうございました。私はこれからもう絶対にあくびをしないように心掛けて仕事したいと思っています。ただ、一つ先生に質問があります。これから私はあくびはしません。ただ、眠気はどうすればいいのでしょうか。私は授業中もそうだったのですが、この研修でもよく寝てしまうのです。寝てはいけないと思うのですが、寝てしまうのです。眠気に対しては何かご指導はないでしょうか」と言われて、何てやつだと思いました。

はっとその時思い付いたのは、ついその直前にお亡くなりになった心理学者の河合隼夫さんのことです。たまたま 2 週続けて講演会でご一緒して、前座みたいなものを務めました。その後河合先生はお倒れになったのですが、元気な先生の講演を聞いていました。その時聞いた話を思い出しました。河合先生は文化庁長官をお務めになったり京大の先生だったりと、いろいろなお仕事をなさっていましたが、多分学長もそうではないかと思いますが、河合先生は会議が大変多いのです。毎日会議の連続で、すぐに寝てしまいます。毎回寝るというのです。「また寝ているよ、河合先生」と。

ある時メンバーが、ちょっとからかってやろう、脅かしてやろうと言って、完全熟睡状態の河合先生を起こしたのです。そして、はっと起きた河合先生に対して「先生、今の件について先生はどちらだと思うか、ぜひ先生のご見解を伺いたい」などと言ったそうです。そんなことを言われても、河合先生は熟睡状態だったため、どちらもこちらもないので答えられません。それで河合先生は何と言ったかというと「そういうことになりますかな」と。これが大人の知恵です。こういうことを「14 歳の挑戦」やインターンシップで覚えるのは早いのですが、そういうちょっとしたことも含めて、案外人付き合いというのはそこから生まれるものだと思いました。

「14 歳の挑戦」は、地域で 1 週間やりたいことをやろうというものです。もともと兵庫で「トライやる・ウイーク」として、必ずしも職業体験や職業意識の啓発だけではなくて、まず子どもたちにやりたいことをやらせて、その中でいろいろなことを体験させるということが始まりました。そこで、やりたいことは何かということになりました。

富山もそうだと思いますが、特に女子生徒にとってはやりたいことの中に美容師があり、美容師に少しあこがれています。もし将来なれるのであれば美容師になりたいということで、意外と美容師希望が多いのです。地域で美容師を探して「14 歳の挑戦」という体験をやると言うと「ああ、いいよ」と言われます。一人親方のような女性美容師は結構たくさんいらっしゃって、厳しいですが非常に面倒見がいいです。「いいよ。そういうものは大事だと思っていた。学校の勉強だけではなくて、いろいろなことを体験するのが大事だと思っていたから喜んで引き受けますよ」と言ってくれます。美容院ですから火曜日だけはお休みなので、その時は役場へ行ったり学校へ行ったりといろいろなことをしますが、月、水、木、金と 4 日間行きます。

先ほどのあくびの子と同じで、月曜日は緊張します。意外に美容院はやることが多いのです。髪の毛を掃いたりタオルを整えたり、お客さんが帰る時はちゃんと扉のところへ行って、ありがとうございましたと言ったりしますが、初日は手際も悪いので一人親方の美容師さんに「駄目だ。やり直し」と結構厳しく怒られます。月曜日は、帰るともうバタンキューです。そして火曜日が休みでよかったというわけです。それから水、木、金と 3 日ぐらいたってまた見に行くと、すごいものであっという間に手際が良くなっていて、前はあれしてこれしてと言われていたのが、もう言われなくて済むのです。次はこれをやらな

ければいけないと全部自分なりに段取りを決めてやっていきます。

その美容室で働いていた女子中学生は少し欲が出たのか、大体言われなくても全部できるようになったから自分で判断して片付けなどをしていました。ある時美容師さんのところにお客さんがいらっしゃってカットしていると、その中学生がすっとやってきて「全部終わりました。次に何をしましょうか」と言いました。つまりまったく指示されることもなく、自分で全部やったのです。するとカットしていた女性は「うん、分かった。ちょっと待っていて」とだけ言って結局カットに専念されて、お客さんがお帰りになった後にその中学生に対して初めて指示を出しました。何と指示を出したかというと、ひどく怒ったのです。「私は自分がこの仕事をしてから、自分の中で決めていることがある。それは、お客さまの髪にはさみを当てている時は、私にとっては真剣勝負なのだ。お客さんとの 1 対 1 の真剣勝負。だからお客さんとはちゃんと話をする。お客さんに対しては何か言われたら要望を聞く。お客さんとしか話をしない。それをあなたは今日邪魔をした。そんなことはやめてほしい。絶対にこれからするな」とかなり厳しくしかりました。その子は褒められるかと思ったのに、しかられたのです。最終日でしたが、その子はショックを受けました。

終わってから感想を書くのですが、その子は少し時間がたってから、うまく表現できないのですがうれしくなってきたのです。初めて大人に真剣にしかられて、働くというか生きるというか、何かプライドのようなものを感じて感動したのです。「14 歳の挑戦」もそうですが、別にその体験をしたからといってその仕事に就く子は多分そんなに多くないと思います。その子も多分美容師にはならなかったでしょう。あれから 10 年ぐらいたっていますからなっているかもしれませんが、ならなかったと思います。ただ、真剣にしかられて、生きることや働くことのプライドをじかに目の前で感じられたというのは、きっとあの子にとってはとてもプラスだったと思います。大学のインターンシップでもそういうことがあるのでしょう。

なぜ「14 歳の挑戦」は 11 月なのかと聞いたことがあります。神戸で聞いたのでしょうか、ある中学校へ行った時に、中学 2 年生の 11 月というのは、不思議なことに必ず何かが起こると言われたのです。何が起こるかと聞くと、とにかく何かが起こるのだそうです。先生も実感があるでしょうか、昔、運動会は 10 月が多かったのです。10 月は運動会を目指すからみんな頑張って、それでいろいろ発散します。中学 2 年生の 12 月になると期末試験などがあり、だんだん高校進学モードに入っていきます。11 月はちょうどその端境期で、非常に不安定というか中途半端な時期です。それから体も心も急に大人になります。1 年生はやはり少し子どもっぽいですが、3 年生になるとだいぶ大人っぽくなります。まさに子どもが大人に変わるのは秋、これから冬を迎えるという時です。富山でしたら、これから厳しい冬を迎えるまでに少し心や体の準備をしますが、あのころが一番いろいろな意味で感じる時期だと言われました。だからそういう時にそういうものを経験すると伸びるのでしょう。大学生はいつごろかは分かりませんが、14 歳ぐらいというのは人生の中で本当に重要な時期なのでしょう。

2. 自立支援に必要な三つのカン

僕は今日この会が終わったら大沢野万願寺に行きますが、そこには「はぐれ雲」という NPO があります。来年で 25 年と言っていましたが、若者の自立支援をするところです。全国にはそういう若者の自立支援をするところが幾つかあります。神奈川の小田原にも「は

じめ塾」というのがあります。これは親の代からもう 3 代目で 80 年以上になり、子どもたちは共同生活をしながら、いろいろな体験をして自立していきます。ニートや引きこもり、不登校の子どもがいますが、自分の力で変わっていくのです。

そこを経営している和田さんという方に、自立支援のポイントは何かと聞くと、「三つのカンが大事だ。このカンにも順番があって、このとおりにいくと子どもはちゃんと勝手に育つ」と言われました。1 番目のカンは「感」です。とにかく人間が人間として成長する時には、ある時期に一度五感を思う存分発揮しなければならないのです。うれしい、楽しい、悲しい、悔しいという気持ちをとにかく思う存分発揮します。理想的には小学校低学年ぐらいまでに、とにかくいろいろなことを感じさせるのです。それがないと人間はうまく成長できないと言われました。

2 番目のカンは「勘」です。例えば子どもがいろいろなことをして楽しんでいるとき、少し危ないことをしてけがをしたりします。そうすると、こういうことをやると危ないからもうやらないようにしようと思います。そういう勘所です。また友達とけんかになった時に、こういうことを言ってしまうといけないから言うのはやめよう、こういうことはまだ言っても大丈夫だという勘です。これが次のカンとして育っていくといいのですが、これもいろいろな経験をして感じなければうまくいきません。

そして三つ目は何だと思いますか。言っておきますが、正解したら盛り上がらないので駄目です。

（松井）　ヒントはありますか。

（玄田）　ありません。早めに。

（松井）　「缶」。

（玄田）　絶対に違う。ありがとう。

そこで出てくるのは「観」です。これから先どうやって生きていくかとか、これから自分は何をしていこうかというビジョンというものです。

カンにはこういう順番があるそうです。今はややもするとこの辺が若干おろそかになり、どのように生きるかというカンを急に求めるから、子どもも何を考えたらいいか分からなくなってしまいます。だから私は「14 歳の挑戦」はこの辺がうまく育っていくための大事なきっかけになるといいのではないかと思います。まずはいろいろなことを感じるとか、あくびをしてはいけないなどと感じる、勘所を見ます。自分はどう働いていくかというところまでは無理です。怒られていることによって何かじんわりと感じることはあっても、自分もこうやって生きていこうというところまでは要求してはいけないと思います。

大学のインターンシップになると、これから自分はどうやって生きていくかというあたりは少し考えてほしいものです。単にどこに就職するのがいいかなどいう目先のことだけではなく、働くことや生きることは大変なことなので、「14 歳の挑戦」から大学のインタ

ーンシップの取り組みをうまくつなげることになると非常にいいと思うし、今回のプロジェクトは多分そういうことをどこかで意識されたのではないかと思います。そういう面で中学校と大学が連携して、中学生と大学生で何かをやるというのは、お互いに成長させ合うという意味でとても大事ではないかと思います。

今はあまりなくなってしまいましたが、写真の現像などをする DPE ショップがあります。社長が大変人徳のある方で、ぜひ引き受けたいと言うのです。中学生もカメラが好きなのでしょう、DPE ショップに行きました。やることはたくさんあるのですが、言われたことは挨拶をちゃんとするという一つだけなのです。特に「『ありがとうございました』と 1 週間でちゃんと言える人間になりなさい。そして『ありがとうございます』と言う時は、ちゃんとお客さまの目を見てしっかりお辞儀をするぐらいでないと駄目だ」と言われました。中学生は案外ぎこちないもので、ちゃんと目を見ていなかったり、お釣りを渡すタイミングが悪かったり、最初は「ありがとうございます」の一言に非常に苦労したりするわけです。ただこれも月、火、水、木とやっていると非常に伸びて、とても上手になります。

最終日の金曜日に「今日は最終テストだ。あなたはちゃんとお客さんにお釣りを渡して『ありがとうございました』と言うのが本当に上手になった。大したものだ。あとは、うちの店は自動扉だろう。お客さんが帰る時に、お客さんの背中に対してあなたが一番いいタイミングだと思うところで『ありがとうございました』と言えたら卒業、合格。今日 1 日はそれを頑張れ」と言われました。パートの女性もいてみんなでやるのですが、最初は帰る時にありがとうございましたと言うのが遅すぎて、お客さんが通り過ぎてしまった後でもう聞こえていないとか、逆に早すぎてお客さんが「何か」と振り返ったりとうまくいきません。それが金曜日の最後の最後になると、自動ドアを出ていく本当に絶妙のタイミングで、ありがとうございましたと言えるようになったのです。そして店長やパートの方に褒められました。

ある先生に、地域で体験学習をする時に、受け入れ先にどんなことをお願いするかと聞いたことがあります。すると「これはもう地域の方のご協力によって成り立っているので、特にこうしてください、ああしてくださいとは言いません。『教育なので、ぜひ一緒にやってください。お願いします』と言うのです。ただ強いて一言だけお願いすることがあるとすれば、『子どもたちは緊張してやっていますので、もし何かうまくやったら目で褒めてやってください』と言います。目で褒められると子どもはすごく自信をつけるのです」と言われました。

それは子どもだけではなく、大人もそうです。働き始めたころを思い出すと、いろいろな失敗をしたりして不安なときに、言葉で褒められるのもうれしいですが、先輩や上司、時にはお客さんから目で褒められるという感覚はとてもうれしいものです。DPE ショップの時も子どもをぱっと見ると、店長もパートさんも別に言葉でよくやったと言うのではなく、目で「うん、それだよ」と言うのです。それは多分その子には非常に残ります。ああいうものだと思いました。そういうところで三つのカンが育っていくのは面白いと思いました。だから福光での 1 週間は寂しかったのですが、そういうことを見ていたら案外寂しくありませんでした。

神戸に、不登校気味で学校に来られない子がいました。先生もちょくちょく自宅に行っていたので、その子は先生とは会っていました。兵庫は「トライやる・ウイーク」といいますが、「今度『トライやる』があるぞ。やりたいことは地域で何でもできるぞ。何かやりたいことはあるか」と聞くと、「別に何もない。何もしたくない」「好きなものはないのか」「何もない」「ないのか。困ったな。では、これは嫌だなという嫌いなものはあるか」「そ

れはある」「何が一番嫌いだ？」「人間が嫌いだ。人がいるところは嫌だ」「そうか、人が嫌いか。では、人でなければいいのだな。ペットはどうだ？　動物だったらいいか」「動物は人間よりは好きだ」「分かった。先生はペットショップに行って、こういう子が一人いるのだけれど受け入れてもらえないかと言ってくるから、ちょっと待ってなさい」と言って、先生は約束どおり地区の中のペットショップに行って率直に話しました。「不登校の子がいて、今人間関係が苦しいというのですが、あの子はどうも動物はかなり好きなのです。ペットショップに１週間行けたら自信をつけたりするかもしれないので、もしよかったら」と言うと、「うちは不登校の子を相手にしたことがないので自信がないし、うちは無理です」と言われてしまいました。校区を離れて別のペットショップへ行くと「いいですよ。うちは特別何もできませんが、どうぞ来てください」と言ってくれました。その地区ではないのですが、「おまえ、ペットショップに行けるけど行くか」と聞くと「分からない」と。

当日に連絡したら、その子はどうも行っているようでした。3 時に帰ったら報告の電話があるはずですが、電話がかかってきません。途中で何か問題を起こしたかなと先生は心配になって、電話をしないで直接車を走らせてそのペットショップに行くと、帰る時間になってもその子がずっといるのです。連絡するのを忘れていたと、何か楽しそうでした。「おまえ、ちゃんと連絡しろと言っただろ」と。結局その子は１週間行きました。そして驚いたことに、その子が学校に来るようになったのです。

不登校気味の子は学校へ行くのがしんどいのですが、家にいたいかというと別にいたいわけではありません。親のこともあるし、本当はこれではいけないので家にもいたくないのです。行く場所がないから非常に苦しい思いでいます。でも、そこに行けば自分のことを受け止めてくれる大人がいた。別に特別に何か言ってくれたり応援してくれたりするわけではありませんが、自分がいても全然構わないという赤の他人の大人がいることが実感できた。そして別に居場所などなくてもいいという気持ちに多少なって、学校に行けるようになったのでしょう。

実際に調べてみると、「14 歳の挑戦」もそうかもしれませんが、不登校の子が体験学習を１週間することによって学校に来る傾向が強まるというのが統計的にもはっきりと出て、みんなびっくりしました。別に不登校対策で始めたわけでも何でもなかったのですが、少し楽になるのでしょう。やはり中学生は本当にそうですが、変な話、多くの子は家と学校しか社会がありません。だからそこに居場所がないと、本当に自分の居場所がどこにもないと思ってしまう子も出てくるかもしれません。その時に家や学校以外にも自分がいてもいい場所があると分かると、多分その二つに追い込まれる感じがなくなってくるのでしょう。いいと思います。そういうことがあるのだなと思いました。だからこういう体験学習が広がればと思い、ずっと応援していました。

3. 希望を持つためのウィーク・タイズ

これは今日のテーマの希望とも少し関係がありますが、いつからか日本には希望がない、希望が持てないということをいろいろなところでたくさん聞くようになりました。震災後は少し変わり、みんなで希望を持とうと言って、希望という言葉をいろいろなところで見聞きするようになりました。特に震災前は、もう日本には希望がないとよく言っていました。なぜ希望がないのかといろいろ調べたり考えたりしました。

一つ大きいのは仕事がないということです。日本人の大人に希望は何かと聞くと、非常に高い確率で仕事にまつわる希望をお話しされます。自分らしい仕事がしたい、やりがい

のある仕事がしたい、安定した仕事がしたい、収入の多い仕事がしたいなど、「希望は仕事です」と仕事にまつわることをおっしゃることが非常に多いのです。家族や健康も多いのですが、圧倒的に仕事の方が多いのです。ご存じのとおり仕事になかなか就けなかったり安定した仕事が非常に限られたりすると、仕事がない、希望がないということになります。やはり経済や仕事に関することは、日本人に何となく希望がないという感覚を持たせる非常に大きな背景であることは間違いありません。ですから、もし日本に希望をもっと増やそうと思ったら、ニート対策もそうですが、雇用対策が大事だととても思います。

ただ、希望を持ちにくくなった理由はそれだけではありません。去年の NHK の特集から「無縁社会」という言葉がいろいろなところで言われるようになりました。希望がない、希望が持てない人のもう一つの共通の特徴は、寂しい人が多いのです。孤独な人です。人間関係が非常に希薄であるとか、自分が本当に心を許せる友達がいないとかです。人間関係の基本は家族ですから、家族に子どものころから信頼されてきたという記憶が自分にはないと、人間関係に対して非常に安心感がないとか、希望がないとなってしまうことが多いのです。希望には出会いのようなところがあり、いろいろな人と人とのかかわりの中で「これも希望か」と思うのです。

中学校などで講演等を頼まれる時に、あまりいろいろなことは言わないのですが、「やりたいことを見つけたいと思ったら、とにかく１日何回でもいいから『ありがとう』と言っておけばいい」「何でもいいから、心の中でもいいから『ありがとう』とたくさん言えばいい」と言います。ただ、ありがとうには言い方があります。ありがとうは「有難う」という字です。あるのが難しいという日本語はないので、もっと普通に言うとめったにないということです。めったにないを英語で言うと「Oh, it's special」です。一つの言葉で言うと「Wow!」です。だからありがとうと言う時に、「これってすごいな」と少し驚くのです。ちゃんと毎日電気がついているのはすごいな、ありがたいなといったようなことを癖にしておくとアンテナが広がって、こういうことをやってみたいと思うようになります。

例えば働いている家族に「仕事って楽しい？」と聞いても、楽しいと言う人は少ないのです。でも、たまに自分が作った料理がおいしかったと、「ごちそうさま、ありがとう、また来るよ」と言われるとうれしい、ありがとうと言われるとうれしいので働いています。しかも、ありがとうと言われることで、こういうことをもっとやっていけば自分にとってもいいのだなと自分も発見します。大人もそうなのです。でも、なかなか人とのかかわりがない人はありがとうと言われることもないですし、人に言うことも少なくなりますから、希望の発見が少なくなります。人間関係、高齢者の孤独死、自殺、ニートなどのいろいろな問題は、日本人が全体的に孤独になっていることとかかわりがあります。従って希望がなかなか持てない原因は経済だけではないのです。

では何が大事かというと、「ウィーク・タイズ」という社会学の言葉があります。「ウイーク」は弱い、「タイ」はネクタイの「タイ」で結ぶ、つまり弱いつながりという意味です。もう少し格好良く言うと、緩やかなきずなです。ウィーク・タイズとは、アメリカのグラノヴェッターという社会学者が提唱した概念です。アメリカは転職を普通にする社会ですが、みんながみんな転職がうまくいっているわけではありません。転職を決める時に、1年に１回とか何年かに１回などとたまにしか会わない友人と久しぶりに会って、何となく話をする中でヒントを見つけて転職を決めた人が一番うまくいくのです。だから資格や学歴も大事ですが、誰とのかかわりがその転職の決め手になったかということです。

ウィーク・タイズの反対はストロング・タイズ、強いきずなです。家族や頻繁に会っている友達、恋人同士はストロング・タイズです。そういうものも大事ですが、実は一番大

事なのは緩いつながりなのです。なぜ緩いつながりが大事かというと、それは「情報」とかかわっています。情報という言葉はなかなかユニークです。「報」は報告書や官報、報いると言うと硬い言葉ですが、「情」は情けですからかなり柔らかいです。どうも形にはなっていないけれど、生きるのに大切な知恵やヒントのようなものを情報と呼ぶとするならば、そこには比較的硬いものと柔らかいものの2種類があるのです。

転職で言えば、必要な情報は給料が幾らかとか、休みが何日ぐらいありそうかということです。こういう比較的数字になりやすいような硬い情報は「報」です。ではそれに対して大事な情報は給料だけか、休みだけかというと違います。その会社は自分にとって向いていそうかとか、その雰囲気は自分に合っていそうかとか、そこで自分は一皮むけそうかということはなかなか数字にはなりませんし、分かりません。これが情報の「情」です。

では「情」はどうしたら分かるかというと、自分と違う世界に生きていて自分と違う経験をしている、自分と違う失敗や自分と違う成功をしている人と緩くつながることで、そういう世界があるのかと、そこから類推やイメージをするのです。緩いと駄目ではないかと思うこともありますが、なぜ緩い方がいいかというと、たまにしか会わない人は自分と違う世界に生きていることが多いのです。ストロング・タイズの人は結構自分と同じような生活をしていたり同じような情報を持っていますから、似ているという安心感はあります。しかし、そちらの世界はそういう感じかと分かることはありません。自分と違う世界にいる人と緩くつながることで「ああ、そうなのか。自分もそういう世界でやってみたいな」と思うことが大事なのです。昔の日本ではあまりこういうことは大事ではなかったようですが、今ではとても大事になっています。

ウィーク・タイズは転職でも大事ですし、起業する時も大事です。前にベンチャー企業を支援するインキュベーターの星野さんという人に話を聞いたことがあります。彼はすごいインキュベーターですが、自立・起業支援でどういうことが大事かと聞くと、彼は「いろいろありますが、小学校の同窓会に面倒くさがらずに出るといいですよ」とおっしゃいました。高校や大学の同窓会は行くと楽しいですが、何となく銀行や公務員など、どんな仕事をしているかイメージしやすいことが多いです。小学校の同窓会はいろいろです。特に学年を越えると、こんな仕事があるのか、それはほとんどやくざではないのかといった仕事や、楽しそうな仕事があります。小学校にはいろいろな人がいて、自分と遠いのです。ただ年齢が違っても、同じ校歌を歌ったというつながりがあります。「先輩、それはどうするのですか」とか、年下でも「それは何なの？」と素直に聞けたり、こちらも素直に教えられたりします。そういうことを大事にするような癖がある人は、起業は孤独ですから、一人で悩んだときにもいろいろな人にヒントを聞けます。そういう人が起業に成功します。何でもかんでも自分一人でやると大体成功しないのです。

だから僕は今回のプログラムも、一つはウィーク・タイズづくりだと思います。受け入れ先と中学生は非常に遠いのです。年も違うし、経験も違うし、最初はうまくいかなくて当たり前です。緊張したらあくびも出ます。考えてみれば、大学生と会社もそんなに近くはないのです。会社から見れば大学生は取りあえずは立派ですが、やはり子どもだと思うところもあり、近くはありません。また中学生と大学生は比較的近くはありますが、同じかというとやはり違います。みんな違う経験や違う情報を持っています。そういう人たち

が緩くつながることによって、お互いに気付きや発見があります。

よく受け入れ先の企業の方々がインターンシップや「14 歳の挑戦」を行って、「初心に帰って、結構学ぶところが逆に多かったです」と言われますが、あれがそうだと思います。緩いつながりがあることで、情報やこういうことがあるとイメージできて、それが後々は「観」につながっていくのです。これがないとやはりうまくいきません。地域の中で緩いつながりをつくっていく。違うからいいのです。違う人同士が緩くつながることによって、お互いに気付きや発見があるという、ある意味では非常に壮大なプロジェクトだったと思います。多分午前中の発表もそうですが、かなりうまくいったのではないでしょうか。理由は、違うからよかったということです。希望を持つためにも、ウィーク・タイズは大事なのです。

大学もそうです。会社全般がそうですが、昔は働くことは組織ありきでした。組織があって、働くことが始まります。まず働くためには優れた組織に入り、組織のメンバーになります。だから有名な会社に入って組織の一員になれば、自分の将来も何とかなるかなと思うのです。組織はストロング・タイズです。会社の部署に入って朝、昼、晩一緒に働いてお酒も飲んで、昔であれば職場結婚も多いですから家に帰っても職場で知り合った家族がいて、土日はゴルフも会社関係とで、引退しても会社の OB 会があります。組織の団結力は強みであり、そして安心感もありました。だから、今でもなるべくいい組織に入りたいと思います。ただ、いい会社に入れば安心かというと、そんなことはありません。この何年間かで有名な会社がどんどん駄目になったりピンチになったりするのをもう山ほど見ています。

今は組織をベースにした働き方から、プロジェクトをベースにした働き方に変わってきたのです。つまり組織のメンバーありきではなく、こういうプロジェクトを達成したいということです。経営者やお客さんなどいろいろな人から、まずプロジェクトが下りてきます。このプロジェクトを成功させるのが仕事です。そうするとまず、君が責任者になってやってくれと責任者のプロジェクトリーダーやプロジェクトマネジャーが決まります。その時に、この仕事にプラスの人を集めてくるように言われます。そうするとウィーク・タイズが必要になるのです。リーダーや会社を興す人で、自分で何でもできると思う人は絶対に失敗します。自分は無力なのだという自覚がまず必要です。プロジェクトが大きければ大きいほど、自分にできないことができる緩やかなつながりがなければいけません。「こういうことをやるのだけれど、ちょっと手を貸してくれないかな」「分かった、やるよ」ということがあって初めてプロジェクトのメンバーが集まり、プロジェクトが動き出します。だからウィーク・タイズなのです。組織はストロング・タイズで、メンバーになることが大事です。だから今はプロジェクトベースなのです。

大学もそうです。何かをやるとすれば大学の同僚とやります。もちろんそういうこともありますが、大学を越えて、県外もそうですし、世界的にもそうですが、まずプロジェクトを成功するためにみんなでやっています。ウィーク・タイズがなければ、大学もあまりうまく研究できません。今回のプロジェクトで何が必要だったかというと、ウィーク・タイズです。ウィーク・タイズには新しい可能性や希望が必要です。組織などのストロング・タイズは安心の源ですが、緩やかなつながりは「こういうものがあるのか」という発見や気付き、可能性や希望を見つけるためのヒントがあります。だから、これからは緩いけれど信頼でつながったきずなを持つことが大事だし、すぐには持てなくても、そういうことは大事だということを中学生や大学生が社会に本格的に出る前に、それこそ勘所として持っていれば大きいと思います。そういうものを全く持たずに、組織に入っていれば安心だ

と思っていると大変だし、面白くありません。そういう緩やかなつながりを広げていくためのプロジェクトだったのではないかと思います。そこでいろいろな気付きを持って、子どもたちが生きていく最初のきっかけになったとすれば非常にいいと思いました。

4.希望を成す四つの柱

希望は夢とは少し違うと思います。「夢と希望」という言い方をしますが、先ほど学長もポスターに「夢を持つことの大切さ」とお書きになっていましたが、僕は夢と希望は少し違うと思っています。夢は「あれもやりたい」「これもやりたい」とどんどん自分の中からわき上がってきてほしいものだと思います。もちろん夢は無意識のうちに見ます。考えなくても「あれもやりたい」「これもやりたい」といろいろ出てくることが大きな活力になります。でも、希望は少し違います。希望はわき上がってくるというよりも、持たなければ生きていけないという、どちらかというと悲壮感に近いものです。

以前、希望という言葉と一番深いかかわりがある言葉は何か、毎日新聞のデータベースを使って検索技術を開発している人に調べてもらったことがあります。明治以降、希望という言葉と一番密接につながっている言葉は何かというと、出てきた言葉にびっくりしました。「水俣」という言葉と希望が、日本の歴史で一番深くかかわりがあったのです。今の水俣市はとてもきれいです。日本で最初にごみの分別を始めて、今は環境で最先端の町です。食べ物もおいしいし、町もきれいだし、人も優しいです。ただ、希望とつながっている「水俣」というのは水俣病の「水俣」です。日本が絶対に忘れてはいけない水俣病という公害問題であり、社会問題です。だから、教科書などではどちらかというと希望よりも失望や日本の失敗としてとらえられることが多いのですが、彼が調べたところ「水俣」が一番希望と近いそうです。

つまり本当に苦しい状況になった人でも明日生きていかなければいけないので、その時に今日よりも少しでもいい明日になると信じたいとか、誰かの苦しみを本当に和らげてあげたいというときに、悲壮な思いで実現できるかできないか分からないけれど持とうとするのが希望です。だから阪神・淡路大震災の後にも希望とよく言われました。そういう時は夢よりも希望という言葉になるのです。今回の震災の後も夢という言葉もたくさん出ましたが、どちらかというと希望という言葉が使われます。苦しい状況で、しんどいけれど生きていきたいというときに希望という言葉になるのです。

夢と希望はどちらがいい、悪いというわけでは全くなく、苦しい状況にいる子どもたちも、苦しい状況だからこそ本当は希望を必要としていると思います。いろいろな家庭環境の問題などがあって希望が持てない子どもたちも、本当は希望を必要としていると思います。だから、僕は中学校などで講演を頼まれることがたまにありますが、子どもたちに「希望を持ちましょう」とはあまり言わないようにしています。私が呼んでいただけるのはどちらかというと指導困難校が多いので、全然希望を持っていない子たちが多いので、何とか自分で考えるヒントみたいなものをと大変難しいご注文をいただき、緊張しながら行きます。その時に「希望を持ちましょう」と言うのは、どうせおれたちなんか無理だという反発のようなものを感じることが以前は多かったので、「希望を持ちましょう」「希望を持てばいいのです」といったことは言わないようにしています。

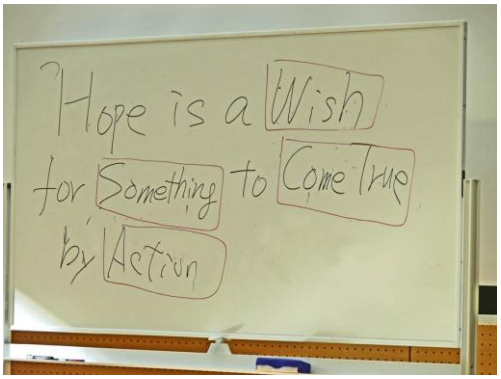
ただ、もしどこか自分の中で希望を持ちたいと思う人がいるならば、いろいろな人が研究してきたけれど、どうも希望は四つの柱から成り立っているようだという話をします。希望は英語でホープ（hope）と言うことが多いです。クラーク博士が言った「Boys, be

ambitious」のアンビション（ambition）の方が希望に近いと言う人もいますが、一応ホープにします。希望はウィッシュ（wish）です。気持ちや思いはとても大事です。ワールドカップやオリンピックなど何でもそうですが、スポーツの決勝戦の前にインタビューすると、大体選手は「ここまで来ると、気持ちの問題です。もう技術とかそういう問題ではないのです。気持ちで勝つか負けるかです」と言います。希望には、強い気持ちを持つ、強い思いを持つことが必要なのです。もう駄目だと思っていると希望は持てません。強い思いを持つことです。

では、思いがあればいいかというとそうではなくて、大事なものがあります。それはフォー・サムシング（for Something)、つまり具体的な何かに対する強い思いです。将来漠然と何となくうまく生きていけばいいとか、何となく良ければいいのではないかという希望は、なかなか希望としては成り立ちません。やはりその人にとって大切な何かを見定めて、それに対して強い気持ちを持つことです。その大切な何かは人によって違います。「世界平和が訪れることが私の思いです」と言えば、世界平和が大事なサムシングです。「私はそこまで大それたことは考えられなくて、とにかく家族が毎日三度ちゃんとごはんが食べられることが今の私の一番の願いです」と言えば、家族が三度ごはんを食べられるということも立派なサムシングです。大事なことは、その人にとって大切な何かを見定めるということです。それがないと希望はまぼろしでしかありません。

それをどうすればいいでしょうか。やはりカムトゥルー（come true）するのです。夢をかなえるドリームズ・カム・トゥルーです。実現する、かなえるためにはどうするのか。先ほど情報と言いましたが、いろいろな情報を集めて「こうすればかなえられるのだな」と段取りを知ったり、方策を考えたり、学習したりするのです。やはりかなえるということがないと、希望にエネルギーがわいてきません。かなわぬ希望というのは非常に苦しいものです。

最初は希望はこれだと思いました。でも話をしているうちに、もう一つだけ大事なものがあると分かりました。どうやって大切な何かをカムトゥルーするかというと、手段があります。バイアクション（by Action）です。行動の伴わない希望はありません。何がしかの行動を伴って、初めて希望は希望となります。



希望は四つの柱から成り立っています。希望は、あなたにとっての大切なサムシングを自分のアクションによって絶対にカムトゥルーするという強いウィッシュです。ほとんどルー大柴さんみたいですが、そういう四つの柱から成り立っているという話をします。もし今希望が持てないという人は、多分この四つの柱のうちのどれかがまだ自分の中で見つかっていないのかもしれません。では、どれが見つかっていないか考えてみようという話をします。すると、もちろん反応がないこともありますが、反応があることもあります。何となくぼんやりと将来うまくいけばいいと思っているだけで、自分にとって大切なサムシングは何かを自分は考えていなかったと。

これが成人の女性だったりすると、例えば「自分は本当は女優になるのが夢であり、希望なのです。けれど女優になるためには、落ちても落ちてもオーディションを受け続けるというアクションがなければ駄目なのですよね。最近していなかった。アクションが足りなかった」と出てきます。こういうことを見定めていくことで、希望は自分でつくれると

思えるようになるのです。私は、希望は与えられるものではないと思っています。人に希望を与えるということは大変大それたことです。希望は自分たちでつくっていくものだと思います。

今回の震災の被災地である岩手の釜石に、震災前から何度も行っていました。釜石は戦前にも2回の大津波でたくさんの人が亡くなりました。近代製鉄発祥の地なので、戦争中には武器を作る鉄が作られるということで、艦砲射撃で町が壊滅した過去があります。戦後は戦後で産業合理化で、まだ日本が高度成長で浮かれている時に早々と雇用がなくなっていき、町が急速に冷え込むという苦しいことを何度も経験しています。そのたびに立ち上がってきた町なのです。

今の釜石の復興のキーワードは「たわまず、屈せず」という言葉です。昔、貴乃花が横綱になる時に「不撓不屈の精神」と言いましたが、あれは、たわまず、屈せずと読むのだそうです。決して屈しないということです。それはどうやるのでしょうか。ある会社の社長で、何億円という借金を抱えながらも復活した方に希望とは何かと聞いたところ、「よく分からないけれど、分かるのは、希望に棚からぼたもちということはないことだ。もがいてぶつかっているうちに出会うものが希望だというのが自分の実感だ」と言われました。人から与えられた希望が希望ではないと言われたこともあります。被災地の方は今も本当に苦しいですが、そうやって自分たちで希望づくりをしていると思います。

5.「14歳の挑戦」から富山の希望へ

震災1カ月後ぐらいに釜石に行きましたが、その時に何を持っていくかを考えました。物資や食料はだいぶ行き届いてきたと聞いていたのでだいぶ悩みましたが、あるものを持っていくと大変喜ばれました。それはカレンダーです。家にあるような少し大きめで、書き込みができるカレンダーを持っていきました。今もそうですが、震災直後は非常に時間感覚が分からなくなります。「今日は何日だったっけ」「今日は何曜日だっけ」「今、何をすればよかったのだろう」と。だから、多分カレンダーにやるべきサムシングを1個1個書き込んでいったのでしょう。希望とはこういうものだと思いました。ある日突然希望が生まれたり実現したりするのではなくて、こういう1個1個の手書きの書き込みを繰り返して、うまくいかなければまた次の日とやっていって、希望はできていくのだと思いました。釜石に限りませんが、まさに希望は四つの柱から成り、それを一人一人の力でつくっていくことを皆さんなさっているのではないかと思います。

釜石の隣に大槌という町があります。こちらは釜石以上に本当に厳しい状況で、まさに町が壊滅状態に近い本当に苦しい状況になっています。地震と津波、火災も起こり、本当に厳しいのです。ここは港町ですが、大槌湾に蓬莱島という島があり、地元では「ひょうたん島」と呼ばれています。「ひょっこりひょうたん島」のひょうたん島です。お亡くなりになった井上ひさしさんが、実は若い時にお母さんの仕事の関係で釜石に住んでいらっしゃったことがあり、「ひょっこりひょうたん島」は井上ひさしさんの原作ですから、蓬莱島を見て考えたのではないかと地元では言われています。私は震災後釜石に行ったり福島や宮城へ行ったりしましたが、何となく今年は「ひょっこりひょうたん島」の歌が頭の中に浮かぶことがとても多くなりました。「苦しいこともあるだろさ。悲しいこともあるだろさ。だけどボクらはくじけない。泣くのはいやだ、笑っちゃおう。進め！」と。特に「泣くのはいやだ、笑っちゃおう。進め！」という感覚が、今の被災地の希望を表わしている感じがします。この間も釜石のカラオケで久しぶりにみんなで笑って飲みましたが、みんなで

肩を組んで「ひょっこりひょうたん島」の歌を歌いました。

このプログラムのおかげで、「14 歳の挑戦」の子たちもたくさんいろいろな失敗ができて、本当によかったのだろうと思います。そしてインターンシップの子たちも「もうちょっとああやっておけばよかったな」とか「次はこういうことをしたいな」「次の後輩がやるときには、こういうことを考えてほしいな」とか、たくさん失敗して、自分の失敗を潔く語れるような人には実は希望があります。自分の過去の試練や挫折を潔く自分の言葉でさわやかに語れる人は希望を持ちやすいのです。だからそういう意味で、上手な失敗をたくさんできて、ユーモアを持って「笑ってしまおう」と語れる人が富山にもたくさんいると思いますし、そういう人が子どもたちからどんどん生まれてくるプログラムとして、大変素晴らしい試みだったと思います。これからこのプログラムがどうなるか、まだご検討中かもしれませんが、いろいろな形で富山の経験を続けていってもらいたいですし、いろいろな取り組みの中で全国に生かされていくことを大変期待しています。

長時間になりましたが、ダブルユウジの前半の方はこちらで終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

（荒井）　玄田先生、ありがとうございました。皆さまにご紹介した冊子の中の玄田先生のお話の次のページに、お勧めの 4 冊を掲載させていただいています。これには写真を入れていませんが、個人的には『希望のつくり方』という本がとても大好きです。ぜひ今日の玄田先生のお話を聞いていただいた中で、ご興味のある方はご購入いただきお読みいただきたいと思います。

次は、中標津からわざわざお越しいただきました飯田先生に、今実際に中学で実践されているキャリア教育のビジネス教育、企業家教育の具体例についてご講演いただきたいと思います。では、よろしくお願いします。

基調講演「キャリア教育が子どもたちを変える～起業家教育からビジネス実践へ～」
飯田　雄士　氏（北海道漂津町立漂津中学校　教諭）

皆さん、こんにちは。もう一人のユウジです。私のところにこのシンポジウムの話があったのが 9 月上旬でしたが、なぜこんな田舎の片隅にある人口 6000 人の町の学校の教員に声を掛けてくださったのかなと最初は不思議でした。でも、開催要項を見て納得しました。玄田有史先生が話をされるということで、私は名前が似ていたので声を掛けていただいたのだなと納得しているところです。この名前を付けてくれた両親に、今本当に感謝しています。

実は北海道はもう雪が降っているものですから、天候の関係で一昨日富山に入らせていただきました。近隣の北陸には行ったことがあるのですが、富山は初めてです。早く着きましてホテルにチェックインできなかったものですから、コンビニへ行っておにぎりを買いました。その時にコンビニの若い男の店員さんが一度も私の顔を見てくれなかったのです。あれ、ちょっと元気がないなというのが第一印象でした。その後大学の近くに来まして、またコンビニに入ると女性がいました。私は妻にしっかりしつけられていますので、女性が来たら道を譲るようにしているのです。女性が入っていった後に男の人が二人、これも私に一切目もくれずにすっと入っていきました。3 人目でようやく私に気付いてくれて、私の方が年上なので「どうぞ」と譲ってくれました。多分富山大学の学生だと思います。その方に本当に救われたというか、よかったなと思いました。そして大学に来て、この学生たちの立派な運営の仕方や午前中の話を聞いて、本当にうれしくなりましたし、富山の未来は明るいなと元気づけられたところです。私がかかわっている子どもたちはまだまだ元気がないところもありますので、この富山の話を北海道の子どもたちに聞かせたいと思っています。

1. キャリア教育を始めたきっかけ

左側の写真がチシマザクラです。私たちの地域にはソメイヨシノはありません。ですから、桜の開花宣言はこのチシマザクラで行われます。桜が咲くのは 5 月末です。数年前にゴールデンウィークの半ばの登校日に吹雪で臨休になったことがあり、連休が長引いてラッキーだった年もありました。右の写真は冬、マイナス 20℃ぐらいになりますと海水温と気温の差で蜃気楼が起こり、朝日が四角く見えるというものです。

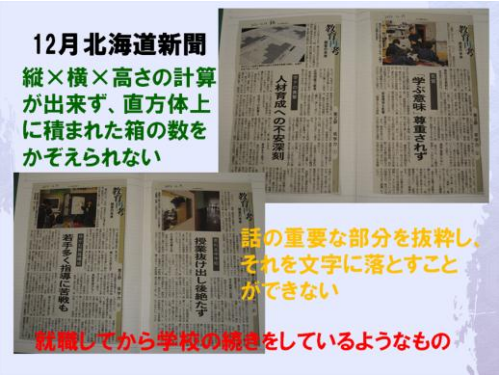
標津町から国後島まで 24km しかありません。人口 6000 人です。こんな町から呼んでいただきました。知床半島の付け根にあります。標津町は秋サケ漁で日本一になったこともある町です。昨日富山の魚をたくさんいただきまして、本当においしかったです。ある意味北海道民ですからプライドがあったのですが、富山の魚はおいしいです。

ノドグロが本当においしくて、後から調べたらとても高級なお魚だったと聞いて大変恐縮しました。富山のお魚はおいしいと北海道の人たちに伝えたいと思っています。

標津町では給食にイクラ丼が出ます。ただしごはんの量に対してイクラが多すぎるのです。私は実は東京生まれなので、東京生まれの私にとっては非常にありがたいメニューですが、子どもたちは家で食べていますので、たくさん残すのです。食育をしっかり受けていますので、無理に食べないという子どもたちです。

次が、現在の標津中学校の子どもたちの様子です。全校生徒は 134 人、打てば響く素直な子どもたちで、先輩後輩の上下関係もなく、わきあいあいとやっています。今は落ち着いているといえる学校です。北海道には 600 校以上の中学校がある中、今年は部活動で卓球、陸上、スケートの三つの部が全国大会に駒を進めています。野球部は軟式野球連盟の北海道大会で優勝しまして、来週から台湾で親善試合を行うことになっています。

勉強の様子ですが、ようやく学習面で伸び始めたというところです。中学 3 年生でも家庭学習が定着しているのは 57.5%、勉強に対してはあまり熱心とはいえない地域です。

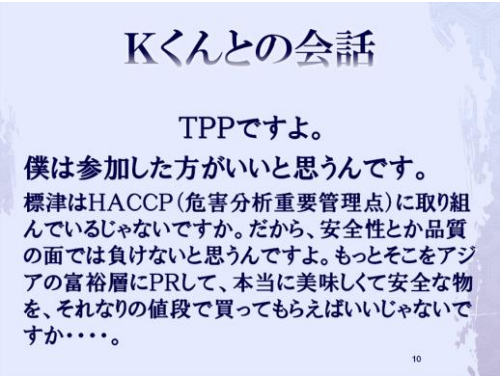


これは昨年 12 月に北海道新聞の地方版に載った記事です (#6)。企業の方がこんなコメントをしています。「縦×横×高さの計算ができず、直方体上に積まれた箱の数を数えられない」「話の重要な部分を抜粋し、それを文字に落とすことができない」「就職してから学校の続きをしているようなもの」。私は実は免許を国語と数学の両方持っていますが、国語と数学を教えている私としては本当に申し訳なさでいっぱいになった記事です。

学力が伸びない理由の一つは、標津町が入っている北海道の根室管内は普通高校が 6 校ありますが、すべて定員割れであることです。統廃合の問題もありますので、高校側は入試の点数が 0 点でも取りあえず合格させます。さらに公立高校の授業料は事実上ただです。高校進学を目的とした指導、昔で言うと出口指導になりますが、それが一切通用しないのが私たちの地域です。だからこそ本質を問い続ける教育が必要なのです。何という教育でしょうか。キャリア教育、社会的・職業的自立に向けて必要となる力を育てる教育です。

2. 子どもたちの現状

今回の 30 分は、K 君に主役になってもらおうと決めました。彼は 2 年前に標津中学校で行ったビジネス実践でアサンテ社という国際関連会社の社長を務めた、現在高校 2 年生の若者です。親は漁師で、本人も後継者となることを希望しています。彼は今年の 7 月に私に会って「先生。やばいっすね、標津」と切り出しました。何がやばいのでしょうか。



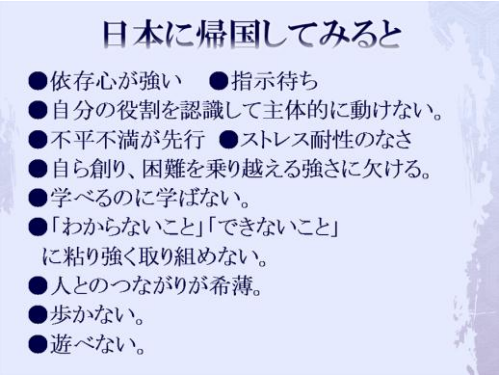
彼は「TPP ですよ。僕は参加した方がいいと思うのです。標津は HACCP に取り組んでいるではないですか。安全性や品質の面では負けないと思うのです。だから、もっとそこをアジアの金持ち層に PR して、本当においしくて安全なものをそれな

りの値段で買ってもらえばいいではないですか」言いました。私はすごいことを言うなと思いました。1次産業が中心の北海道ではどこの役場に行っても、TPP交渉参加に断固反対という垂れ幕が下がっています。公務員の私はとてもこの問題について意見を言うことなどできない雰囲気です。当然彼の家族も反対の立場であったと思います。このK君たちの学級の生徒40人と出会ったのは平成20年度でした。ここで4年前にタイムスリップしていただきます。

平成19年度まで、私は3年間東アフリカのケニアでナイロビ日本人学校の教員をしていました。現地のNGOを支援していたのでスラムにちょくちょく行っていました。スラムの子どもたちはよく遊びますが、懸命に働いて兄弟の世話もよくしていました。公立小学校では、勉強すれば貧しさから少しでも解放されることを知っているので、授業にとても熱心に取り組んでいました。ちなみに6年生の算数では、60人ほど詰め込まれた教室で分数の方程式をほぼ全員が理解していました。

私のケニアでの一番の楽しみは、短パンに20シルコイン（約30円）を入れて日本人学校から家まで16kmほどの距離を走って帰ることでした。20シルというのは足が痛くなったら乗り合いタクシー（マタトゥー）に乗れる金額です。それからのどが渇いたら、コーラが大体13シルで飲めますので、コーラを飲むためのお金です。ケニアでは私のような外国人が走っていると、たくさんの人が話し掛けてくれます。中には、お金がない、仕事がないか、日本車を輸入する仕事がしたいなど、駄目もと精神で聞いてくる人もいますが、とにかくポジティブでコミュニケーションが上手です。そんなたくましい子どもたち、シンプルですが線が太いケニアの人々の生活に触れて、私は日本に帰国し、標津中学校に赴任したわけです。

富山の皆さんは、北海道の子どもというとどんなイメージですか。ほっぺたが赤くて、鼻水を垂らして長靴で雪の中を遊んでいるというイメージかもしれません。確かにそのイメージにぴったりな子はいますが、開拓精神が豊富でたくましいという良さは失われつつあると感じています。それは北海道がとても便利になり、困ったり我慢したり不自由を感じたりすることがなくなってしまったからだと私は考えています。ちなみに、全国体力テストの結果も中学2年生の女子は全国最下位、ほかも40位台という低さです。

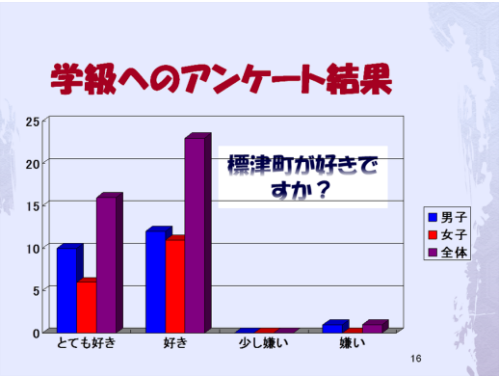


帰国して、私はK君たち中学2年生40人の担任となりました。このクラスの生徒たちを担当して感じたのは、悪いことばかりで申し訳ないのですが、依存心が強い、指示待ち、自分の役割を認識して主体的に動けない、不平不満が先に立つ、ストレス耐性がない、自ら創り困難を乗り越える強さに欠ける、学べるのに学ばない、分からないことやできないことに粘り強く取り組めない、人とのつながりが希薄、歩かないといったことです。

歩かないというのは、私たちの地区では夕方の学校近くになると渋滞が起こるのです。北海道は渋滞がないはずですが、渋滞が起こります。お迎え渋滞というものです。本当に

子どもは歩けなくなりましたし、親も歩かせなくなりました。ちなみに大相撲でかつて大鵬、千代の富士など北海道力士が幕内の半数近くを占める時代もありましたが、実はもう10年間も北海道から幕内力士は出ていません。

最後に、遊べないというのは集団遊びができない子が増えたということです。昼休みがつまらないとか退屈だと言う子が非常に多かったのです。実は私はその時にトランプを与えて、大富豪を子どもたちと一緒にやろうとしたのです。子どもたちが微妙な顔をしているのでどうしたのかと思ったら、生徒指導部の先生に怒られてしまいました。トランプは不要物ということで、校則に違反していたのです。それを私が与えてしまったので子どもたちが面食らっていたのです。私にとっては遊ぶという大事な行為をするための必要な道具だったのですが、不要物と扱われてしまいました。決められたルールを守らせるのは大事なことなのでトランプを使わない遊びをしましたが、問題だと感じたのは、子どもたちがなぜ禁止されているのかということを全然理解していないことです。ですからそういう子どもたちは大変素直ですが、物足りなさを感じたことは事実です。一人遊びに困らない時代、疑問など抱かなくても不自由はありません。放っておいたら工夫するとか、クリエートすることができなくなる子どもたちです。



クラスにアンケートを取ったところ、学級40名中38名が標津町をとても好き、または好きと答えていました。また、将来標津に住みたいかという問いの結果も、住みたくないと答えたのはわずか7.5%。本当に標津という町が好きな子どもたちでした。

しかし標津町について作文を書かせたところ、内容は「店をもっと増やしてほしい」「遊ぶ場所を作ってほしい」、町から依頼された山車の引き手や踊り手を拒んでおきながら「町民祭りはなくさないでほしい」と書くなど、町は誰かがつくってくれるもの、うまくいかないのは役場のせい、勉強は先生に教えてもらうものなど、すべてにおいて依存心が強く、自分たちが主体的につくっていくという気持ちが低い状態でした。

3. 子どもたちの起業プラン

そこでキャリア教育の計画の中に、急遽「標津町の良さを生かした起業プラン」という活動を組み入れました。そこでは「この標津を活気がある住みやすい町にするために、自分たちの手で労働を創り出し、お金を稼ぐことができる会社を起業せよ」と指令を出しました。机上のプランです。この指令を出した後、子どもたちは乗り気だったのですが、ある生徒は「先生、こんなプランを作って役場に要望するのですか」と言ってきました。「そうではないよ。君たちが将来つくるのだよ」と言ってもぽかんとしていましたが、そんな状態でした。標津町にはふるさと学習、地域理解学習のプログラムが既にできていましたので、地域素材を生かした起業家教育は比較的スムーズに入れることができました。わずか10時間の活動でしたが、7月には飯田学級グループ三つの会社から八つの事業プランが発表されました。発表会の目標は、このプランなら融資しても大丈夫と銀行に判断してもらえるようなプレゼンをしようというものでした。

まずは、自然観光・体験会社です。アイデア1はダチョウ・オオカミパークです。鹿肉カレーは、実際に鹿肉販売業者を招いて調理実習を行いました。6年目には借金を返済で

きる予定のプランです。

アイデア 2 は体験ツアーの誘致です。年間 550 万円の黒字プランです。

アイデア 3 は観光と地域生活の拠点となる大きな夢、社長の名前を取って「大夢パーク」の建設です。子どもたちはこういうものを作らせたら、どんどん工夫します（#36-44）。結構放課後にやっていました。写真はオホーツク紋別のガリンコ号ですが、ビッグドリーム号を就航させるそうです（#45）。返済まで 10 年もかかる、少し勇気の要るプランです。

アイデア 4 は、施設・土地利用会社による合宿所の建設です。この社長は走り高跳びで北海道で 1 番になった子ですので、恐らくこんな施設が欲しかったのだと思います。これも莫大な初期投資が必要となるプランです。

アイデア 5 の会社は、食品関連会社です。アイデアはワンコイン、ワン紙幣で食べられるレストランです。実際にサケを調理する達人を招いてメニューを作りました。テナントなので、1 年で黒字に転ずる優良プランです。

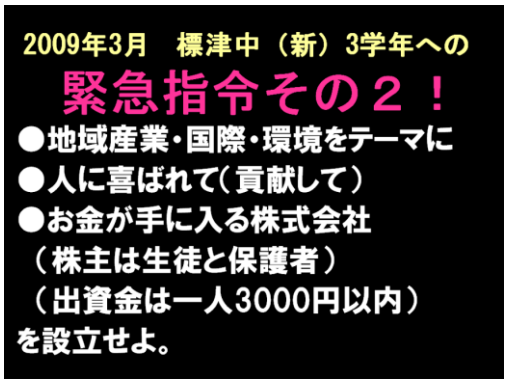
アイデア 6 は 500 円のセット寿司です。これも実際に調理してみました。15 年後には札幌進出を狙っているプランです。

アイデア 7 は軽食＆デザートのお店です。「さけいも団子」はなかなかのヒット商品でした。年間 17 万個売り上げるという楽観的なプランです。

最後のアイデア 8 は標津の特産物を販売する市場です。インターネットでの注文も受け付けて、3 年で借り入れを返済するプランです。

発表会には、標津町役場商工観光課の方を招きましたが、さけいも団子はすぐにでも商品化したいとおっしゃっていただき、子どもたちの大きな自信となりました。生徒は人件費の割合の多さに驚き、貢献できなければお金がもらえないという社会的責任を理解していました。また、2 学期以降もことあるごとにビジネスについてのアイデアが生徒の口から出されるようになり、ビジネスの面白さを多くの生徒が実感したようでした。この後に行われた 2 日間の職業体験では、「自分ならもっとこうしたいと思うことがありましたが、やはり現実だと失敗が怖いし、簡単にはできないですよね」というちょっと生意気な発言ですが、主体的に、そして現実的に職場体験を行ったことが分かる感想も聞かれました。

そんな時に、東京の中高一貫校郁文館夢学園の石田勝紀さんの講演会があり、学校祭の模擬店でビジネスを学ぶ活動を紹介していただきました。そこで石田さんに送っていただいた資料をアレンジしながら、公立の標津中学校でも思い切って実際にお金を動かす活動に挑戦してみることにしました。具体的には、株式会社をつくる疑似体験です。



その時出した指令は、地域産業・国際・環境をテーマに、人に喜ばれて（貢献して）、お金が手に入る株式会社（株主は生徒と保護者、出資金は 1 人 3000 円以内）を設立せよというものです。36 時間扱いの計画です。この年は複数担任制を採用しましたので、特別支援学級の教員も含めて 5 人の教員でサポートしました。4 月 26 日の日曜授業参観日に保護者

に事業計画を説明し、株式を販売しました。

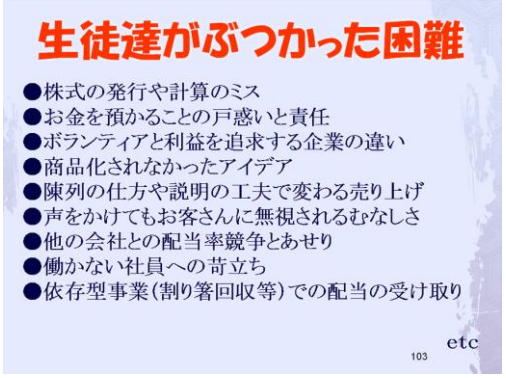
まずはＫ君が社長を務めた国際会社アサンテの事業計画と定款です。アサンテはスワヒリ語で「ありがとう」という意味です。次が環境会社リサイクルカンパニーです。地域会社渡福です。

ここからは、この年の 10 月に実施した解散株主総会をご紹介します。国際グループは、ケニアの身体障害者が作ったものを適正価格で購入し商品価値を高めて販売するというフェアトレードを行いました。また、ケニアのストリートチルドレンに視点を当てたドキュメンタリー映画「チョコラ」の上映会を行い、ケニアの小学校に給食を提供する支援募金も行いました。フェアトレードや募金活動は、町民祭りや修学旅行先の札幌でも行いました。また、国際パンフレットを作って配りました。募金をしていただいた方々にはケニアから直筆のお礼状が届き、生徒たちも大喜びでした。

地域産業グループは、標津の素材を生かしたキャラクターと食品を開発しました。多くのキャラクターの中から、標津の特産のサケとウシを合体させたキモかわいい「サケシ」が選ばれて、キーホルダーを作成しました。また食品は調理実習を繰り返して、さけサンドとはまなすアイスに決まりましたが、アイスは保健所の許可が下りませんでした。町民祭り「水・キラリ」では、さけサンドはあっという間に売り切れ、キーホルダーも 200 個以上売り上げました。札幌では観光パンフレットを配り「サケシ」のキーホルダーを販売しましたが、キーホルダーを買ってくれた山口県の方から「皆さんと出会って標津に行きたくなり、この前標津に 2 泊してしまいました」というはがきが届き、生徒たちは喜んでいました。これは北海道新聞に取り上げられた記事です。

最後に、環境グループはお金を稼ぐビジネスと理想を追求するボランティアの違いに苦しんでいましたが、町内のレストランから回収した使用済み割りばしで割りばし細工を作り、さらに竹の割りばしを竹炭にして販売しました。町民祭りでは作ったものをすべて売り尽くし、札幌では漁業組合から提供していただいた鮭とばを 100 袋以上売り上げました。環境グループが放課後の時間に作った事業報告です。人件費がないので、かなりの配当が出ています。213％です。環境グループは東京農業大学を招いての環境ミーティングに参加し、発表も行いました。

ビジネス実践の益金は、半分は株主に配当、半分は税金という名目でケニアへの給食支援金としました。国際グループが行った募金、それから映画上映会のチケット代と合わせて 30 万円､スラムの小学生 115 名分の年間給食費を届けることができました。



生徒たちはビジネス実践でさまざまな困難にぶつかりましたが、その分学んだことが多くありました。生徒たちは、何のために勉強するのか、なぜ協力することが必要なのか、どんな力が求められているのかが理解できるようになり、学校生活や将来への見通しが持てるようになり、学校教育活動全体に相乗的な効果をもたらすことができました。K 君たちは現在高校 2 年生で、地元の高校で標津の自然を守るためにさまざまな調査をし、地域の子どもたちにも喜んでもらえるイベントを企画したり、地域行事の運営に協力したりするなど主体的に貢献しています。

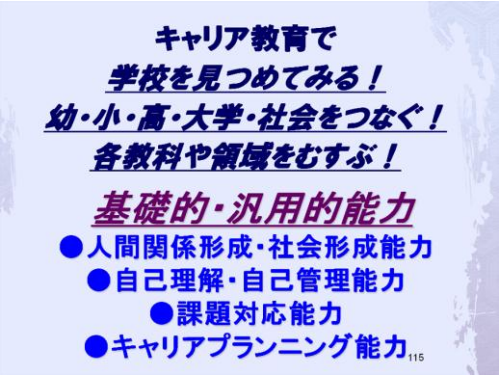
22 年度からは総合的な学習の時間の減少により、生徒会の有志活動としてフェアトレードのみ続けることになりました。22 年度は標津町内で 2 回、釧路市内で 2 回販売し、売上 33 万 8570 円をケニアへ送金することができました。23 年度も既に 3 回のフェアトレードを実施しています。一般的には中学校でお金を動かす活動は早いような気がします。しかし、教育活動は目指す姿と子どもの実態とのギャップ、つまりニーズを埋めるために仕組まれるものであると考えます。その意味で、標津中学校の生徒たちにとってはニーズを満たす効果的な取り組みだったと感じています。

4. キャリア教育のニーズと「NYESS」の活動

今月、国立教育政策研究所生徒指導研究センターから「キャリア教育を創る」という冊子が配られました。今回は PDCA サイクルに従ってまとめられていますが、「学校オリジナルのキャリア教育の物語を創ろう」の 1 歩目は実態をつかむことです。まずは子どもたちの実態をつかみ、目指す姿とのギャップ、ニーズを探ることが大事だと思います。そして教育活動全体をつなぎながらギャップを埋め、ニーズを満たしていきます。さらに子どもたちの変化を見取りながら、絶えず改善・進化させていくことが大切だと考えます。

子どもたちの実態をチェックするのに、これまでは八つの能力を挙げていました。私たち根室地区でも､幼稚園から高校までの 15 年間それぞれの段階で身に付けるべき課題をまとめ、例えば中学校ならばこの部分だと、目の前にいる子どもたちと照らし合わせて、できていない部分があればその能力を付けるための活動を仕組んでまいりました。どんな活動を行うかにつきましては、各能力を育てるための活動が記載された構想図にまとめられています。例えば中学 3 年生であれば、このラインにかかっている活動を行うことになります。活動には幅を持たせてありますので、地域や子どもの実態に合わせて各学校で柔軟

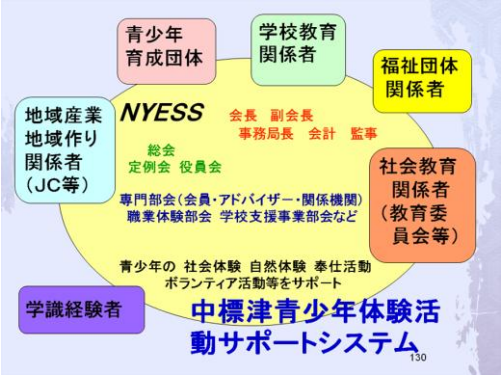
にプログラムを組み、15 年間を全体として一貫性が生まれるようにしています。



キャリア教育は社会的・職業的自立に向けて必要となる力を育てる教育ですので、それ自体が学校の目標になってもよいと思いますが、学校全体を見直す点検ツールにもなり、幼・小・中・高・大学、そして社会をつなぎ、各教科や領域を結ぶ手段ともなります。社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力として、1 月に出された四つの能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）をこれから活用していくことになるでしょう。

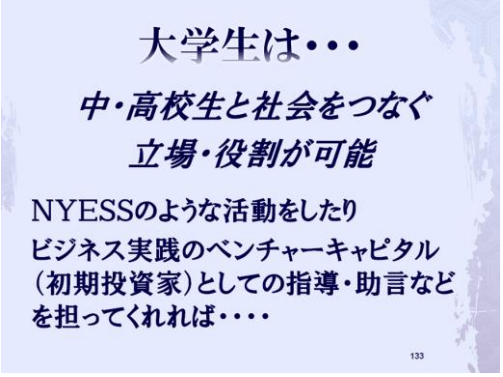
キャリア教育がクローズアップされている背景には､多くの社会的なニーズがあります。学校現場がこのような現状をしっかり認識して、社会的なニーズを満たす努力をすることが必要です。中学生の 1 日の平均勉強時間は、中国は 14 時間、韓国は 9.8 時間、そして日本は 8 時間（学校で 6～7 時間）です。日本はもっと頑張らせなくてはいけません。人生を切り開く力を付けるために、知・徳・体をバランスよく身に付けなければならないことを毎日口を酸っぱくして生徒たちに言って、嫌がられているところです。

最後に、地域全体で「14 歳の挑戦」をサポートしている富山の皆さんの前で大変恥ずかしいところですが、私どもの地域でキャリア教育を支えている団体について紹介させてください。名前は「NYESS」です。なかしべつ青少年体験活動サポートシステムといいます。このシステムのスタートは先ほどの玄田先生の話にあったように、ウィーク・タイズ、同窓会から始まります。地元で荒れた中学校があったのですが、その教員が同窓会で「大変だ。何か助けてくれないか」と言ったところ、その中に青年会議所（JC）の理事長がいて、そこと連携して膨らんでいったのがこの NYESS という組織です。



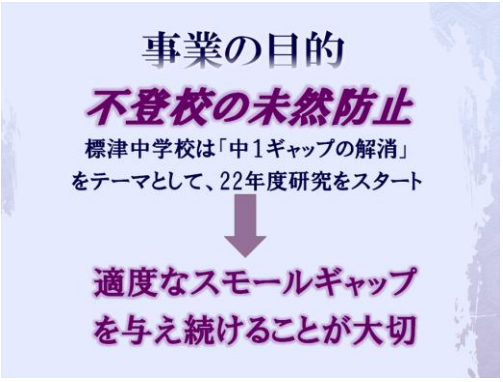
詳しくはNYESSのホームページがありますので、これをご覧いただければ分かります。職業体験を受け入れている150近くの事業所が紹介されています。子どもたち自身が希望する事業所を選び、ホームページ内にある履歴書を持って自分で依頼するようになっています。これは職場体験、職業インタビュー、職場訪問の様子です。

NYESSは可能な限り学校のニーズに応えますので、要望に合わせて人材を選び、職業講話を行っています。また地域の奉仕活動に協力したり、求めに応じてトラックや重機を出したりして地域の子どもたちの活動を支援しています。今、これだけの関係者が組織されていますので、学校から上がった要望にはほぼ応えることができています。心強いメンバーです。



私たちの地域には大学はありませんが、大学生は中・高校生と社会をつなぐ立場や役割が可能です。NYESSのような団体を運営したり、例えばビジネス実践のような取り組みがあれば、ベンチャーキャピタルとして会社を立ち上げる資金を投資してもらったり、授業の内容や方法について指導や助言を行うなど、年齢が最も近い良識ある大人、ウィーク・タイズとして教育活動に入っていただけると助かると思います。富山大学が行っている「14歳の挑戦」へのサポートは、学校にとっても子どもたちにとっても大変心強い取り組みだと感じました。うらやましいです。

5. 今後の展望



最後に、標津中学校では昨年度から2年間国立教育政策研究所の指定校として、不登校の未然防止を目的とした魅力ある学校づくり調査研究事業を行ってまいりました。昨年度は中1ギャップの解消をテーマにスタートしたはずでしたが、さまざまな取り組みを行い各種調査結果を分析していくと、子どもたちの実態に応じて適度な困難さを持つ課題、スモールギャップを与え続け乗り越えさせる経験を繰り返すことが不登校の未然防止につながるという結論に達しました。職場体験でも学校がすべてをお膳立てし、事業所もまるでVIP対応のように懇切丁寧に子どもたちに気を使ってくださるケースも、私たちの地

域では時々見られます。ハードルが高すぎても駄目ですが、困難を乗り越えて役割を果たし、誰かの、社会の役に立ったり貢献できたりした体験を継続して積むことこそが、荒井先生がおっしゃっていた「自己信頼」につながりキャリア形成にもなるかと思います。

子どもたちが裸のまま激烈な競争社会に放り出されることがないよう、キャリア教育の視点から子どもたちを、そして学校を見直し、人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力をしっかりと身に付けさせることができる教育の在り方について、ぜひ皆さんと一緒に考えてまいりたいと思います。この後のパネルディスカッションでも、ぜひよろしくお願いします。以上で終わりたいと思います。ありがとうございました（拍手）。

（荒井）　飯田先生ありがとうございました。

第３部　新たな出発点を求めて（パネルディスカッション）

コーディネーター　　小助川貞次（富大流人生設計支援室長）
コメンテーター　　玄田　有史（東京大学社会科学研究所　教授）
パネリスト　大学生：金盛　　愛（富山大学経済学部４年）
　　大澤　　亮（富山大学医学部６年）
　　中学校：飯田　雄士（北海道標津町立標津中学校　教諭）
　　矢崎千栄美（射水市立大門中学校　教諭）
　　高　校：長田　　治（富山県立富山いずみ高等学校教諭）

（松井）　それでは、富大流人生設計プログラム第３部「新たな出発点を求めて」（パネルディスカッション）を始めます。本日は７名の方々にご参加いただきます。簡単にご紹介申し上げます。コーディネーターの富大流人生設計支援室、小助川先生。

（小助川）　よろしくお願いします（拍手）。

（松井）　高校生パネリストの富山県立富山いずみ高校教諭、長田治先生。

（長田）　よろしくお願いします（拍手）。

（松井）　中学校パネリストの第２部でお話しいただきました飯田雄士先生。

（飯田）　先ほどはありがとうございます（拍手）。

（松井）　富山県射水市立大門中学校教諭、矢崎千栄美先生。

（矢崎）　よろしくお願いします（拍手）。

（松井）　大学生パネリストの本学医学部６年生、大澤亮さん。

（大澤）　よろしくお願いします（拍手）。

（松井）　同じく本学経済学部４年生、金盛愛さん。

（金盛）　よろしくお願いいたします（拍手）。

（松井）　そして、第２部でお話しいただきましたコメンテーターの玄田有史先生（拍手）。なお、このパネルディスカッションの司会は、コーディネーターの小助川先生にお願いしたいと思います。小助川先生、お願いします。

（小助川）　ただ今よりパネルディスカッションを始めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いします。最初から時間の制限を申し上げるのは大変恐縮ですが、非常に限られた時間ですので、今から大体１時間ぐらいをめどにしてまとめて、このパネルのテーマである「新たな出発点を求めて」というところに何とかたどり着ければと思います。

最初から到着点といいますか、結論をあまり誘導してはいけないと思いますが、恐らくこの取り組みは、4 年間やってまいりましたが、そもそも明確な成果などがなかなか見えにくいものです。もちろん数値的には何人が何社で何校の生徒、何人とかかわったということは出ますが、具体的にどのくらい学生が伸びたかとか、成長したかというのはなかなか測りにくいところがあります。なおかつ新たな出発点ということですので、こうでなければならないとか、「こういう出発点でスタートするのだ、頑張ろう」というところは多分なかなか見えないと思います。ただ、そんなことを言っても全くないというのでは困ります。例えが悪いのですが、次の出発点の原子核になるような小さなものが見えれば、そこから広がっていけるのではないかと考えています。そんな感じで進めてまいりたいと思います。

学生支援プログラムですので、やはり学生の声、率直なお話を最初に優先して聞きたいということで、金盛さんから順番にお話しいただきたいと思います。時間は 1 人 5 分ぐらいを目安にしていただいて、今日のテーマにかかわるところで、必ずしも「14 歳の挑戦」やキャリアということではなくても、当然皆さんかかわっていますので、ご自身がそれぞれかかわってきたこと、あるいは今頑張っていること、これからのこと等を中心に話していただき、それが結果的に私たちにとって次のステップへの種になればというところでお話しいただければと思います。非常に曖昧模糊とした感じですが、このような感じでお話を進めてまいりたいと考えています。

それでは早速ですが、金盛愛さんからよろしくお願いしたいと思います。

（金盛）　今、紹介にあずかりました富山大学経済学部 4 年の金盛愛と申します。よろしくお願いします。

私は今回「14 歳の挑戦」を実際に受けた側として、ここに座っています。ということは、私自身生まれも育ちも富山、そして富山大学ということで、富山を大変愛しています。そういう私は実際に小学校、中学校、高校と進学校に通っていまして、自分自身が地域とのかかわりがいつあったかとあらためて考えてみますと、「14 歳の挑戦」の時の記憶が一番濃く残っています。地域とのかかわりが自分としては薄いという感想を持っていますが、私は大学に落ちてしまい、高校から大学に入るまでの 1 年間浪人していたという経験を持っています。その時に、今まで中学校、高校と敷かれたレールに安心し、勉強すれば大学に入れて、社会に自然に溶け込んでいけるのではないかと一人で勘違いしていたという自分に気付き、予備校に入った時に私は一体何がしたいのか、自分は何ができるのかと非常に迷った時期がありました。そしてその 1 年間で、誰も自分の人生をつくってくれない、自分の人生は自分で決めていかなければならないことをとても強く感じました。そして私自身レールに乗ってきたということもあり、その予備校に通う 1 年間は、とても恥ずかしいという言葉が合っているかどうか分かりま

せんが、自分としてはあまり人に知られたくないものでした。
　しかし、その予備校に通っている時に出会った人たちの中に、一度社会に出て医者になりたいと思い医学部を目指してもう一度頑張っている人、また結婚して美容師をしていたけれど大学にもう一度入りたいと思い勉強している人など、さまざまな生活背景を持った人たちに出会うことができました。その時に、自分自身がとても小さいというか、もっといろいろなことに挑戦して、自分自身で人生を切り開いていけるということを強く感じました。そして大学受験をへて富山大学に入学し、大学の経営戦略のゼミを通して、半年間ではありましたが、富山商工会議所の主催で青年部の方々と一緒に模擬会社をつくり、実際に商品を作って売るという作業をしました。いろいろな業界の方たちとともに話し合って悩みながら、実際に販売することまでつなげていきました。
　そのような経験をへて、就職活動を終えて社会に出ていく立場にある私ですが、いろいろな考えの人たちがいることに気付きました。まだ私自身、何がしたいのか、社会に出て何ができるのかということがきちんと明確になっているわけではありませんが、人とのつながりによって「こういうふうに生きていきたい」「こういう人になりたい」という目標ができることは、自分がこれから生きていく何か指標になるのではないかととても感じることが最近あります。
　今までの私のこの短い経験を通してですが、人と人とのつながり、また立場の違う人と出会うことによって、自分の視野や自分の置かれている立場への見方を変えることもできると思い、私自身、地域とのかかわりをへてつながりが広がっていくことがとても大切ではないかと感じています（拍手）。

（小助川）　どうもありがとうございました。時計で測ったように、ちょうど５分で終えていただきました。そんなにきっちり５分ということではございませんので、そのあたりは少し緩やかに考えていただいて結構です。
　それでは２番手は、大澤亮さんです。どうぞよろしくお願いします。

（大澤）　ご紹介にあずかりました富山大学医学部６年、大澤亮と申します。今日はこのシンポジウムにシンポジストとしてお話ししてほしいと荒井先生と小助川先生からお話があり、自分には荷が重いと思いながらもここに座っています。まず、自分がこのインターンシップや「14 歳の挑戦」という取り組みに参加しようと思ったきっかけをお話ししたいと思います。
　まずこの取り組みを知ったのは、確かSNSという富山大学版のmixiのようなもので、そこにあった書き込みから見つけてアクセスし、この活動に参加しました。なぜ自分がインターンシップや「14 歳の挑戦」に興味を持ったかというと、昨日の夜から考えてみたのですが、多分そこには自分の親の後ろ姿、背中があったのだと感じています。自分の両親は共働きで、本当に子どものために生きているような人です。公務員ですが、例えば大雪が降れば出ていき、地震になれば「震度４以上だから行かなければ」と言って役所や街に出ていきます。そういう姿をずっと見てきた自分にとっては、なぜこの人はこんなに仕事をして頑張っているのだろう、そこにどんな意味があるのだろうかと想像していました。そして自分が今大学生になって医学部に入り、もう医者になるというある意味１本のレールが敷かれた上に乗った時に、もっと自分の母のようないろいろな人の仕事や生き様を見てみたいという思いがずっとありました。それがあったために、今回このインターンシップに行かせていただきました。

また医者という仕事には、基本的によく言われることですが、教育・臨床・研究を通して社会貢献をするという言葉があります。社会貢献をするためには、やはり社会というものがある程度自分の中に見えていないと、本当に自分のしていることがいいことなのか、思い込みではないのか、独り善がりではないのか分からないという思いがありました。できればそういう意味で自分の視点を広げたい、いろいろな人と話してみたいという思いがあり、今回この企業に行かせていただいたり、五福キャンパスでいろいろな学部の方とお話しして、そういう人たちが就職活動を通して成長していく様子を横で見たりしながら少しずつ学んでいました。

インターンシップで一番感じたことは、医療への期待です。自分は富山新聞社様に1週間ほど行きましたが、「最近、市民や国民の方が医療に対してとても期待している。医療の記事を載せると反響が大きい」と聞きました。そういう話を聞きながら、医療者としてそこには大きな期待があると感じました。

また、自分がそのように社会を見たいという思いもありましたが、同時に、逆に自分たち医学生や医療界のことをインターンシップを通して知ってほしいという気持ちもありました。医療の世界はなかなか狭く、プロフェッショナリズムのある専門性の高い世界になってしまうので、どうしても見えにくい部分があると思います。そういう中で、インターンシップを通して、ほかの人たち、市民の方たちが医療について興味を持ってくれたり助言していただけたらという思いが、今はとてもあります。

「15歳の選択」に行かせていただいた時は、やはり仲間を見たかったという思いがありました。いろいろ話を聞いていて、その中で一番残った言葉を一つ挙げるとすると、今日はちょうどいらっしゃらないと思いますが、卒業されて1年目の安達（あださく）さんが書いていた言葉です。「就職活動を通して、一応いろいろな企業に面接して通って受かった。けれども、それは演技力で受かっただけかもしれない。本当にそれでいいのだろうか」という自分を内省しているような文章だったと思います。それを見ながら本当の意味でのキャリア、今まで荒井先生が伝えたかったキャリアや、小助川先生が伝えたかったキャリアというものが、彼女にはきちんと伝わっているのだろうと感じていました。

また同時に、自分はよくそういう悩みや、演技ではないのかということについて考えたりして人の話を聞いていると、「取りあえず自分がもしこういう人になりたかったら、そのように演技でいいからし続けること、継続し続けてみなさい。もし自分が根暗で、患者さんに対して嫌な印象しか与えないと思っていたら、明るい雰囲気で常にそういう演技をし続ければそういう人間になれる」という言葉を前にいただいたことがあります。そういう意味で今回のいろいろな経験を通して、自分の今まで学んできたことが少しずつ結び付いて、一つのある形になりつつあればと思っています。

今回いろいろやってきて、5〜6年間を振り返ってみて最後に一つ言っておかなければいけないと思うのは、自分のやってきたことを一緒にやってくれた仲間がいたということと、後輩が大変よくやってきてくれたということです。この前の大震災があって「ボランティアで街頭募金したい」と言えば、彼らは勝手にどんどん動いて街頭募金の計画を立て、実行します。また今度は、来年度富山大学に大きな夢を与えたい、力や元気を与えたいと考えれば、彼らは自分たちで講堂を借りて、富山大学の病院の先生やいろいろな研究者の方

などにお願いして彼らの夢を語ってもらうなど、すぐにそういう行動に移している姿を見て、自分としては本当に6年間やってきてよかったと感謝しています。少し長くなりましたが、以上です（拍手）。

（小助川）　どうもありがとうございました。ここまでは学生からの発言でした。では、実際に学校現場の先生方から、中学校と高校の現場からお話を伺いたいと思います。

それでは中学校の矢崎先生。ご紹介があったと思いますが、実はこの10月から12月末までの3カ月間ですが、射水市の教育委員会の方から、派遣といいますか内地研修という形で、実は私のところに研究生として来ていただいています。毎週二人で「『14歳の挑戦』の推進について」というテーマでここのところずっと一緒に勉強させていただいて、私も初めて本格的に「14歳の挑戦」についての仕組みや、そもそもの発端であるとか現状といったことをいろいろ勉強させていただいています。余計なコメントになりましたが、矢崎先生、どうぞよろしくお願いします。

（矢崎）　大門中学校の矢崎と申します。よろしくお願いします。

私の勤務する大門中学校は平成12年度から「14歳の挑戦」を実施して、今年で12回目を迎えました。これまでに約140の事業所にお世話になり、延べ2800名がこの事業に参加しています。本当にここまで12年間地域に浸透し、そして地域に支えられてしっかりと根付いているという実感を持っています。

毎年活動終了後にアンケートを生徒と保護者と事業所の方にお願いしているのですが、その結果を少しご紹介しますと、生徒の95％以上が「1週間が充実していた」と答えています。それから事業所の90％以上は「生徒は積極的に5日間を取り組み、受け入れ先としてこの授業に取り組んだ意義があった」と回答していただいています。それから保護者の80％以上からは「この1週間で子どもに好ましい変化が見られた」というような回答をいただいています。ここ2～3年もそうですが、12年分の報告書がありまして、それをひも解いてみますと、この結果というのはスタート時点からあまり変わらず、子どもたちは本当に充実感を持っているし、事業所の方にもそういう意義があったととらえていただいているし、保護者もいい活動だったと思われているということが12年間ずっと続いていることが分かり、本当に意味のある活動だと思っています。

うちの学校は毎年5月に実施しているのですが、今日私は今年度の報告書を持ってまいりました。この中にはアンケートの結果もまとめてありますが、生徒一人一人が書いた活動終了後の感想がすべて載せられています。これが12年分ありまして、今私はそれを何とかしてまとめて、何かそこから見えてこないかということで小助川先生にお力をお借りしながらまとめようとしています。この中に本当に生徒一人一人の学びがあるのです。先ほどからもいろいろ出てきましたが、マナーの厳しさや大変さを実感してきている子たちもいますし、「やりがいとは、もしかしたらこんなことなのかな」と喜びを感じてくる子たちもいます。あとは両親、お父さんやお母さんはすごい、感謝しなければいけないと思って文章をつづっている子もいます。この一人一人の文章の中に本当にたくさんの学びがあり、達成感があり、成就感があります。本当に成長を感じる文章が2800あるということで、これをどのようにまとめていけばいいか私も悩んでいるところではありますが、そういう本当に有意義な活動になっていると思います。

この活動をこのあと10年、さらに20年とぜひ継続していきたいし、いくべきだと私も思っていますが、そのためにはいろいろ課題はあると思います。その中の課題として、今、

大門中学校が当面の課題として抱えている問題は、実は事業所の確保です。大門中学校区は住宅地が増えてまいりました。生徒がこの後数年間どんどん増加していくことが予想されている地区です。今は 250 人ぐらいいるのですが、この後すべての学年が 7～8 クラスになりそうだという勢いのところで、新規開拓も含めて事業所の確保をやっていかなければいけません。

もう一つは事業所のアンケートです。いろいろな項目があるのですが、その中に「来年度も引き受けていただけますでしょうか」というものがあります。それに「積極的に協力する」、あるいは「協力する」と答えていただける事業所は、本当にここ 2～3 年で少しずつ下がってきています。これはグラフ化して初めて分かったことです。ただ「依頼があれば協力する」という事業所も大変たくさんありまして、それを含めると 90%はいくので、何とか 90%ぐらいの事業所は確保できるかと思っています。しかし生徒数が増えたら事業所を確保しなければなりません。最近は「14 歳の挑戦」は地域の方にも理解していただいているので、事業所へ「14 歳の挑戦」の趣旨や意義などをあらためて説明することなく、すっと「今年度の子どもたちです」というようにやっているのですが、少し原点に立ち返って意義や趣旨などを理解していただいたり、あるいは地域で子どもたちを育てるという基本的な考え方についてもう一度事業所の方に理解していただく、地域の方に訴えるという活動が必要になっている時期なのかと思いますし、またそういう働き掛けをすることによって、さらに地域の協力が強まるのではないかと今思っているところです。

それから、私は今年小助川先生の下で GP の活動を目の前で見せていただきました。本当に素晴らしいと思い感動しました。大門中学校の生徒は残念ながらどの活動にも参加できなかったのですが、もしも私の学校の生徒がいたら、本当にぜひこの大学生にかかわってほしかったと思いました。1 日目は子どもたちは本当に緊張しながら事業所に行きます。私が今まとめた段階で、報告書の 3～5 割ぐらいは緊張と不安が出てきます。「初日は緊張しました」という言葉からスタートします。そういう緊張を緩和するのに、本当に大学生の役割は大きかったと思います。それから最終日の北日本新聞社の活動のまとめを見せていただきましたが、子どもたちが 5 日間大学生との再会を心待ちにしていたのが、見ていて手に取れるようでした。大学生のやり終えた後のさわやかな笑顔が今も私は忘れられませんし、本当にすごいことをやったという充実感を彼らも味わっていたと思います。この活動も時間的、人数的な制限がいろいろあるようですが、ぜひ中学校の現場にもう少し還元できるような方法を工夫していきたいし、いってほしい。私もその力になりたいと今思っているところです。以上です。

（小助川）　どうもありがとうございました（拍手）。飯田先生はまた後ほどディスカッションの方でかかわっていただきます。

次は高等学校の方からです。いずみ高の長田先生です。個人的なことを申し上げて恐縮ですが、私の娘が二人先生のところで大変お世話になりまして、一応そのころからの付き合いがあります。もう一つは、ご存じの方も多いと思いますが、いずみ高校は総合学科を持っている県内三つの高校の中の一つです。総合学科というのは子どもたちが自分たちで科目を選択しながら組み立てていくということで、かなりキャリアを意識しないと授業の組み立てができないし、そこで科目の選択を間違ってしまうと高校卒業後の進路がかなり限定されてしまうということで、そういう点で非常にご苦労されているのではないかということで、今回パネリストに入っていただきました。では長田先生、よろしくお願いします。

（長田）　ただ今ご紹介いただきました長田です。今回「14 歳の挑戦」には直接参加していないのですが、まず高校の現場の話を少しさせていただきながら始めたいと思います。

今、話がありましたが、いずみ高校は富山市内にありまして、総合学科は 4 クラス、看護科が 1 クラスあります。看護科は 3 年間高校籍がありまして、その後 2 年間の専攻科をへて、5 年間で国家試験を受けるという形のものです。富山大学の医学部からもご支援いただきながらという形でやっていますが、その二つの学科を持っている学校です。看護科では、中学校 3 年の段階で看護科を志望し、専攻科 5 年までいくという決断はなかなか大変な状況だとは思いますが、毎年高倍率でみんな志望してくれていまして、およそ 5 年間で国家試験に合格していきます。最近は国家試験に 100％合格しているという具合です。

一方総合学科の方ですが、今、小助川先生のお話にもありましたように、普通科でもなく職業科でもない、自分の未来をどう考えていくかという形の学科です。1 年生の時には必履修科目が決まっていますが、2 年生以降の授業科目は一応自分たちでデザインしています。そのために、1 年次に「産業社会と人間」という科目が 2 単位であります。「産業社会と人間」という科目の中で、自分の今後のことを学ぶ、社会を知るための手段をいろいろと学ぶということをやっています。「産業社会と人間」でいろいろな先生たちの話を聞いたりもしますし、中には地域の方にお世話になるという場面もあります。最近は裁判所の方にお世話になり、模擬裁判ということでいろいろな形のものを実際にやってみたりしながら生徒に社会の仕組みを考えさせたり、いろいろなことを考えさせたりしています。

GP の大学生を見ながら、生徒の経験をどう上げるかということを思っています。例えば学校では体育大会などの活動がありますが、体育大会の活動を一つ変えるだけでも、教職員の中ではかなり「なぜそんなことを変えなければいけないのか」などと言われるのです。そしてそれを進めた時には、教員として一つやれたと思っています。それを生徒たちが実際に活動することによって、自分たちでプロジェクトを進め、それを実行して達成感を持つことはとても素晴らしいし、そういうことができないかと思っています。「産業社会と人間」は、いずみ高校として総合学科となって 10 年間やってきて大体固まってきてはいますが、それをまた変えていかないとマンネリになってしまって駄目だろうという思いでいます。

大学との連携というのも、小助川先生とは少し相談したりしました。例えば人間発達科学部の教育実習の時間は 2 週間、合わせて 10 日間だけなので、それよりもさらに実際に生徒と触れ合う時間を作れないかということで、高校側としては身近な未来モデルとして大学生を見る・知ることによって彼らの将来に生かしていきたいということで、夏休みに大学生には勉強を見てもらう、高校側からは勉強を教えてもらう、質問という形で、一度そういう機会を作ってみました。3 日間だけの機会で、1 年限りになってしまったのですが、そんなことをしながら何か成功体験を、大学生あるいはうちの子にもできないかと思いながらいる次第です。そういう形で参加させていただこうと思っています。

（小助川）　どうもありがとうございました（拍手）。

それでは、これからディスカッションに入りたいと思います。まず私の方から問題提起させていただいて、パネリストの方にそれぞれ補足意見なりご発言いただきたいと思います。時間があればフロアからも質問等をいただいて、最後に飯田先生と玄田先生からコメントをいただきます。それが終わって最後のところで私の方でまとめとして、ではどのように出発点を見いだすのかというところに話を持っていければと思います。

今４人の方からお話を伺ったのですが、恐らくポイントは二つあるでしょう。一つは地域とのつながりです。私たちが今やっているプログラムもまさに地域社会があって初めて成り立つことですが、地域とのつながりは非常に大事であるということです。そしてさらに仲間をどうやって自分たちの中に引き込み、巻き込んでいくかということです。地域と同じことになると思いますが、そういうことがあると思います。

それから、もう一つは変革です。「14 歳の挑戦」もそうですし、長田先生のお話にもありましたが、何かを変えていくときには非常に大きなエネルギーが必要です。しかし、変えていかなければどうしても物事はマンネリ化してしまうので、常に新しい視点で取り組んでいくということです。もちろんそれまでの蓄積を大事にすることも大切ですが、あえてマニュアル化せず自分たちで工夫しながらやっていくことで進歩していきます。そこで子どもたちがどのようにするか。大人がそこをセッティングするのではなくて、生徒や学生がそこを自分たちで変えていく、それを大人がどう支援していくかということがもう一つあったかと思います。

富山大学というものを考えてみますと、大学院生を含めると３キャンパスで約１万人の学生がいます。また、教職員は病院関係者も含めて約 2000 人います。ですから、一つの企業として見るとこれは非常に大きな組織で、そこにはいろいろな専門性があります。ですから、大学は供給源として非常にいろいろなものを持っていて、もっと地域とかかわっていける。それこそ地域とのかかわりといったときに、大学をもっと使ってくださいと言えるのではないでしょうか。その中でどのように大学生とかかわらせながら地域の子どもたちを育て、そして大学生も一緒に育っていくかということがこのプログラムの一つの流れでもあります。そんなところだったのではないかと思います。

それで幾つか問題はあると思いますが、変えていくときのエネルギーというのでしょうか。今日この会場にいらっしゃっている方々は変えていこうというお気持ちがあり、実際にそういう実践にかかわっている方です。私も大学の人間ですが、特に大学の場合、そういうことにかかわる人間、あるいはかかわろうという意思や意欲を持った人間は恐らくほとんどいない世界だと思います。そういう中で何かをやっていこうするのは、はっきり言って非常に大変なことです。逆に言いますと、中学校、高校、小学校というのはすべての教員がそこにかかわっていきます。だから「14 歳の挑戦」であれば、誰かがやるのではなく、みんながやっていく、みんなが生徒指導していくという仕組みに、大学と高校までの大きな違いがあると思います。

ですから、私たちは今後このプログラムをどのように展開していくかを考えなければいけません。組織論になってしまいますが、どうやって仲間を引き寄せて、仲間を巻き込んでいけばいいのかというあたりで、何かヒントあるいは実践、例えば大澤さんの場合は杉谷にボランティア同好会をつくっているのですが、どのようにして仲間を増やしているのかといった仲間づくりのようなところで、少しご意見をいただければと思います。特に指名しませんので、どなたからでもお話しいただければと思います。

（玄田）　大澤君が指名されているように聞こえるのですが。

（小助川）　では大澤さん、どうでしょうか。大澤さんは実は 6 年生ですので、あと数カ月で大学からいなくなります。でも、今日も実際に会場にいらっしゃっていますが大澤さんの後輩がいて、その後輩が既に次の取り組みを始めているのです。それは何て上手なのかとも思います。私たちももちろんそういうつながりで、先輩から後輩へという中でやってきましたが、特に荒井先生などは強力にかかわって指導されているわけですよね。大澤さんの場合は特に杉谷で、先生がかかわっていることは多分ないと思うので、そのあたりを。サークルとは恐らく違うと思います。サークルのようなノリとは違うと思うのですが、ご苦労など、そのあたりはどうですか。

（大澤）　仲間をどう巻き込むかは難しいですし、自分でもうまくいっていないとは思っています。うまくいっているとは思っていないのですが、本当のところ、それは多分後輩に聞いた方がいいところだと思います。自分の経験から言うと、まずは自分の気持ちをきちんと伝えること。こういうことがしたいと誰に対してもきちんと伝えること。そして、できたらその思いを当事者同士が、当事者意識をお互いに持って共有できたら、一歩先には進むと感じています。だからといって、これが実際に自分にできているかと言われたら分かりません。

先ほど出ていた地域で大学生を育てるという話に関しては、今までここ 2〜3 週間、山間部の診療所に行って実習していたのですが、そこでいろいろなおばあさんたちのお話を聞きました。戦前、戦中、戦後、そして苦労を聞いていると、どんな人に対しても、その人にはその人の人生があって、今があるという感覚になります。だから、今どんなに患者さんとしてはお酒やたばこは駄目だとしても、それはそれなりに訳があって、そういう人があると思うと、たとえどんな人でもその人に対して尊重やリスペクトする気持ちを持つべきだと感じています。そうすると、地域で人を育てるときというのは、多分誰にでも育てていい資格のようなものがあるのではないかと感じています。だからこれからお互いにそういう意味で、先ほど最初に遠藤先生が「相手を尊重することが教育の初めの一歩だ」とおっしゃっていたと思いますが、それにつながるのだろうという感じを最近は持っています。どうでしょうか。仲間づくりからは外れてしまいましたが、そんな感じです。

（小助川）　どうもありがとうございました。金盛さん、玄田先生からのご指名です。

（玄田）　何でもいいですよ。

（金盛）　私は巻き込むことがとても難しいと思っています。巻き込むことは、大澤さんも言われたように自分の気持ちをきちんと伝えること、それから相手が何を考えていて、どのように育ってきたのか、どのようにこれから進んでいきたいのか、もっとその先のことも話し合える仲に落とし込んでいってから目指すものを固めていくことが必要なのではないかと今感じています。以上です。

（小助川）　どうもありがとうございます。

（玄田）　巻き込み方ということでだいぶアドバイスめいたことを言うと、希望学というものをずっとやっていました。希望学を最初にやる時に、とても反対されました。そんなのは無理だとか宗教っぽいとか、いろいろ言われました。もっとまじめに研究しろと怒ら

れたりもしました。けれど何人かとやるときに、いつも打ち合わせするたびに「これは結局真剣な遊びだね。これは真剣な遊びだと思ってやろうね」と言っていました。あまり考え過ぎると苦しいし、駄目ならしょうがないと言っていました。だから、僕の本職は経済学ですが、それはきちんとやろうと。希望学は真剣な遊びぐらいの気持ちでいいのではないかということで、まじめに遊ぼうとずっと言っていました。そうした方が何となく楽しかったし、こういうことが分からない人にとってつまらないと勝手に言ったりもしていました。だから、何か一生懸命やるのもいいですが、そういうことも大事です。

（小助川）　ありがとうございます。ほかにどうでしょうか。

（玄田）　長田先生も勝手にしゃべってください。どうぞ地域でも人づくりでもいいので。

（長田）　こういうGPの学生の組織ができること自体が稀有で、小助川先生や荒井先生の熱意に巻き込んでいかれたのだろうと思います。私の経験では誰が核になるのか、いい意味での変というか、何かやろうという人がいないということだと思います。

それからある意味子どもというか、発達段階にある者としたら、大人との関係での縛りというよりも、子どもと子どもとか、斜めぐらいでもいいですし、その方が例えば不登校の生徒がだんだん治っていく時には、私の今までの経験上一人だけ不登校からうまくいったのですが、生徒同士でそういうことをやった時にはうまくいったという経験があります。そんな具合です。

（小助川）　ありがとうございました。では、突然ですが、飯田先生どうですか。

（飯田）　先ほどの玄田先生のお話を聞いて、玄田先生はポジティブですよね。どこかでポジティブアクションという言葉を使っていませんでしたか。玄田先生を見ると、何か頼れそうだとか、やりがいがありそうだと思わせる雰囲気があります。人を巻き込むときに、私の仕事では別のやり方でやりますが、学生たちがやるときには仕事ではないので、やはりそういう雰囲気を醸し出さないと人は集まらないと思います。だからポジティブなことをどんどん表に出して人に語るようにすると、人は自然と集まるのではないかと思います。やはり魅力あるところにみんな集まってきます。

今度は、仕事で新しいことを始めるときにどう人に理解してもらうかということですが、私たちの学校ではPDCAをCから始まると思っています。CAPDとよく言いますが、まずチェックして、学校評価などできちんと「これが課題だ」というものが出れば、われわれはプロなのでそれを放っておくわけにはいきません。だから、きちんとデータで「これが課題だ。これを解決するためにはわれわれはどうするのか」ということでたくさんの提案をしていく中で、これを選ぼうとみんなで共有していくのです。ねらいはみんな同じです。子どもを良くしたいという気持ちは教職員みんな一緒だと思うので、そういうことで一つ取り組んでいけるのかな、みんなで作り上げていく雰囲気ができるかと感じているところです。

（小助川）　ありがとうございました。矢崎先生はいかがですか。

（矢崎）　巻き込むということですよね。巻き込むということは、実は私はこの間からいろいろ考えているのですが、私が一番苦手なことと思っています。

（玄田）　そうなんだ。先生が巻き込めないのはまずいのではないの？

（矢崎）　私はどうして今ここにいるのだろうというのが本当に正直な感想です。自分から一歩踏み出すことがなかなかできないタイプの人間で、今回たまたまキャリアのことを勉強したいからということで、小助川先生にお電話１本差し上げたら快諾していただいて、つながりができました。それから今日は大学生ともいろいろなところでかかわらせていただいて、今日こんなところまで立たせていただきました。今日のお話にいろいろありましたが、少し動いたらいろいろ世界が変わるということを私は今実感しています。そういう体験を子どもたちにたくさんさせることが大切なのではないでしょうか。
　子どもたちの世界は狭いという話がありましたが、本当に何も知らずにそれが当たり前だと思っている子どもたちです。だから、最初は「14 歳の挑戦」のように無理やりにでも社会に押し出すようなレールが必要なのかもしれません。この前話をしていたら、金盛さんが「今、私はいろいろなところへ出掛けていって、いろいろな人とかかわるのが楽しくてしょうがない」と言われたのです。それを聞いた時に、何てすごいのだろうと思いました。今、私はそれがほんの少しだけ、いろいろな人の話を聞いたりかかわったりすることは楽しいかもしれないと思い始めて、私はこれからアクションを起こそうかなと、巻き込んだり巻き込まれたりしていこうと思っているところです。

（小助川）　ありがとうございました。まだまだいろいろお聞きしたいこともありますが、このあたりでフロアから何かご質問や、特にかかわるとか巻き込むなどということだけではなく、今のお話全体を踏まえて何かご発言がございましたら。どうぞ。学生から手が挙がるあたりは僕は素晴らしいと思います。

（玄田）　素晴らしいですね。別に打ち合わせしているわけではないのでしょう。

（小助川）　全然ないです。

（滝谷）　ちょっと話させていただきたいと思いまして、手を挙げました。
　午前中も発表させていただいた滝谷と申します。よろしくお願いします。私は、巻き込むという話とこれからどうしていくかという話について、今自分がやっていることと、これからどうしていけばいいかということについて話させていただきたいと思います。
　まず、私は朝も話したのですが、今、社会が元気がなくなっていると思っていまして、まずは自分の見えるところから、自分の町から元気にしていこうという取り組みをやっています。取り組みといいましてもそこまで大それたことはできないので、まず自分たちに何ができるかというところに落とし込んで、取りあえずは庄川町を元気にしたい人たちが集まる会というような緩いつながりをつくって、1 回目が終わりました。また来月にも開催するつもりです。情報社会となり、フェイスブックなど非常に便利な情報ツールがある

ので、そういうものの紹介機能のようなものを使って庄川町出身の人に、この会に来てくださいと呼び込むのも巻き込む一つの方法だと思っています。その時に取りあえず「楽しい会なので、みんな興味を持ったら来てください」という感じで言って、少しずつでも興味を持ってもらい、その会に来てもらうことで私たちの熱い気持ちを共有できたらと思っています。

今やっていることというのは、その会以外にもう一つあります。私は、多分玄田先生もそう思われるところがあると思いますが、農業に対する教育の可能性を感じています。食べることは人間にとって一番必要なことだと私は思っているので、農業は人間にとっても大事なものになると思います。その農業の後継者が今本当にいないのです。平均年齢 65 歳以上といった状況で、また兼業農家ばかりが増えている状況です。そうすることで農業が廃れていくのではないかという不安はずっとあると思いますが、これから少しずつ改善していくアプローチを誰かがしなければいけないと思っています。

若い者が農業の良さを知らなければ、増えるわけがありません。そこで、自分の兄は農業をやっていますので、その兄を巻き込んでということになりますが、ボランティアをやっています。「ニンジン収穫ボランティア」をして、取りあえず農業に触れてみようという会を開いています。別に農業に興味がなくても、ニンジンを収穫したらあげますよと話をすると、「それならやってみようかな」と。これまで 3 回やったのですが、毎回フェイスブックに載せます。そうすることで「この活動、面白そう。今度行ってもいい？」というコメントが返ってくるのです。「ぜひ来てください。いつでもやりますので」と全く会ったこともない人とそういうやりとりをしてつながっています。今日もニンジン収穫に協力してもらっている農業法人の方のところで秋の収穫セールがあるのですが、それも昨日勝手にフェイスブックでそのように宣伝させてもらいました。そうすると、今日も全く知らない人からフェイスブックに「今日行ってみようと思います」「今から行きます」というコメントが来て、「ぜひどうぞという話になりました。

そのようにして、興味がある人のためにまずは自分から情報発信をしていく。そして緩いつながりの中で少しずつやりとりを持ちながら、そういう人を巻き込む。そういう少しのつながりどんどん広めていけば、良さを伝えていくことで多分私が知らない人からまた違うところへアプローチをしてくれると思います。まずは自分から熱い気持ちを伝えて、それを実感してもらう機会を与え、そこで実感してもらうことでまたみんなに広がっていくのではないかと、そういう連鎖が起これば思っています。すみません、少し長くなりましたが以上です。ありがとうございました（拍手）。

（小助川）　ありがとうございました。まさに玄田先生がおっしゃったウィーク・タイズということです。逆に言うと、私たちの GP の集まりというのは強いつながりで、かなり濃厚なつながりです。だから、私の頭の中ではこういう濃厚な集団がいなければ逆にできないのではないかと思ってしまいます。それに一般の 2 年生や 1 年生の学生をどのようにかかわらせていくかは非常に悩ましいところでしたが、ウィーク・タイズという観点でいくと、もっと楽にもっと簡単に情報を発信して、少し関心のある人を巻き込んで「ちょっと来てみない？」といったノリでいけるという気がだんだんしてきました。学生支援 GP で 4

年間も文科省から予算をもらってというと、何かきちんとしたプログラムがあって、きちんとした成果を出して、きちんとした報告書を出してということがどうしても頭にあるのです。

（玄田）　報告書はきちんと出さなければいけない。

（小助川）　やはり？　そこがそうなのです。少し何か見えてきた気がしました。お時間もだいぶたってきました。もうお一方ぐらい、いかがでしょうか。学生の皆さん。

（玄田）　誰かいないですか。話を聞いてみたい人。誰か言いませんか。

（フロア）　いいですか。

（小助川）　ではマイクをお願いします。

（フロア）　富山市内で中学校の教員をしています。そして、あまり弱いつながりではなかったかもしれませんが、今年度から知り合いと自分たちで勉強会みたいなものをつくりまして、20 人ぐらいしかいないのですが、まず第一歩ということをさせていただいています。それこそ仲間づくりは本当に大変だなとつくづく思い、今、聞かせていただきました。

自分が中学校の教員だからということで、少しどうかなと思ったのは、「14 歳の挑戦」も教員は最初から別にやりたくてやったわけではなくて、最初は 3 分の 1 の学校がやりなさいという県教委からの指令があって、3 分の 1 ずつやっていって 3 年目で初めて全部になったといういきさつがあります。ここまで来て何か少し変えたいという気持ちはあるのです。しかし、自分が富山県の教員なので言いにくいのですが、富山県全部の風土なのか富山県の教員だけなのか分かりませんが、割と保守的だと思うのです。だから今「14 歳の挑戦」が続いているのは、去年やっていたことをやっているからです。そのままで 10 年、20 年このままやっていってもいいのかという問題だと思います。

教員の中でも何かを変えていこうというのは、先ほど小助川先生が言われたように、富大の中の大変少ないと言われたぐらいの少なさかもしれないと僕は思っています。実際に学年や学校内で、こんなことをやっていこうと熱く語る人がもっと多くなってほしいと思っています。例えば先ほど飯田先生が言っておられたように、JC の方とのタイアップですが、僕も今年縁があってある地区の JC の講演会を 2 回ほど聞かせてもらいました。その JC は中学校にも出向いています。県内にもそういう JC があるのです。だから、そういうところとのかかわりです。あるいは、これは地区によっても違いますが、地域の商工会などが入ってくれている学校もあれば、そういうところが入ってくれていない学校もあります。だから、教員が自分で新しい事業所を探さなくてはいけない学校もあれば、そういうところにお願いして探してもらえるところもあるのです。

いろいろな地域による格差というか違いがあるものだから、そういうものをもっとこれから広げていかなくてはいけないと思います。地域への広がりは、現場で言えば一教員はなかなかしにくいことだと思います。だから、少なくとも管理職なり教育委員会がもっと表に出て、商工会や JC などいろいろなところとの関係の中でもいいし、個人的に弱いつながりで、それがひいては強いつながりをつくっていくのもいいと思いますが、何かもっとそういう動きをこれからやっていかないといけないと思います。

同じことで北海道の飯田先生にお聞きしたいのは、飯田先生がそういうことを中学校でされている中での仲間づくりです。きっと教員の中での反発もあったのではないかと実は思います。僕は全く詳しいことを知らないで言いますが、例えば北海道は割と組合の強いところなので、そういうところとの関係や、先ほどお話しされていない、教育委員会も組合も大賛成で飯田先生の取り組みをしておられるのかどうかというところに実は興味を持ちながら聞いていたので、もしお聞かせ願えればその仲間づくりということも含めてお願します。

（飯田）　その質問を待っていました。

（フロア）　そうですか。すみません。

（小助川）　よろしいですか。では飯田先生、話せる範囲で結構ですので。

（飯田）　愚痴を言えばきりがありません。まず私たちの標津中学校ですが、大変困った時期がありました。何とかしなければいけないという思いがとても強くて、実は教員も総入れ替えになりました。2 年間で一人を除いて全部入れ替わりました。組合員も一人しかいません。私は元組合委員でして、組合を否定するわけではないのですが、そういう点では新しいことをやろうという土壌はあったと思います。

普通はみんな困っていると思うのです。多分富山が保守的だというのは困っていないからです。私は子どもたちをそんなにたくさん見ていませんが、3 日目になりますが、雰囲気も子どもたちは落ち着いているのではないでしょうか。だからあまり困っている学校はないような気がするのですが、いかがでしょうか。比較的ということですが学力も高いですし、今の状態で多分おおむね満足ということではないかと私は押さえています。

北海道は荒れた時期も随分ありましたので、困っていたのです。それで何とかしなければという思いが大変強く、さらに協働という意味では一時期全学年で複数担任制を取っていました。一人の教員では学級崩壊につながります。実はベテラン教員がいない地域なのです。教頭先生も 30 代がいるぐらいですから、大変若い教員で 20 代が半分ぐらいいましたので、一人では手に負えなくて、とにかくみんなで教室に入ろうということで、朝の会も帰りの会も給食も全部、全員の教員が入ってやっています。とにかく複数でやっている学校文化があったということが今回の活動ができた一つの理由かと思います。今回も 5 人で行っていますので、そういう点ではやりやすかったというか、できたのではないかと思います。

せっかく北海道から来ましたので、率直に富山の印象を言ってもよろしいですか。多分的外れなことも多いと思います。まず、先ほどお話しした第一印象もあったのですが、来る前に女房に「富山ってどんなところなの？」と聞かれました。私は来たことがなかったのですが、思い出したのは、黒部市と根室市が姉妹都市なので昔一緒に駅伝をしたことがあり、その時 YKK の社員が来てくれたのです。YKK に「何がおいしいの？」と聞くと、寒ブリぐらいは出てきたのですが、そのほかは出てきませんでした。あとは出てきたのは立山です。来てみるといい素材がたくさんあります。ところが、どちらかというと目立っていません。もっと PR すればこの富山という場所の魅力が全国に伝わるのではないかと思います。ぜひ学生に「富山の魅力掘り起こし隊」ということで、どんどん掘り起こしていただきたいと思います。

先ほど、ノドグロの話をしましたが、コラーゲンたっぷりのゲンゲ、シロエビ、ホタルイカ、それからお米があります。実は原発の問題があるので、うちの妻は子どもに神経質になって、なるべく西の方の米を買いあさっているのですが、在庫がないのです。富山には「てんたかく」というお米があるのですか。

（小助川）　あります。

（飯田）　コシヒカリがメインだと思いますが、私はその名前も知りませんでした。そういういい素材があるので、ぜひそれを全国にアピールしてもらいたい。学生にぜひやってもらいたいと思います。

先ほどCAPDのお話をしましたが、うちの学校でビジネス実践をする時に教育課程の編成会議でいろいろな提案が出ましたが、その中の一つに、標津のふるさと教育でこんなことをやったらいいのではないかという案がたくさん出ました。それを今から標津という言葉を富山に直して読み上げますので、もし何かの材料になればと思います。

富山理解・貢献・支え合い活動をやりましょう。活動例、富山の歌作り、富山キャラクター作り、富山の食材を使った食品開発、富山の歴史紹介、富山のかるた作り。北海道には方言かるたというものがありますが、富山の方言東西横綱は大変素晴らしいのでまねしたいと思います。富山ガイドの養成。観光客が来た時にガイドするということです。老人ホームの訪問、花いっぱい運動、富山の花や植生調査、学校のグラウンドの公園化。ベンチや、冬にアイスキャンドルを作るということです。富山の良さ写真展の開催、小学校への学習支援、子ども遊び支援、独居老人の支え合い活動。こんな案が出ました。

このうち採用されたのは三つです。いろいろなアイデアはあると思いますので、本当に富山の魅力が一層輝くように、そして富山は日本一素晴らしいというPRをぜひ学生たちに頑張っていただきたいと期待しています。すみません、長くしゃべりました。

（小助川）　どうもありがとうございました。大変いいですね。

（玄田）　富山の教育は困っていないというのはどうですか、先生。僕は富山の教育を知らないので。富山の教育は困っていないのですか。

（長田）　困っていないかと言われれば、まあまあかなと私は思っています。個別に見れば。

（玄田）　先ほどちょうど飯田先生が言われたように、依存心が強いとか現状を変えるということに対して、あまりに消極的というのは比較的全国共通だと思いますが、富山はどうですか。

（長田）　それはそうですよね。どうですか。

（玄田）　矢崎先生はどうですか。富山だって完ぺきということはないでしょう。

（矢崎）　私が一番驚いたというか、「え？」と思ったのは、現任校の大門中学校に赴任した時ですが、修学旅行のコースを考えようという時に、全く今までにないような新しいコ

ースを提案してみたのです。そうしたら、保護者も生徒たちも「去年までの方がよかった」と本当に言って、「なぜ去年の先輩たちと同じことを僕たちはできないのか」と言ったのです。それを聞いた時に、地域性なのか、前任校では全くそんなことはなかったのですが、何て保守的なのだろう、今までのものをそのまま継承することをよしとする文化というところに、驚きを感じたことはあります。

（玄田）　でも、変えるものを持たないと絶対に守れない。両方持たないと。富山は何が変わるといいのですか、大澤君。

（大澤）　富山が何が変わるといいか。

（玄田）　富山で何が変わるといいのですか。富山でも富山県人でもいいですが。昨日福井から来たのですが、福井も同じところがあるけれど、先ほど飯田先生が言ったようにいいものがたくさんあるから、いいものがあればいいと思っているでしょう。つまりいいものを作っていれば、黙っていても売れると思っているのです。黙っていてもお客さんが来ると思っているところがありますね。もうこれからは来ませんよ。いいものはいいと言わないと、これからはもう来ません。昔は「男は黙ってサッポロビール」というのがあったけれど、今は黙っていては駄目です。

（大澤）　多分そこだと思います。富山も医者不足で、医者が残らないのです。なぜ残らないのかということを学生のうちで話すと、富山の先生たちの考え方で多いのは「ほかの大学には負けていない」ということです。そんなことを言っていたら誰も残りません。「ほかの大学と負けないぐらいであれば、都会へ行きたい」となるので、もう一歩踏み込んで富山だからこそという、富山の良さをもっとアピールすることは大事だと思いました。

（玄田）　金盛さんはどうですか。司会を奪っていますが。

（金盛）　私が 23 年間生きてきて思うのは、年を重ねるごとに保守的になる県民性はとても感じていて、閉鎖的というか、あまり挑戦することを周りが後押ししてくれない環境があるかとは思っています。それで、たまに県外から来て富山県に住まれている方などと出会うと、「そのアイデアいいじゃん。今度やってみようよ」というノリの軽さが富山県にはないのかなとはすごく感じます。

（玄田）　どうすれば変えられますか。

（金盛）　そうですね。私自身この活動に参加しなかったら、きっと大学生としかかかわっていなかったと思うのです。年を重ねても大学生とかかわったり、自分の家族以外の人とかかわるきっかけをつくっていくことが非常に大切なのではないかとは思います。

（玄田）　変わることはそんなに難しいことではないと思います。僕は広島東洋カープというチームのファンですが、そこに大野豊という島根県出身のピッチングコーチがいます。彼はデビューした時は直球しか投げられなくて、全然ノーコンで駄目でした。彼は 40 代と、当時としては結構現役が続きました。彼は新しいキャンプの時期になると、毎年 1 球新し

い球にチャレンジすると、30 代半ばに決めました。何か 1 個だけチャレンジしようと思って、それで全然使い物にならなければしょうがないし、使えたらやってみようと何か 1 個変えるのです。それを見つけるのはそんなに難しいことではありません。

僕は「14 歳の挑戦」の一つのモデルになった兵庫県のトライやる・ウイークに行きましたが、ある先生が言ったことを今でも覚えています。それは「こういう体験学習というのは永遠に未完成なのですよね。永遠に何かどこかに必ず問題がある。それを 1 個 1 個つぶしていくしかない」ということでした。考えてみれば、キャリア教育に限らず教育というのはそういうものなのです。こうすれば完成というものはないのです。必ずこういうものにはマンネリが出てきますが、マンネリになるはずがありません。毎年生徒が違うのですから。学年が違うと、なぜこんなに違うのかというぐらい違うではないですか。だから自分が完ぺきだと思う人は保守的であればいいのではないでしょうか。

だから富山は完ぺきかというと、全然そうは思いません。自分はどこか未完成だという部分を素直に認めてしまって、1 個 1 個つぶしていくだけです。何か完ぺきなものをさらにもう 1 個付け足していこうなどいう傲慢なことを考えてはいけません。だから富山はまだ完ぺきではありません。いろいろな問題があります。このままいけばかなり苦しいことがたくさんあるでしょう。だからそこは 1 個 1 個つぶしていくしかないのです。

先生には悪いですが、あまり巻き込もうなどと考えては駄目です。永遠に未完成なものは、自分は未完成だと認めてしまって、それを 1 個 1 個つぶすのは意外に面白いかもしれません。実はばかばかしいのです。永遠に未完成なことをなぜ完成に向けてやるかというのはある種ドン・キホーテですから、本当のことを言うと変なのです。けれど、そういうことをやるのが楽しいと思っている姿にしか人は巻き込まれません。だから、あまり巻き込もうなどと考えなくていいのです。自分たちが「あの人たちって何か変だけれど、面白そうだね」という人がいると「私も参加させてよ」となりますし、ならなければならないでいいではないですか。そう思いまして、まとめに代えさせていただきました。

（小助川）　ありがとうございました（拍手）。時間がないのが本当に残念です。玄田先生に途中から司会を交代していただきまして、本当にありがとうございました。最後になりますが、私の方から評価のことについてごく簡単に、簡潔に報告させていただきます。

学生支援 GP は文科省のプログラムでしたので、キャリアサポートセンターの運営委員会の中に評価専門部会を立ち上げまして、9 月以降に自己点検評価、それから評価専門部会で評価を行いました。その評価の内容につきましては最終的な成果報告書にまとめて、またご報告したいと思っています。きちんとした手続きを踏みまして、評価を行っています。

そして最後になりますが、本当に最後の感想です。実はこの取り組みは私たちも非常に大変で、悩むことも多かったのです。学生は非常に成長していただいたと思うのですが、実は一番得をしたのは私ではないかと思っています。とにかく自分の専門の中だけでは絶対に出会えない方、特に学部の違う学生、それから企業の方、ほかの大学の方、教育関係者。恐らく私は教員の中で一番そういう環境を多くつくった人間の一人ではないかと思っています。それはそこで終わりではなくて、そのことが結局自分のやっている専門の中で、研究者向きの視点だったものが社会に向いていく、あるいは学生に向いていく、お客さんは誰かというところに向いて自分の専門をやっていくという方向性が、少しここ 4 年ぐらいで変わってきたのではないかと思います。自分の論文などを見ているとそういう傾向が見て取れることがあって、よかったのではないかと。大変だったことは大変だったと思います。ですから私自身、多分このような取り組みから遠ざかることはないのではないかと

いうことを申し上げないとまとまりがつかないので、遠ざかることはないだろうということで、簡単ですがまとめさせていただきたいと思います。

本当にこのプログラムに関心を持ってご参加いただいた方々、とりわけ学生、生徒の皆さん方、そして支援室の荒井先生、高井コーディネーター、横山さん、山田グループ主査、歴代の就職支援グループ長に厚くお礼を申し上げたいと思います。本日ご参加いただきました皆さま方には、今日のお話から何かヒントをお土産としてお持ち帰りいただければ、私にとっては一番の喜びではないかと思っています。司会進行が不慣れでして時間を多少超過しましたが、これにてパネルディスカッションを終了したいと思います。どうもありがとうございました（拍手）。

（松井）　ありがとうございました。最後に閉会の挨拶を行います。キャリアサポートセンター、西川友之先生、よろしくお願いします。

閉会挨拶
西川　友之（富山大学副学長・キャリアサポートセンター長）

今日お集まりいただきました皆さま方、本当にありがとうございました。約 100 名ほどの皆さんにお集まりいただきました。今回は 3 部に分けて、この 4 年間取り組みましたテーマについての報告、そして玄田先生のご講演、さらに飯田先生のまさに実践を伴ったご報告のご講演いただき、今ほどパネルディスカッションで富山大学はこういうことを少しずつ目指していけばいいのかなというヒントをいただきました。本当にありがとうございました。

一昔前ですと、国立大学が就職あるいはキャリアのことについてそんなに深く考えることはあまりなかったのですが、実はここ数年で急速にわれわれがもう一度襟を正して、教職員も日ごろ何をやっているのか、何を目的にやろうとしているのかということも少し考えながら、学生に何を与えていけるかということも今現在真剣に少しずつ考え出したところです。今日のこのシンポジウムの成果を明年度以降少しずつ生かして、「富山大学からはこういう学生たちが出てくるのだ」というような大学に変えていきたいと思っています。今日お集まりいただきました皆さま方に、またいろいろご支援いただければと思います。

終わりになりますが、今日の基調講演をしていただきました玄田有史先生、そして飯田先生、遠いところから本当にありがとうございました。それからパネラーの先生方、学生諸君も本当に心から御礼申し上げたいと思います。終わりに、本学のキャリア支援にいろいろな面でかかわってご協力いただいている企業の皆さま方にも厚く御礼を申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました（拍手）。

（荒井）　それでは最後になりましたが、今回の私どもの取り組みは学生自身が作っていくという中で、仕切ってくれた笹倉さんから一言もらって締めたいと思います。

（笹倉）　今日のシンポジウムの運営の責任者を担当させていただきました、富山大学経

済学部 4 年の笹倉由季です。急で何を言えばいいのか。

（玄田）　感謝の言葉を言えばいいのですよ。

（笹倉）　今日はお忙しい中ご来場いただき、本当にありがとうございました。また講演者の先生方もありがとうございました。

（小助川）　今後の決意について、自分自身がこれから。

（笹倉）　今 4 年生で、この責任者として人をまとめることの大変さなども体験させていただいたので、これから社会人になったら生かして頑張っていきたいと思います。本日はありがとうございました（拍手）。

（荒井）　あらためまして、最後に学生に向けて拍手をお願いします（拍手）。
　本日はお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございました。これにて「富大流人生設計支援プログラム」シンポジウムを終了させていただきたいと思います。誠にありがとうございました（拍手）。

Ⅵ. 取組の総括と今後の課題

学生支援GPを振り返る

キャリアサポートセンター　特命准教授　荒井　明

平成20年度に文部科学省に認定された新たな社会的ニーズに対応した学生支援GP「富大流人生設計支援プログラム」は、学生が地域と連携して様々な人々と関わり、自ら考え行動することにより多くの失敗体験と少しの成功体験で自己信頼観や自己効力感を高めていくプログラムである。

このプログラムの特徴として、①平成 11 年度から継続して実施されている富山県の就業体験『社会に学ぶ「14 歳の挑戦」』と連携していること、②地域コミュニティをフィールドに大学生・教職員（中学・大学）・企業人・地域の方々など様々な人々共に、未来を担う発達段階の生徒の将来のために取り組みがなされていること、③「インターンシップでの学び」を中学生に教えることから learning by teachig（教えることによって学ぶ）効果に繋がることが挙げられる。またプログラム名が象徴するように、「就職支援」　→　「キャリア支援」　→　「人生設計支援」と、「学生の職業人生に対するより長期的な支援」を大学がこの体験を通して提供し、さらには地域貢献にも繋げていくことを目指したものである。

平成20年度に選定されたこの「富大流人生設計支援プログラム」は、初年度（平成20年）を準備期間（実施運営体制の確立期）、平成21年度を試行的稼働年度、平成22年度を実質稼働年度、最終年度を完成年度と位置付け、①長期循環型インターンシップの実施と②初等・中等教育段階からの連続したキャリア教育の調査・研究及び実施の二本柱のミッションを、初期に設定した3年計画をローリングしながら完成度を高めていった。

私が実際にこのプログラムに携わったのは平成 21 年度の試行期からで、フレームワークは確立されていたがほとんどがゼロベースのものであり、このプログラムに携わる学生達や教職員達と手探り状態ながらも千辛万苦して築き上げていった。

この3年間を振り返って、改めて他県に比して卓抜した取組みである「14歳の挑戦」を地域社会・学校・家庭が連携して支援し、10数年継続している「富山県」の教育に対する姿勢に感嘆し、あまり広報活動は苦手な県ではあるがゆえ全国に改めてこの素晴らしい取組みを発信する意義を感じている。

法政大学大学院坂本光司教授の研究室の調査「４７都道府県幸福度ランキング」において、富山県は全国2位と北陸3県（石川県全国1位、福井県全国3位）が上位を占めた。持ち家比率や一人当たり畳数、正社員比率、生活保護被保護実人員率などは全国でトップである。四方を 3000 メートル級の立山に囲まれ、水などの自然に恵まれそこから新鮮な魚介類や美味しいお米が収穫され、お酒も美味しく、家は広く、家族皆が働き助け合い、女性の有業率は高く働き者で、雇用も守られるなど際限が無い程、素晴らしさを沢山持ち合せている県である。図書館、美術館、博物館なども多く「学ぶ」環境が整っており、その結果として「１４歳の挑戦」を継続が可能となり、高校進学率も全国トップでかつ無業者となる割合が全国で最も低い。改めて列記してみると、県名が象徴しているように「多くの山が連なる自然と富に溢れた国」ではないだろうか。

「いまどきの若者」という言葉は昔から使われているが、現在の若者の傾向とされている「内向的かつ真面目で打たれ弱い」という若者たちが大半だとしても、ちょっとした経験の積み重ね（多くの失敗経験と少しの成功体験）により、大きく飛躍する学生も多く存在することを痛感している。東京大学教授の玄田有史先生もおっしゃっていたが、「あくびをする生徒がいたら、それをちゃんと叱ってくれる大人がそばにいればいい。あくびをかみ殺す術をおぼえるのは、生きていくのに大事なことだ。」という言葉通り、今の高等教育においてもそばにいてきちんと教職員が叱ってあげることが大切であると感じている。叱られた経験のない学生はすぐ折れてしまうかもしれないが、「叱られるという経験をすること」、

「何故叱られたのか」、「叱られないようにするにはどうすればいいのか」を考えさせ、きちんとそばにいて見守っている大人がいることに気づかせてあげられれば、必ずその経験の繰り返しにより「自分でも何とかやっていける」という自己効力感が高まり、あと一歩だけ前に進むことが可能となる。自律型人材や即戦力などを社会は求めるが、社会人になる前に現在の若者にとってはまず心身共に「自立」させることが急務であり、社会人基礎力等を育む前に様々な人達との繋がりの中で挫折経験や失敗経験を体験させ、自己信頼観や自己効力感を高めてあげること、そして高等教育機関においてもそのような「体験が積める場」の提供が必要である。

IT 化や情報化などの進化により、人と直接触れ合う（話すなど）機会が少なくなり、簡単に解答を得ることができる環境で育った現在の若者は、失敗することを恐れ、考え方も行動も保守化していく傾向にある。しかし、一歩踏み出す「きっかけ」や「タイミング」を大人が用意することで、多くの学びのを得る機会となる。「富大流人生設計支援プログラム」はいわゆる PBL(Project-Based Learning)であるが、このプログラムを遂行することだけが目的ではなく、「何のためにこのプログラムを遂行するのか」と「悔いなくやり遂げること」を学生達に伝えることを最重要視してきた。このプログラムを通して中学校の校長先生や教頭先生、中学生、企業の人の方々との「ゆるやかなつながり」（weak ties）が、普段の教室内や大学内では学ぶことができない「人生の大切な学び」をもたらしてくれる。

また、PBL の効果として期待されるのは、頭では分かっていても行動出来ない多くの若者が実際に体験することによって、自信をつけさせることであり、大人が見守る中で少しずつ、成長に繋げることである。

現在においては大人にも若者にも共通することだが、何かと「『～が』の応酬」が蔓延している。エドワード・E・ジョーンズらが提唱したとされるセルフ・ハンディキャッピング（自分の失敗を外的な要因に求める傾向）のように、「社会が悪い」、「学校が悪い」、「親が悪い」等、全てを他責にする甘えの構造が垣間見られる。手とり足とりのような過度な干渉をせず、失敗を覚悟の上での経験を積ませ、必要な時に大人が手を差し伸べ、自分たちで考え、実行し、達成させたんだという経験こそが、今後のキャリア教育やキャリア支援に望まれると感じている。

このプログラムへの参加者は、この体験により様々な視点から積極的に学ぶことが習慣化し、自らの行動を振り返り良い行動を繰り返す傾向が見られ、「学びの循環」が生じていることが伺えた。このプログラムに参加した学生の最後までやり遂げた達成感から生じる満面の笑顔を見た時に、このプログラムの大きな意義を感じ、今後も大学がこのような体験の場を提供する必要性を強く感じている。私の大好きな言葉である「no pain,no gain」という諺通り、学生にはまず一歩踏み出して多くの人達と出会い、多くの経験をし、失敗してもくじけずに、少しずつ自分のキャリアを築いていって頂きたい。「失敗することだって、大切な経験。失敗を恐れずに、あと一歩だけ前に踏み出してみてください。」

3 年間という限られた中で、様々な課題や問題点も生じましたが、この「富大流人生設計支援プログラム」を支援してくださった、中学校、企業、地域の方々そして何よりもこのプログラムを自ら築きあげてくれた参加学生の皆さまに心から感謝を申し上げます。

取組の総括と今後の課題

富大流人生設計支援室長　小助川　貞次

本プログラムは冒頭に述べた通り、学生が地域社会（教育界・産業界）と交流する過程を通して、自身の人生を種々の課題のもとに自ら構築していくという取組であり、具体的な活動は極めて多岐にわたった。したがって、関わった人間がすべて同質の達成感や感想を持っているわけではなく、総括を誰がどのような価値観や視点を設定して行なうかによって当然異なった記述になる。

1. 担当者の総括

1.1 取組の特色と難しさ

評価専門部会での評価は厳しい内容であったが、これはこの取組内容が低迷していたからではなく、実情はむしろその逆で、本報告書の随所に記述されていた通り、この取組が極めて独創的で高度な質的内容を持っていたために、量的な成果が当初の予想通りに達成できなかったということに尽きる。このプログラムでは、インターンシップ体験学生が「14 歳の挑戦」事業に参加する中学 2 年生の支援活動をするという二重構造を持っており、「14 歳の挑戦」事業の実施時期がこれまでの 2 学期から 1 学期にシフトしつつある現状では、とりわけタイミングの取り方（マッチング）が非常に難しかった。学生や生徒の発達段階から考えて、就業体験活動をどの時期に実施するのが望ましいのかという理想的な観点と、過密化するスケジュールの中で実施しなければならないという現実的な観点とのせめぎ合いがある。単純に就業体験の回数や期間を多くすればいいという問題ではなく、学生や生徒が成長していく長い過程を見据えることが必要で、この点で本プログラムの「長期循環型インターンシップモデル」という考え方は、際だって優れていると自負できる。

1.2 タイミングの問題

インターンシップ体験終了後の 9 月以降に「14 歳の挑戦」事業に関わるというタイミングは、本プログラムを実施する上での要であるが、このタイミングの問題は技術的には解決可能な問題である。方法は以下の 2 つ。

・インターンシップ体験学生が 4 年次前期に「14 歳の挑戦」事業と関わる
・「14 歳の挑戦」事業の実施時期を 2 学期になるように見直してもらう

前者では、大学 4 年生の卒業論文や就職活動と重なることになるが、むしろ大学生としての学力・社会人力など、もろもろの力が一層向上する 4 年次前期に実施することに、従来の 4 年次の過ごし方とは全く異なる意義を見出せるのではないかと思う。さらに、新たにインターンシップに参加する 3 年生の事前学習にも関わることにもなり、学年を超える活動による成果が期待できる。一方、後者は実施する中学校や中学生を受け入れる事業所の判断によるところが大きく、大学からは口を挟めない「聖域」である。しかし、13 歳から 14 歳に至るどの段階（1 学期か 2 学期か）で就業体験を入れることが、その後の生徒の発達にとって有効なのか、ということを検討する必要があろう。「14 歳の挑戦」の実施時期が 1 学期だからいけないということではなく、「14 歳の挑戦」を中学校 3 年間のカリキュラムの中でどのように位置づけるのかという視点が明確であることこそが必要だと思う。さらに、生徒を受け持つ教員の継続性も重要な点であろう。1 年次の 3 学期から「14 歳の挑戦」の準備を進めた教員が、4 月には他校に異動するということも起こりうるのである。

このタイミングの問題は、大学・学校がそれぞれに解決しなければならない部分と、相互に意見交換することで新たに展開できる部分とがある。大学教職員にあっては、キャンパスから出て地域社会と積極的に関わる勇気を、学校教職員にあっては、大学や大学生を教育資源として活用する工夫が強く望まれる。

1.3 組織性の問題

「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」が大学としての組織的取組であることは、公募要領にも明記されており、改めて言うまでもないことである。本プログラムも、そのような大学組織を上げての蓄積の上に組み立てられている。しかし、本プログラムのように学生支援やキャリア開発支援に関わる内容は、多くの教職員の日常的業務では認識されにくい問題であることも事実である。この点、中学校の教員が教科教育以外の課外活動や生徒指導、進路指導に日常的業務の多くの時間をかけていることと根本的に異なる。

大学教職員が本プログラムのような「非日常的業務」に関わる際の組織性の問題について、本プログラムが始まる数年前に自分の考えを述べたことがある（「地方国立大学におけるインターンシップの取組」（『大学と学生』第 42 号、日本学生支援機構、2007 年）、「競争原理・評価環境における教員サイドからの学生支援」（日本学生支援機構東海・北陸地区学生指導研修会講演、2007 年 7 月 26 日））。当時はまだ楽観的・希望的であったのだろうと思い起こされるが、本プログラムを担当してみて、やはり組織性の弱さ・脆さ、難しさを強く感じた（評価専門部会の評価でも、この点は指摘されている）。

今後の継続性にも関わることであり、早急に改善策を講じなければならないが、しかしこれは相当に難しい問題であると考える。例えば、仕組みを整備したり、教職員の意識改革や研修の機会を増やしたりという方策がまず考えられるし、そのような過程を通じて熱意や能力のある人材を発掘したり創出するということもありうるだろう。しかし、それだけでは組織力は成長しないと思う（職務や規則で縛り付けるなどということはもちろん論外であるが）。

端的に言ってしまえば、大学を学生と共に一から作り直して行くことしかないと思う。現在、本学のあるキャンパスでひとつのプロジェクトが動き始めている。学生自らの発意で学生自身が企画運営し、教職員を巻き込んで自分たちのキャンパスや専門性を多くの市民に知ってもらおうというプロジェクトである（平成 24 年 4 月 7 日午後、本学黒田講堂で実施予定）。学生支援やキャリア開発支援は教職員から学生へという一方向の回路を前提としているが、双方向、あるいは逆方向の回路も必要なのではないかと考える。

1.4 新たな取組

本プログラムの中心は長期循環型インターンシップにあり、様々な困難な課題に直面しながらも、際だって優れた取組であったことは間違いない。さらに、この取組の過程で、当初予定していなかった新たな取組が起こったことも高く評価しなければならない。

これは、本学近隣の富山市立中学校において、インターンシップや就職活動を経験した大学生と進路選択を目前にした中学 3 年生が対話活動をする「15 歳の選択」プログラムである。平成 21 年度から 3 年間継続して行ったものであり、詳細は本報告書のⅣ活動報告の「2.中等教育との連携事業」を参照していただきたい。長期循環型インターンシップが事業所を活動の場とした少人数での関わりであるのに対して、「15 歳の選択」は一つの中学校の 3 年生全員と 20 名ほどの大学生が一度に対話するものであり、量的な成果は大きい。就業体験という要素の無い点は異なるが、大学生は自己の振り返りを行い、中学生は進路選択という単に目先の問題だけではなく、将来にわたる長い視点での生きるヒントを獲得することができる点では、長期循環型インターンシップと同様の効果がある。大学生が企画・調整を行い主体的に行動する点でも同様である。学年や就業体験の有無を問わずに、比較的大人数での実施が可能であり、今後の大学と中等教育との連携の一つの柱になり得る取組である。

２．今後の課題

学生がキャンパス外で社会的な体験や地域との交流活動を行うことは、今後もその必要性は変わらない。専門性を獲得しながら成長し続ける自己を社会と関連づけることは、専門性の向上にとっても意義がある。一方、地域社会からは、大学や大学生を教育資源として有効に活用しようとする働きかけが、もっとあってよいし、現に本学はそのような力を持っていると自負できる。ただし、現在の大学組織の在り方のままで、学生を主導／支援しようとすることは、特定の教職員にだけ負担が重くのしかかる。「言い出しっぺ」は必要であるが、誰か任せであってはいけない。組織改革は従前から行っているが、学生を含めた組織体という認識こそが、これからの大学には必要なのだと思う。学生・院生 9,359 名、教職員 2,138 名（平成 23 年 5 月 1 日現在、役員を除く）という人数は、家電メーカや自動車メーカなどの大企業には遠く及ばないが、富山県内の企業と比べると、どこよりも大所帯である。今回の取組によって、そのような意識の芽生えがどこかにあるならば、本学はもちろんのこと、この地域社会も発展し続けられると思う。

謝辞

このプログラムは地域社会の支えと学生・生徒の参加が無ければ成り立たないものです。難しい課題にも拘わらず、関心と理解を示し、直接・間接に参加していただいた地域社会の多くの方々、学生・生徒の皆さん、キャリアサポーターの学生の皆さんに厚くお礼申し上げます。また本プログラムの担当組織であるキャリアサポートセンター・富大流人生設計支援室のメンバーとして、前職を投げ打って加わっていただいた荒井明准教授、高井博美コーディネーター、横山麻里子事務補佐員、柳川美代子前事務補佐員は、企画・運営のすべての面において実に献身的に動いてくれました。これら室員の方々の働きがなければ、本プログラムは最終年度に辿り着くことはもちろんのこと、始動することすら出来なかったと思います。感謝申し上げますとともに、同僚として一緒にこのプログラムに参画できたことを誇りに思っています。管理部門であるキャリアサポートセンターの西川友之センター長（副学長）、田中輝和就職支援グループ長、長崎悟前就職支援グループ長、湯浅健一元就職支援グループ長にも厚くお礼申し上げますとともに、私の至らなさのために、多くのご負担ご心配をかけてしまったことをこの場を借りて深くお詫び申し上げます。

最後に、本プログラムの開始以前からインターンシップ業務で仕事をともにし、その経験とキャリア教育に対する深い理解・信念から本プログラムの構想を一緒に考えてきた山田豊就職支援グループ主査には、「教職協働」という自分にとっては全く未知の働き方を教えていただきました。山田豊主査と出会うことが無ければ、このプログラムも、したがって現在の私も存在しなかったと思います。深く感謝しております。

平成 20 年度－平成 23 年度

文部科学省・新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）

富大流人生設計支援プログラム

―『14 歳の挑戦』と連携する長期循環型インターンシップモデル―

報告書

発行日：平成 24 年 2 月

発行元：富山大学キャリアサポートセンター

〒930－8555

富山県富山市五福 3190

076－445－6255（就職支援グループ）